

キャリア教育に関する総合的研究
第二次報告書

令和3年10月

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター

目 次

はじめに	3
I. 本報告書の構成と内容	5
1. キャリア教育に関する総合的研究の概要	7
2. 本報告書の内容と分析の方法	9
II. 分析編	11
1. 小学校調査結果の分析	13
(1) 小学校調査で用いた調査票	13
(2) テーマ1 キャリア教育によるカリキュラム・マネジメントの効果	13
(3) テーマ2 職業に関する体験活動の重要性	28
(4) テーマ3 「キャリア・パスポート」の有用性	42
2. 中学校調査結果の分析	53
(1) 中学校調査で用いた調査票	53
(2) テーマ1 キャリア教育によるカリキュラム・マネジメントの効果	53
(3) テーマ2 職業に関する体験活動の重要性	65
(4) テーマ3 「キャリア・パスポート」の有用性	76
3. 高等学校調査結果の分析	89
(1) 高等学校調査で用いた調査票	89
(2) テーマ1 キャリア教育によるカリキュラム・マネジメントの効果	89
(3) テーマ2 職業に関する体験活動の重要性	100
(4) テーマ3 「キャリア・パスポート」の有用性	112
4. 各学校種調査結果の比較分析	121
(1) 各学校種調査結果の比較分析で用いた調査票	121
(2) テーマ1 学校・教員の取組と児童生徒の「学びのレリバンス意識」	121
(3) テーマ2 学校・教員の取組と児童生徒の「課題対応能力」	134

III. 資料編 1 4 7
1. 附表 1 4 9
2. 調査協力者等 2 0 3

はじめに

今日、社会の様々な領域において急激な構造変化が進行しており、産業・経済の変容は雇用形態の多様化や流動化にもつながっている。そうした中、就職・進学を問わず子供たちの進路をめぐる環境が大きく変化し、社会的・職業的自立に向け必要な能力や態度を育てるキャリア教育の更なる推進・充実が強く求められている。

中学校、高等学校における進路指導やキャリア教育の実態を把握すること、及びそれらに関する在校生、卒業生の意識等を明らかにし、今後の進路指導の改善・充実やキャリア教育の基礎資料を得ることを目的として、平成17年に『進路指導に関する総合的実態調査』が実施され、翌18年3月に報告書がまとめられた。

その後、中央教育審議会答申にてキャリア教育の新たな方向性が示されるなどキャリア教育・進路指導を取り巻く状況が大きく変化したことなどから、平成24年度、新たに小学校も調査対象に加え、専門家等の協力を得ながら再び『キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査』が実施され、分析が行われている。

前回調査から7年が経過し、中央教育審議会答申においてもキャリア教育の重要性が繰り返し強調され、平成29年・30年告示の小学校、中学校及び高等学校の学習指導要領に特別活動を要に学校教育全体でキャリア教育の充実を図ることが明記されたことから、このたび「キャリア教育に関する総合的研究」を実施し、各学校・地域の実態に応じた効果的なキャリア教育の推進・充実に資するための調査、分析を行うこととした。

なお、研究成果をできる限り速やかに報告するため、令和2年3月には第一次報告書を提示した。ここでは、設問ごとの結果に対する整理と分析を中心に据えていた。その後、本調査の結果については、クロス集計や多変量解析等の詳細な整理・分析を行い、本第二次報告書に取りまとめた。

本第二次報告書が、文部科学省、教育委員会そして学校のキャリア教育・進路指導の改善・充実に資することを強く願うと同時に、本調査の実施に協力を頂いた教育委員会や学校の関係者、及び、調査に回答を頂いた方々に深く感謝を申し上げる。

令和3年10月

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
センター長 鈴木敏之

I. 本報告書の構成と内容

1. キャリア教育に関する総合的研究の概要

(1) 研究の目的

本研究は、キャリア教育に関する実態を把握するとともに、それらに関する在校生の意識等も明らかにし、今後の各学校におけるキャリア教育の改善・充実を図るための基礎資料を得ることを目的として、7年に1度、実施しているものである。

前々回となる平成17年度には、中学校・高等学校を対象として実施したが、平成24年度に実施した前回は、児童生徒の社会的・職業的自立に向け、小学校段階から発達段階に応じたキャリア教育の推進・充実が強く求められている状況を踏まえ、新たに小学校も調査対象に加え、調査を実施した。

前回調査から7年が経過し、中央教育審議会答申においてもキャリア教育の重要性が繰り返し強調され、小学校、中学校及び高等学校の学習指導要領においては、特別活動を要に学校教育全体でキャリア教育の充実を図ることが明記された。こうした状況を踏まえ、各学校・地域の実態に応じた効果的なキャリア教育の推進・充実に資するため、令和元年度における、キャリア教育に関する実施状況と意識について総合的な調査、分析を行う。

(2) 調査の実施時期

令和元年7月～10月

(3) 調査の種類

- ① 小学校、中学校、高等学校におけるキャリア教育に関する実施状況と意識調査(学校調査)
- ② 学級・ホームルーム担任のキャリア教育に関する意識調査(学級・ホームルーム担任調査)
- ③ 在校生の進路に関する意識調査(児童生徒調査)

(4) 調査の方法等

各都道府県・政令指定都市ごとに対象とする学校数を決めたのち、各都道府県・政令指定都市が所管する公立小学校・中学校・高等学校の児童生徒数に基づく学校規模に比例するよう、国立教育政策研究所において、ランダムに抽出して調査を依頼した。なお、児童生徒調査については、上記で抽出した学校のうち、更に各都道府県・政令指定都市から2校ずつ、ランダムに抽出して調査を依頼した(高等学校については、所管する学校が少ない場合は学校数を1校とするなどの調整を行った(別紙一覧表参照))。

① 学校調査

- ・管理職に回答を依頼
- ・調査票は小学校・中学校・高等学校ともに1部ずつ配布

② 学級・ホームルーム担任調査

- ・各学校の最高学年（小学校：第6学年，中学校・高等学校：第3学年）を調査対象学年とし，その学年の学級・ホームルーム担任全員に回答を依頼
- ・調査票は小学校には5部，中学校・高等学校には10部ずつ配布

③ 児童生徒調査

- ・各学校の最高学年（小学校：第6学年，中学校・高等学校：第3学年）を調査対象学年としその学年において児童生徒数が最も多い学級・ホームルームの児童生徒全員に回答を依頼
- ・調査票は小学校・中学校・高等学校ともに45部ずつ配布

(5) 調査票の種類と配布数

	学校種類	対象学校数	調査票配布数
学校調査	小学校	1,000校	1,000枚
	中学校	500校	500枚
	高等学校	1,000校	1,000枚
学級・ホーム ルーム担任調 査	小学校	1,000校	5,000枚
	中学校	500校	5,000枚
	高等学校	1,000校	10,000枚
児童生徒調査	小学校	134校	6,030枚
	中学校	134校	6,030枚
	高等学校	126校	5,670枚

(6) 回答の状況

	学校種類	回答学校数	回答者数	回収率※
学校調査	小学校	795校	-	79.5%
	中学校	397校	-	79.4%
	高等学校	716校	-	71.6%
学級・ホーム ルーム担任調 査	小学校	800校	1,562人	98.3%
	中学校	400校	1,379人	97.2%
	高等学校	724校	4,066人	94.2%
児童生徒調査	小学校	110校	2,908人	98.2%
	中学校	118校	3,426人	93.7%
	高等学校	101校	3,606人	98.0%

※学校調査の回収率は，回答学校数を対象学校数で除して算出。学級・ホームルーム担任調査と児童生徒調査の回収率は，回答者数を回答頂いた学校に在籍する対象者数で除して算出している。

2. 本報告書の内容と分析の方法

本研究の「第一次報告書」(令和2年3月)においては、主として各調査票における個別の設問への回答に焦点を絞り、それぞれの結果を整理して具体的に示した。本第二次報告書は、個々の設問への回答のみからでは把握し得ないキャリア教育の実態を浮き彫りにすることを目的として取りまとめたものである。

この目的を達成するため、本第二次報告書の本体(分析編)においては、まず、学校種ごとに(1)第一次報告書に基づく再分析、(2)クロス集計、(3)多変量解析を行い、これらの分析の結果を掲載している。その後、学校種ごとの調査結果の比較検討を通して、小学校・中学校・高等学校のキャリア教育実践の共通点・相違点を明らかにした上で、学校種を縦断的に捉えつつキャリア教育実践についての多変量解析を試み、それらの結果を整理して掲載した。

本第二次報告書では、今回の研究結果で明らかとなった児童生徒の意識の特徴や、今日のキャリア教育推進施策の中心的な課題に基づいて、次の3点のテーマを設定した。

A 【キャリア教育によるカリキュラム・マネジメントの効果】

カリキュラム・マネジメント(具体的な目標設定、評価改善の円滑な取組、学校内外の体制確立等)の視点でキャリア教育に取り組む学校とそうではない学校とでは担任及び児童生徒の意識や実態がどのように異なるのか。

B 【職業に関する体験活動の重要性】

職業に関する体験活動(職場見学、職場体験活動、就業体験活動(インターンシップ))において活動のねらいを明確にし、事前・事後指導を計画的に行い、児童生徒の変容を丁寧に見取っている学校と、そうではない学校とでは、児童生徒の意識にどんな違いが見られるのか。

C 【「キャリア・パスポート」の有用性】

「身に付けさせたい力」を教師が意識している指導及び評価している場合とそうでない場合、「身に付けたい力」を児童生徒が意識して活動及び自己評価している場合、学習意欲や基礎的・汎用的能力どのような影響が見られるのか。

なお、本文に収録し得なかったクロス集計の結果、及び、多変量解析の詳細については巻末の「附表」に掲載している。

II. 分 析 編

1. 小学校調査結果の分析

(1) 小学校調査で用いた調査票

小学校調査で用いた調査票は、①キャリア教育の実施状況と管理職の意識調査（学校調査）、②学級担任の意識調査（学級担任調査）、③児童の意識調査（児童調査）の三つである。

(2) テーマ1 キャリア教育によるカリキュラム・マネジメントの効果

- 学校の全体目標を具体的に設定し、基礎的・汎用的能力との関係を示すことがカリキュラム・マネジメントの促進に影響していると考えられる。
- ・全体計画・年間指導計画の作成は、学校レベルのカリキュラム・マネジメントに向けた「はじめの一步」である。
 - ・全体計画においては、学校の全体目標を具体的に設定し、基礎的・汎用的能力との関係を示すことが、カリキュラム・マネジメントを促進する。
 - ・学校レベルのカリキュラム・マネジメントを発展させることは、担任がキャリア教育目標を意識することにつながり、学年・学級レベルのカリキュラム・マネジメントを効果的に機能させる。
 - ・学校レベルでのカリキュラム・マネジメントが機能している学校では、担任は児童のキャリア発達を実感している。
 - ・担任が計画に基づいてキャリア教育を実施することは、児童の学習意欲や基礎的・汎用的能力の向上に寄与する。
 - ・キャリア教育の評価・改善は、児童の積極性や学習意欲にプラスの影響を与えるが、2割未満の学校でしか実施されておらず、促進に向けた工夫が求められる。

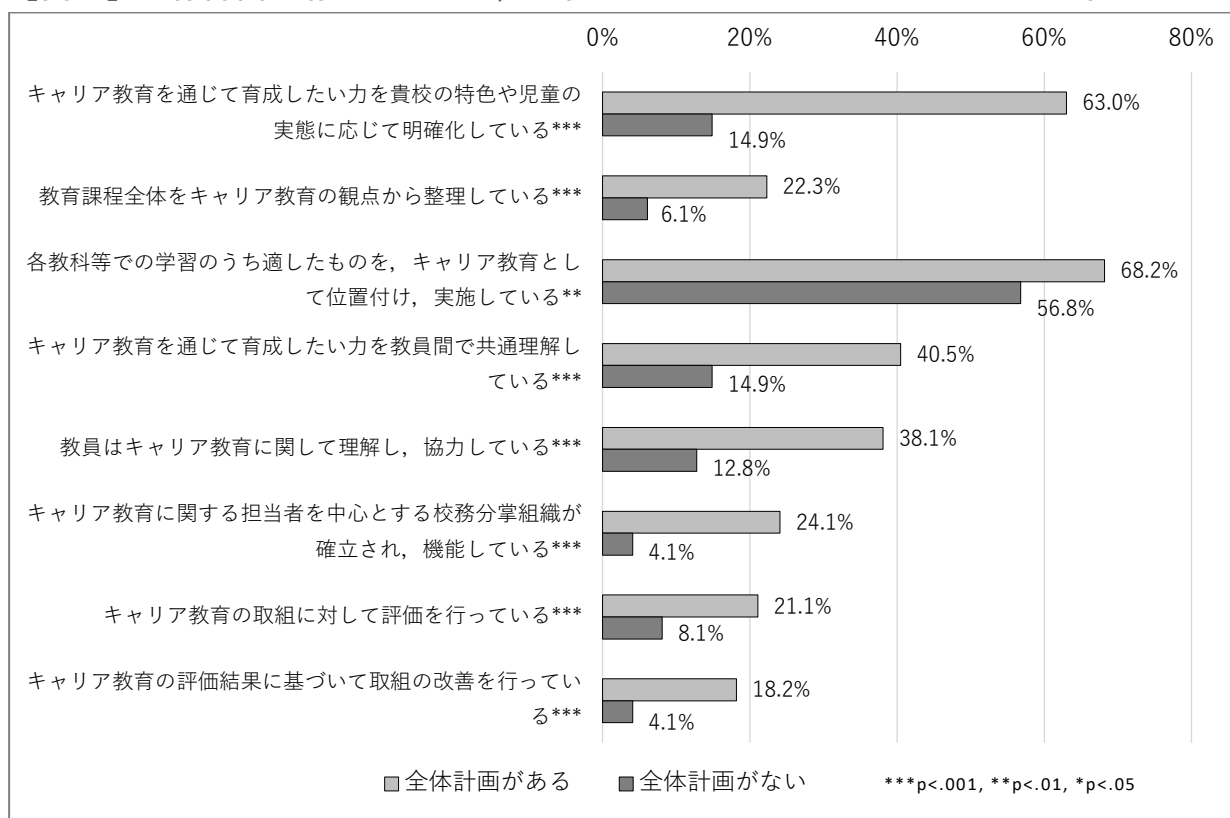
①全体計画が管理職・担任の意識に与える影響

79.9%の学校がキャリア教育の全体計画を作成しているが*¹、それはカリキュラム・マネジメントの第一歩といっても過言でない。全体計画のある学校とない学校で、学校のキャリア教育の現状のうち*²、カリキュラム・マネジメントと関わりの深い8項目の割合を比較したところ、全項目で全体計画のある学校の方が高くなった(図1)。特に、「キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児童の実態に応じて明確化している」は48.1ポイント、「キャリア教育を通じて育成したい力を教員間で共通理解している」は25.6ポイント、「教員はキャリア教育に関して理解し、協力している」は25.3ポイントの差がある。

それでは、どのような全体計画が学校レベルのカリキュラム・マネジメントを促進するのであろうか。全体計画のある学校に限定して、そこに具体的に記されている内容*³と、キャリア教育の現状のうち*²、カリキュラム・マネジメントと関わりの深い

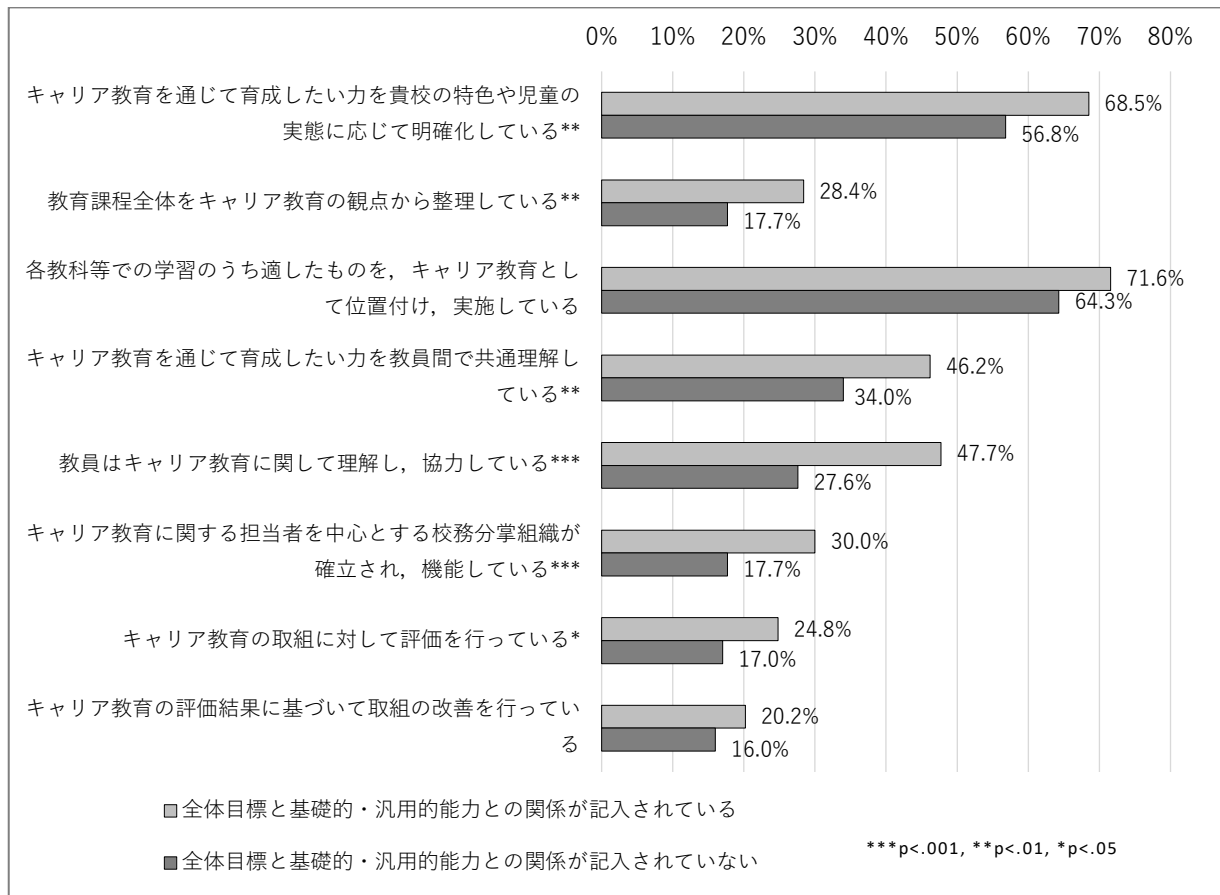
8項目との関係を分析したところ、「キャリア教育の全体目標（学校全体で身につけさせたい資質・能力）と基礎的・汎用的能力との関係」を記載することの有効性が明らかになった。全体目標と基礎的・汎用的能力の関係を記入している学校は、そうでない学校に比べて6項目で割合が高く、特に「教員はキャリア教育に関して理解し、協力している」は20.1ポイント、「キャリア教育に関する担当者を中心とする校務分掌組織が確立され、機能している」は12.3ポイントの差がある（図2）。基礎的・汎用的能力との関係を明記することが、目標を意識化し、教育内容・方法を見直したり教育組織を構築したりすることにつながっていると推察される。一方で、「キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている」に関しては、全体計画の有無による差は確認されているが（図1）、全体目標と基礎的・汎用的能力の関係を記入しているかどうかによる差は見られなかった（図2）。このことは、全体計画の作成はPDCAサイクルを展開するために必要であるが、計画の内容を充実させるだけでは改善（A）にまで至らない可能性があることを示唆している。

【図1】全体計画の有無別にみた、学校のカリキュラム・マネジメントの状況



※ χ^2 検定の結果、8項目の全てで有意差が見られた。「キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児童の実態に応じて明確化している」($\chi^2(1) = 111.538, p < .001$)、「教育課程全体をキャリア教育の観点から整理している」($\chi^2(1) = 22.185, p < .001$)、「各教科等での学習のうち適したものを、キャリア教育として位置付け、実施している」($\chi^2(1) = 6.934, p < .01$)、「キャリア教育を通じて育成したい力を教員間で共通理解している」($\chi^2(1) = 34.314, p < .001$)、「教員はキャリア教育に関して理解し、協力している」($\chi^2(1) = 34.386, p < .001$)、「キャリア教育に関する担当者を中心とする校務分掌組織が確立され、機能している」($\chi^2(1) = 29.784, p < .001$)、「キャリア教育の取組に対して評価を行っている」($\chi^2(1) = 13.264, p < .001$)、「キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている」($\chi^2(1) = 18.225, p < .001$)

【図2】全体計画に「キャリア教育の全体目標と基礎的・汎用的能力との関係を記している学校とそうでない学校の別でみた、学校のカリキュラム・マネジメントの状況



※全体計画がある学校に限定した比較

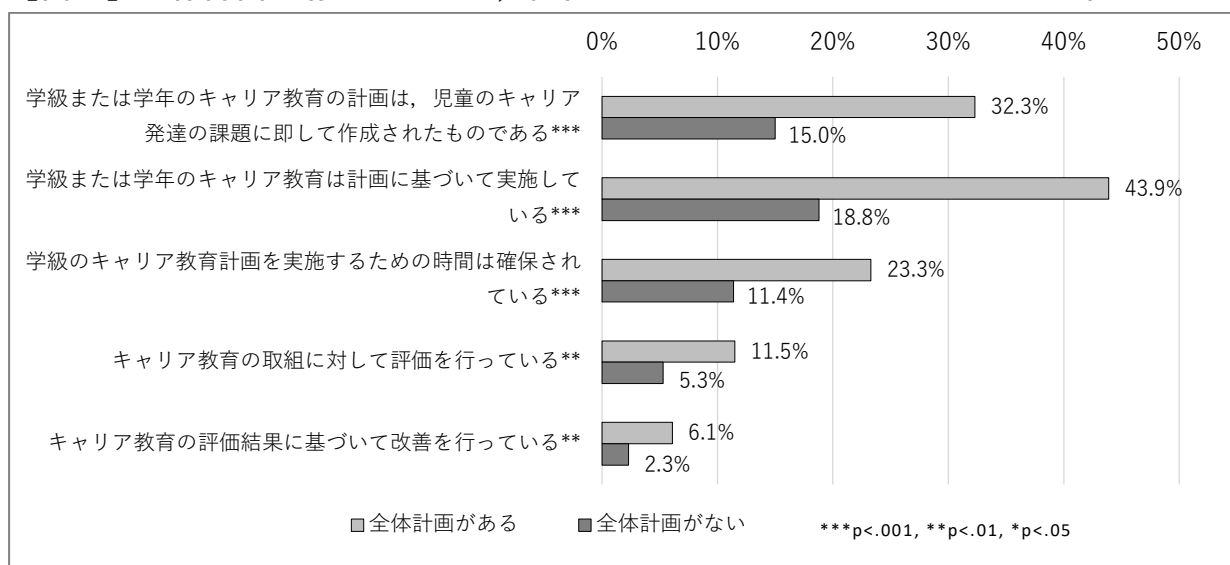
※ χ^2 検定の結果、6項目で有意差が見られた。「キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児童の実態に応じて明確化している」($\chi^2(1) = 9.086, p < .01$), 「教育課程全体をキャリア教育の観点から整理している」($\chi^2(1) = 10.002, p < .01$), 「キャリア教育を通じて育成したい力を教員間で共通理解している」($\chi^2(1) = 9.511, p < .01$), 「教員はキャリア教育に関して理解し、協力している」($\chi^2(1) = 26.650, p < .001$), 「キャリア教育に関する担当者を中心とする校務分掌組織が確立され、機能している」($\chi^2(1) = 12.748, p < .001$), 「キャリア教育の取組に対して評価を行っている」($\chi^2(1) = 5.606, p < .05$)

全体計画は、学年・学級レベルのカリキュラム・マネジメントも促進する。全体計画の有無と担任から見たキャリア教育の計画・実施に関する現状のうち*4、カリキュラム・マネジメントと関わりの深い5項目との関係を分析したところ、全体計画のある学校の担任はない学校の担任に比べて、全ての項目で高い割合となった(図3)。特に、「学級または学年のキャリア教育は計画に基づいて実施している」は25.1ポイント、「学級または学年のキャリア教育の計画は、児童のキャリア発達の課題に即して作成されたものである」は17.3ポイントの差が確認された。また全体計画は、担任によるキャリア教育の評価及び評価結果に基づく改善も促進するが、計画のある学校の担任でもそれぞれ11.5%と6.1%にとどまっていることから、その効果は限定的であると言えよう。

また、全体計画のある学校とない学校で、自校のキャリア教育目標の内容を把握している担任の割合^{*5}を比較したところ、計画のある学校では、ない学校と比べて39.0ポイント高い(図4)。さらに、全体計画のある学校に限定して、「キャリア教育の全体目標と基礎的・汎用的能力との関係」を全体計画に記載しているかどうかで比較したところ、記載している学校はしていない学校に比べて、11.6ポイント高い(図5)。したがって、全体計画を作成する際に全体目標及び基礎的・汎用的能力の関係を明らかにしながら育成したい力を記載することは、担任が目標を意識してキャリア教育を実践することにつながると考えられる。

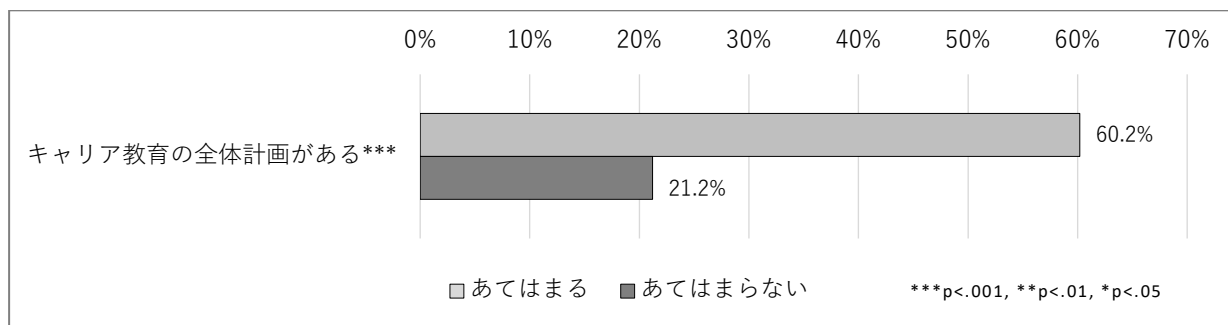
さらに、全体計画のある学校とない学校で、担任から見た児童や保護者におけるキャリア教育の計画・実施に関する現状^{*6}を比較したところ、全体計画のある学校では、児童の成長を見取っている担任の割合が高い傾向にある(図6)。特に「児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる」は15.1ポイント、「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、自己の生き方や進路を真剣に考えている」は11.5ポイントの差がある。

【図3】全体計画の有無別にみた、担任のカリキュラム・マネジメントの状況



※ χ^2 検定の結果、5項目全てで有意差が見られた。「学級または学年のキャリア教育の計画は、児童のキャリア発達の課題に即して作成されたものである」($\chi^2(1) = 39.230, p < .001$), 「学級または学年のキャリア教育は計画に基づいて実施している」($\chi^2(1) = 70.858, p < .001$), 「学級のキャリア教育計画を実施するための時間は確保されている」($\chi^2(1) = 22.685, p < .001$), 「キャリア教育の取組に対して評価を行っている」($\chi^2(1) = 11.316, p < .01$), 「キャリア教育の評価結果に基づいて改善を行っている」($\chi^2(1) = 7.355, p < .01$)

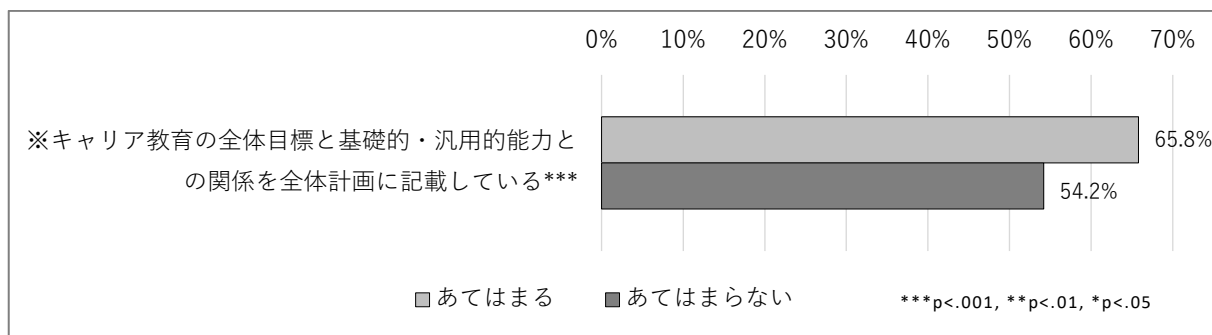
【図4】 全体計画の有無別にみた、自校のキャリア教育目標を把握している担任の割合



※「学校で設定しているキャリア教育目標について詳しく知っており、その内容を人に説明することができる」と「学校で設定しているキャリア教育目標について、その内容を人に説明はできないがある程度知っている」の合計

※ χ^2 検定の結果、有意差が見られた ($\chi^2(1) = 163.606, p<.001$)。

【図5】 全体計画に「キャリア教育の全体目標と基礎的・汎用的能力との関係を記している学校とそうでない学校の別でみた、自校のキャリア教育目標を把握している担任の割合

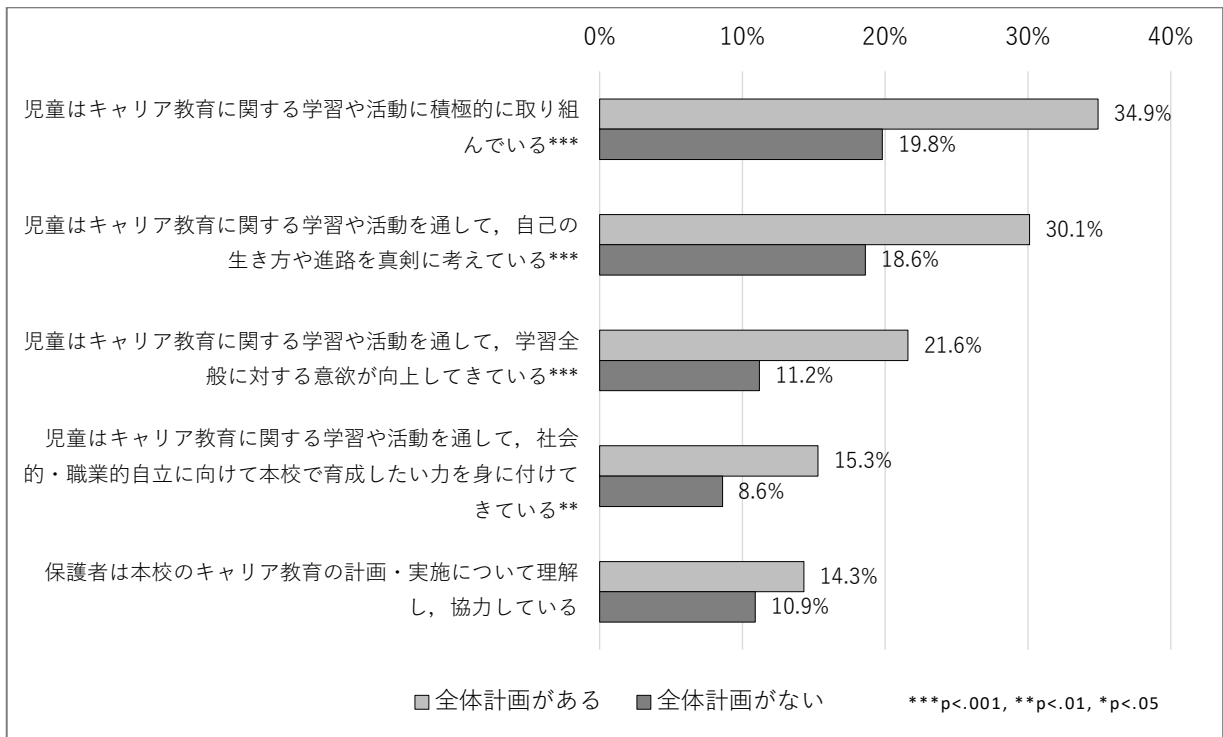


※「学校で設定しているキャリア教育目標について詳しく知っており、その内容を人に説明することができる」と「学校で設定しているキャリア教育目標について、その内容を人に説明はできないがある程度知っている」の合計

※全体計画がある学校に限定した比較

※ χ^2 検定の結果、有意差が見られた。 ($\chi^2(1) = 16.531, p<.001$)

【図6】全体計画の有無別にみた、児童や保護者のキャリア教育に関する現状に対する担任の意識



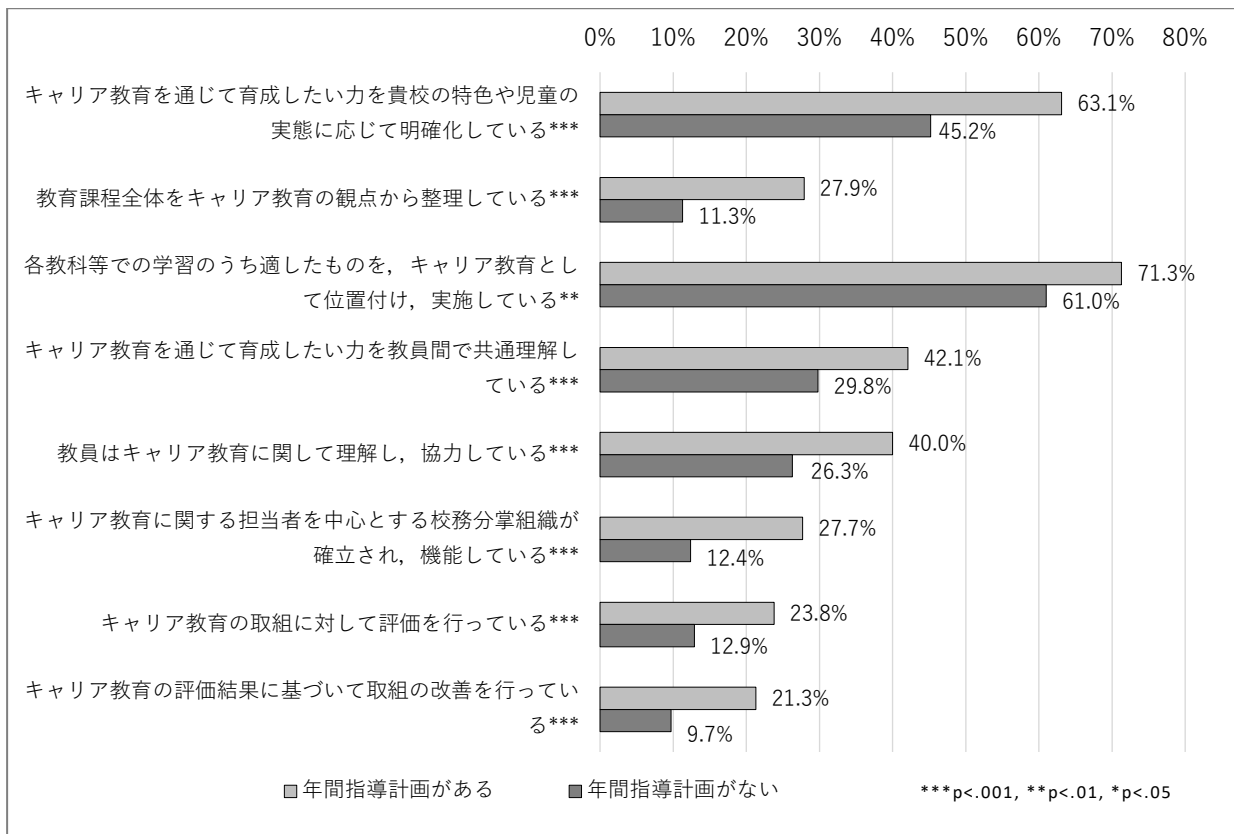
※ χ^2 検定の結果、4項目で有意差が見られた。「児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる」($\chi^2(1) = 28.650, p < .001$)、「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、自己の生き方や進路を真剣に考えている」($\chi^2(1) = 17.775, p < .001$)、「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、学習全般に対する意欲が向上してきている」($\chi^2(1) = 18.885, p < .001$)、「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、社会的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている」($\chi^2(1) = 10.078, p < .01$)

②年間指導計画が管理職・担任の意識に与える影響

全体計画を作成している学校が約8割に達するのに対して、年間指導計画のある学校は50.5%と約半数にとどまる*⁷。しかし、年間指導計画の有無は、学校及び学年・学級のカリキュラム・マネジメントに大きな影響を与えている。

年間指導計画のある学校とない学校で、学校のキャリア教育の現状のうち*²、カリキュラム・マネジメントと関わりの深い8項目の割合を比較したところ、全項目で年間指導計画のある学校の方が高くなった(図7)。特に、「キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児童の実態に応じて明確化している」は17.9ポイント、「教育課程全体をキャリア教育の観点から整理している」は16.6ポイント、「キャリア教育に関する担当者を中心とする校務分掌組織が確立され、機能している」は15.3ポイントの差がある。また、キャリア教育の評価・改善に関しても差が確認されることから、PDCAサイクルを確立するためには年間指導計画が必要であると言えよう。

【図7】年間指導計画の有無別にみた、学校のカリキュラム・マネジメントの状況



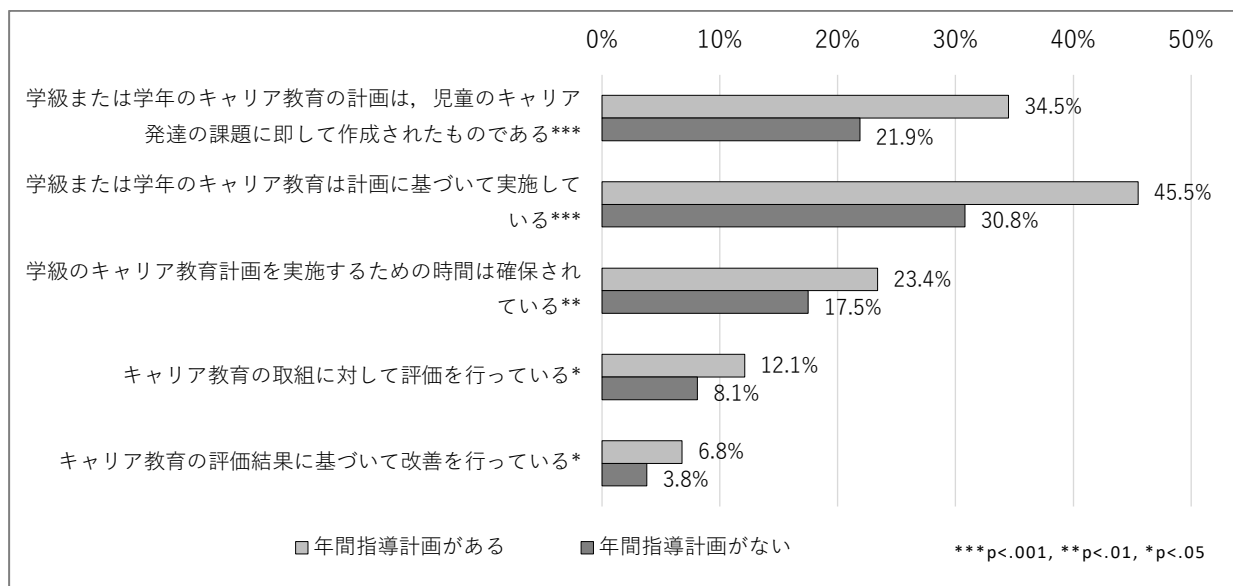
※ χ^2 検定の結果、8項目の全てで有意差が見られた。「キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児童の実態に応じて明確化している」($\chi^2(1) = 24.629, p < .001$)、「教育課程全体をキャリア教育の観点から整理している」($\chi^2(1) = 33.251, p < .001$)、「各教科等での学習のうち適したものを、キャリア教育として位置付け、実施している」($\chi^2(1) = 8.968, p < .01$)、「キャリア教育を通じて育成したい力を教員間で共通理解している」($\chi^2(1) = 12.312, p < .001$)、「教員はキャリア教育に関して理解し、協力している」($\chi^2(1) = 15.967, p < .001$)、「キャリア教育に関する担当者を中心とする校務分掌組織が確立され、機能している」($\chi^2(1) = 27.736, p < .001$)、「キャリア教育の取組に対して評価を行っている」($\chi^2(1) = 15.119, p < .001$)、「キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている」($\chi^2(1) = 19.457, p < .001$)

次に、年間指導計画の有無と担任から見たキャリア教育の計画・実施に関する現状のうち^{*4}、カリキュラム・マネジメントと関わりの深い5項目との関係を分析した。その結果、年間指導計画のある学校の担任はない学校の担任に比べて、いずれも高い割合であり、「児童のキャリア発達の課題に即して作成されたものである」は12.6ポイント、「計画に基づいて実施している」は14.7ポイントの差があった(図8)。したがって、学校の年間指導計画があることで、担任はそれを手がかりに各学年や各学級の実態に合ったキャリア教育の計画を作成し、実践できると考えられる。また年間指導計画には、担任によるキャリア教育の評価及び評価結果に基づく改善も促進するが、計画のある学校の担任でもそれぞれ12.1%と6.8%にとどまっていることから、その効果は限定的と考えられる。

さらに、年間指導計画のある学校とない学校で、自校のキャリア教育目標の内容を

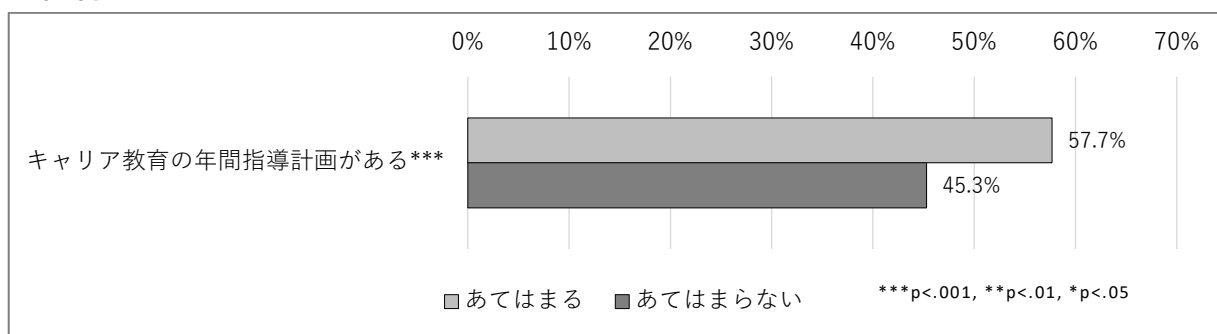
把握している担任の割合*⁵を比較したところ、計画のある学校では、ない学校と比べて目標を把握している担任の割合が12.4ポイント高くなった(図9)。このように、年間指導計画は、担任が自校のキャリア教育目標を理解することを後押しする。

【図8】年間指導計画の有無別にみた、担任のカリキュラム・マネジメントの状況



※ χ^2 検定の結果、5項目で有意差が見られた。「学級または学年のキャリア教育の計画は、児童のキャリア発達の課題に即して作成されたものである」($\chi^2(1) = 29.020, p < .001$), 「学級または学年のキャリア教育は計画に基づいて実施している」($\chi^2(1) = 33.631, p < .001$), 「学級のキャリア教育計画を実施するための時間は確保されている」($\chi^2(1) = 7.874, p < .01$), 「キャリア教育の取組に対して評価を行っている」($\chi^2(1) = 6.610, p < .05$), 「キャリア教育の評価結果に基づいて改善を行っている」($\chi^2(1) = 6.684, p < .05$)

【図9】年間指導計画の有無別にみた、自校のキャリア教育目標を把握している担任の割合



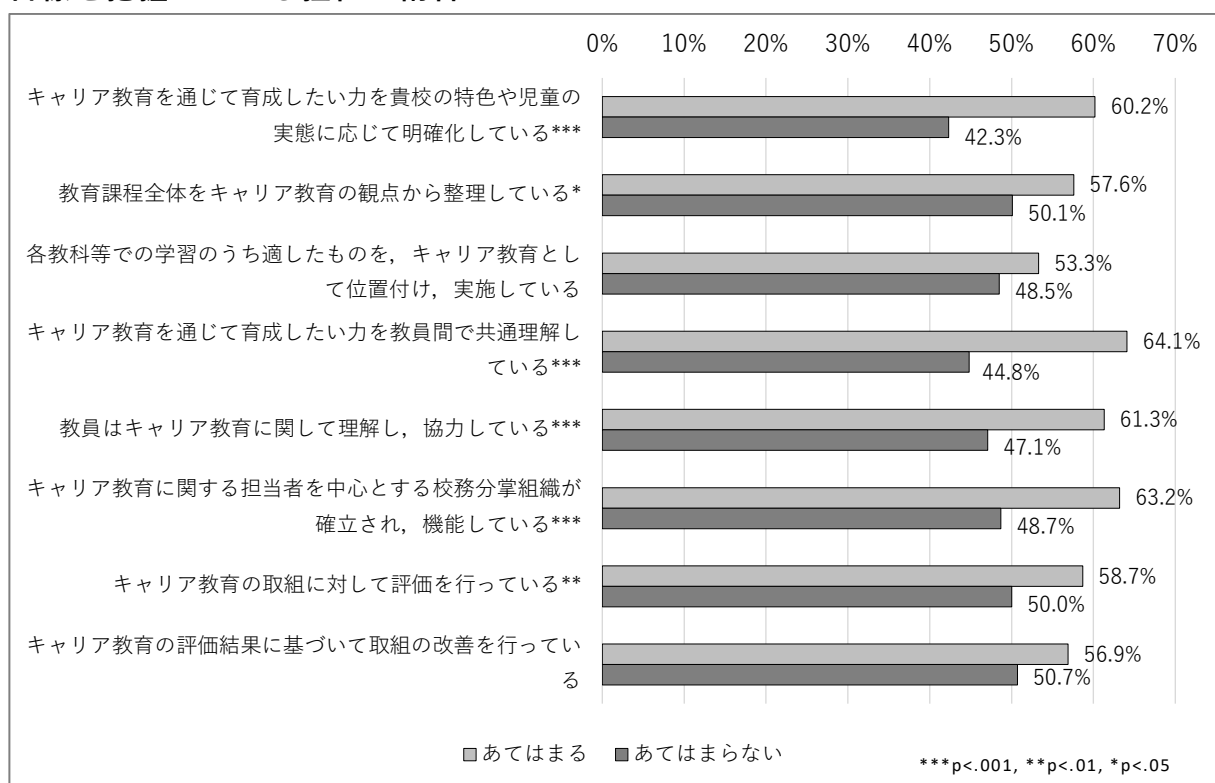
※「学校で設定しているキャリア教育目標について詳しく知っており、その内容を人に説明することができる」と「学校で設定しているキャリア教育目標について、その内容を人に説明はできないがある程度知っている」の合計

※ χ^2 検定の結果、有意差が見られた。($\chi^2(1) = 23.135, p < .001$)

③カリキュラム・マネジメントが担任の意識に及ぼす影響

カリキュラム・マネジメントが実現されることは、キャリア教育に関する担任の意識にどのような影響を与えるだろうか。学校のキャリア教育の現状^{*2}のうちカリキュラム・マネジメントと関わりの深い8項目の回答によって、自校のキャリア教育目標の内容を把握している担任の割合^{*5}がどう異なるか分析を行った結果、6項目で差が確認された(図10)。特に、「キャリア教育を通じて育成したい力を教員間で共通理解している」かどうかで19.3ポイント、「キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児童の実態に応じて明確化」しているかどうかで17.9ポイントの差が見られる。したがって、育成したい力を明確化して教員間で共通理解することが、担任が目標を意識することにつながると考えられる。

【図10】学校のカリキュラム・マネジメントの状況別にみた、自校のキャリア教育目標を把握している担任の割合



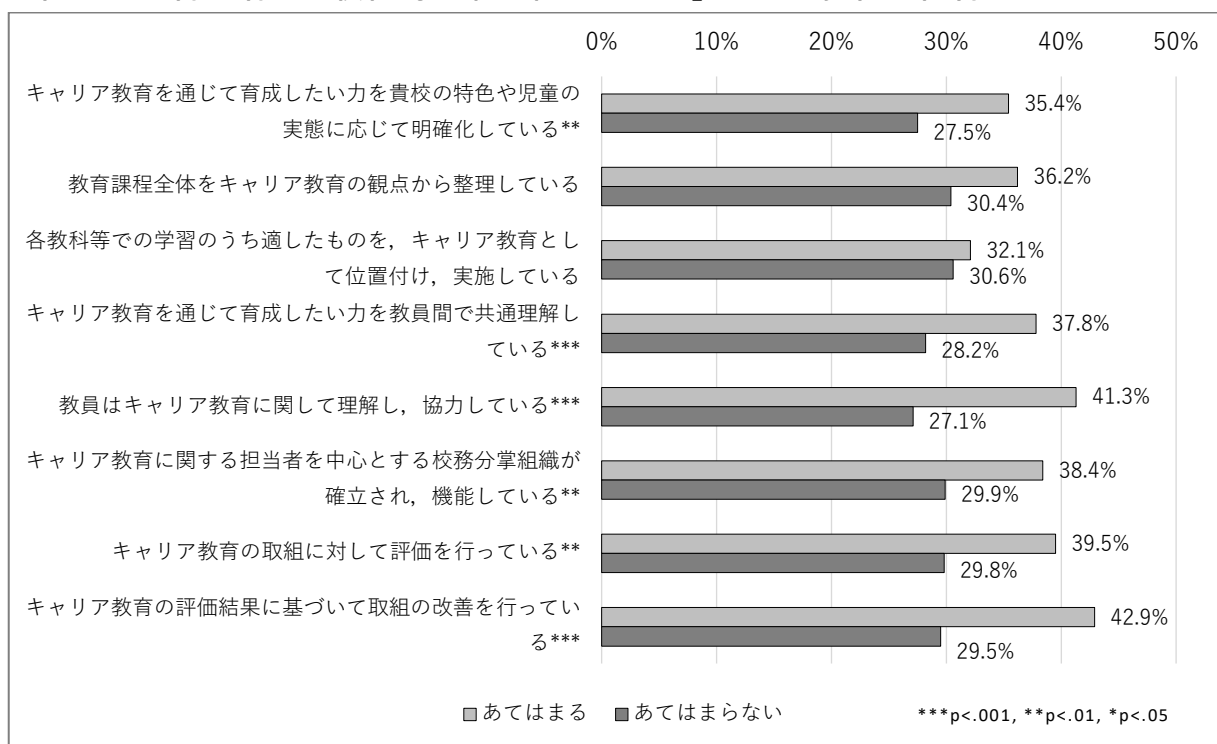
※ χ^2 検定の結果、6項目で有意差が見られた。「キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児童の実態に応じて明確化している」($\chi^2(1) = 48.633, p < .001$), 「教育課程全体をキャリア教育の観点から整理している」($\chi^2(1) = 5.527, p < .05$), 「キャリア教育を通じて育成したい力を教員間で共通理解している」($\chi^2(1) = 51.704, p < .001$), 「教員はキャリア教育に関して理解し、協力している」($\chi^2(1) = 26.625, p < .001$), 「キャリア教育に関する担当者を中心とする校務分掌組織が確立され、機能している」($\chi^2(1) = 20.656, p < .001$), 「キャリア教育の取組に対して評価を行っている」($\chi^2(2) = 6.771, p < .01$)

さらに、学校のキャリア教育の現状のうち*2、カリキュラム・マネジメントと関わりの深い8項目の回答によって、学級や学年の児童におけるキャリア教育の計画・実施について担任に尋ねた設問のうち*6、「児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる」及び「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、学習全般に対する意欲が向上してきている」と回答した割合がどう異なるか分析した。

その結果、「児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる」については、6項目で差が確認された(図11)。特に「教員はキャリア教育に関して理解し、協力している」かどうかで14.2ポイント、「キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている」かどうかで13.4ポイント、「キャリア教育の取組に対して評価を行っている」かどうかで9.7ポイント、「キャリア教育を通じて育成したい力を教員間で共通理解している」かどうかで9.6ポイントの差がある。また、「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、学習全般に対する意欲が向上してきている」については、7項目で差が確認された(図12)。特に「教育課程全体をキャリア教育の観点から整理している」かどうかで10.0ポイント、「キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている」かどうかで7.5ポイント、「教員はキャリア教育に関して理解し、協力している」かどうかで7.3ポイントの差がある。

このように、キャリア教育で育てたい力を明確にして教員で共通理解し、その育成に向けて組織的に協力して教育課程を見直している学校、更にはキャリア教育を評価し、その結果をもとに改善している学校では、担任が子供の積極性や学習意欲の向上を実感している。

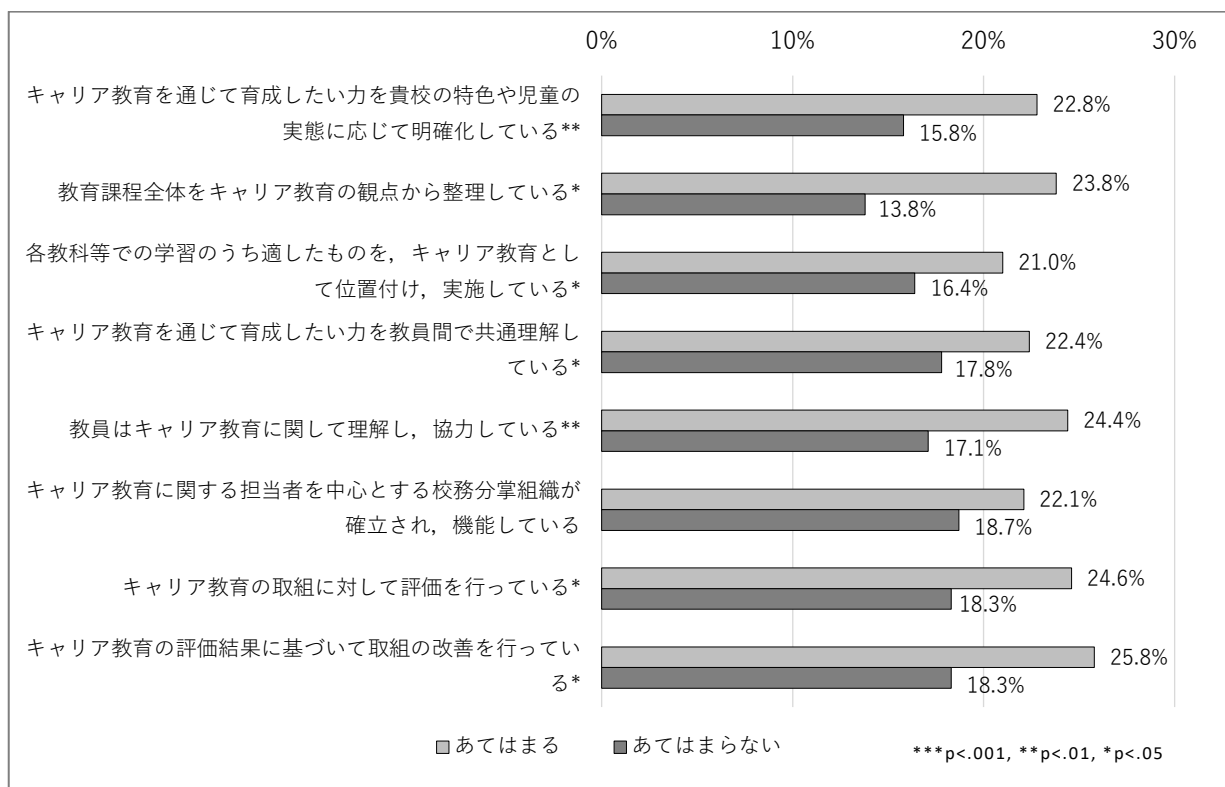
【図11】学校のカリキュラム・マネジメントの状況別にみた、「児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる」と思う担任の割合



※ χ^2 検定の結果、6項目で有意差が見られた。「キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児童

童の実態に応じて明確化している」($\chi^2(1) = 11.022, p < .01$), 「キャリア教育を通じて育成したい力を教員間で共通理解している」($\chi^2(1) = 14.543, p < .001$), 「教員はキャリア教育に関して理解し, 協力している」($\chi^2(1) = 30.787, p < .001$), 「キャリア教育に関する担当者を中心とする校務分掌組織が確立され, 機能している」($\chi^2(1) = 8.347, p < .01$), 「キャリア教育の取組に対して評価を行っている」($\chi^2(1) = 9.748, p < .01$), 「キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている」($\chi^2(1) = 16.346, p < .001$)

【図 12】 学校のカリキュラム・マネジメントの状況別にみた, 「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して, 学習全般に対する意欲が向上してきている」と思う担任の割合



※ χ^2 検定の結果, 7 項目で有意差が見られた。「キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児童の実態に応じて明確化している」($\chi^2(1) = 11.842, p < .01$), 「教育課程全体をキャリア教育の観点から整理している」($\chi^2(1) = 4.649, p < .05$), 「各教科等での学習のうち適したものを, キャリア教育として位置付け, 実施している」($\chi^2(1) = 4.706, p < .05$), 「キャリア教育を通じて育成したい力を教員間で共通理解している」($\chi^2(1) = 4.520, p < .05$), 「教員はキャリア教育に関して理解し, 協力している」($\chi^2(1) = 11.167, p < .01$), 「キャリア教育の取組に対して評価を行っている」($\chi^2(1) = 5.844, p < .05$), 「キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている」($\chi^2(1) = 7.025, p < .05$)

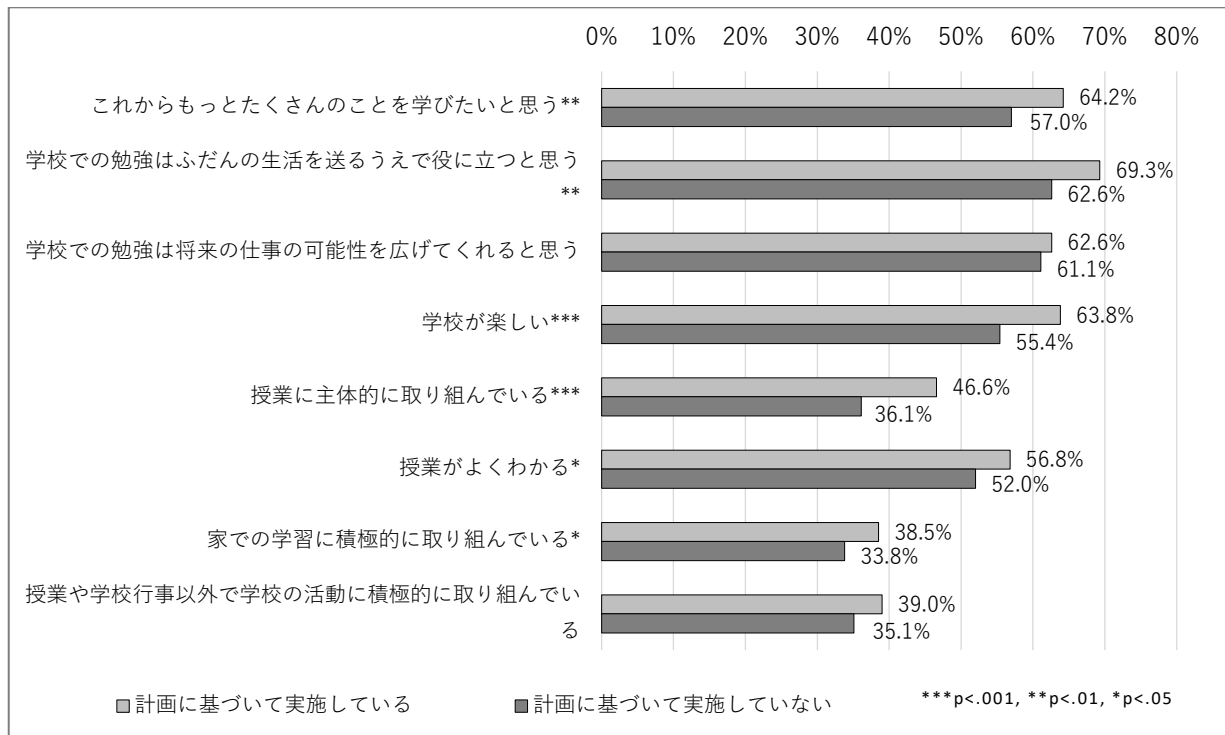
④計画に基づく実践が児童の学習意欲と基礎的・汎用的能力に及ぼす影響

学年・学級でのカリキュラム・マネジメントは、児童の学習意欲や基礎的・汎用的能力の向上に寄与しているのだろうか。

担任から見たキャリア教育の計画・実施に関する現状のうち*4、「学級または学年のキャリア教育は計画に基づいて実施している」と回答した担任とそうでない担任で、児童の学習に対する意識を尋ねた設問*8に「あてはまる」と回答した割合を比較したところ、6項目で計画に基づいて実施している担任の学級に所属する児童の方が高くなった（図13）。特に、「授業に主体的に取り組んでいる」は10.5ポイント、「学校が楽しい」は8.4ポイント、「これからもっとたくさんのことを学びたいと思う」は7.2ポイントの差が見られる。このことから、担任が計画に基づいてキャリア教育を実践することは児童の学習意欲を向上させ、「学びに向かう力」の育成に寄与すると考えられる。

次に、「学級または学年のキャリア教育は計画に基づいて実施している」と回答した担任とそうでない担任で、児童の日常生活の様子に関する設問*9に「いつもそうしている」と回答した割合を比較したところ、8項目で計画に基づいて実施している担任の学級に所属する児童の方が高くなった（図14）。特に、「自分の考えを話す時は、相手が理解しやすいように伝えている」は8.8ポイント、「誰かの話を聞く時は、その人の考えを受け止めようとしている」は8.2ポイント、「苦手なことをしないといけない時でも、進んで取り組んでいる」は7.6ポイントの差がある。したがって、計画に基づいてキャリア教育を実践することは児童の基礎的・汎用的能力を向上させており、とりわけ人間関係形成・社会形成能力及び自己理解・自己管理能力の発達に大きく貢献していると考えられる。

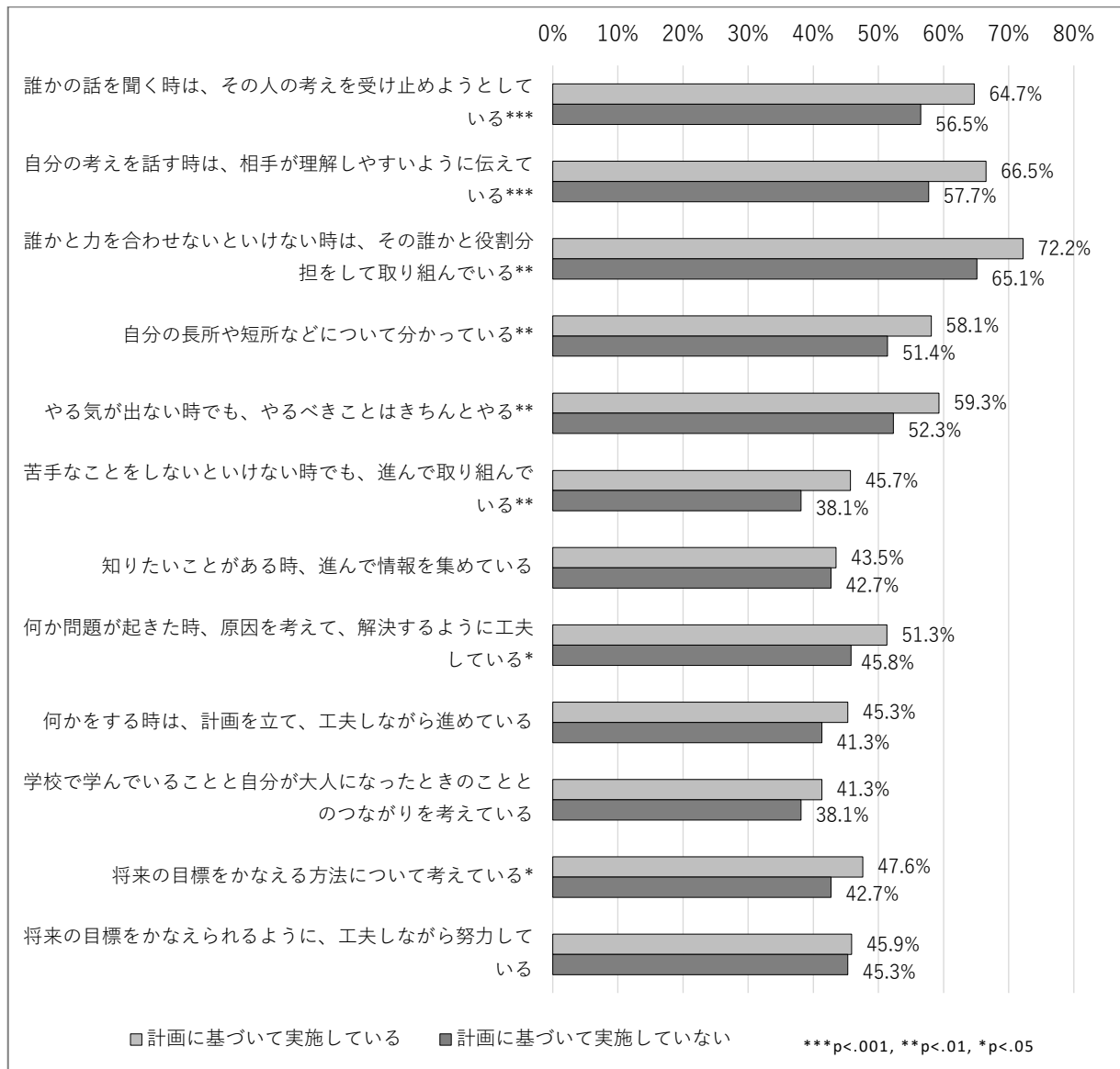
【図 13】 計画に基づいてキャリア教育を実施する担任とそうでない担任の別に見た、学習に対する児童の意識



※ 「あてはまる」と回答した児童の割合

※ χ^2 検定の結果、6項目で有意差が見られた。「これからもっとたくさんのことを学びたいと思う」($\chi^2(1) = 11.065, p < .01$)、「学校での勉強はふだんの生活を送るうえで役に立つと思う」($\chi^2(1) = 10.031, p < .01$)、「学校が楽しい」($\chi^2(1) = 14.929, p < .001$)、「授業に主体的に取り組んでいる」($\chi^2(1) = 23.633, p < .001$)、「授業がよくわかる」($\chi^2(1) = 4.770, p < .05$)、「家での学習に積極的に取り組んでいる」($\chi^2(1) = 4.726, p < .05$)

【図 14】 計画に基づいてキャリア教育を実施する担任とそうでない担任の別に見た、基礎的・汎用的能力に関する児童の意識



※ 「いつもそうしている」と回答した児童の割合

※ χ^2 検定の結果、8項目で有意差が見られた。「誰かの話を聞く時は、その人の考えを受け止めようとしている」($\chi^2(1) = 14.081, p < .001$), 「自分の考えを話す時は、相手が理解しやすいように伝えている」($\chi^2(1) = 16.321, p < .001$), 「誰かと力を合わせないといけない時は、その誰かと役割分担をして取り組んでいる」($\chi^2(1) = 11.640, p < .01$), 「自分の長所や短所などについて分かっている」($\chi^2(1) = 9.094, p < .01$), 「やる気が出ない時でも、やるべきことはきちんとやる」($\chi^2(1) = 9.921, p < .01$), 「苦手なことをしないといけない時でも、進んで取り組んでいる」($\chi^2(1) = 12.093, p < .01$), 「何か問題が起きた時、原因を考えて、解決するように工夫している」($\chi^2(1) = 6.069, p < .05$), 「将来の目標をかなえる方法について考えている」($\chi^2(1) = 4.847, p < .05$)

⑤今後の方向性

児童の意識レベルで見たとき、学習意欲や基礎的・汎用的能力の向上のカギを握るのは、担任が計画に基づいてキャリア教育を実施するかどうかである。ただし、それは担任個人の努力だけによってなし得るものではない。学校として全体計画や年間指導計画を作成して具体的に「育てたい力」を明確にし、それを各教員が把握して共通認識をもつことで、担任は計画的な実践を行うことが可能となる。そのためには今後、多くの教員がキャリア教育の全体計画の作成プロセスに関わり、具体的かつ焦点化された目標（「育てたい力」）を協力してつくりあげること、またそれを実践の中で常に意識できるように可視化することが求められる。

一方で、「キャリア教育の取組に対して評価を行っている」学校は全体の18.3%、「キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている」学校は15.4%にすぎない*²。分析からは、全体計画や年間指導計画を充実させるだけでは、取組の評価・改善には必ずしもつながらず、新たな工夫が必要であることが示唆される。例えば、児童の作成した「キャリア・パスポート」の内容を見取るなど、キャリア教育の観点から見た児童の成長や課題を担任が解釈し、学年や学校全体で共有することで、PDCAサイクルにつなげていくことができるのではないだろうか（本章（4）テーマ3参照）。

参考：第一次報告書における参照データ

* 1	P54	小学校・学校調査	問4（1）A
* 2	P76	小学校・学校調査	問13
* 3	P55	小学校・学校調査	問4（1）B
* 4	P86	小学校・学級担任調査	問6
* 5	P85	小学校・学級担任調査	問4
* 6	P87	小学校・学級担任調査	問7
* 7	P57	小学校・学校調査	問4（2）A
* 8	P99	小学校・児童調査	問7
* 9	P97	小学校・児童調査	問5

(3) テーマ2 職業に関する体験活動の重要性

○職業に関する体験活動の実施は児童の学習意欲の向上に影響していると考えられる。

- ・職業に関する体験活動や事前・事後指導を担当が積極的に推進し、児童が学習経験として認識するためには、学校のキャリア教育計画の中に位置付ける必要がある。
- ・職業に関する体験活動を重視してキャリア教育計画を作成することは、体験活動の目標の明確化につながる。さらに、適性、職業選択、働き方、生き方について学ぶことを目標として体験活動を実施することで、児童の学習意欲を向上させることができる。
- ・事前指導を通して体験の内容や活動する上でのマナーを知ることは、児童の自己理解を促進する。また、事後指導を通して体験活動の成果を共有し、今後の生き方を展望することは、学校生活に対する児童の積極性を向上させる。特に「キャリア・パスポート」を活用することで、学習意欲を伸ばすことができる。
- ・職業に関する体験活動に参加することにより、児童の基礎的・汎用的能力や学習意欲が高まる。
- ・キャリア教育計画において職業に関する体験活動を重視する学校や、2日以上職場見学を実施する学校では、教室での職業に関する調べ学習を経験している児童の割合が少ない。校外での体験活動を充実させるだけでなく、校内での学習とのバランスを取り、双方の学びをつなげていく必要がある。

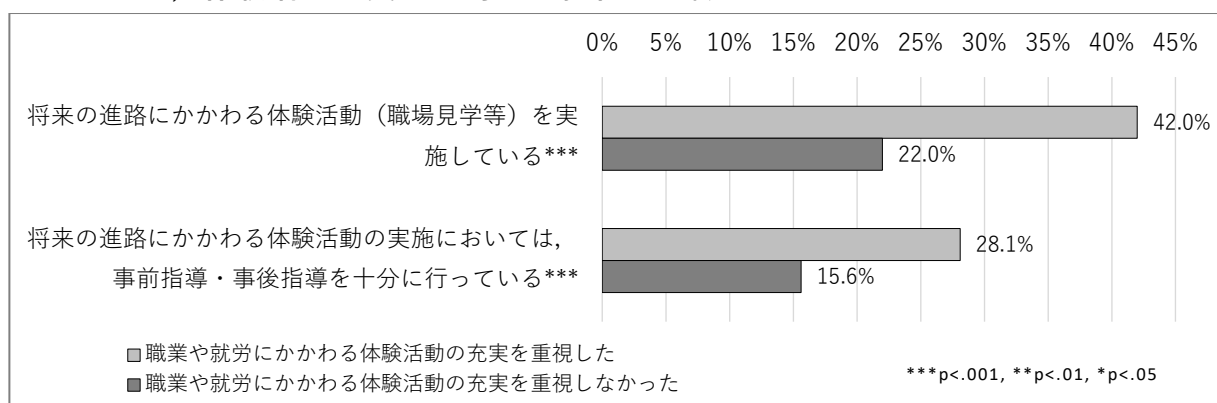
①キャリア教育の計画において職業に関する体験活動を重視することの意義

キャリア教育の計画を立てる上で重視したことを尋ねた設問で^{*1}、「職業や就労にかかわる体験活動（職場見学等）を充実させること」を選択した学校では、実際に体験活動が提供されているのだろうか。学級あるいは学年におけるキャリア教育の計画・実施に関する現状について担任に尋ねた設問のうち^{*2}、体験活動に関わる2項目を比較した。その結果、重視する学校はそうでない学校に比べて、「将来の進路にかかわる体験活動（職場見学等）を実施している」は20.0ポイント、「将来の進路にかかわる体験活動の実施においては、事前指導・事後指導を十分に行っている」は12.5ポイント高い（図1）。

さらに、将来の職業について児童が学校でどのような学習活動をしたか^{*3}を比較したところ、重視する学校はそうでない学校に比べて、「お店や工場、農家や漁師の仕事などの職業を見学したり体験したりする活動」は8.4ポイント、「大人の人から職業についてのお話を聞いたり、質問したりする活動」は7.7ポイント、「お店や工場、農家や漁師の仕事など、いろいろな仕事を知る学習」は6.6ポイント高い（図2）。一方で、「自分になりたい職業の内容について調べる活動」は9.1ポイント、「自分にあった職業を考える学習」は7.8ポイント低い。このことは、キャリア教育に関する学習時間が有限である中で、直接的な体験活動を重視することによって、教室内での学習の機会が相

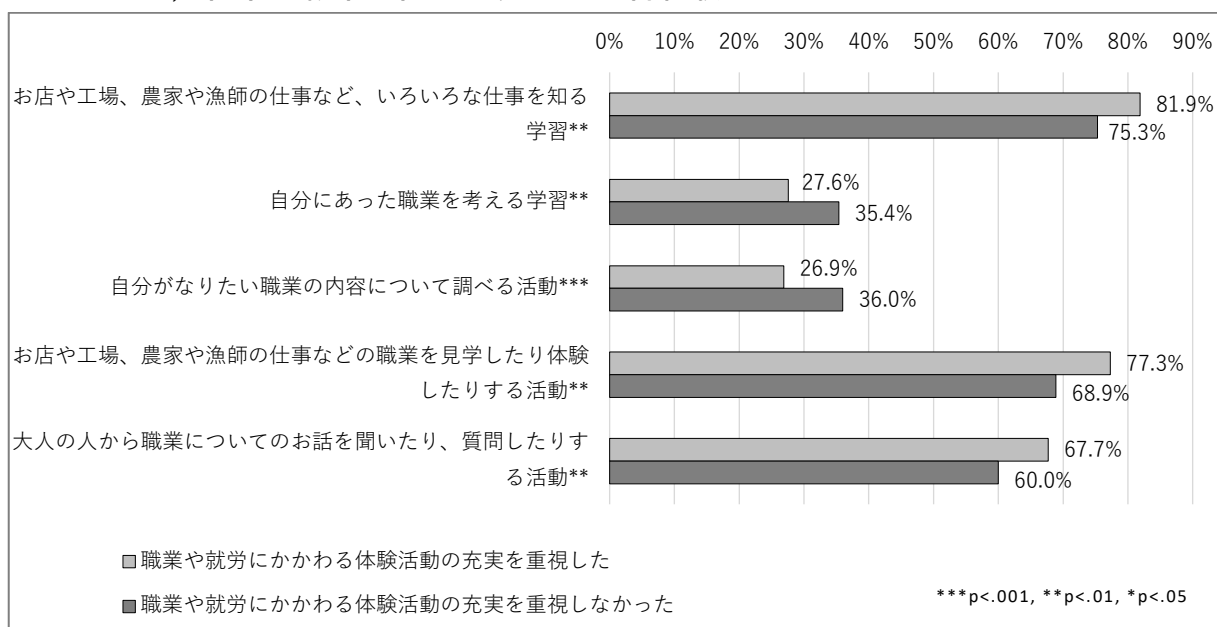
対的に少なくなってしまう可能性を示唆している。ただし、小学生段階では、職業に対する興味を広げることも重要である。体験活動を重視している学校では実感を伴った理解をさせるとともに、職業について興味・関心を高めることを大切にしており、児童の実態や発達段階に応じた活動に積極的に取り組んでいるという見方もできる。

【図1】学校のキャリア教育計画において体験活動を重視する学校と重視しない学校の別に見た、体験活動の実施に対する担任の意識



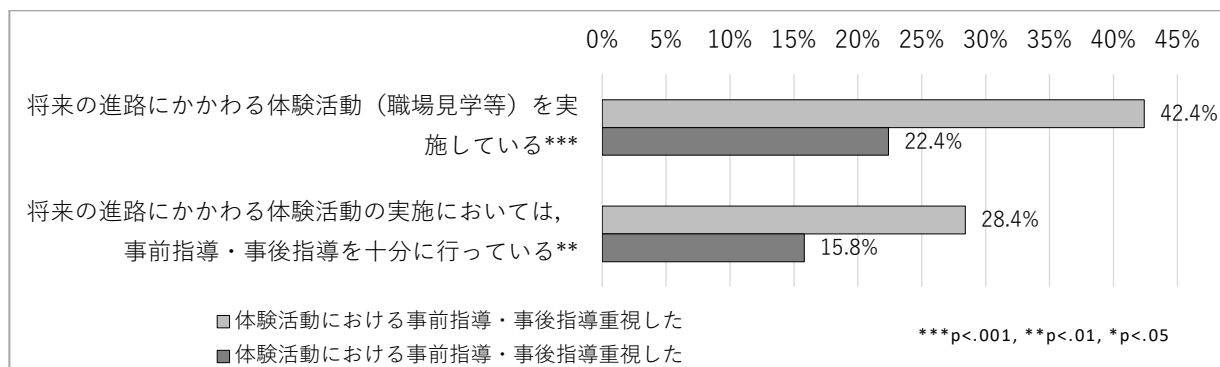
※ χ^2 検定の結果、2項目全てで有意差が見られた。「将来の進路にかかわる体験活動（職場見学等）を実施している」($\chi^2(1) = 46.294, p < .001$), 「将来の進路にかかわる体験活動の実施においては、事前指導・事後指導を十分に行っている」($\chi^2(1) = 23.472, p < .001$)

【図2】学校のキャリア教育計画において体験活動を重視する学校と重視しない学校の別に見た、将来の職業に関する児童の学習経験



※ χ^2 検定の結果、5項目全てで有意差が見られた。「お店や工場、農家や漁師の仕事など、いろいろな仕事を知る学習」($\chi^2(1) = 7.984, p < .01$), 「自分にあった職業を考える学習」($\chi^2(1) = 8.944, p < .01$), 「自分がなりたい職業の内容について調べる活動」($\chi^2(1) = 12.294, p < .001$), 「お店や工場、農家や漁師の仕事などの職業を見学したり体験したりする活動」($\chi^2(1) = 11.025, p < .01$), 「大人の人から職業についてのお話を聞いたり、質問したりする活動」($\chi^2(1) = 8.224, p < .01$)

【図3】学校のキャリア教育計画において事前・事後指導を重視する学校と重視しない学校の別にみた、体験活動の実施に対する担任の意識



※ χ^2 検定の結果、2項目全てで有意差が見られた。「将来の進路にかかわる体験活動（職場見学等）を実施している」($\chi^2(1) = 41.476, p < .001$)、「将来の進路にかかわる体験活動の実施においては、事前指導・事後指導を十分に行っている」($\chi^2(1) = 21.630, p < .001$)

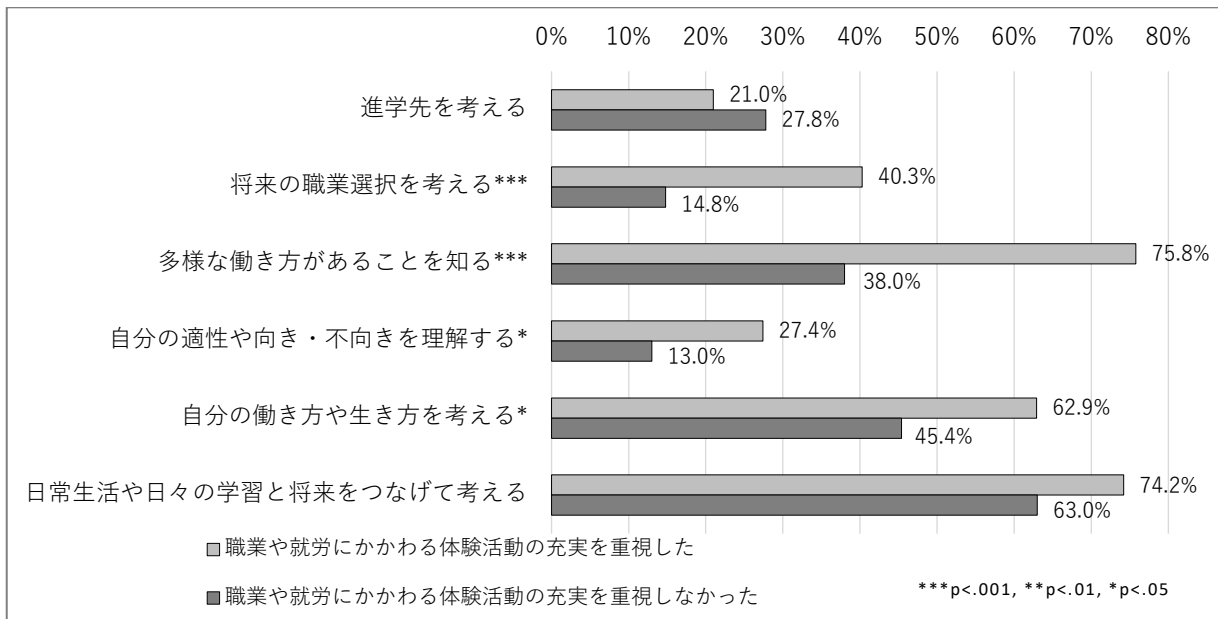
体験活動の事前指導と事後指導についても、学校の計画レベルで重視することが担任の行動の変容につながる。「職場見学や体験入学等の体験活動において、事前指導・事後指導を重視すること」を選択したかどうかによって、学級あるいは学年におけるキャリア教育の計画・実施に関する現状について担任に尋ねた設問のうち²、体験活動に関わる2項目を比較した。その結果、重視する学校はそうでない学校に比べて、「将来の進路にかかわる体験活動（職場見学等）を実施している」は20.0ポイント、「将来の進路にかかわる体験活動の実施においては、事前指導・事後指導を十分に行っている」は12.6ポイント、高い（図3）。

以上のことから、学校のキャリア教育計画の中に職業に関する体験活動や事前・事後指導を位置付けることは、担任がこれらの活動を積極的に実施することにつながり、児童もこれらの学習経験として認識できると言えよう。

②年間指導計画における体験活動の目標の重要性

年間指導計画に体験活動を位置付けている学校に限定して、実施する上で重視している点について尋ねた回答を⁴、キャリア教育計画において職業に関する体験活動を重視する学校とそうでない学校で比較した。その結果、重視する学校は体験活動の目標を明確化していることが明らかになった（図4）。特に「多様な働き方があることを知る」は37.8ポイント、「将来の職業選択を考える」は25.5ポイントの差がある。このように、キャリア教育計画の中に体験活動を位置付けることは、体験が提供されるかどうか（体験の量）にとどまらず、体験の質にも影響を与える。

【図4】学校のキャリア教育計画において体験活動を重視する学校と重視しない学校の別にみた、体験活動の実施にあたって重視した目標

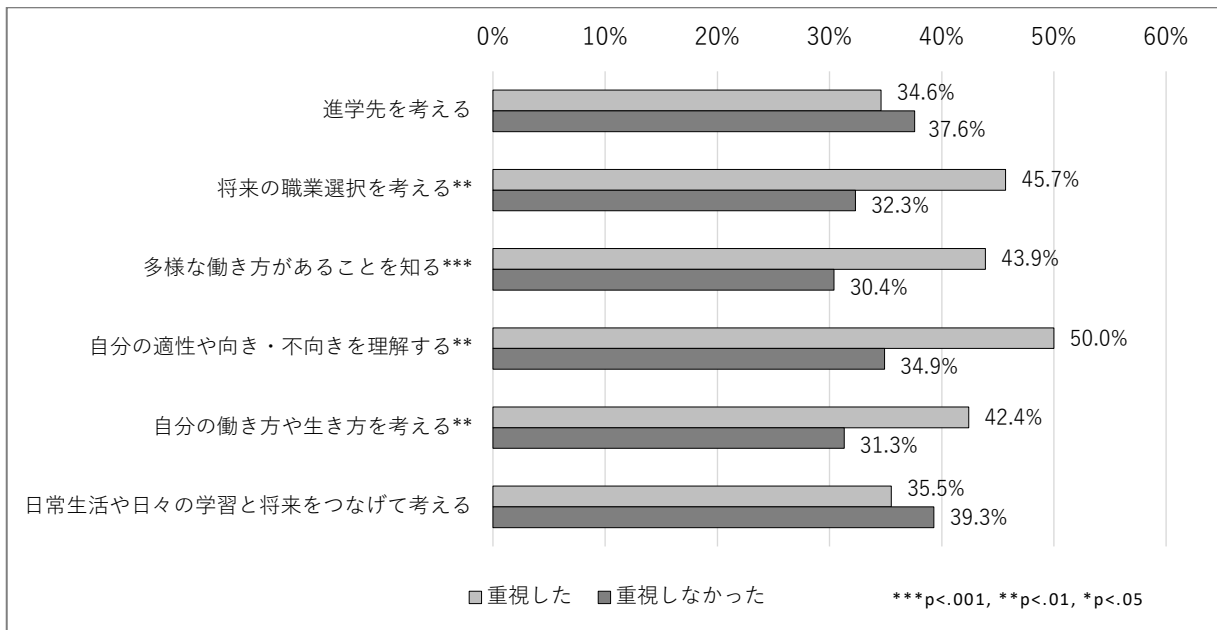


※年間指導計画に体験活動を位置付けている学校に限定した比較

※ χ^2 検定の結果、4項目で有意差が見られた。「将来の職業選択を考える」($\chi^2(1) = 14.003, p < .001$), 「多様な働き方があることを知る」($\chi^2(1) = 22.592, p < .001$), 「自分の適性や向き・不向きを理解する」($\chi^2(1) = 5.521, p < .05$), 「自分の働き方や生き方を考える」($\chi^2(1) = 4.849, p < .05$)

それでは、明確な目標をもって体験活動を行うことは、児童にどのような影響を与えるであろうか。学習に対する意識を児童に尋ねた設問のうち*5、「家での学習に積極的に取り組んでいる」に「あてはまる」と回答した児童の割合が、体験活動を実施する上で重視している点について尋ねた回答によってどう異なるか比較した。その結果、重視する学校はしない学校に比べて、4項目で高くなった。特に、「自分の適性や向き・不向きを理解する」を重視するかどうかで 15.1 ポイント、「多様な働き方があることを知る」を重視するかどうかで 13.5 ポイント、「将来の職業選択を考える」を重視するかどうかで 13.4 ポイントの差が確認される(図5)。したがって、適性、職業選択、働き方、生き方について考えるといった目標を重視して体験活動を実施することは、児童の学習意欲を向上させると考えられる。

【図5】体験活動を実施するにあたって重視した目標別にみた、「家での学習に積極的に取り組んでいる」に「あてはまる」と回答した児童の割合



※年間指導計画に体験活動を位置付けている学校の児童に限定した比較

※ χ^2 検定の結果、4項目で有意差が見られた。「将来の職業選択を考える」($\chi^2(1) = 12.053, p < .01$), 「多様な働き方があることを知る」($\chi^2(1) = 13.825, p < .001$), 「自分の適性や向き・不向きを理解する」($\chi^2(1) = 7.365, p < .01$), 「自分の働き方や生き方を考える」($\chi^2(1) = 9.402, p < .01$)

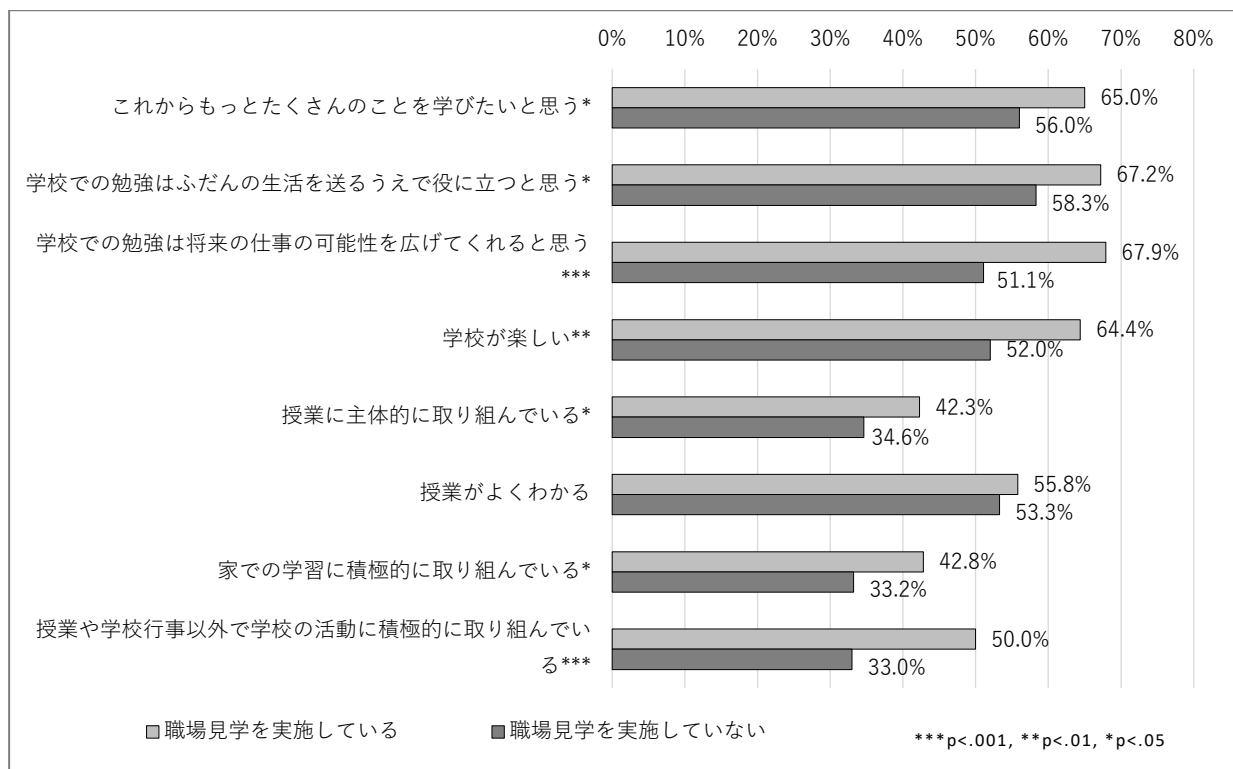
③学校による職場見学の実施が与える影響

学校が職場見学を実施することは、担任や児童の意識にどのような影響を与えるであろうか。

年間指導計画に体験活動を位置付けている学校のうち、職場見学を実施している学校と実施していない学校で*6、児童の学習に対する意識を尋ねた設問*5の回答を比較したところ、6項目について実施している学校の方が高い割合となった(図6)。特に、「授業や学校行事以外で学校の活動に積極的に取り組んでいる」は17.0ポイント、「学校での勉強は将来の仕事の可能性を広げてくれると思う」は16.8ポイント、「学校が楽しい」は12.4ポイントの差がある。したがって、児童が日常の学習に意義を見だし、主体的に学校生活を送ることと、職場見学の実施は何らかの関わりがあると考えられる。

それでは、職場見学の日数によって効果に違いは見られるだろうか。職場見学に充てる日数を尋ねた設問*7の回答を「2日以上」と「1日」に分け、将来の職業についての学習活動を経験した児童の割合*3を比較した(図7)。その結果、2日以上実施している学校の児童は1日に比べて、「大人の人から職業についてのお話を聞いたり、質問したりする活動」を経験した割合が24.9ポイント、「お店や工場、農家や漁師の仕事などの職業を見学したり体験したりする活動」を経験した割合が21.5ポイント、「お店や工場、農家や漁師の仕事など、いろいろな仕事を知る学習」を経験した割合が16.6

【図6】 職場見学の実施の有無別にみた学習に対する児童の意識



※年間指導計画に体験活動を位置付けている学校の児童に限定した比較

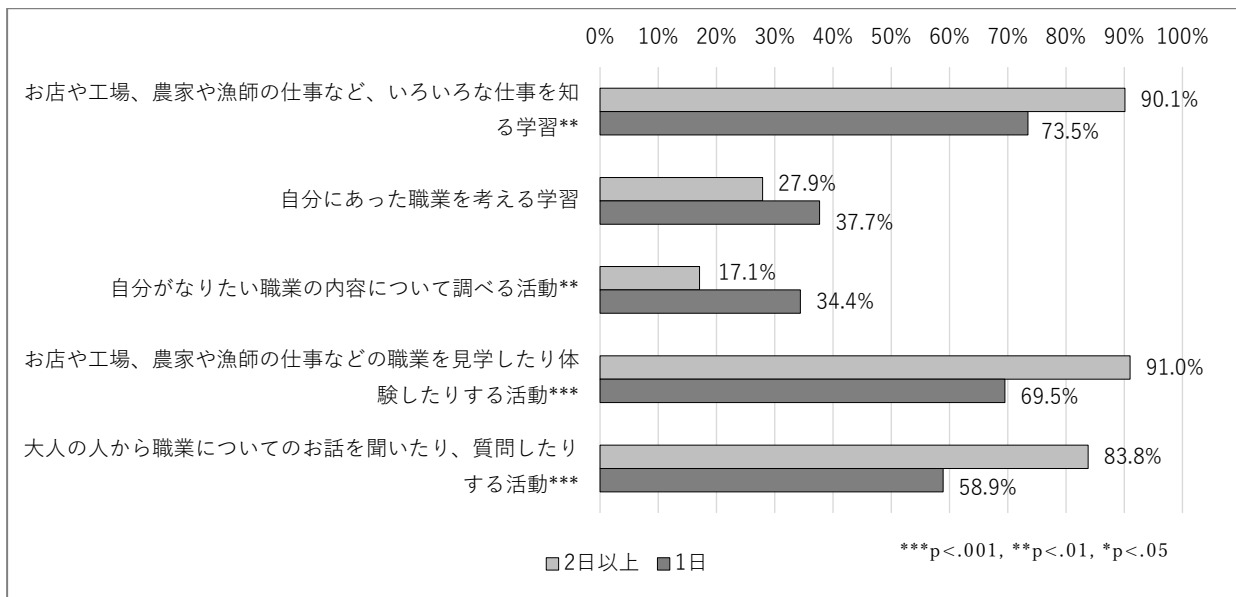
※「あてはまる」と回答した児童の割合

※ χ^2 検定の結果、6項目で有意差が見られた。「これからもっとたくさんのことを学びたいと思う」($\chi^2(1) = 5.693, p<.05$), 「学校での勉強はふだんの生活を送るうえで役に立つと思う」($\chi^2(1) = 5.480, p<.05$), 「学校での勉強は将来の仕事の可能性を広げてくれると思う」($\chi^2(1) = 19.152, p<.001$), 「学校が楽しい」($\chi^2(1) = 10.341, p<.01$), 「家での学習に積極的に取り組んでいる」($\chi^2(1) = 6.584, p<.05$), 「授業や学校行事以外で学校の活動に積極的に取り組んでいる」($\chi^2(1) = 19.985, p<.001$)

ポイント高いことが示された。逆に、「自分がなりたい職業の内容について調べる活動」は17.3ポイント低いことから、職場見学の期間が相対的に長い学校は校内で行われる職業理解よりも、校外で行われる体験活動を通じた職業理解を優先する傾向にあると言えよう。ただし、先述のように職業に対する興味を広げるために、児童の実態に応じた活動に積極的に取り組んでいるという解釈もできる。

また、職場見学の日数に応じて、学級や学年の児童や保護者におけるキャリア教育の計画・実施に対する担任の意識^{*8}を比べたところ、2日以上実施している学校の児童は1日に比べて、「児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる」の割合が19.7ポイント、「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、社会的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている」の割合が15.4ポイント高い(図8)。このように、2日以上職場見学を実施する学校では、担任が児童の学習意欲や基礎的・汎用的能力の向上を実感している。まとまった時間数が確保されることで、職場見学がより充実したものになる傾向が確認できた。

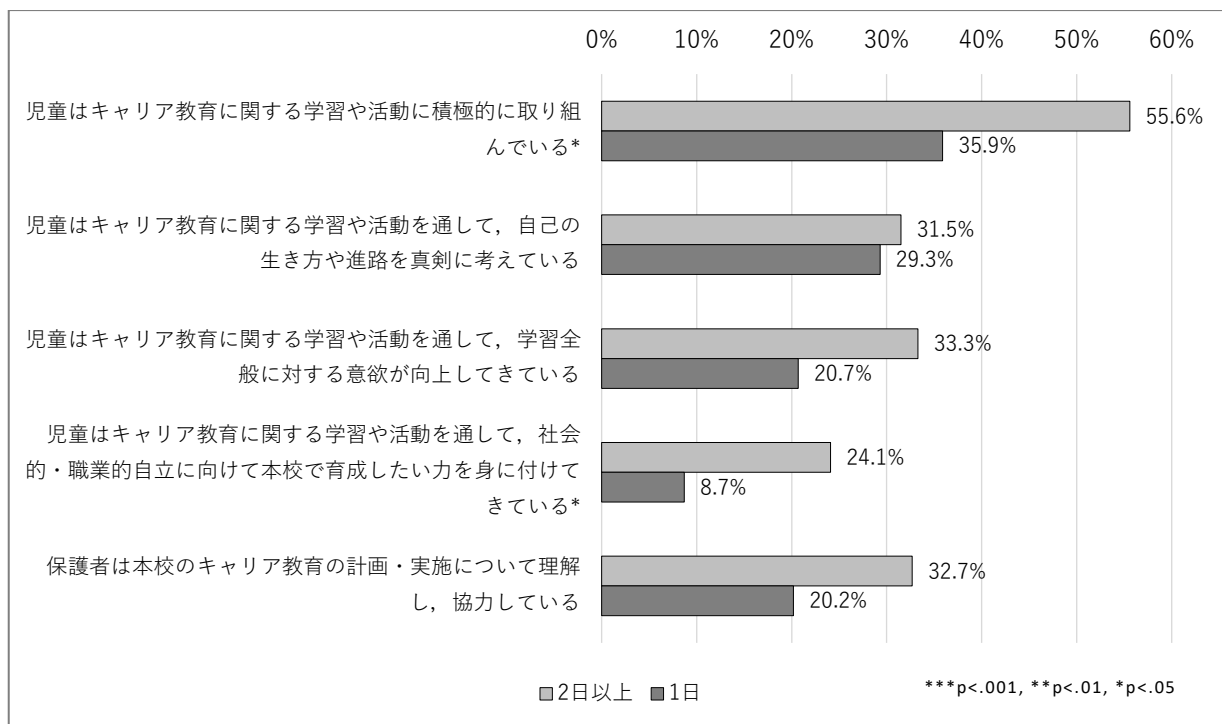
【図7】 職場見学に充てる日数別にみた、将来の職業に関する児童の学習経験



※年間指導計画に体験活動を位置付けている学校の児童に限定した比較

※ χ^2 検定の結果、4項目で有意差が見られた。「お店や工場、農家や漁師の仕事など、いろいろな仕事を知る学習」($\chi^2(1) = 11.218, p < .01$), 「自分がなりたい職業の内容について調べる活動」($\chi^2(1) = 9.714, p < .01$), 「お店や工場、農家や漁師の仕事などの職業を見学したり体験したりする活動」($\chi^2(1) = 17.522, p < .001$), 「大人の人から職業についてのお話を聞いたり、質問したりする活動」($\chi^2(1) = 16.615, p < .001$)

【図8】 職場見学に充てる日数別にみた、児童や保護者のキャリア教育に関する現状に対する担任の意識



※年間指導計画に体験活動を位置付けている学校の児童に限定した比較

※ χ^2 検定の結果、2項目で有意差が見られた。「児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる」($\chi^2(1) = 5.376, p < .05$), 「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、社会的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている」($\chi^2(1) = 16.615, p < .001$)

的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている」($\chi^2(1) = 6.535, p < .05$)

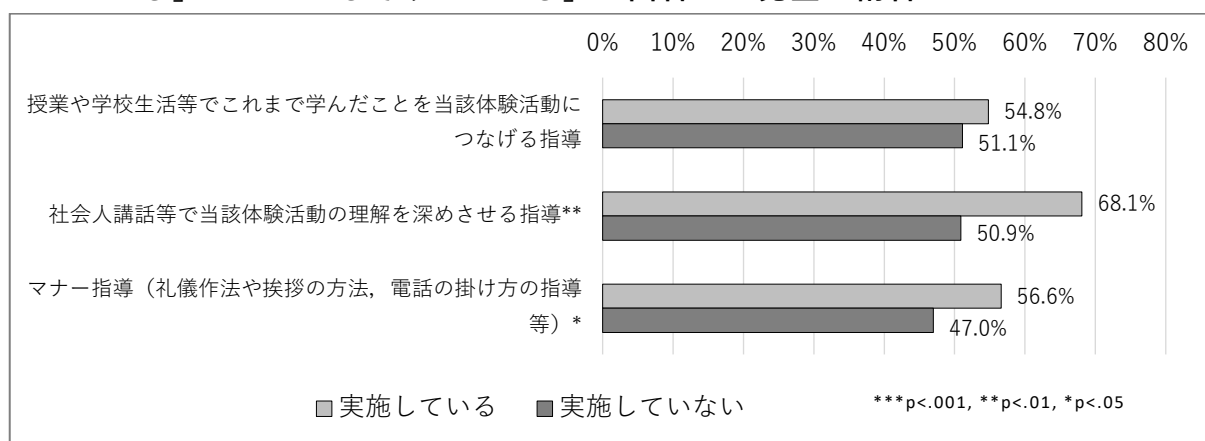
④学校が行う事前・事後指導の内容が与える影響

体験活動の実施に当たって、どのような事前指導・事後指導を行うことが児童の自己理解を促進するだろうか。

事前指導を実施している学校に限定した上で、その内容を尋ねた質問の回答によって*⁹、児童の学習に対する意識を尋ねた設問のうち*¹⁰「自分の長所や短所などについて分かっている」に「いつもそうしている」と回答した児童の割合がどう異なるか分析した(図9)。ただし、「当該体験活動の目的を設定・確認させる指導」については94.0%の学校で実施しており、実施していない学校のサンプルが極めて少ないため除外した。その結果、「社会人講話等で当該体験活動の理解を深めさせる指導」を行っているかどうかで17.2ポイント、「マナー指導(礼儀作法や挨拶の方法、電話の掛け方の指導等)」を行っているかどうかで9.6ポイントの差が見られた。社会人講話等で児童が事前に活動内容を把握することによって体験がより有意義なものとなり、体験活動を通して自己理解が深まることにつながる、と解釈できる。またマナー指導については、事前活動の充実度のバロメーターの一つであり、事前指導が充実したものとなっていることが、自己理解を高めている可能性がある。

次に、事後指導を実施している学校に限定した上で、その内容を尋ねた質問の回答によって*¹¹、児童の学習に対する意識を尋ねた設問*⁵のうち「授業や学校行事以外で学校の活動に積極的に取り組んでいる」に「あてはまる」と回答した割合がどう異なるか、分析を行った(図10)。その結果、4項目で差があり、特に『『キャリア・パスポート』等を活用して当該体験活動の経験を卒業後の進路につなげる指導』を行っているかどうかで26.6ポイント、「発表会やポスターセッションなど当該体験活動の成果を共有させる指導」を行っているかどうかで14.8ポイント、「当該体験活動の経験をこれからの生き方につなげて考えさせる指導」を行っているかどうかで12.1ポイントの差が確認された。体験活動の成果を共有し、それを今後の進路や生き方とつなげて考えさせることで、学校生活に対する児童の積極性が向上していると推察される。

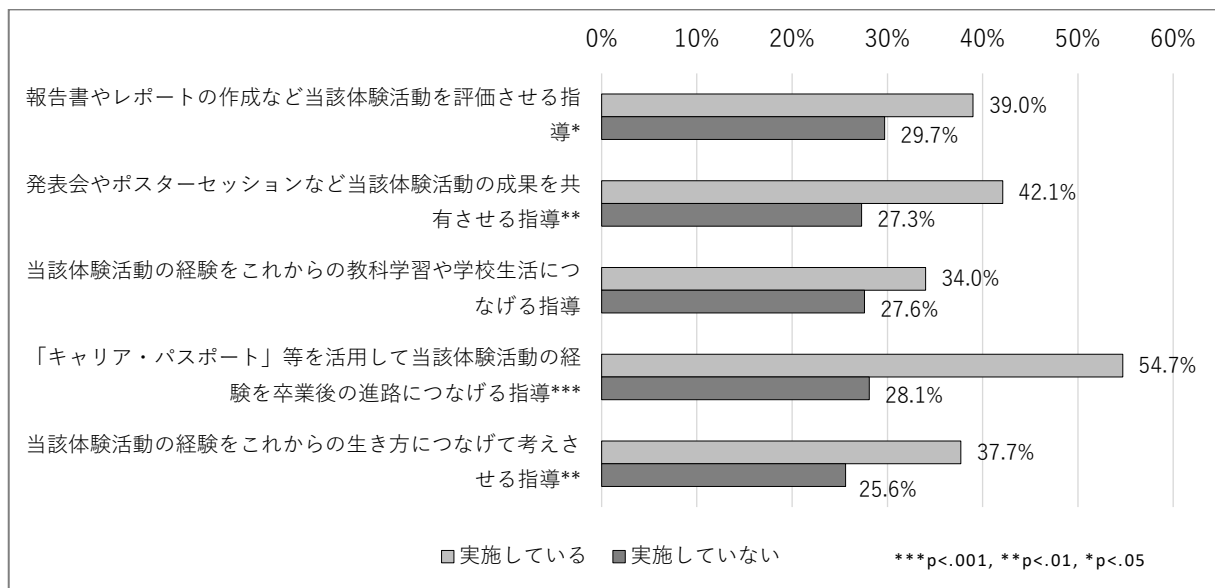
【図9】学校の実施する事前指導の内容別にみた、「自分の長所や短所などについて分かっている」に「いつもそうしている」と回答した児童の割合



※体験活動の実践指導・事後指導を実施している学校に限定した比較

※ χ^2 検定の結果、2項目で有意差が見られた。「社会人講話等で当該体験活動の理解を深めさせる指導」($\chi^2(1) = 7.131, p < .01$), 「マナー指導(礼儀作法や挨拶の方法, 電話の掛け方の指導等)」($\chi^2(1) = 4.370, p < .05$)

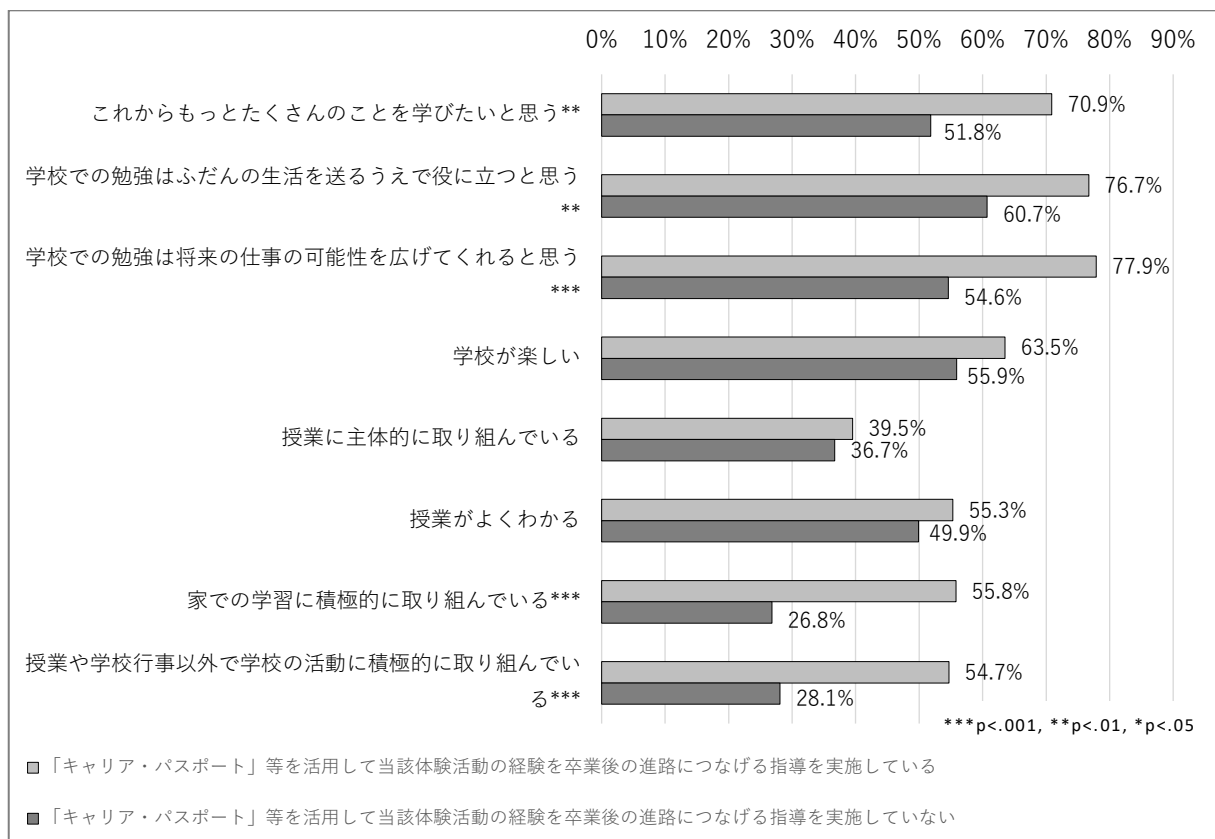
【図 10】学校の実施する事後指導の内容別にみた、「授業や学校行事以外で学校の活動に積極的に取り組んでいる」に「あてはまる」と回答した児童の割合



※ χ^2 検定の結果、4項目で有意差が見られた。「報告書やレポートの作成など当該体験活動を評価させる指導」($\chi^2(1) = 11.700, p < .01$), 「発表会やポスターセッションなど当該体験活動の成果を共有させる指導」($\chi^2(1) = 4.335, p < .05$), 「「キャリア・パスポート」等を活用して当該体験活動の経験を卒業後の進路につなげる指導」($\chi^2(1) = 22.940, p < .001$), 「当該体験活動の経験をこれからの生き方につなげて考えさせる指導」($\chi^2(1) = 8.460, p < .01$)

さらに、上記の分析で最もポイント差の大きかった『「キャリア・パスポート」等を活用して当該体験活動の経験を卒業後の進路につなげる指導』の有無に絞って、学習に対する児童の意識^{*5}を比較した。その結果、5項目について指導している学校の児童はそうでない児童に比べて高くなり、特に「家での学習に積極的に取り組んでいる」は29.0ポイント、「学校での勉強は将来の仕事の可能性を広げてくれると思う」は23.3ポイントの差があった(図 11)。ゆえに、事後指導の中でも、「キャリア・パスポート」を活用して学習経験と進路を接続する取組は効果が高く、児童の学習意欲の向上に寄与している。

【図 11】『キャリア・パスポート』等を活用して当該体験活動の経験を卒業後の進路につなげる指導の有無別にみた、学習に対する児童の意識



※「あてはまる」と回答した割合

※ χ^2 検定の結果、5項目で有意差が見られた。「これからもっとたくさんを学びたいと思う」($\chi^2(1) = 10.565, p < .01$), 「学校での勉強はふだんの生活を送るうえで役に立つと思う」($\chi^2(1) = 7.920, p < .01$), 「学校での勉強は将来の仕事の可能性を広げてくれると思う」($\chi^2(1) = 16.007, p < .001$), 「家での学習に積極的に取り組んでいる」($\chi^2(1) = 27.864, p < .001$), 「授業や学校行事以外で学校の活動に積極的に取り組んでいる」($\chi^2(1) = 22.940, p < .001$)

⑤児童の職業に関する学習経験が学習意欲と基礎的・汎用的能力に与える効果

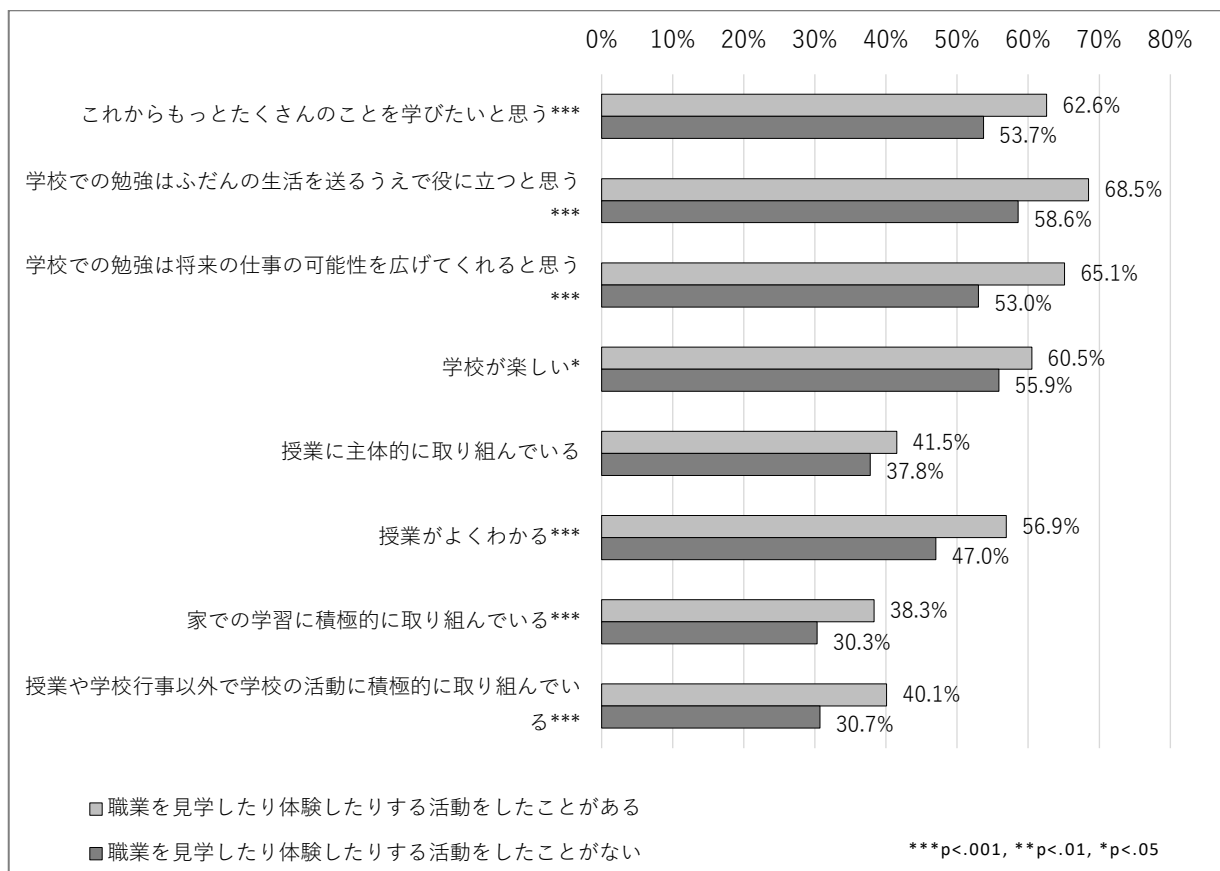
最後に、職業に関する体験活動の経験が、児童の学習意欲や基礎的・汎用的能力に影響を与えるのかどうか見てみたい。

将来の職業について学校でどのような学習活動をしたか児童に尋ねた設問に注目し*³, 「お店や工場、農家や漁師の仕事などの職業を見学したり体験したりする活動」をしたことがあるかどうかで、児童の学習に対する意識を尋ねた設問*⁵に「あてはまる」と回答した割合を比較したところ、7項目について活動したことがある児童の方が高い割合となった。特に「学校での勉強は将来の仕事の可能性を広げてくれると思う」は12.1ポイント、「学校での勉強はふだんの生活を送るうえで役に立つと思う」は9.9ポイント、「授業がよくわかる」は9.9ポイントの差がある(図12)。このように、職業に関する体験活動には、児童の学習意欲を向上させる効果がある。

さらに、児童の日常生活の様子に関する設問*⁹に「いつもそうしている」と回答し

た割合を比較した。その結果，9項目について活動したことのある児童の方が高い割合となった（図13）。とりわけ，「誰かの話を聞く時は，その人の考えを受け止めようとしている」は13.4ポイント，「自分の長所や短所などについて分かっている」は8.2ポイント，「何か問題が起きた時，原因を考えて，解決するように工夫している」は7.2ポイントの差がある。したがって，児童が職業に関する体験活動に参加することによって，人間関係形成・社会形成能力，自己理解・管理能力，課題対応能力などが向上していると考えられる。

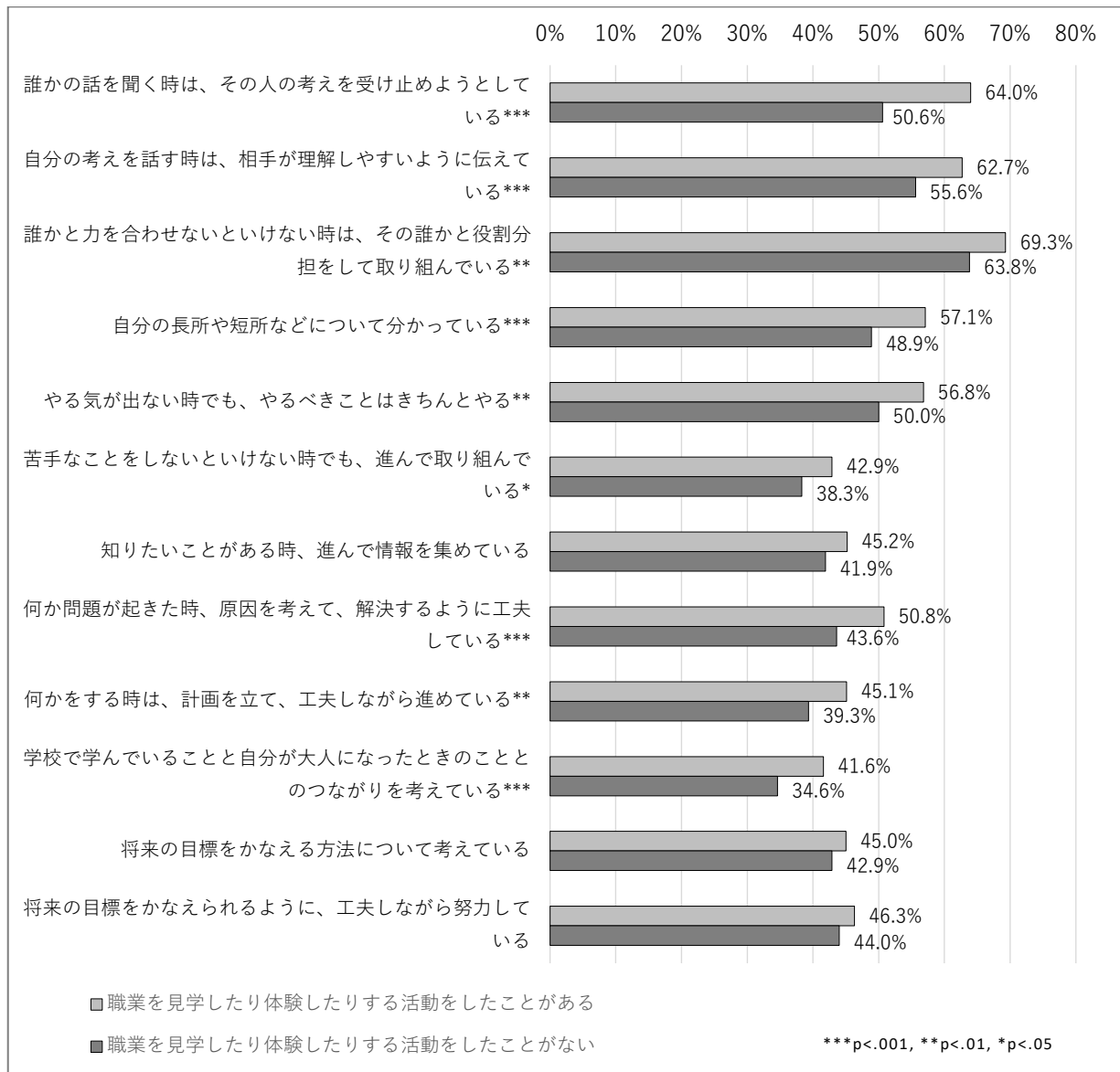
【図12】「お店や工場，農家や漁師の仕事などの職業を見学したり体験したりする活動」の有無別にみた，学習に対する児童の意識



※「あてはまる」と回答した児童の割合

※ χ^2 検定の結果，7項目で有意差が見られた。「これからもっとたくさんことを学びたいと思う」($\chi^2(1) = 19.679, p < .001$)，「学校での勉強はふだんの生活を送るうえで役に立つと思う」($\chi^2(1) = 25.876, p < .001$)，「学校での勉強は将来の仕事の可能性を広げてくれると思う」($\chi^2(1) = 36.540, p < .001$)，「学校が楽しい」($\chi^2(1) = 5.299, p < .05$)，「授業がよくわかる」($\chi^2(1) = 23.761, p < .001$)，「家での学習に積極的に取り組んでいる」($\chi^2(1) = 16.516, p < .001$)，「授業や学校行事以外で学校の活動に積極的に取り組んでいる」($\chi^2(1) = 22.441, p < .001$)

【図 13】「お店や工場，農家や漁師の仕事などの職業を見学したり体験したりする活動」の有無別にみた，基礎的・汎用的能力に対する児童の意識



※ 「いつもそうしている」と回答した児童の割合

※ χ^2 検定の結果，9項目で有意差が見られた。「誰かの話を聞く時は，その人の考えを受け止めようとしている」($\chi^2(1) = 44.181, p < .001$)，「自分の考えを話す時は，相手が理解しやすいように伝えている」($\chi^2(1) = 12.537, p < .001$)，「誰かと力を合わせないといけない時は，その誰かと役割分担をして取り組んでいる」($\chi^2(1) = 8.229, p < .01$)，「自分の長所や短所などについて分かっている」($\chi^2(1) = 16.382, p < .001$)，「やる気が出ない時でも，やるべきことはきちんとやる」($\chi^2(1) = 11.258, p < .01$)，「苦手なことをしないといけない時でも，進んで取り組んでいる」($\chi^2(1) = 5.114, p < .05$)，「何か問題が起きた時，原因を考えて，解決するように工夫している」($\chi^2(3) = 12.643, p < .001$)，「何かをする時は，計画を立て，工夫しながら進めている」($\chi^2(1) = 8.102, p < .01$)，「学校で学んでいることと自分が大人になったときのこととのつながりを考えている」($\chi^2(1) = 12.268, p < .001$)

⑥今後の方向性

職業に関する体験活動に参加することにより、児童の学習意欲や基礎的・汎用的能力は向上する。「お店や工場、農家や漁師の仕事などの職業を見学したり体験したりする活動」をしたことのある児童は70.3%であるが*³、この割合を今後もっと高めていくことが求められる。そのためには、学校としてのキャリア教育計画の中に職業に関する体験活動を明確に位置付け、可能ならば2日間以上の職場見学を実施することが望ましい。

さらには、体験の量だけでなく質にも目を向ける必要がある。キャリア教育の年間指導計画がある学校は50.5%であるが*¹²、そのうち「キャリア教育に関わる体験活動（職場見学やボランティア活動、上級学校見学（訪問・体験）等）」が含まれている学校は51.5%（全体を母数にすると26.0%）にとどまる*¹³。しかし、「何のための体験活動か」を計画段階で明確にして活動を実施することは、その効果を大きく左右する。「活動ありき」を回避するためにも、体験の目標を教員間及び児童と共有することが期待される。

事前・事後指導を更に充実させることも、質の改善に向けた課題である。「事業所や上級学校での体験活動にかかわる事前指導・事後指導」を企画・実施している学校は、全体の19.7%にすぎない*¹⁴。しかし、事前の予習を通して児童が自らの視野を広げることによって、限られた時間での体験がより豊かなものになる。また、事後に活動成果を共有して自らの生き方と関連付けることで、それは「体験から得た学び」として定着する。

一方で、児童の学習時間や教員の労働時間は限られているため、職業に関する体験活動（校外での学び）を重視することは、それ以外（校内での学び）での職業に関する学習を後退させてしまう可能性がある。ここは、校外と校内を二項対立で捉えるのではなく、つなぐ視点に立つことが重要であろう。上述のように体験の量が教育効果に影響を与えているとはいえ、どの程度の時間数を充てられるかは学校の状況によっても異なる。したがって、各学校が両者のバランスを判断しつつ、校内で学習した知識や基礎的・汎用的能力を校外の体験において活用し、それらを更に高めることができるようカリキュラム・マネジメントを実現することが求められる。また、児童自身が校内外の学習のつながりを認識することも重要であり、「キャリア・パスポート」を用いて、体験で学習したことを日常の学びや自らの進路に結びつける活動の発展も期待される。

参考：第一次報告書における参照データ

* 1	P59	小学校・学校調査	問 5
* 2	P86	小学校・学級担任調査	問 6
* 3	P98	小学校・児童調査	問 6
* 4	P62	小学校・学校調査	問 6 (3)
* 5	P99	小学校・児童調査	問 7
* 6	P60	小学校・学校調査	問 6 (1)
* 7	P61	小学校・学校調査	問 6 (2)
* 8	P87	小学校・学級担任調査	問 7
* 9	P74	小学校・学校調査	問 12 (1)
* 10	P97	小学校・児童調査	問 5
* 11	P75	小学校・学校調査	問 12 (2)
* 12	P57	小学校・学校調査	問 4 (2) A
* 13	P57	小学校・学校調査	問 4 (2) B
* 14	P73	小学校・学校調査	問 11

(4) テーマ3 「キャリア・パスポート」の有用性

○「キャリア・パスポート」の作成は、キャリア教育に期待される児童の学習意欲を高めることに影響していると考えられる。

- ・「キャリア・パスポート」の作成は、各学校のキャリア教育の取組を評価し、改善へ結びつける「検証・改善サイクル」の手がかりとなる。
- ・「キャリア・パスポート」の作成はキャリア教育に対する認識の共有や協力体制の構築など、職員間の連携を促進する。
- ・「キャリア・パスポート」の作成は、自己の生き方に関して気づきを促すなど担任によるキャリア・カウンセリングの一層の充実につながる。
- ・「キャリア・パスポート」の作成は、キャリア教育において期待される、児童の学習意欲を高めることに結び付く。
- ・「キャリア・パスポート」に対するフィードバックや振り返りの時間を設けることは、児童に対しては社会的・職業的自立に必要な力に結び付き、保護者に対しては一層の理解や協力へとつながる。
- ・「キャリア・パスポート」に「自己の成長」などの記録内容を含めることで、その教育的効果は一層高まる。
- ・キャリア教育の一層の充実寄予する「キャリア・パスポート」の教育的効果を共有し、作成する学校・担任の割合を高めていくことが必要である。

①「キャリア・パスポート」の作成が管理職の意識に与える影響

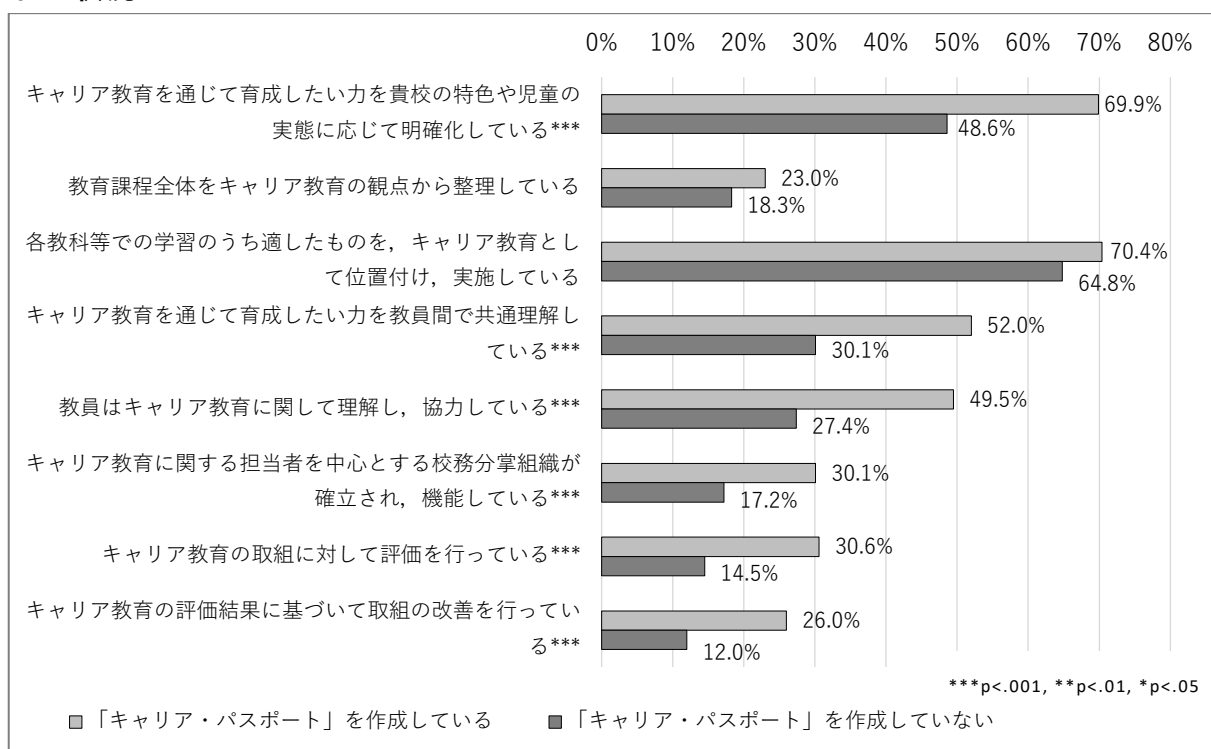
「キャリア・パスポート」を作成している学校は25.2%、作成していない学校は74.8%であり*1、作成率の向上がまず課題として挙げられるところではあるが、各自治体の主導などもあり、本調査以降、作成する学校は増えてくると予想される。

「キャリア・パスポート」を作成している学校と作成していない学校で、管理職から見たキャリア教育の現状に関する設問のうち、カリキュラム・マネジメントに関わる8項目の割合を比較したところ*2、6項目で「キャリア・パスポート」を作成している学校の方が高い割合であった(図1)。「教員はキャリア教育に関して理解し、協力している」は22.1ポイント、「キャリア教育を通じて育成したい力を教員間で共通理解している」は21.9ポイント、「キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児童の実態に応じて明確化している」は21.3ポイント、「キャリア教育の取組に対して評価を行っている」は16.1ポイント、「キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている」は14.0ポイントの差が見られた。

また、同じ設問のキャリア教育の成果に関わる4項目では3項目で差が見られ、「キャリア教育の実践によって、児童が将来や自らの生き方を考えるきっかけになり得ている」は23.0ポイント、「キャリア教育の実践によって、児童が社会的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている」は8.5ポイント、「キャリア教育の実践によって、学習全般に対する児童の意欲が向上してきている」は8.1ポイント高い(図2)。

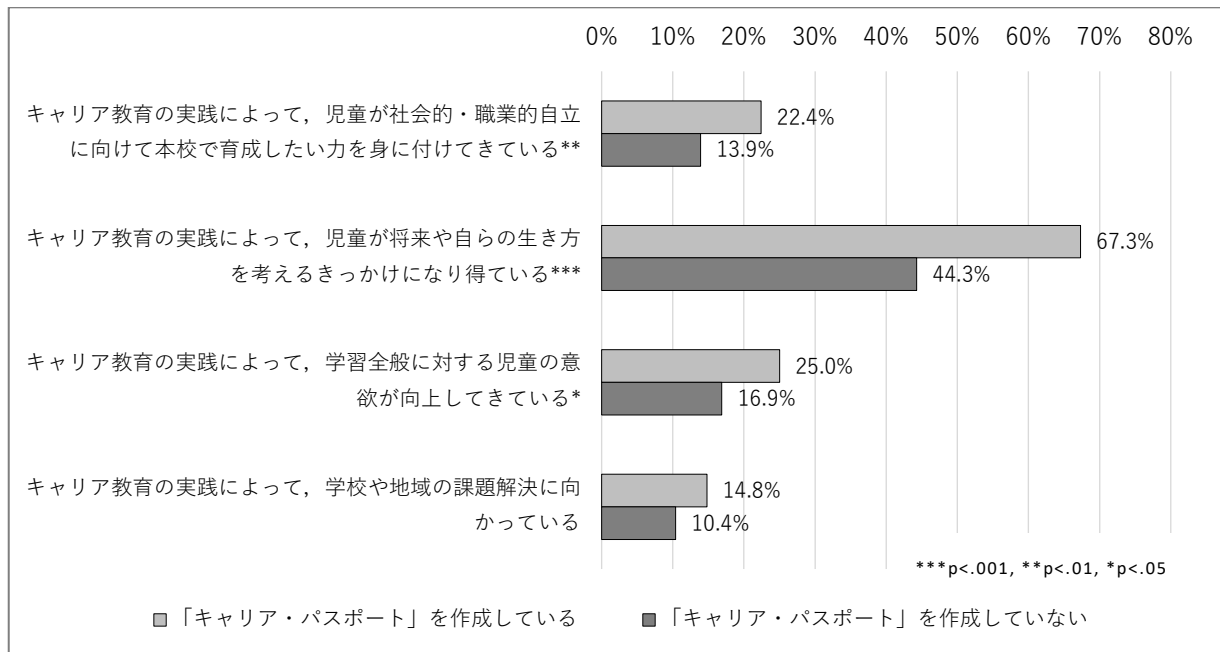
「キャリア・パスポート」の作成は、第一義的な目的である「児童の取組に関する記録の蓄積と評価」のみならず、各学校のキャリア教育が適切に実施されているか、改善点はどこにあるのかなど、「検証・改善サイクル」の手がかりとしても有効に機能していると思われる。さらに、基礎的・汎用的能力の育成をはじめとするキャリア教育の目標の確認や、職員間のキャリア教育に対する認識の共有、実施の際の協力体制の構築にもつながるなど、キャリア教育の推進に好ましい影響を与えていると推察される。また「キャリア・パスポート」を作成している学校では、「キャリア・パスポート」が将来や自らの生き方を考えるきっかけとなっており、キャリア教育に対する学習意欲の向上や学習の動機づけに結び付いていることが推測される。

【図1】「キャリア・パスポート」作成の有無別の、学校のカリキュラム・マネジメントの状況



※ χ^2 検定の結果、6項目で有意差が見られた。「キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児童の実態に応じて明確化している」 ($\chi^2(1) = 26.667, p < .001$) , 「キャリア教育を通じて育成したい力を教員間で共通理解している」 ($\chi^2(1) = 30.526, p < .001$) , 「教員はキャリア教育に関して理解し、協力している」 ($\chi^2(1) = 32.393, p < .001$) , 「キャリア教育に関する担当者を中心とする校務分掌組織が確立され、機能している」 ($\chi^2(1) = 14.804, p < .001$) , 「キャリア教育の取組に対して評価を行っている」 ($\chi^2(1) = 25.207, p < .001$) , 「キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている」 ($\chi^2(1) = 21.767, p < .001$)

【図2】「キャリア・パスポート」作成の有無別の、管理職からみたキャリア教育の成果



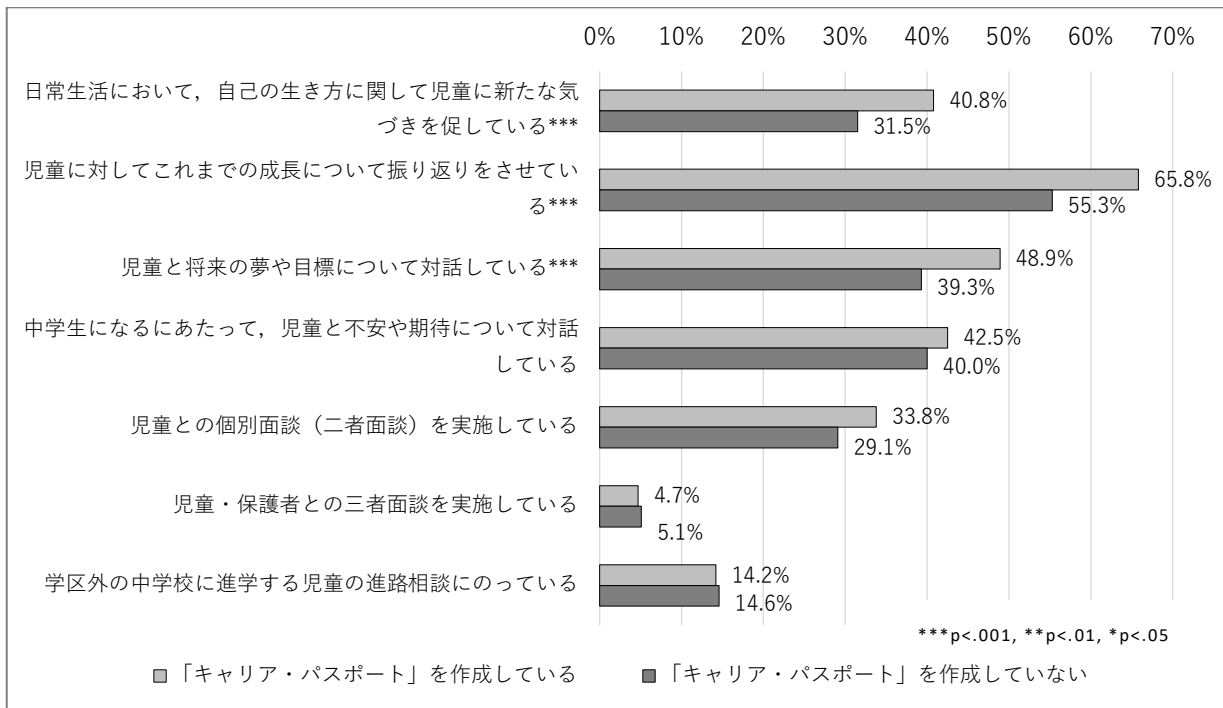
※ χ^2 検定の結果、3項目で有意差が見られた。「キャリア教育の実践によって、児童が社会的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている」($\chi^2(1) = 7.835, p < .01$), 「キャリア教育の実践によって、児童が将来や自らの生き方を考えるきっかけになり得ている」($\chi^2(1) = 31.176, p < .001$), 「キャリア教育の実践によって、学習全般に対する児童の意欲が向上してきている」($\chi^2(1) = 6.240 < .05$)

② 「キャリア・パスポート」の作成が担任の意識に与える影響

「キャリア・パスポート」を作成している担任と作成していない担任における*³, 担任がキャリア・カウンセリングとしてどのような実践を行っているか尋ねた設問*⁴の回答を比較したところ、3項目について「キャリア・パスポート」を作成している担任の方が、高い割合であった(図3)。「児童に対してこれまでの成長について振り返りをさせている」は10.5ポイント, 「児童と将来の夢や目標について対話している」は9.6ポイント, 「日常生活において、自己の生き方に関して児童に新たな気づきを促している」は9.3ポイントの差が見られた。

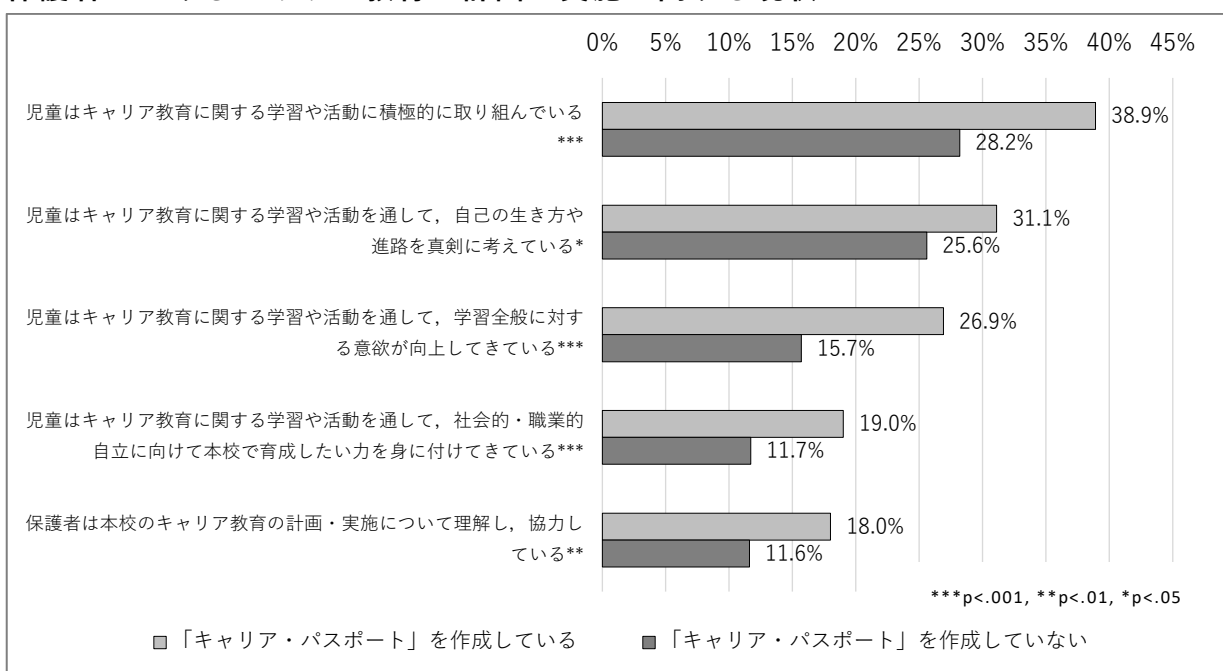
また「キャリア・パスポート」を作成している担任と作成していない担任における、担任から見た学級や学年の児童や保護者におけるキャリア教育の計画・実施の現状について比較したところ*⁵, こちらも「キャリア・パスポート」を作成している担任の方が、高い割合であった(図4)。「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、学習全般に対する意欲が向上してきている」は11.2ポイント, 「児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる」は10.7ポイント, 「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、社会的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている」は7.3ポイントの差が見られた。

【図3】「キャリア・パスポート」作成の有無別の、担任がキャリア・カウンセリングとして行っている実践



※ χ^2 検定の結果、3項目で有意差が見られた。「日常生活において、自己の生き方に関して児童に新たな気づきを促している」($\chi^2(1) = 12.705, p < .001$), 「児童に対してこれまでの成長について振り返りをさせている」($\chi^2(1) = 15.096, p < .001$), 「児童と将来の夢や目標について対話している」($\chi^2(1) = 12.405, p < .001$)

【図4】「キャリア・パスポート」作成の有無別の、担任からみた学級や学年の児童や保護者におけるキャリア教育の計画・実施に関する現状



※ χ^2 検定の結果、5項目全てで有意差が見られた。「児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる」($\chi^2(1) = 17.740, p < .001$), 「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、

自己の生き方や進路を真剣に考えている」($\chi^2(1) = 4.971, p < .05$), 「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して, 学習全般に対する意欲が向上してきている」($\chi^2(1) = 26.800, p < .001$), 「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して, 社会的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている」($\chi^2(1) = 14.812, p < .001$), 「保護者は本校のキャリア教育の計画・実施について理解し, 協力している」($\chi^2(1) = 11.543, p < .01$)

すべての児童を対象とした相談活動であるキャリア・カウンセリングについて, 特に小学校においては実施率を高めるとともに, 自立的に生きていけるよう支援していくことが課題として挙げられている。そのような中において, 「キャリア・パスポート」を作成している担任の方が, これまでの成長を振り返らせたり, 将来の夢や目標について取り上げたり, 自己の生き方に関して気づきを促したりするなど, キャリア・カウンセリングの内容が, より充実していることが明らかになった。

さらに, キャリア教育の計画や実施に関わる項目では, 「キャリア・パスポート」を作成している学校の方が, キャリア教育に関する学習や活動に積極的であったり, その活動を通して, 基礎的・汎用的能力などの学校が育成したい力を身に付けたりしているなど, 望ましい姿が見られている。特筆すべきこととして, 学習に対する意欲が高まっていることがあげられる。キャリア教育においては, 学校での学習の意義を自分の将来との関係において見だし, 学習に対する意欲を高めていくことが期待されており, 今回の結果はその成果の一端を示したものと言えるであろう。

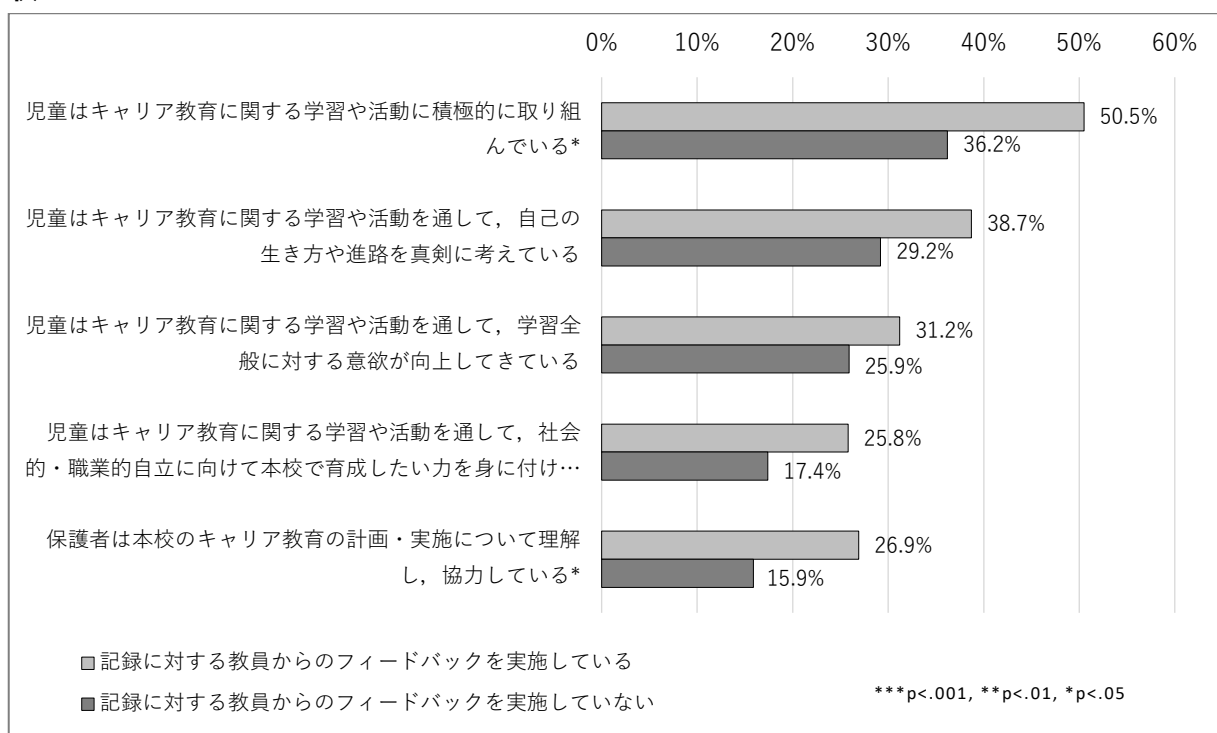
③ 「キャリア・パスポート」のフィードバックが担任の意識に与える影響

「キャリア・パスポート」の活用方法を尋ねた設問に着目し^{*3}, 「キャリア・パスポート」を作成している担任のうち, 記録に対する教員からのフィードバックを実施している場合と, そうでない場合における, 担任から見た学級や学年の児童や保護者におけるキャリア教育の計画・実施に関する現状を比較した^{*5}。その結果, 2項目について教員からのフィードバックを実施している場合の方が, 高い割合であった(図5)。「児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる」では14.3ポイント, 「保護者は本校のキャリア教育の計画・実施について理解し, 協力している」では11.0ポイントの差が見られた。

また, 「キャリア・パスポート」を作成している担任のうち, キャリア・パスポートへの記載内容に関して児童同士による共有・フィードバックを実施している場合と, そうでない場合における, 担任から見た学級や学年の児童や保護者におけるキャリア教育の計画・実施の現状を比較したところ, 児童同士によるフィードバックを実施している場合の方が, 高い割合であった(図6)。「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して, 自己の生き方や進路を真剣に考えている」は21.2ポイント, 「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して, 学習全般に対する意欲が向上してきている」は15.5ポイント, 「保護者は本校のキャリア教育の計画・実施について理解し, 協力している」は12.1ポイント, 「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して,

社会的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている」は 10.9 ポイントの差が見られた。さらに、「キャリア・パスポート」を作成している担任のうち、学期末・年度末などに記録を振り返らせる時間を設けている場合と、そうでない場合における、学級や学年の児童や保護者におけるキャリア教育の計画・実施の現状を比較したところ、記録を振り返らせる時間を設けている場合の方が、高い割合であった（図 7）。「児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる」は 11.3 ポイント、「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、自己の生き方や進路を真剣に考えている」は 10.8 ポイントの差が見られた。

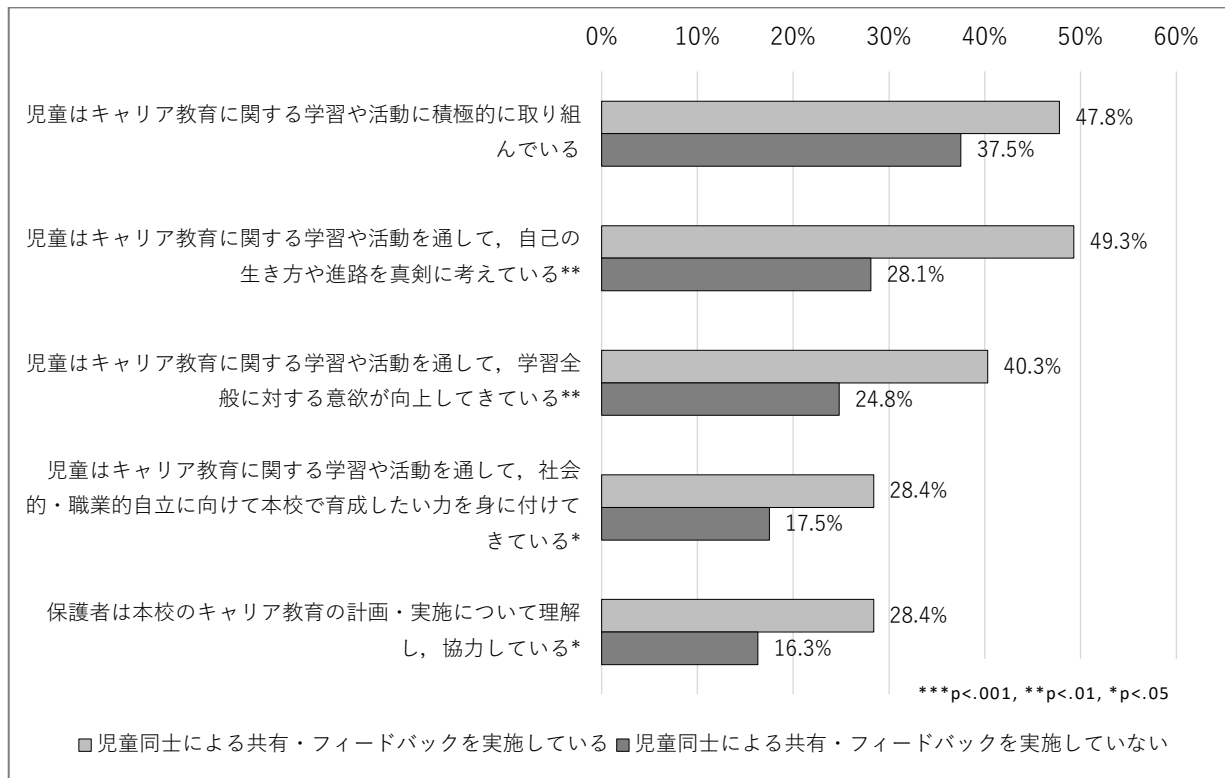
【図 5】「キャリア・パスポート」記録に対する教員のフィードバックの有無別の、担任からみた学級や学年の児童や保護者におけるキャリア教育の計画・実施に関する現状



※ 「キャリア・パスポート」を作成している担任に限定した比較

※ χ^2 検定の結果、2項目で有意差が見られた。「児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる」($\chi^2(1) = 6.535, p < .05$)、「保護者は本校のキャリア教育の計画・実施について理解し、協力している」($\chi^2(1) = 6.135, p < .05$)

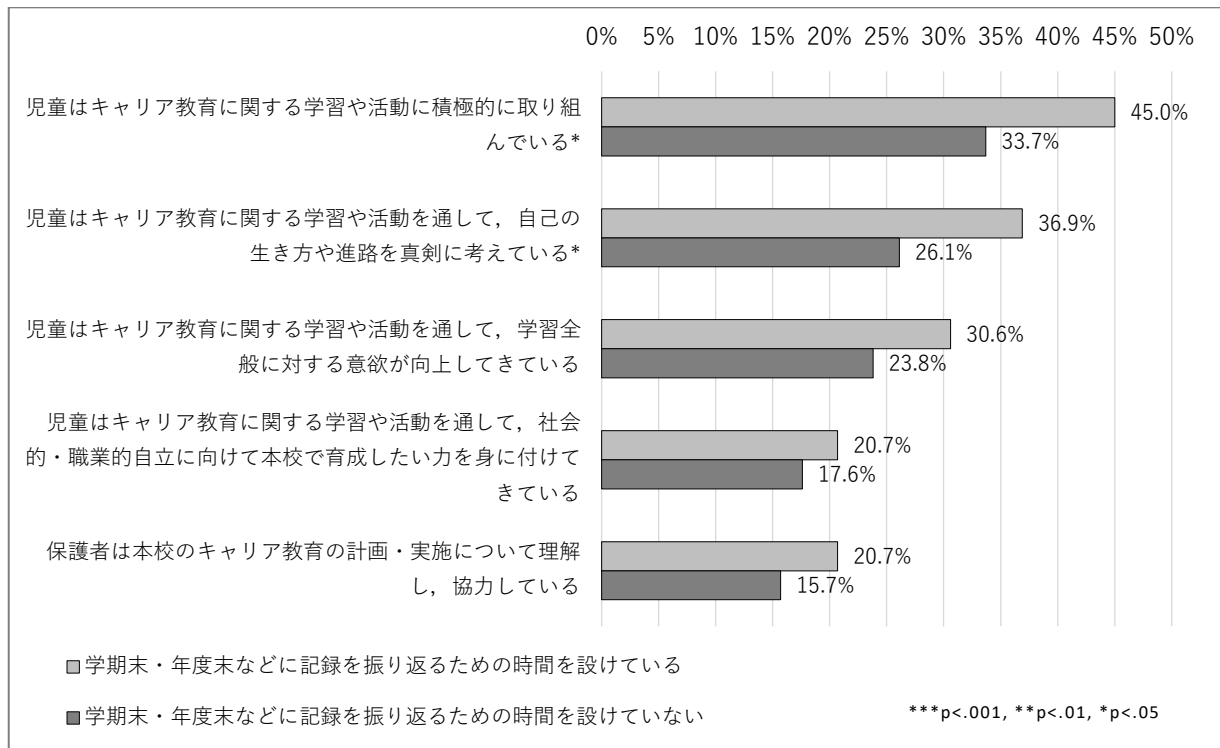
【図6】「キャリア・パスポート」記録に対する児童同士による共有・フィードバックの有無別の、担任からみた学級や学年の児童や保護者におけるキャリア教育の計画・実施に関する現状



※「キャリア・パスポート」を作成している担任に限定した比較

※ χ^2 検定の結果、4項目で有意差が見られた。「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、自己の生き方や進路を真剣に考えている」($\chi^2(1) = 12.032, p < .01$)、「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、学習全般に対する意欲が向上してきている」($\chi^2(1) = 7.083, p < .01$)、「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、社会的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている」($\chi^2(1) = 4.373, p < .05$)、「保護者は本校のキャリア教育の計画・実施について理解し、協力している」($\chi^2(1) = 5.638, p < .05$)

【図7】学期末・年度末などに記録を振り返る時間の有無別の、担任からみた学級や学年の児童や保護者におけるキャリア教育の計画・実施に関する現状



※「キャリア・パスポート」を作成している担任に限定した比較

※ χ^2 検定の結果、2項目で有意差が見られた。「児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる」($\chi^2(1) = 6.476, p < .05$)、「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、自己の生き方や進路を真剣に考えている」($\chi^2(1) = 6.636, p < .05$)

「キャリア・パスポート」の記録への教員のフィードバックは、児童のキャリア教育に対する取組の姿勢に良い影響を与え、それを見た、又は知った保護者に対しては一層の理解や協力に結び付くことが明らかになった。また、「キャリア・パスポート」の記録への児童同士の共有やフィードバックは、自己の生き方や今後の進路について真剣に考えることや、社会的・職業的自立に必要な力を身に付けることに結び付くことも明らかになった。さらに、学習意欲の向上に関しては、「キャリア・パスポート」を作成している担任の方が強く認識していることを前述したが、その「キャリア・パスポート」の記載内容に関して児童間で共有させたり、フィードバックをさせたりすることが、更なる学習意欲の向上に結び付いている。

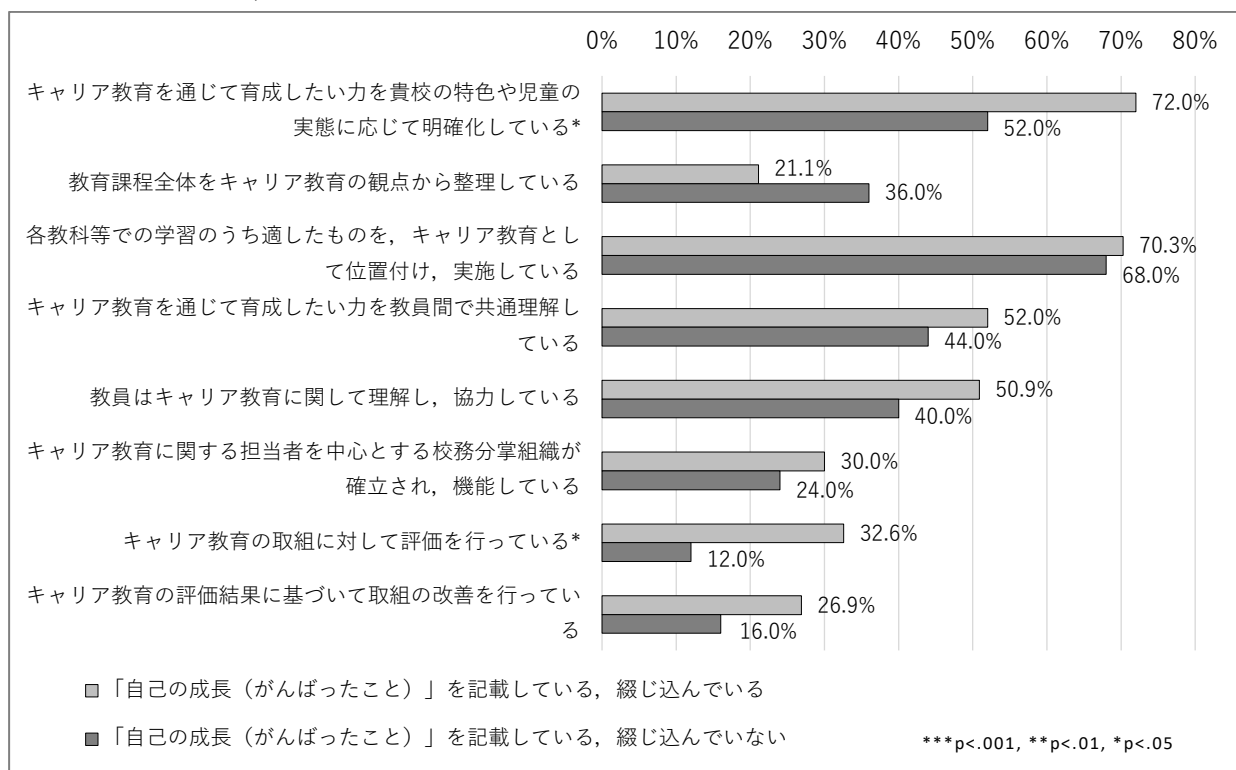
記録の振り返りの時間を設けることにより、児童のキャリア教育の取組に対する姿勢が積極的になることや、自己の生き方や進路を真剣に考えるようになる、との結果からも、「キャリア・パスポート」の作成だけでなく、その活用方法によって、教育的効果は一層高まると言える。

④管理職の意識と「キャリア・パスポート」の記載内容の関係

「キャリア・パスポート」の内容を尋ねた設問*6に注目して、管理職から見たキャリア教育の現状に関する設問のうち、カリキュラム・マネジメントに関わる8項目の割合*2がどのように異なるか分析した。「キャリア・パスポート」を作成している学校のうち、「キャリア・パスポート」に「自己の成長（がんばったこと）」を記載している、又は綴（と）じこんでいる場合と、そうでない場合を比較したところ、記載している、又は綴じこんでいる場合の方が、2項目について高い割合になった（図8）。「キャリア教育の取組に対して評価を行っている」は20.6ポイント、「キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児童の実態に応じて明確化している」は20.0ポイントの差が見られた。

「キャリア・パスポート」の作成により、検証・改善サイクルの手がかりとなることや、キャリア教育の推進に好ましい影響を与えること、児童の学習意欲を高めたり、学校が育成したい力を身に付けさせたりすることにつながるなど、望ましい姿が見られることは前述したが、「自己の成長（がんばったこと）」を記載している、又は綴じこんでいる場合については、キャリア教育の評価が充実すること、更にキャリア教育の目標の明確化にもつながる傾向が見られた。「キャリア・パスポート」に記載させる内容を工夫することで、「キャリア・パスポート」を用いることによる教育的効果は一層高まると言える。

【図8】「キャリア・パスポート」に「自己の成長（がんばったこと）」の記載や綴じこみの有無別の、学校のカリキュラム・マネジメントの状況



※ 「キャリア・パスポート」を作成している学校に限定した比較

※ χ^2 検定の結果、2項目で有意差が見られた。「キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児

童の実態に応じて明確化している」($\chi^2(1) = 4.128, p < .05$), 「キャリア教育の取組に対して評価を行っている」($\chi^2(1) = 4.408, p < .05$)

⑤ 今後の方向性

「キャリア・パスポート」の作成により、各学校のキャリア教育の取組や、児童に与える良い影響が確認された。具体的には、各学校においてはキャリア教育の取組に対し「検証・改善サイクル」の手がかりとなることやキャリア教育の実施における職員間の連携の推進につながることで、担任個人においてはキャリア・カウンセリングの一層の充実につながることで、児童においてはキャリア教育において期待される基礎的・汎用的能力の育成とともに、学習意欲が高まることに結び付くことなどである。

さらに、「キャリア・パスポート」の活用方法について、フィードバックや振り返りの時間を設けることは、児童に対しては社会的・職業的自立に必要となる力に結び付き、保護者に対しては一層の理解や協力へとつながること、「キャリア・パスポート」に「自己の成長」などの記録内容を含めることで、その教育的効果を更に高めることも期待できる。

「キャリア・パスポート」は単なる形式ではなく、既に実質的な機能を果たしている。冒頭にも記載したが、現状「キャリア・パスポート」の抱える一番の課題は、作成していない学校が7割を超えるところにある。分析結果から明らかになった効果について特に作成していない学校に対して情報提供や情報の共有を図り、各自治体や学校において「キャリア・パスポート」の作成を働きかけていくことが重要であろう。

参考：第一次報告書における参照データ

* 1	P78	小学校・学校調査	問 15
* 2	P76	小学校・学校調査	問 13
* 3	P90	小学校・学級担任調査	問 10
* 4	P91	小学校・学級担任調査	問 11
* 5	P87	小学校・学級担任調査	問 7
* 6	P79	小学校・学校調査	問 15(2)

2. 中学校調査結果の分析

(1) 中学校調査で用いた調査票

中学校調査で用いた調査票は、①キャリア教育の実施状況と管理職の意識調査（学校調査）、②学級担任の意識調査（学級担任調査）、③生徒の意識調査（生徒調査）の三つである。

(2) テーマ1 キャリア教育によるカリキュラム・マネジメントの効果

- カリキュラム・マネジメントの実現は、学級担任のキャリア教育の指導の充実や生徒の自己肯定感の醸成に影響していると考えられる。
- ・キャリア教育の全体計画は約9割、年間指導計画は約8割の学校で作成されており、前回調査よりも作成している学校が増加している。
 - ・全体計画では、キャリア教育の計画・実践・評価・改善のサイクルを計画に位置付けることで、キャリア教育を通じたカリキュラム・マネジメントの充実につなげることができる。
 - ・年間指導計画では、各教科におけるキャリア教育を具体的に示し、組織的な取組とすることが必要である。
 - ・各学校では校内研修を充実し、キャリア教育に関する学習活動を軸にしたカリキュラム・マネジメントの充実を図っていくことが大切である。
 - ・キャリア教育の評価に基づいて取組の改善を行っている学校は約3割である。
 - ・カリキュラム・マネジメントに取り組んでいる学校では、学級担任が生徒の「基礎的・汎用的能力」を高めることを意識した指導を活発に行っており、生徒のキャリア発達を促している。
 - ・自校のキャリア教育目標を説明できる学級担任は1割にも満たず、カリキュラム・マネジメントの円滑実施に向けての端緒として、まずは校内研修での共有が必要である。

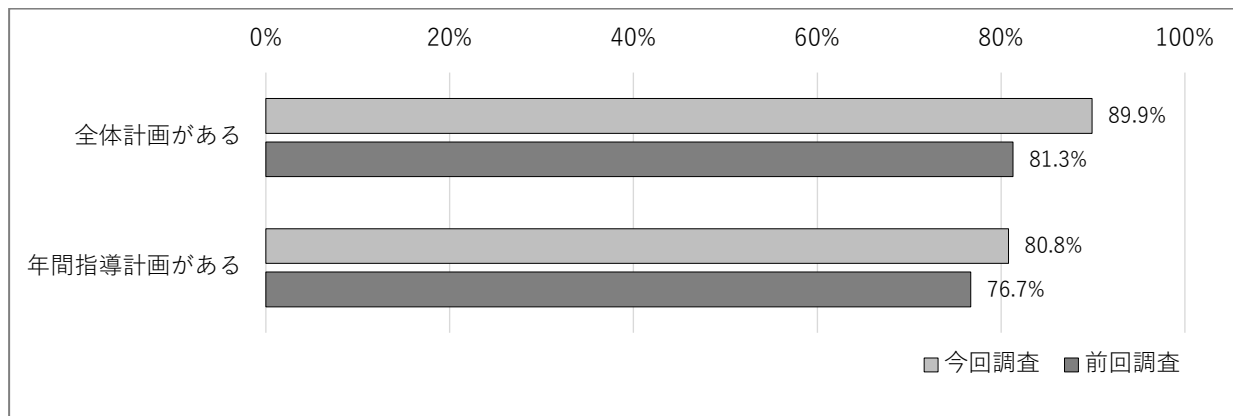
①キャリア教育に関する学習活動を軸にしたカリキュラム・マネジメントの充実

『中学校学習指導要領（平成29年告示）』では、学校教育に関わる様々な取組を、教育課程を中心に据えながら組織的かつ計画的に実施し、教育活動の質の向上につなげていくカリキュラム・マネジメントに努めるよう定めている。取組を組織的かつ計画的に進めるためには、運営を担う具体的な組織を決定し、教育課程の編成を含めたカリキュラム・マネジメントに関わる取組を、各種計画に明確に位置付けることが重要となる。キャリア教育に関する学習活動もカリキュラム・マネジメントに関わる取組として、「全体計画やそれを具体化した年間指導計画などの各種計画に具体的な取組を位置付けること」と「具体的な組織を決定して進めていくこと」が必要である。まずは、今回調査から、上記の2点に

ついてキャリア教育に関する学習活動の現状を確認する。

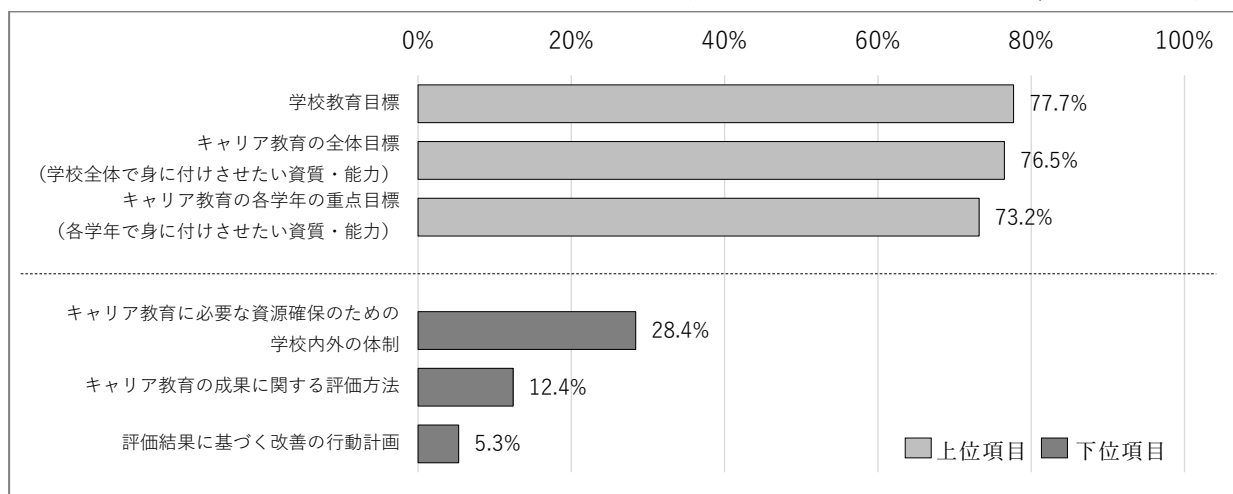
全体計画及び年間指導計画の作成状況について、今回調査と前回調査との比較をしたのが図1である。

【図1】全体計画と年間指導計画の作成状況（学校調査）



全体計画について、計画があると回答した学校の割合は、前回調査の81.3%から89.9%と、8.6ポイント高い*1。また、学級担任調査において、学級でキャリア教育を行っていく上で、困ったり悩んだりしたことについての項目「キャリア教育の全体計画がない」をあてはまると回答した割合が、前回調査の8.0%から3.9%と低いことから、全体計画の作成が進んでいることが分かる。計画に記されている具体的な内容については、図2にあるように、「学校教育目標」や「キャリア教育の全体目標」などはいずれも7割を超える学校で記されているのに対し、「キャリア教育に必要な資源確保のための学校内外の体制」「キャリア教育の成果に関する評価方法」「評価結果に基づく改善の行動計画」などの項目はいずれも3割に満たない。各学校においては、カリキュラム・マネジメントの実現に向けてこれらの項目も全体計画に位置付けることが求められる。

【図2】全体計画に具体的に記されている内容（上位3項目と下位3項目，学校調査）



年間指導計画についても同様に、前回調査では 76.7%の学校が作成していたのに対し、今回調査では 80.8%と、作成する学校は増加している。ここで、計画に含まれる内容を見てみると、「キャリア教育に関わる体験活動」は 91.5%と高い割合を示しているのに対し、「各教科におけるキャリア教育」は 37.1%と、相対的に低い割合にとどまっている*2。しかし、学級担任調査や生徒調査からは、約 6 割の学級担任が、各教科の授業を実施する際に、生徒のキャリア発達を促すよう意識して指導しており*3、約 6 割の生徒が、様々な教科における日々の授業が、自分の将来の生き方や進路を考える上で「役に立った」と感じている。*4 つまり、半数を超える学級担任と生徒が、既に各教科におけるキャリア教育の重要性を認識していると言える。各教科におけるキャリア教育を年間指導計画に位置付けて取り組んでいない学校は、早急に計画の見直しを図り、学校全体で各教科におけるキャリア教育に取り組んでいくことが求められる。

次に、キャリア教育に関する学習活動を、具体的な組織を決定して進めていくことについての現状を確認する。中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（平成 23 年）において、「具体的な担当（例えば、主幹教諭、進路指導担当等）を明確にしつつも、組織的に業務に取り組み、教職員一人が抱え込むことのないような配慮について、各学校で工夫することが必要である」と、キャリア教育を組織的に進めることの重要性が指摘されている。その点については、学校調査で、キャリア教育の企画や全体計画の作成を主体となって進める校務分掌組織上の構成について尋ねた設問において、85.2%の学校が組織を設けて進めている現状がうかがえるなど、キャリア教育に関する学習活動は、多くの学校で組織的に進められていると言える。*5。

このように、キャリア教育に関する学習活動は、全体計画や年間指導計画などの各種計画に位置付ける具体的な内容を改善する余地はあるにせよ、組織的かつ計画的に取り組む素地ができていくことが分かる。今後、各学校で教育活動の質の向上につなげていくカリキュラム・マネジメントの充実を図っていくには、キャリア教育に関する学習活動を軸にして進めることが可能であると考えられる。

②カリキュラム・マネジメントの充実とキャリア教育の推進を関連付けた研修機会の設定

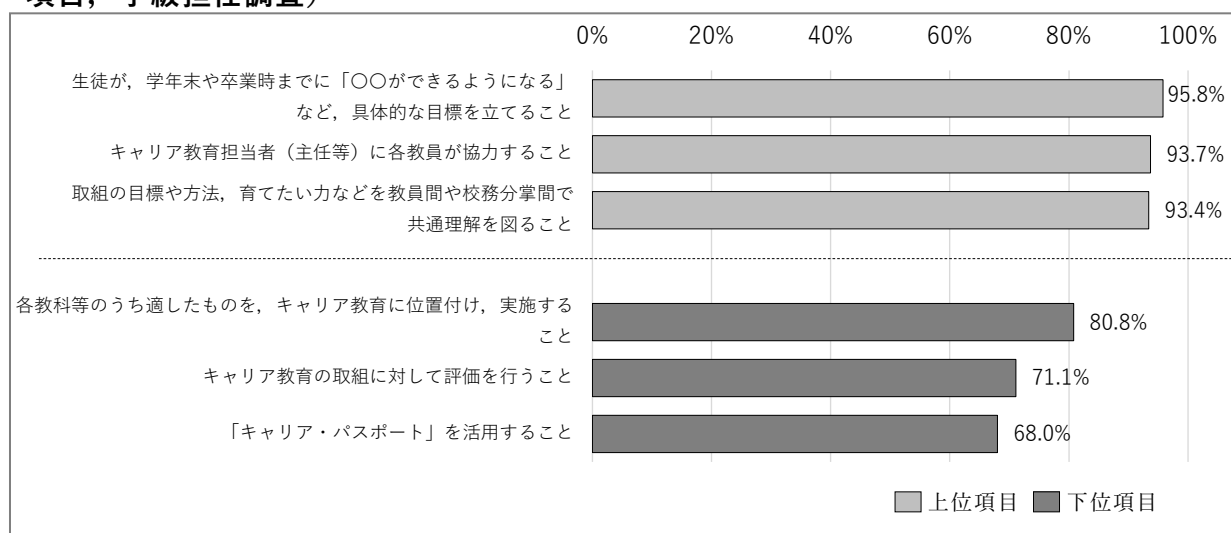
学校調査において、研修等への教職員の派遣状況を尋ねる項目のうち、「キャリア教育推進のためのカリキュラム・マネジメントに関する研修」に派遣した（派遣予定）と回答した割合は 18.1%であった*6。学級担任調査における同様の項目について、10.9%が参加したと回答していることから*7、参加の程度は低いと言える。

カリキュラム・マネジメントの重要性としては、「学校や地域の実態、特色を考えると」と「学校教育目標を達成するために、子供たちに身に付けさせたい力や目指す子供の姿を考えること」が挙げられる。この両者については、中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（平成 23 年）において、「初等中等

教育においては、(中略)子どもの発達の段階に応じた課題や、それぞれの地域や学校の実態等を踏まえ、キャリア教育の指導計画を作成することが必要である。」(P.31)「各学校において、各時期に身に付けておく必要のある能力や態度の具体的な到達目標を設定するとともに、個々の活動と能力や態度の形成の関連を明確にすることが必要である。」(P.32)とあるように、これらはキャリア教育を進める上でも大切にしてきたことである。

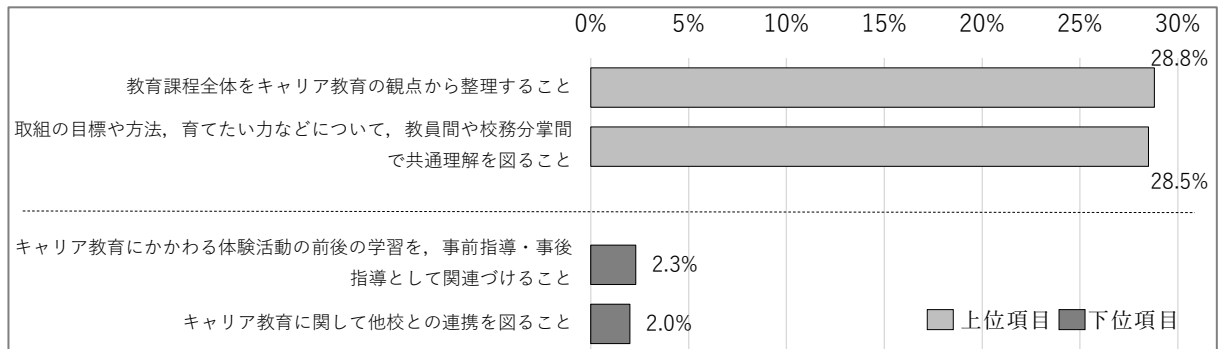
実際、図3にあるように、学級担任調査では、学級でキャリア教育を適切に行っていく上で、現状から見て、今後重要だと思うことを尋ねる項目のうち、「生徒が、学年末や卒業時まで『〇〇ができるようになる』など、具体的な目標を立てること」に肯定的な回答をした学級担任が95.8%と、全項目の中で最も高い割合を示している*8ことから、キャリア教育を進める上で、生徒に身に付けさせたい力や目指す姿を、生徒と共有することを学級担任は重視していることが分かる。

【図3】学級でキャリア教育を適切に行っていくうえで、現状からみて、今後重要だと思うこと（「とても重要だと思う」「ある程度重要だと思う」を合わせた上位3項目と下位3項目、学級担任調査）



また、図4にあるように、学校調査では、キャリア教育を適切に行っていく上で、改善しなければならないことを尋ねる項目のうち、「取組の目標や方法、育てたい力などについて、教員間や校務分掌間で共通理解を図ること」を選択した学校管理職の割合が全20項目中で2番目に高い。このことから、学校管理職も学級担任と同様に、子供たちに身に付けさせたい力や目指す子供の姿を考えることを重視していることが分かる*9。

【図4】キャリア教育を適切に行っていくうえで、改善しなければならないこと（上位2項目と下位2項目、学校調査）



これらのことから、キャリア教育で大切にしてきたことと、カリキュラム・マネジメントの重要性とは軌を一にするものであることが分かる。特に、生徒自身が目標を立てたり、教員間で育てたい力について共通理解を図ったりすることが求められる。各自治体においては、そのような研修機会を充実し、各学校では、そのような研修等に積極的に教員を派遣することが求められる。そして、その成果を自校の教育課程に生かすと同時に、校内研修を充実して全教員が協働してカリキュラム・マネジメントの充実とキャリア教育の推進を図っていくことが大切である。

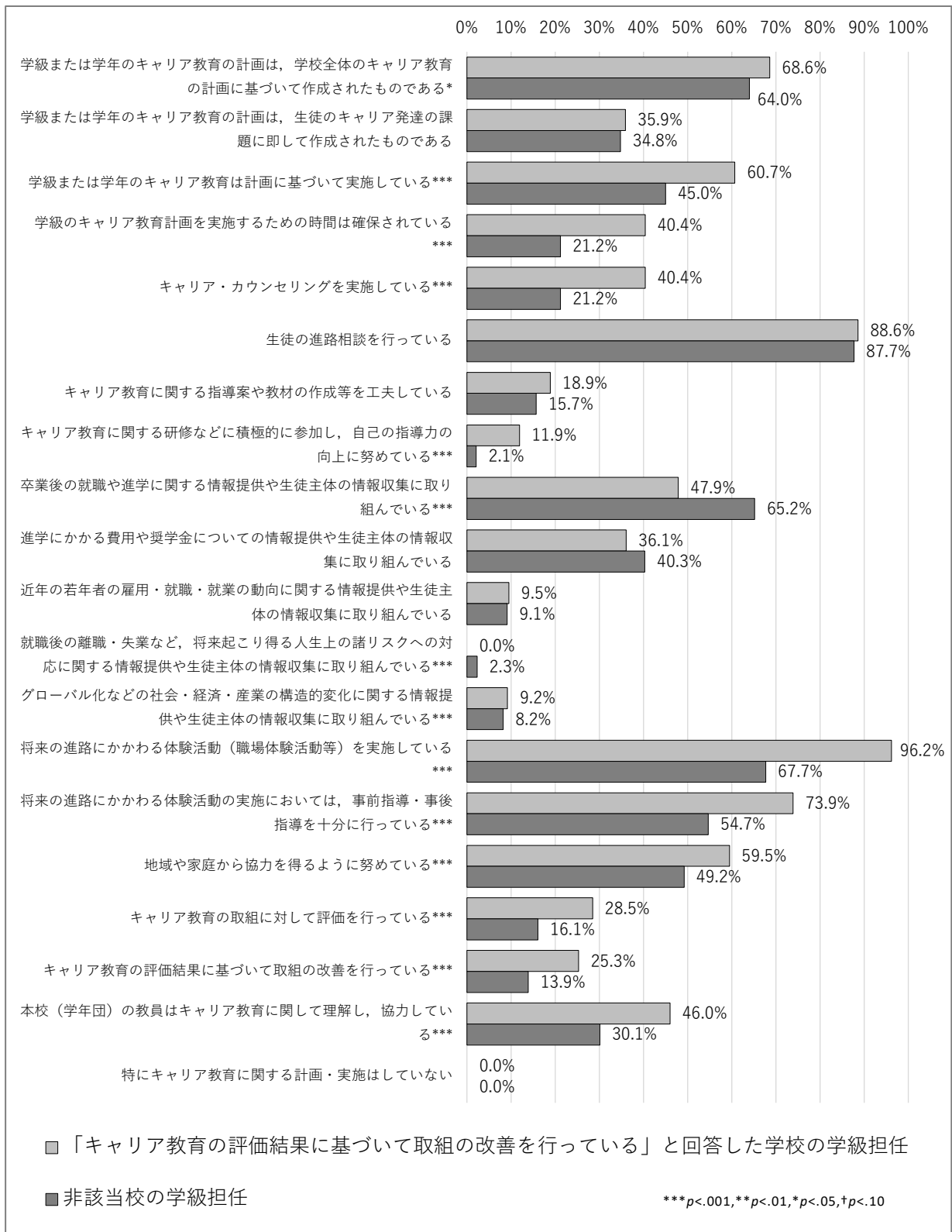
③キャリア教育の評価に基づいて取組の改善を行っている学校の学級担任は、学級や学年のキャリア教育の現状を肯定的に捉えている（学校調査、学級担任調査より）

調査対象校のキャリア教育の現状について尋ねた学校調査で、「キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている」と回答した学校は33.1%であった。

こうした「検証・改善」を行っている約3割の学校とそうでない約7割の学校では、学級担任の意識やキャリア教育の計画・実施状況にどのような差異が見られるのだろうか。

図5は、「評価・改善」を行っている学校の学級担任とそうでない学級担任について、自校のキャリア教育の現状や指導状況等に関する比較を行った結果である。結果を見ると、20項目中16項目において「評価・改善」を行っている学校の学級担任の方が、自校のキャリア教育の現状や指導状況を高く評価していた。

【図5】キャリア教育の評価に基づく改善の実施有無別に見た学級担任の指導状況（学校調査・担任調査）



※ χ^2 検定の結果、有意差が見られた項目は、「学級または学年のキャリア教育の計画は、学校全体のキャリア教育の計画に基づいて作成されたものである」($\chi^2(1)=4.732, p < .05$), 「学級または学年のキャリア教育は計画に基づいて実施している」($\chi^2(1)=49.687, p < .001$), 「学級のキャリア教育計画を実施するための時

間は確保されている」($\chi^2(1)=93.033, p<.001$), 「キャリア・カウンセリングを実施している」($\chi^2(1)=30.580, p<.001$), 「将来の進路にかかわる体験活動(職場体験活動等)を実施している」($\chi^2(1)=237.402, p<.001$), 「将来の進路にかかわる体験活動の実施においては, 事前指導・事後指導を十分に行っている」($\chi^2(1)=79.584, p<.001$), 「地域や家庭から協力を得るように努めている」($\chi^2(1)=21.822, p<.001$), 「キャリア教育の取組に対して評価を行っている」($\chi^2(1)=47.583, p<.001$), 「キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている」($\chi^2(1)=45.225, p<.001$), 「本校(学年団)の教員はキャリア教育に関して理解し, 協力している」($\chi^2(1)=56.090, p<.001$)であった。

特に大きな差が見られた項目は, 「将来の進路にかかわる体験活動(職場体験活動等)を実施している(28.5ポイント差), 「将来の進路にかかわる体験活動の実施においては, 事前指導・事後指導を十分に行っている」(19.2ポイント差), 「学級のキャリア教育計画を実施するための時間は確保されている」(19.2ポイント差), 「本校(学年団)の教員はキャリア教育に関して理解し, 協力している」(15.9ポイント差)であった。

④キャリア教育の評価に基づいて取組の改善を行っている学級担任は, 生徒のキャリア発達を促すことを意識して指導を行っている(学級担任調査より)

担任する学級あるいは所属する学年のキャリア教育の現状について尋ねた学級担任調査で, 「キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている」と回答した学級担任はわずか12.6%であった。

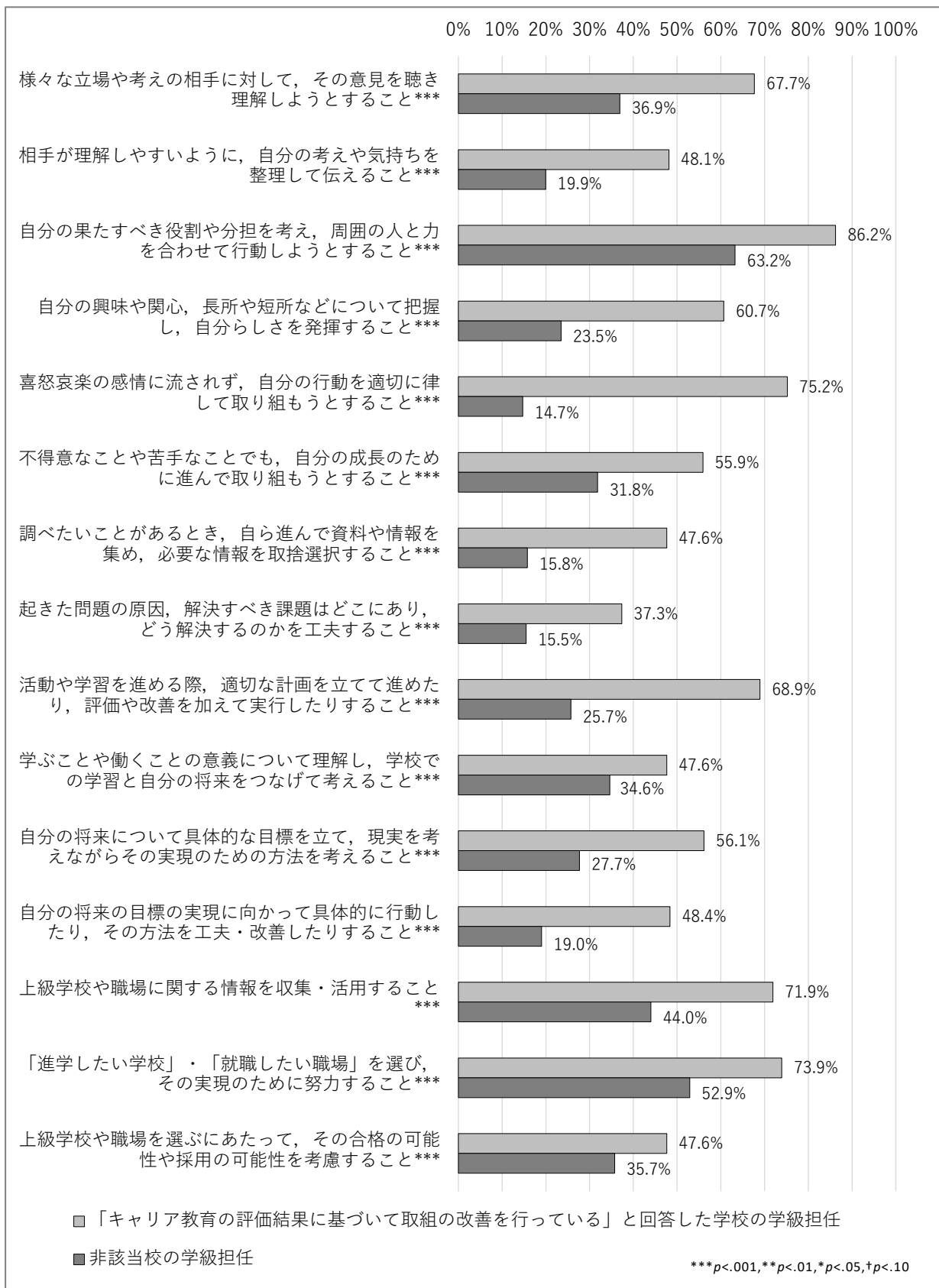
こうした「評価・改善」を自分自身で行っている学級担任とそうでない学級担任の間には, 生徒のキャリア発達を意識した指導内容や程度にどのような差異が見られるのだろうか。

図6は, 「検証・改善」を行っている学校に勤務する学級担任とそうでない学級担任について, 学級や学年の指導内容や程度に関する比較を行った結果である。結果を見ると, 15項目すべてにおいて「検証・改善」を行っている学級担任の方がキャリア発達を意識した指導の割合が高く, 統計的にも有意な差異が見られた。

とりわけ大きな差が見られた項目は, 「喜怒哀楽の感情に流されず, 自分の行動を適切に律して取り組もうとすること(60.5ポイント差), 「活動や学習を進める際, 適切な計画を立てて進めたり, 評価や改善を加えて実行したりすること」(43.2ポイント差), 「自分の興味や関心, 長所や短所などについて把握し, 自分らしさを発揮すること」(37.2ポイント差), 「調べたいことがあるとき, 自ら進んで資料や情報を集め, 必要な情報を取捨選択すること」(31.8ポイント差), 「様々な立場や考えの相手に対して, その意見を聴き理解しようとする」(30.8ポイント差)であった。

また, 進学や就職に関する項目としては, 「上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること」(27.9ポイント差)に大きな差が見られた。

【図6】キャリア教育の評価に基づく改善の実施有無（学級担任）別に見た、学級担任の基礎的・汎用的能力の指導状況（学級担任調査）



※ここでは、「よく指導している」と回答した割合を取り上げて比較した。

※ χ^2 検定の結果、有意差が見られた項目は、「様々な立場や考えの相手に対して、その意見を聴き理解しようとする事」($\chi^2(2)=134.268, p<.001$)、「相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを整理して伝える事」($\chi^2(2)=149.796, p<.001$)、「自分の果たすべき役割や分担を考え、周囲の人と力を合わせて行動しようとする事」($\chi^2(2)=83.981, p<.001$)、「自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、自分らしさを発揮すること」($\chi^2(2)=230.176, p<.001$)、「喜怒哀楽の感情に流されず、自分の行動を適切に律して取り組もうとする事」($\chi^2(2)=634.625, p<.001$)、「不得意なことや苦手なことでも、自分の成長のために進んで取り組もうとする事」($\chi^2(2)=82.197, p<.001$)、「調べたいことがあるとき、自ら進んで資料や情報を集め、必要な情報を取捨選択すること」($\chi^2(2)=213.502, p<.001$)、「起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するのかを工夫すること」($\chi^2(2)=116.130, p<.001$)、「活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること」($\chi^2(2)=309.476, p<.001$)、「学ぶことや働くことの意義について理解し、学校での学習と自分の将来をつなげて考えること」($\chi^2(2)=78.352, p<.001$)、「自分の将来について具体的な目標を立て、現実を考えながらその実現のための方法を考えること」($\chi^2(3)=123.425, p<.001$)、「自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫・改善したりすること」($\chi^2(2)=153.493, p<.001$)、「上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること」($\chi^2(2)=102.703, p<.001$)、「『進学したい学校』・『就職したい職場』を選び、その実現のために努力すること」($\chi^2(2)=69.163, p<.001$)、「上級学校や職場を選ぶにあたって、その合格の可能性や採用の可能性を考慮すること」($\chi^2(2)=86.366, p<.001$)であった。

⑤ キャリア教育の評価に基づいて取組の改善を行っている学校の生徒は、自分自身の日常生活での様子を高く自己評価している（学校調査、生徒調査より）

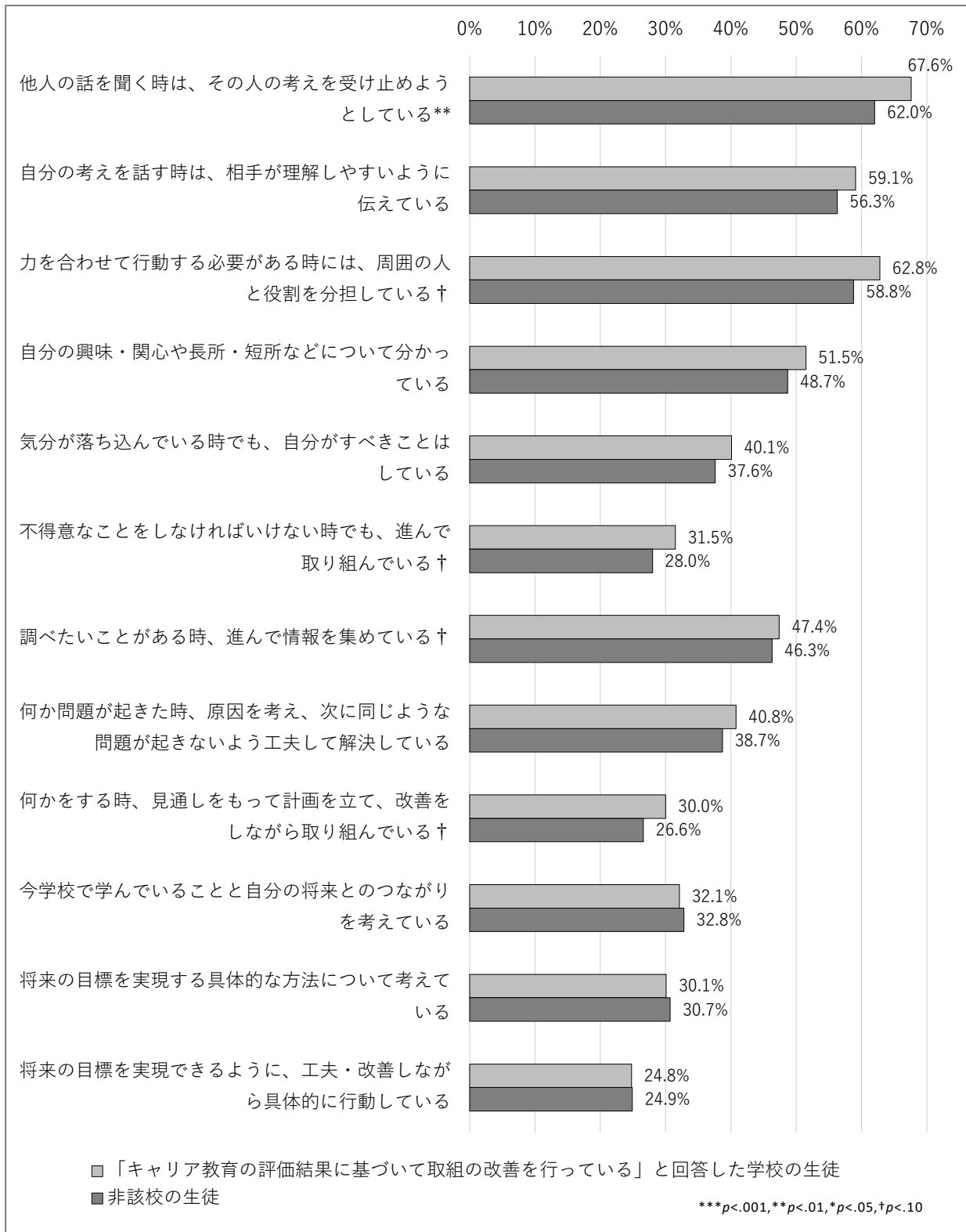
調査対象校のキャリア教育の現状について尋ねた学校調査で、「キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている」と回答した学校は33.1%であった。

こうした「検証・改善」を行っている学校とそうでない学校には、生徒の日常生活の様子や行動に対する自己評価に差異が見られるのだろうか。

図7は、「評価・改善」を行っている学校の生徒とそうでない学校の生徒について、自身の日常生活の様子や行動に関する比較を行った結果である。結果を見ると、12項目中9項目において、「検証・改善」を行っている学校の生徒の方が、自身の日常生活や行動について積極的に評価していた。

例えば、「他人の話聞く時は、その人の考えを受け止めようとしている」(5.6ポイント差)、「力を合わせて行動する必要がある時には、周囲の人との役割を分担している」(4.0ポイント差)、「不得意なことをしなければいけない時でも、進んで取り組んでいる」(3.5ポイント差)、「何かをする時、見通しをもって計画を立て、改善をしながら取り組んでいる」(3.4ポイント差)、「自分の興味・関心や長所・短所などについて分かっている」(2.8ポイント差)であった。

【図7】キャリア教育の評価に基づく改善の実施有無に見た生徒の日常生活の様子（「基礎的・汎用的能力」）の自己評価（学校調査・生徒調査）



※ここでは、「いつもそうしている」と回答した割合を取り上げて比較した。

※ χ^2 検定の結果、有意差が見られた項目は、「他人の話聞く時は、その人の考えを受け止めようとしている」($\chi^2(2)=12.540, p<.01$)であった。

⑥今後の方向性

全体計画及び年間指導計画は、前回調査（平成 24 年）と比べて作成している学校の割合は高く、多くの中学校がキャリア教育を重要な教育活動として位置付けている。とりわけ、身に付けさせたい資質・能力を全体計画に記載していた点は、自校のキャリア教育の目指すべき到達点を意識化することであるゆえ、今後も継続を期待される点である。

一方で、その計画内容を見ると、カリキュラム・マネジメントの観点からキャリア教育を実践するための体制や方法に関する具体的な計画が不足している実態が明らかとなった。具体的には、校内外の推進体制づくり、成果の評価方法、評価に基づく改善計画が課題として挙げられる。これらの課題は、自校のキャリア教育の実践に対する管理職の認識レベルでも不足している点として挙げられており、今後の改善が強く望まれる。

今回の分析結果では、カリキュラム・マネジメントの観点からキャリア教育を実践している場合は、基礎的・汎用的能力を意識した指導が担任レベルで活発に行われていることが示された。これは、学校全体での目標（育成したい資質・能力）を学校全体で共有しながら各教員が生徒の実態に合わせて実践し、その実践を評価・共有しつつ更なる改善を学校全体で行うことで、再び各教員の活発な実践につながる可能性を示唆する結果と言えるであろう。

また、今回の結果から、カリキュラム・マネジメントに基づくキャリア教育の実践が、生徒のキャリア発達を促す効果も示唆された。自校の生徒に身に付けさせたい資質・能力の目標共有に基づいた計画（Plan）・実践（Do）・評価（Check）・改善（Action）を学校全体で行うことで、学級担任レベルでの活発な指導を促し、更には生徒の基礎的・汎用的能力が高まるという好循環が期待される。

今回の調査結果が示すカリキュラム・マネジメントの効果を発揮するための前提として、自校のキャリア教育目標の全体共有の重要性を再度指摘したい。今回、自校のキャリア教育目標について説明できると回答した学級担任はわずか 6.1%である^{*10}。中学校の 77.7%が全体目標を計画に記載していること^{*11}を踏まえると、まずはこの乖離（かいり）を埋めることがカリキュラム・マネジメントの円滑実施に向けた端緒となるであろう。

最後に、目標の理解や共有のための研修実施を提言したい。「教員間や校務分掌間での共通理解を図ること」は 2 番目に高い管理職の考える改善点（28.5%）であるものの^{*12}、学級担任の 64.8%はキャリア教育に関する校内研修に参加していない^{*13}。学級担任で構成される担任団によってキャリア教育の根幹部分が異なることなく、校内研修により目標や方針を共有し、自校の実践を内省しつつ学校全体としてキャリア教育によるカリキュラム・マネジメントの効果を着実に高めることを期待したい。

参考：第一次報告書における参照データ

* 1	P105	中学校・学校調査	問 4 (1) A
* 2	P108	中学校・学校調査	問 4 (2) A B
* 3	P140	中学校・学級担任調査	問 9
* 4	P159	中学校・生徒調査	問 11
* 5	P104	中学校・学校調査	問 3 (3)
* 6	P114	中学校・学校調査	問 8
* 7	P133	中学校・学級担任調査	問 2 (3)
* 8	P144	中学校・学級担任調査	問 13
* 9	P126	中学校・学校調査	問 14
* 10	P135	中学校・学級担任調査	問 4
* 11	P106	中学校・学校調査	問 4 (1) B
* 12	P126	中学校・学校調査	問 14
* 13	P132	中学校・学級担任調査	問 2 (2)

(3) テーマ2 職業に関する体験活動の重要性

- 生徒は職場体験活動に積極的に参加しており、大多数の生徒が職場体験活動を振り返って有意義と感じている。
- ・職場体験活動は、ほぼ全ての中学校で年間計画に位置付けられて重視されている。
 - ・事前指導・事後指導では、マナー指導のみならず、学校での生活や学習と体験との接続を意識するなどの多様な観点からの指導が望まれる。
 - ・生徒は職場体験活動に積極的に参加しており、大多数の生徒が職場体験活動を振り返って有意義と感じている。
 - ・学校側の意図した職場体験活動の重視点（ねらい）と、生徒の感じる有意義さに隔たりがある（例えば、「自分の働き方や生き方を考える」）。事前指導・事後指導を通じて、職場体験活動のねらいを生徒と共有することが求められる。
 - ・職場体験活動を重視している学校は、多様な観点から事前指導・事後指導を行っており、特に体験と日常生活や教科学習との接続を意図している。
 - ・充実した事前・事後指導を伴う職場体験活動によって、生徒のキャリアプランニング能力の向上が見込まれる。例年どおりの形骸化や目的意識の希薄化に陥ることなく、多様な観点から充実した事前指導・事後指導を実施が望まれる。

①職場体験活動の実施状況と事前指導・事後指導の現状と課題

職場体験活動は、99.3%の中学校でキャリア教育の活動として年間計画に位置付けられており、「上級学校見学（訪問・体験）」(63.4%)や「ボランティア活動」(39.2%)と比べて、中学校におけるキャリア教育にかかわる体験活動の中でも中核的な位置付けとなっている*¹。

職場体験活動の事前指導・事後指導の重要性については、前回調査の『第二次報告書』（平成25年）や今回調査の『第一次報告書』（令和2年）でも指摘されていることであり、事前・事後指導の充実が職場体験活動の教育効果にもたらす影響は大きいと考えられる。

今回の学校調査では、事前指導・事後指導の内容を具体的に尋ねており、図1・図2に示したとおり、十分に指導されている点と今後の課題が読み取れる*²。

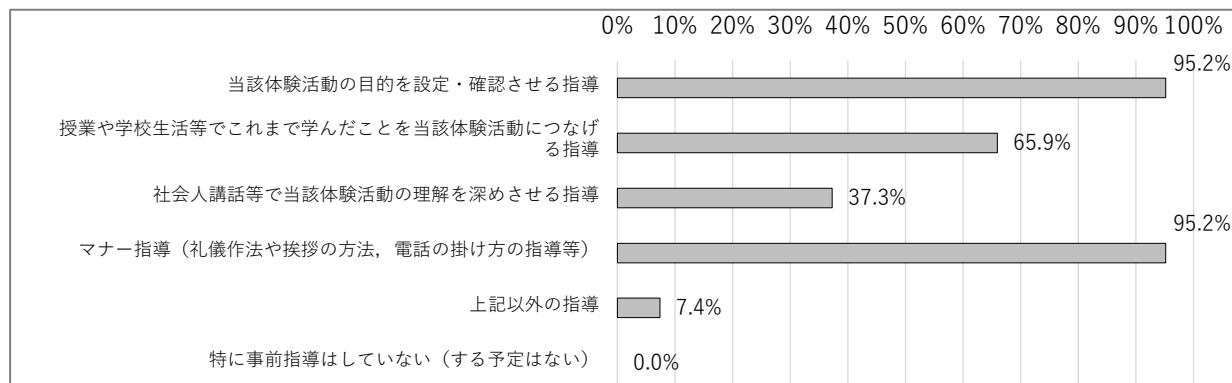
事前指導・事後指導に共通して指摘できる課題としては、体験活動と学校での生活や学習の接続を意識した指導が相対的に行われていない点である。今後は、職場での貴重な体験を日常の学びや生活及び将来との関係の中で意味付けることを意識した事前指導・事後指導が必要であろう。

この点に関して、『中学校キャリア教育の手引き』（文部科学省、2011）では、「体験活動には、…（中略）…など様々な効果が期待できる。しかし、その効果を十分に発揮させるためには、体験活動を一過性のものに終わらせるのではなく、ねらいを明確にして、ほかの教育活動と関連付けたり、事前・事後の指導を充実させたりすることが重要である」（P.129）と述べられており、今後も引き続き充実した事前指導・事後指導が望まれる。

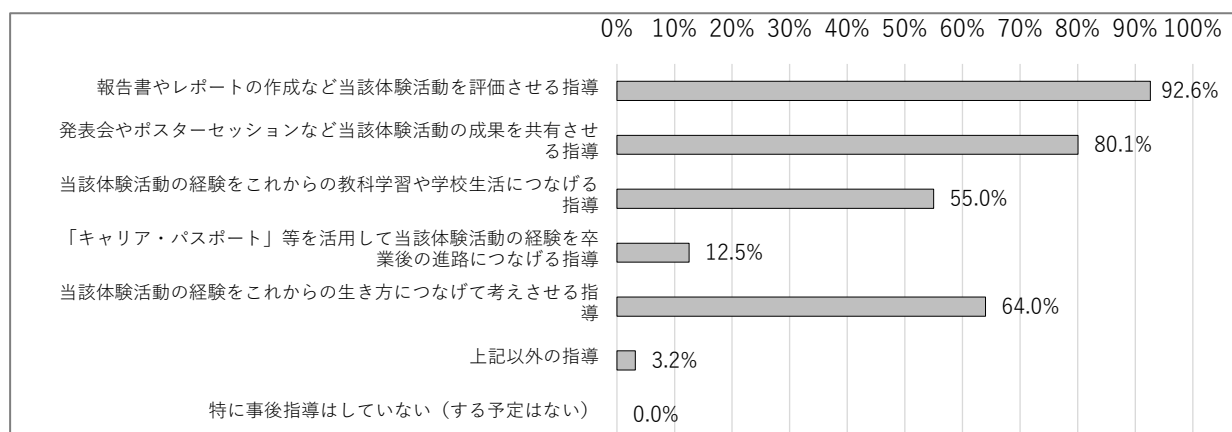
また、今後は「キャリア・パスポート」を活用しながら、生徒が体験から学んだ事柄を

振り返りつつ、これまでと今後の学びやキャリア形成との関連の中で職場体験活動を有意義な経験として意味付けるような事前指導・事後指導が求められるであろう。

【図1】体験活動の事前指導の内容（学校調査）



【図2】体験活動の事後指導の内容（学校調査）



②職場体験活動のねらいと生徒の振り返り内容について

生徒調査によれば、職場体験活動に積極的に取り組んでいる割合は94.1%であり*³、また、職場体験活動を経験した生徒の90.9%が「有意義な活動だと思う」と回答している*⁴。くわえて、生徒の92.5%が自分の将来の生き方や進路を考える上で職場体験活動が役立ったと回答している*⁵。この結果からも、中学校がキャリア教育の中核として重視している職場体験活動は、生徒の観点からも有意義な活動であると言える。

今回の生徒調査では、職場体験活動を振り返っての感想や体験の受け止め方を、「どのような点から有意義だと思いましたか」という項目で尋ねている*⁶。また、この生徒調査と概ね対応させる形式で、学校側の体験活動に関して重視している点（ねらい）について尋ねている*⁷。職場体験活動に関して学校側の重視している点を図3に示し、生徒側の受け止め方を図4に示した。

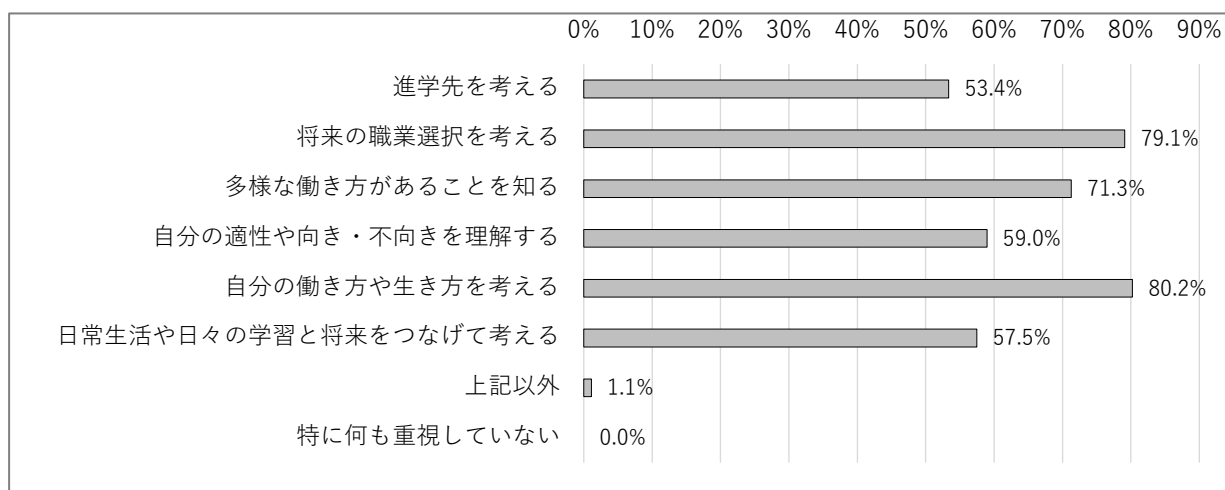
対応する項目を比較すると、学校側の重視点（ねらい）と生徒側の受け止め方に、やや異なる様相が見られる。とりわけ差異が大かった項目は、「自分の働き方や生き方を考えることができた」（-45.9ポイント差）、「日常生活や日々の学習と将来をつなげて考えることができた」（-26.8ポイント差）であった。

このうち、「自分の働き方や生き方を考える」ことは、80%以上の学校が重視している点（ねらい）であるが、生徒側の受け止め方としては30%程度の有意義さであった。これは、体験した職業を通して垣間（かいま）見える職業人としての姿や生き方、あるいは自分の志望職業にも通底する将来の自分の働き方や生き方に引き寄せて振り返る指導の必要性を示唆する結果と考えられる。

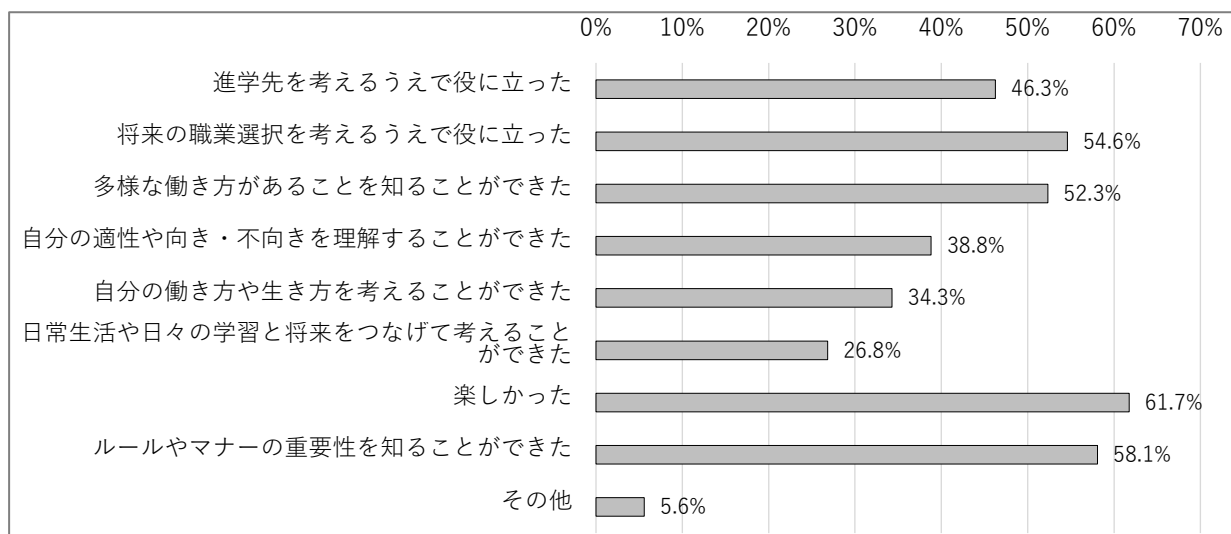
また、「日常生活や日々の学習と将来をつなげて考える」ことは、生徒側の有意義さの認識の中で最も低い項目であった（26.8%）。この結果は、先述の事前指導・事後指導の内容と同様の傾向である。学校側の重視する視点（ねらい）が相対的に不足気味であることが、職場体験活動と日常との接続を意識することなく体験している可能性も示唆される。

職場体験活動はキャリア教育の中核的な位置付けであり、生徒側も積極的に取り組む姿が見られると同時に、肯定的に受け止めている。それゆえに、多様な重視する点（ねらい）を学校が意識して計画し、事前指導・事後指導を通して、日常生活や将来との関連を生徒自身が見いだすような一連の取組が今後も求められる。

【図3】体験活動の計画をするうえで重視している点（学校調査）



【図4】 職場体験活動を振り返って有意義だと思った点（生徒調査）



③職場体験活動の充実を重視する学校は、指導内容や効果を具体的に意識した計画を立てている（学校調査より）

キャリア教育の年間指導計画を立てる上で、8割を超える中学校が職業や就労にかかわる体験活動（職場体験活動等）を重視している。職場体験活動は、体験したことを通じて働く意義や学ぶこと・働くこと・生きることに関する自身の考えを深めることや統合する機会となる重要なキャリア教育活動である。また、これらの事前指導・事後指導の充実が活動の成否や生徒の職業意識・生活意識等に影響することは、前回調査の報告書（平成25年）においても指摘されている。

そこで、学校調査【問5】「職業や就労にかかわる体験活動（職場体験活動等）を充実させること」項目に該当する学校を「職場体験を重視している学校」及び「職場体験活動や体験入学等の体験活動において、事前指導・事後指導を重視すること」項目に該当する学校を「事前指導・事後指導を重視している学校」として、そうでない学校との間で取組や指導内容及び生徒の意識に違いが見られるかについて比較した。

令和元年度のキャリア教育の計画を立てる上で重視した事柄について尋ねた学校調査で、「職業や就労にかかわる体験活動（職場体験活動等）を充実させること」と回答した学校は83.1%であり、19項目の中で最も重視されている。この「充実させること」の内容については、例えば、体験を通じた勤労観・職業観の育成や日常生活や学習と体験との結び付きを意識した指導が求められるだろう。

ここでは、職業や就労にかかわる体験活動を重視している学校が、内容を計画する上で重点化している具体的な点（体験活動のねらい）について検討する。

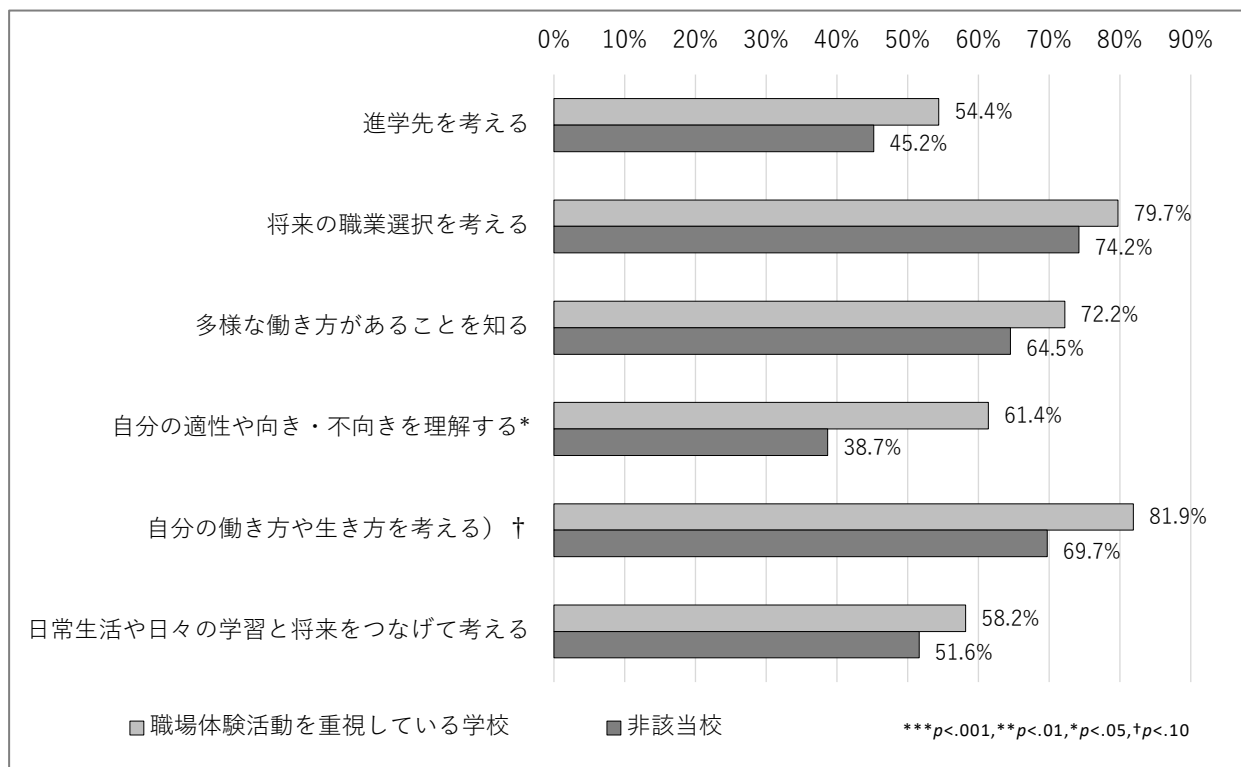
図5は、年間計画を立てる上で「職場体験活動を重視している学校」が非該当校と比べて、具体的にどのような指導内容や効果を重視しているのかについての回答割合である。

結果を見ると、8項目中6項目で、「職場体験活動を重視している学校」の方が高い割合を示した。

特に顕著な差異が見られた項目は、「自分の適性や向き・不向きを理解する（22.7ポイント差）」、「自分の働き方や生き方を考える」（12.2ポイント差）、「進学先を考える」（9.2ポイント差）、「多様な働き方があることを知る」（7.7ポイント差）であった。

こうした結果に見られるとおり、職場体験活動等を充実させている学校は、体験活動のねらいや具体的な重視点を意識した計画を立てていると考えられる。

【図5】体験活動の重視有無別にみた具体的な指導内容や効果の重視点（学校調査）



※ χ^2 検定の結果、有意差が見られた項目は、「自分の適性や向き・不向きを理解する」($\chi^2(2)=5.938, p < .05$)であった。

④職場体験活動の事前指導・事後指導を重視する学校は、多様な目的や効果を意図

した事前指導・事後指導を行っている（学校調査より）

令和元年度のキャリア教育の計画を立てる上で重視した事柄について尋ねた学校調査で、「職場体験活動や体験入学等の体験活動において、事前指導・事後指導を重視すること」と回答した学校は71.3%であり、19項目の中で2番目に高い割合で重視されている。事前指導・事後指導の充実がキャリア教育にかかわる体験の意義の理解や体験の効果を高める上で重要であることは、前回調査でも指摘されている。

そこで、今回の調査では、体験活動の事前指導・事後指導を重視している学校が、事前

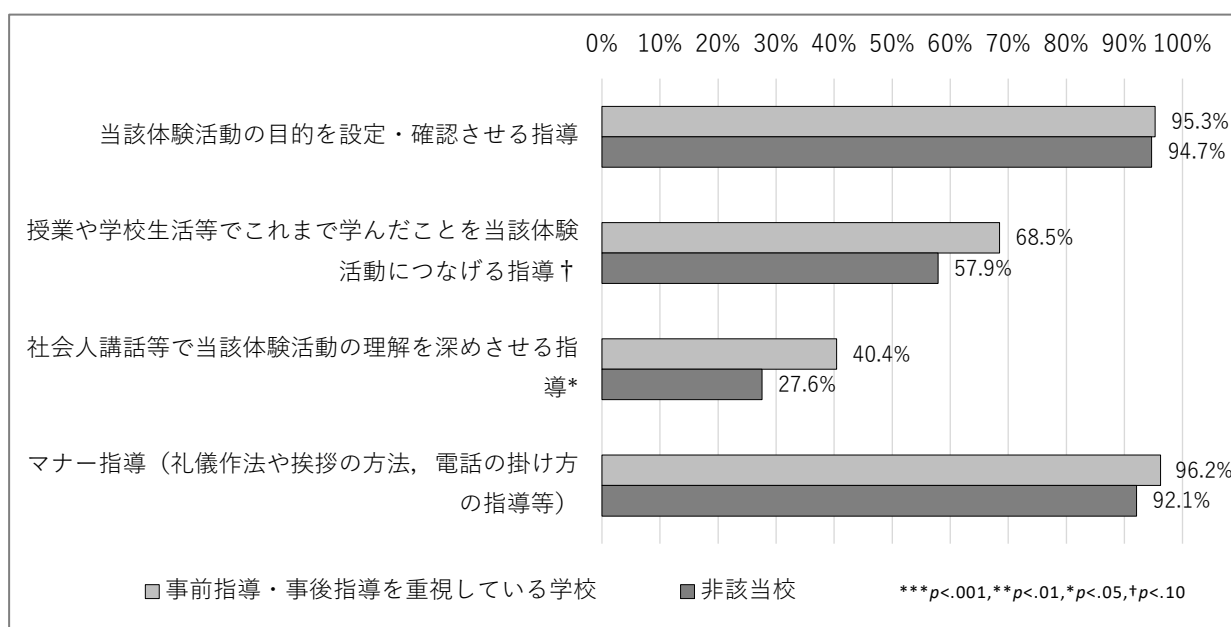
指導で具体的に指導している内容について、非該当校との比較を通じて検討した。

図6は、「事前指導・事後指導を重視している学校」が非該当校と比べて、具体的にどのような内容を事前に指導したのかについての回答割合である。結果を見ると、6項目中4項目で、「事前指導・事後指導を重視している学校」の方が高い割合を示した。

その中でも、10ポイント以上の差が見られた項目は、「社会人講話等で当該体験活動の理解を深めさせる活動（12.8ポイント差）、「授業や学校生活等でこれまで学んだことを当該体験活動につなげる指導」（10.6ポイント差）であった。

マナー指導等については差が見られない一方で、事前指導・事後指導の充実を重視した計画を立てている学校が、実際の指導場面においても日々の授業や学校生活と体験活動との結びつきを意識した事前指導を行っていることは、今後の事前指導の在り方を検討する上で重要な結果と言えるだろう。

【図6】体験活動の事前指導・事後指導の重視別にみた事前指導の内容（学校調査）



※ χ^2 検定の結果、有意差が見られた項目は、「社会人講話等で当該体験活動の理解を深めさせる指導」（ $\chi^2(1)=4.019, p<.05$ ）であった。

次に、体験活動の事前指導・事後指導を重視している学校が、事後指導で具体的に指導している内容について、非該当校との比較を通じて検討した。

図7は、「事前指導・事後指導を重視している学校」が非該当校と比べて、事後指導で具体的にどのような内容を指導したのかについての回答割合である。結果を見ると、7項目中4項目で、「事前指導・事後指導を重視している学校」の方が高い割合を示した。

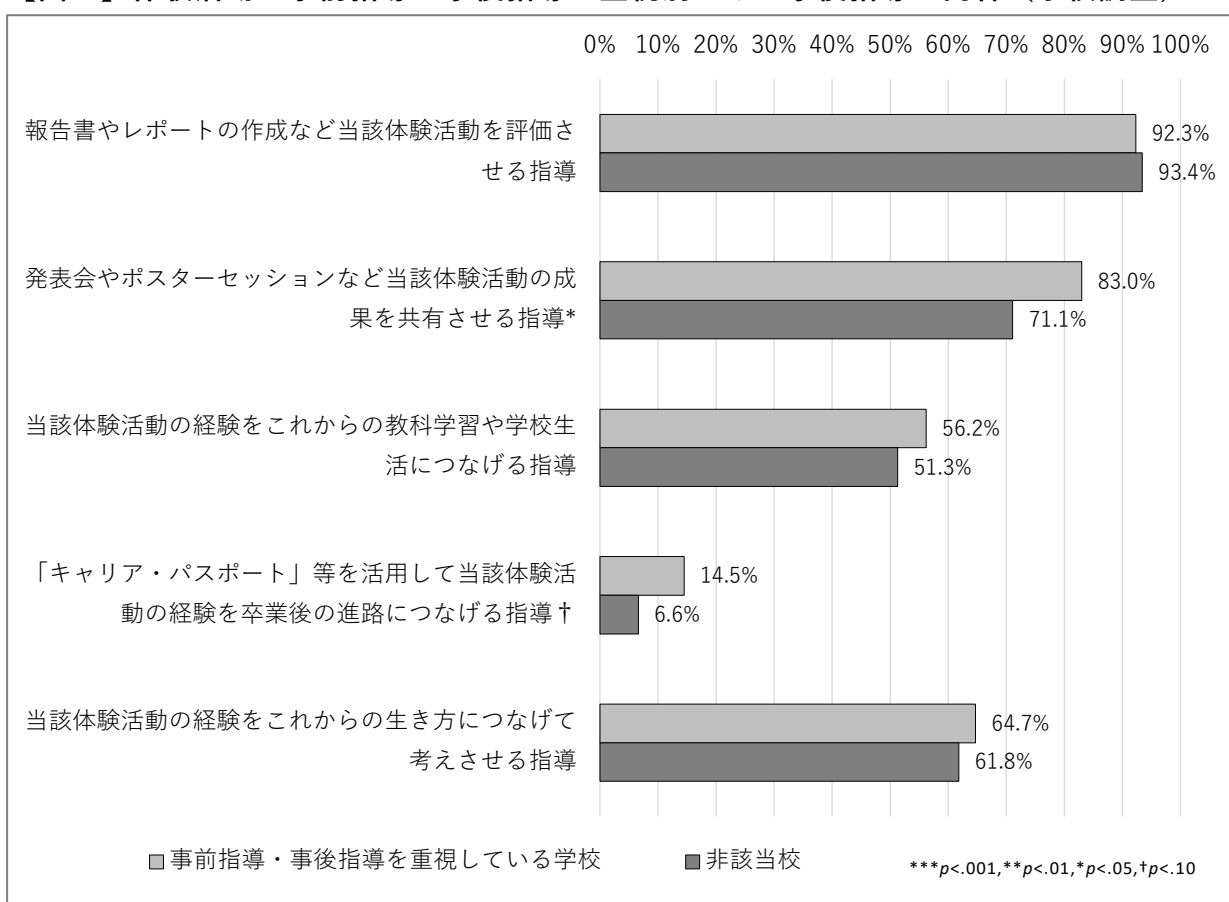
差異が見られた項目は、「発表会やポスターセッションなど当該体験活動の成果を共有させる指導」（11.9ポイント差）、「『キャリア・パスポート』等を活用して当該体験活動の経験を卒業後の進路につなげる指導」（7.9ポイント差）、「当該体験活動の経験をこれからの教科学習や学校生活につなげる指導」（4.9ポイント差）、「当該体験活動の経験をこれか

らの生き方につなげて考えさせる指導」(2.9ポイント差)であった。

結果の中で着目すべきは、報告書やレポート作成には差異が見られないが、個人や各班の体験や成果を共有する発表会やポスターセッションでは10ポイント以上の差が見られたことである。他の生徒や班の体験内容や受け止め方などを共有することで多様な働き方を知ることが期待される。事前指導・事後指導を重視する学校は、こうした職場体験活動の効果を高めるべく、他者に向けた表現機会や共有機会を企図していると考えられる。

また、事前指導と同様に、事後指導においても当該活動の経験を教科学習・学校生活・これからの生き方につなげる指導で差が見られた。くわえて、「キャリア・パスポート」の活用にも差が見られた。これらの結果から、計画段階での重視点の実施段階での実際の指導の差異として現れると考えられるゆえ、職場体験活動を年間指導計画の中に明確に位置付けることの重要性が引き続き指摘できるだろう。

【図7】体験活動の事前指導・事後指導の重視別にみた事後指導の内容（学校調査）



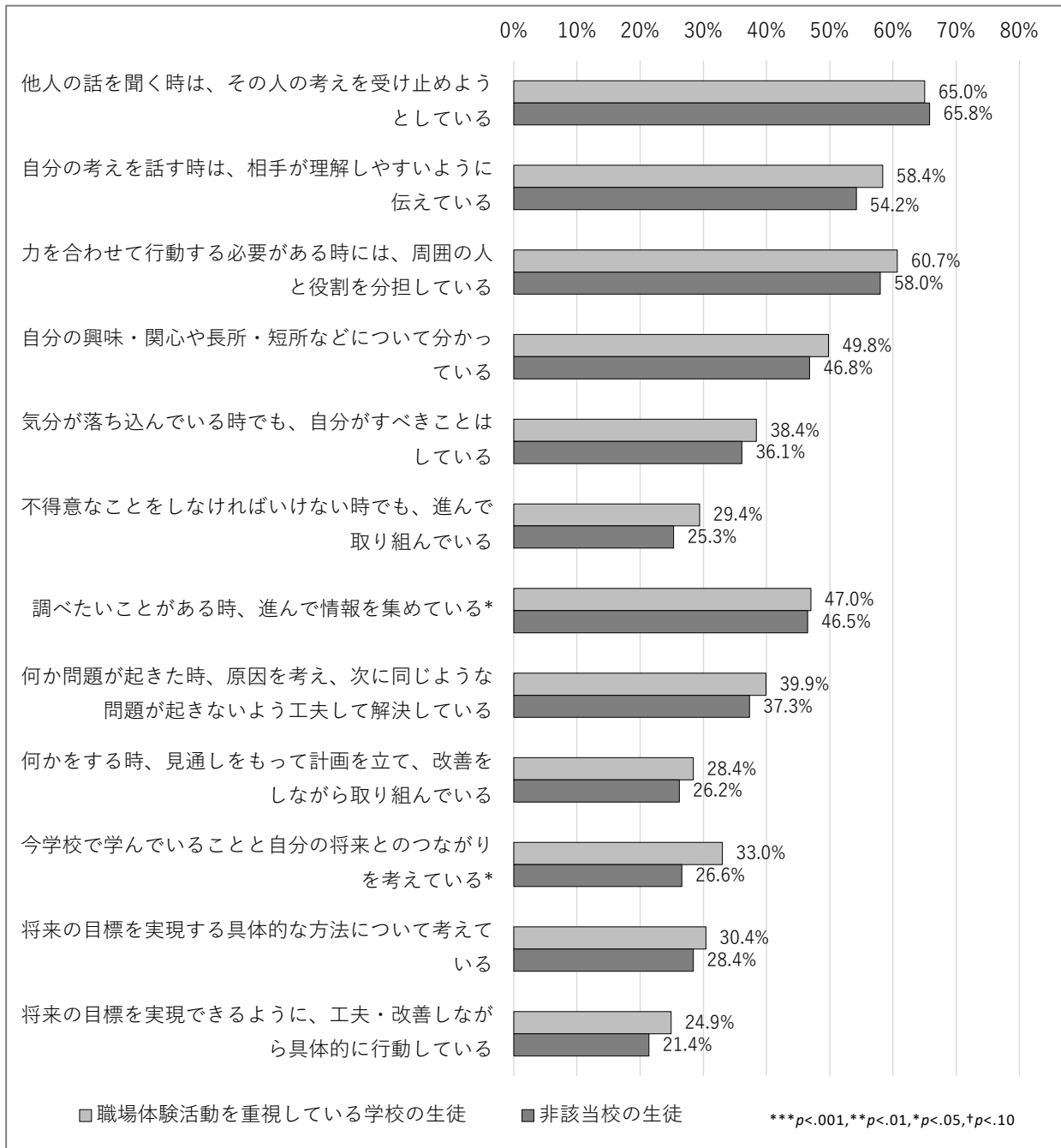
※ χ^2 検定の結果、有意差が見られた項目は、「発表会やポスターセッションなど当該体験活動の成果を共有させる指導」($\chi^2(1)=5.117, p<.05$)、「『キャリア・パスポート』等を活用して当該体験活動の経験を卒業後の進路につなげる指導」($\chi^2(1)=3.259, p<.10$)であった。

⑤職場体験活動及び事前指導・事後指導を重視している学校の生徒は、キャリア教育で育成を目指す「基礎的・汎用的能力」を高く自己評価している（学校調査、生徒調査より）

ここでは、学校調査【問5】「職業や就労にかかわる体験活動（職場体験活動等）を充実させること」、「職場体験活動や体験入学等の体験活動において、事前指導・事後指導を重視すること」の二つの項目の両方に該当する学校を「職場体験重視校」とし、2項目ともに該当しない学校を「職場体験非重視校」に区分した。そして、それぞれの中学校の生徒の間に、キャリア発達にかかわる意識や行動の違いが見られるかについて比較した。

図8は、「職場体験重視校」の生徒と「非重視校」の生徒について、自身の日常生活の様子や行動に関する自己評価（「基礎的・汎用的能力」に関する自己評価）を比較した結果である。結果を見ると、12項目中11項目において、「職場体験重視校」の生徒の方が、自身の日常生活や行動について積極的に評価していた。

【図8】学校側の重視項目別に見た生徒の日常生活の様子（「基礎的・汎用的能力」）の自己評価（学校調査・生徒調査）



※ここでは、「いつもそうしている」と回答した割合を取り上げて比較した。

※中学校2年生までに職場体験活動を経験している生徒を集計対象とした。

※ χ^2 検定の結果、有意差が見られた項目は、「調べたいことがある時、進んで情報を集めている」($\chi^2(2)=6.420, p < .05$)、「今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えている」($\chi^2(2)=7.938, p < .05$)であった。

差が見られた主な項目は、「今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えている」(6.4ポイント差)、「自分の考えを話す時は、相手が理解しやすいように伝えている」

る」(4.2 ポイント差),「不得意なことをしなければいけない時でも,進んで取り組んでいる」(4.1 ポイント差),「将来の目標を実現できるように,工夫・改善しながら具体的に行動している」3.5 ポイント差),「自分の興味・関心や長所・短所などについて分かっている」(3.0 ポイント差)であった。

とりわけ,今回調査で現在の学びと将来との接続や将来目標の実現に向けた工夫や改善等,キャリアプランニングにかかわる生徒の意識や行動に差異が見られたことから,引き続き職場体験活動を学校の年間指導計画に明確に位置付け,充実した事前指導・事後指導を伴いながら実施することが重要である。

⑥今後の方向性

99.3%の中学校が職場体験活動を年間指導計画に位置付けており,中学校におけるキャリア教育の中核的な実践として定着している*⁸。地域社会との積年の連携により実施される職場体験活動は,生徒の職業観形成に資する重要な学習機会として学校側も重視している。一方で,毎年の継続実施による形骸化や,体験の目的や効果に対する意識の希薄化を招く可能性もはらんでおり,充実した事前指導・事後指導を伴う職場体験活動の重要性が前回の『第二次報告書』(平成25年)でも指摘されている。

今回の調査結果から指摘できる今後の方向性として3点が挙げられる。

一つ目は,多様な観点での事前指導・事後指導を行う必要性である。実社会との接点となる体験の性質上,ややもするとマナー指導(礼儀作法や挨拶の方法,電話の掛け方の指導等)に傾斜した事前指導・事後指導になりやすい。しかし,日々の学校生活の過ごし方や授業で学んだ事柄と「働くこと」の接点を見いだのような事前指導・事後指導によって,職場体験活動の効果や有意義さは更に高まるであろう。例えば,事後指導場面での使用が約1割*⁹にとどまっている「キャリア・パスポート」を積極的に活用するなどして,生徒自身の気づきや成長を学校生活の文脈に結び付けて捉え直すような事後指導が必要である。

二つ目は,学校側が職場体験活動において重視している点(ねらい)を生徒と共有する必要性である。9割を超える生徒が職場体験を有意義と感じているが,その有意義さの内訳を細かく見ると,学校側の企図した水準ほどは有意義さを感じていない。例えば,約8割の学校が「働き方や生き方を考える」ことを重視しているが,このねらいを生徒が実感しているのは3割程度である(図4参照)。職場体験活動は,学校と生徒ともに重要性や意義を感じている中核的なキャリア教育の機会ゆえに,学校が企図する効果やねらいを生徒が理解して臨むべく,やはり事前指導・事後指導の充実が今後も重要であろう。

三つ目は,充実した事前指導・事後指導を伴う職場体験活動は,生徒のキャリア発達を促す可能性がある点である。キャリア教育を通じて育成を目指す「基礎的・汎用的能力」に関連する項目について,職場体験活動を重視している学校の生徒ほど高く自己評価していた(例:「今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えている」)。キャリアプランニングに対する取り組み姿勢を促す可能性が示唆されたことから,例年どおりの形骸化や目的意識の希薄化に陥ることなく,多様な観点から充実した事前指導・事後指導を

伴う職場体験活動の実施を期待される。

参考：第一次報告書における参照データ

- | | | | |
|-----|-----------|----------|------------|
| * 1 | P111 | 中学校・学校調査 | 問 6(1) |
| * 2 | P123・P124 | 中学校・学校調査 | 問 12(1)(2) |
| * 3 | P158 | 中学校・生徒調査 | 問 10 |
| * 4 | P163 | 中学校・生徒調査 | 問 12(5) |
| * 5 | P159 | 中学校・生徒調査 | 問 11 |
| * 6 | P163 | 中学校・生徒調査 | 問 12(6) |
| * 7 | P112 | 中学校・学校調査 | 問 6(3) |
| * 8 | P111 | 中学校・学校調査 | 問 6(1) |
| * 9 | P124 | 中学校・学校調査 | 問 12(2) |

(4) テーマ3 「キャリア・パスポート」の有用性

- 「キャリア・パスポート」を作成している学校の学級担任は生徒のキャリア発達を意識した指導に取り組んでいる。
- ・管理職と学級担任は「キャリア・パスポート」に対する重要性を認識している。
 - ・「キャリア・パスポート」の作成や活用に関する改善の必要性を管理職は感じているが、校内研修の実施率及び学級担任の校内外への研修参加率はいずれも1割未満である。
 - ・「キャリア・パスポート」を作成している学校は半数未満であり、今後の作成・活用が望まれる。
 - ・生徒は自身の適性理解や進路選択の考え方や方法の理解を希求していることから、「キャリア・パスポート」を活用しながら教員が対話的に関わるのが可能である。
 - ・「キャリア・パスポート」を作成している学校の学級担任は、生徒のキャリア発達を意識した指導に取り組んでいる。
 - ・「教科における学習の記録・振り返り」を記載している場合、生徒の学習意欲の向上やキャリア教育に関する学習や活動への積極的な取組姿勢を学級担任が実感している。
 - ・「キャリア・パスポート」の重要性を認識している担任の学級生徒は、自身の「基礎的・汎用的能力」を高く自己評価しており、今後の「キャリア・パスポート」の適切な活用が求められる。

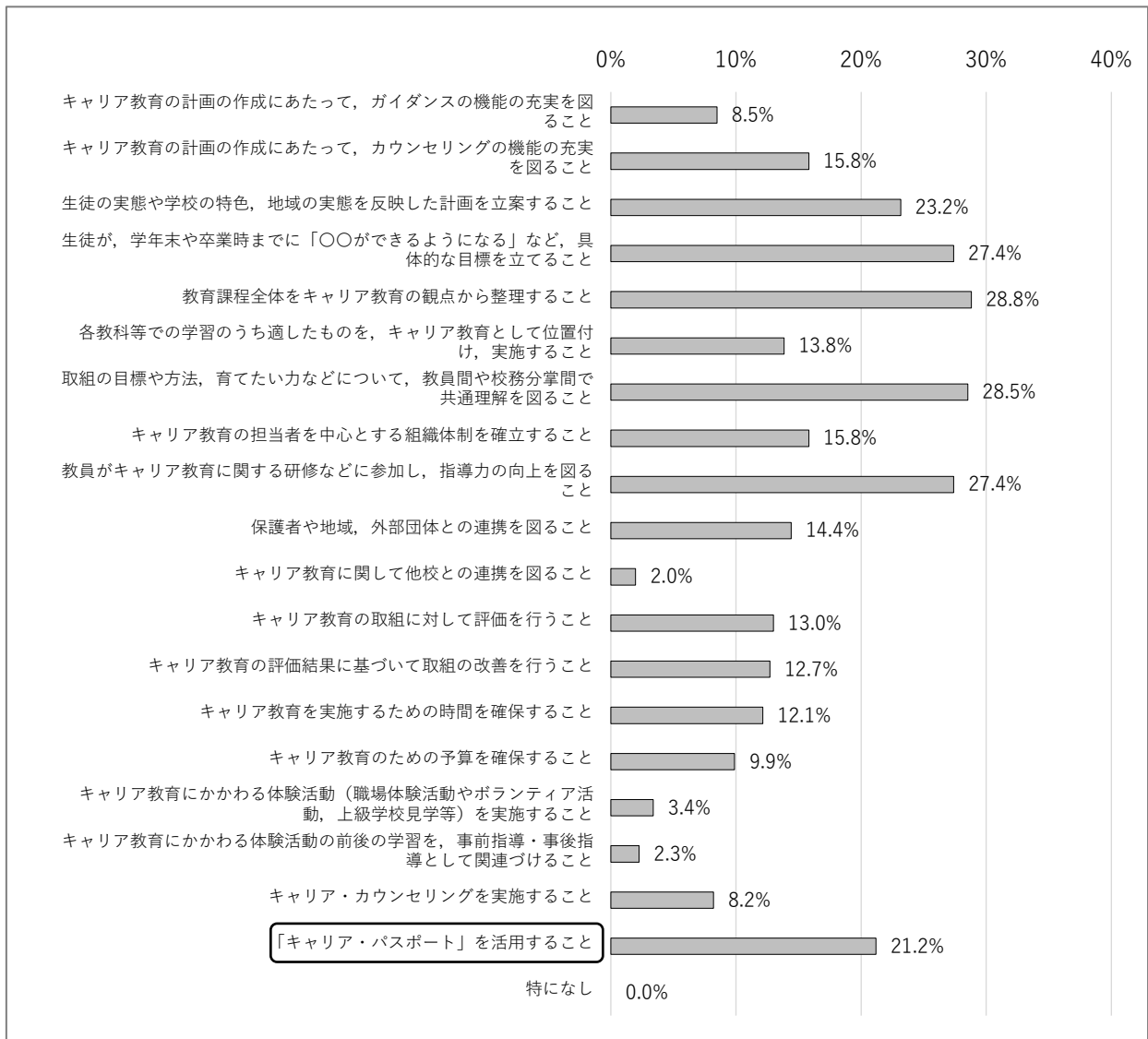
① 研修機会の充実について

キャリア教育を適切に行っていく上での改善点を尋ねた学校調査で「『キャリア・パスポート』を活用すること」は上位(21.2%)に挙がっており、管理職は「キャリア・パスポート」を活用することの意義や目的及び有用性について一定の認識を有しているものと推察できる*1(図1)。また、キャリア教育を適切に行っていく上で今後重要だと思っていることを尋ねた学級担任への設問では、「『キャリア・パスポート』を活用すること」について「とても重要だと思う」及び「ある程度重要だと思う」の合計が67.9%となっており、約7割の学級担任においても重要性を認識している状況が見られる*2。

しかし、その一方で、校内研修で実施した内容として「『キャリア・パスポート』に関する研修」が6.9%*3、校外での研修等への教職員に派遣状況については「『キャリア・パスポート』に関する研修」が4.1%*4となっている。さらに、校内研修で参加した内容については「『キャリア・パスポート』に関する研修」が2.6%*5、校外研修等については「『キャリア・パスポート』に関する研修」が2.5%*6となっており、キャリア・パスポートに関する校内研修の実施状況及び校外研修への教職員の参加状況は、ともに低い割合となっている。

このように、「キャリア・パスポート」の活用に関する改善の必要性や重要性は認識されているものの、研修の実施及び参加は進んでいないことが指摘できる。

【図1】キャリア教育を適切に行っていくうえで、改善しなければならないこと（学校調査）



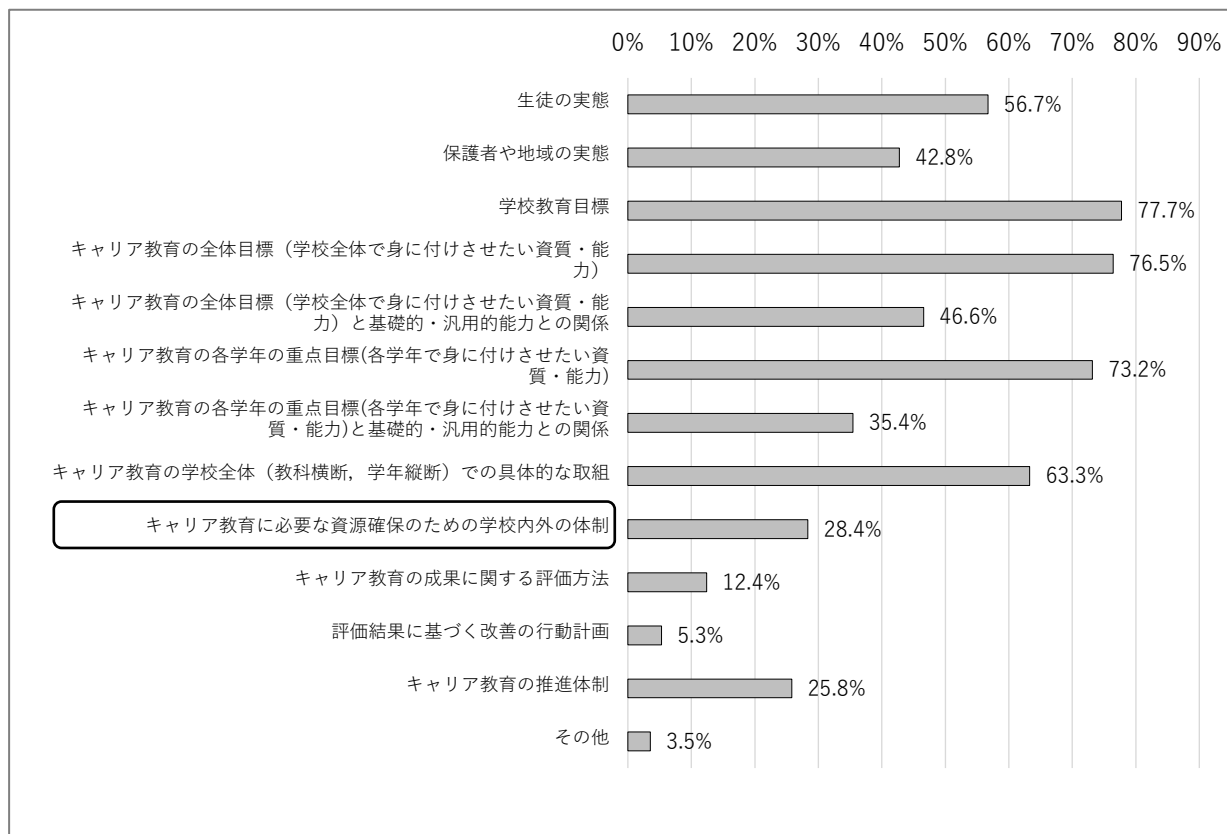
また、図2に示したとおり、キャリア教育の全体計画に記されていることを尋ねた学校調査では、「キャリア教育の学校全体（教科横断、学年縦断）での具体的な取組」が63.3%^{*7}と高い割合を示していた。

「キャリア・パスポート」に期待される役割として、中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」（平成28年）で「特別活動を中心としつつ各教科等と往還しながら、主体的な学びに向かう力を育て、自己のキャリア形成に生かすために活用できるものとなることが期待される。」と述べられている。こうした点に鑑みると、「キャリア・パスポート」の適切な活用を通じて、生徒自身による学びのプロセスの振り返りや教科や学年を横断する学びの統合を促すことが望まれる。

そこで今後は「キャリア・パスポート」の作成のみならず、効果的な活用に関する研修機会の拡充が求められる。また、作成・活用の意義や目的の周知にくわえ、先進的な実践事例を参考しながら自校での実践方法を検討することも重要であろう。こうした研修機会

の充実により、「キャリア・パスポート」が有効に活用され、キャリア教育の全体計画に位置付けられている教科横断・学年縦断の取組がより一層進むことが期待される。

【図2】全体計画に示されている内容（学校調査）

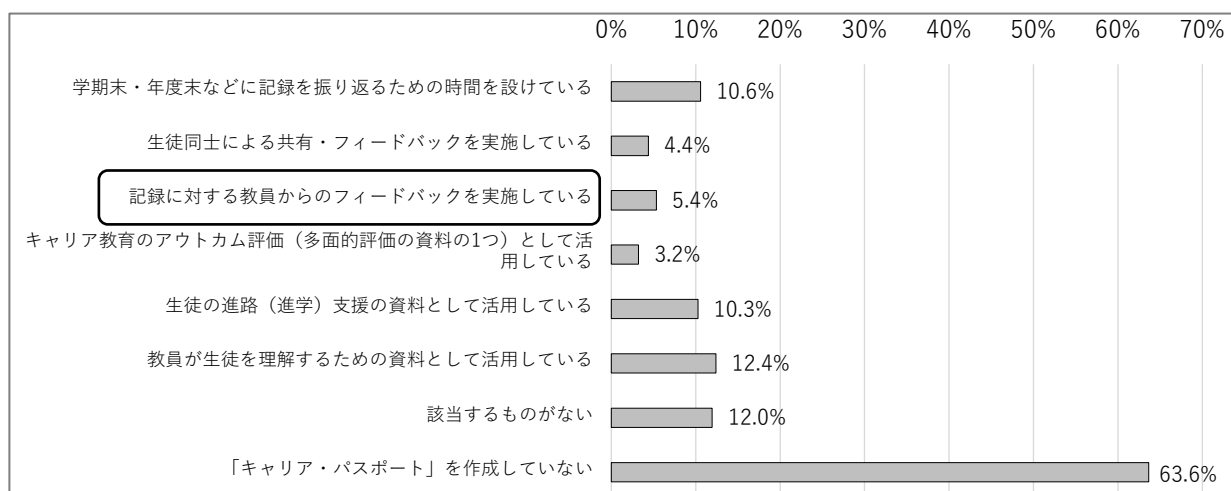


② 「キャリア・パスポート」の活用における生徒との対話的関わりの重要性

学級担任への「キャリア・パスポート」の活用に関する設問では、「キャリア・パスポート」を活用している58.3%のうち、「記録に対する教員からのフィードバックを実施している」の割合が5.4%と低い*8（図3）。このように、現状では「キャリア・パスポート」の対話的な活用が進んでいない実態が見られる。

しかし、『中学校学習指導要領』（平成29年告示）の前文では、「（前略）生徒が学ぶことの意義を実感できる環境を整え、一人一人の資質・能力を伸ばせるようにしていくことは、教職員をはじめとする学校関係者はもとより、家庭や地域の人々も含め、様々な立場から生徒や学校に関わる全ての大人に期待される役割」と示されているように、生徒の資質・能力を育成していくためには、教職員のみならず、様々な立場の大人による生徒との関わりが求められている。

【図3】「キャリア・パスポート」の活用について（担任調査）



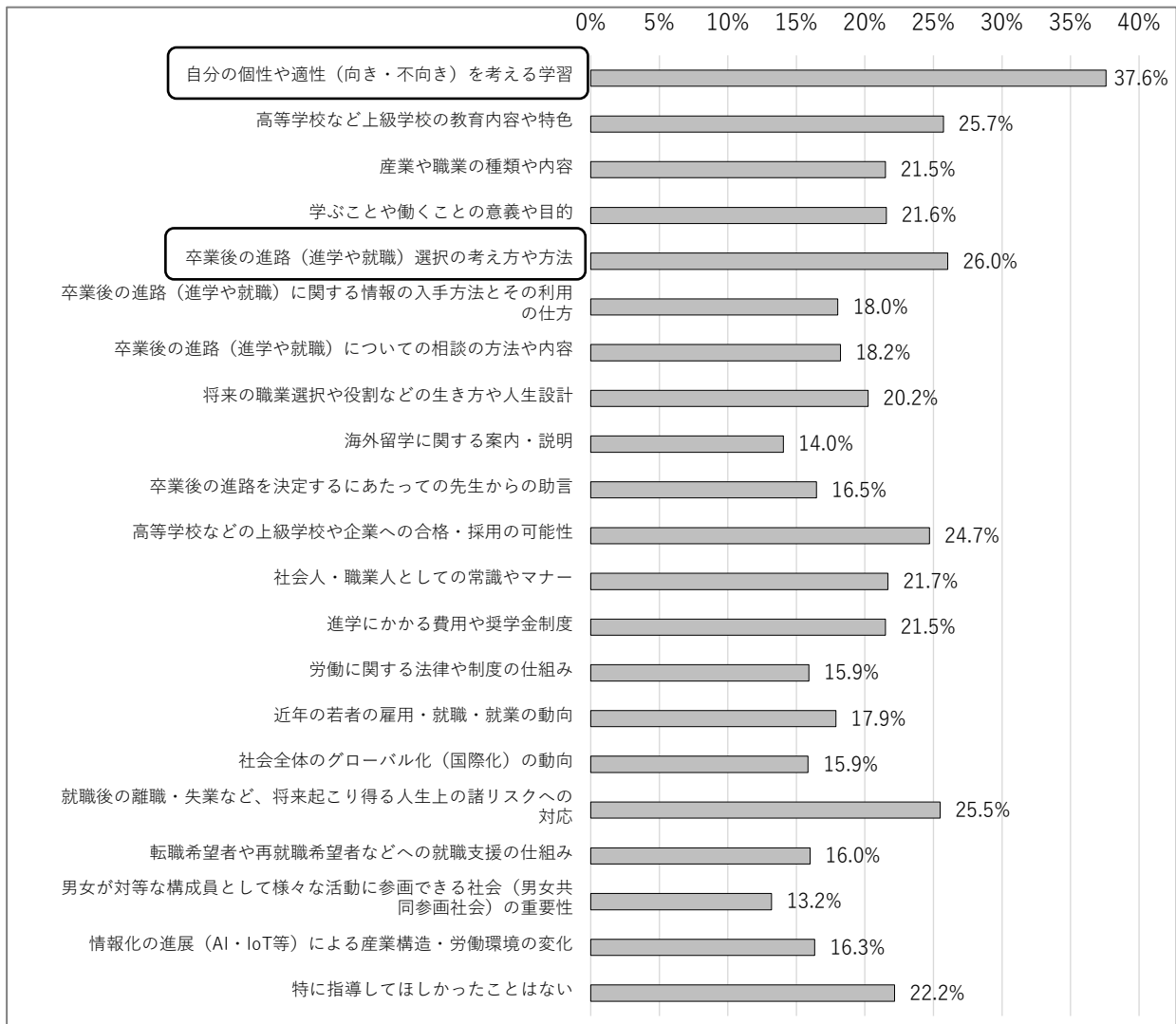
この点に関連して、図4に示したとおり、自分の将来の生き方や進路について考えるために指導してほしいことを尋ねた生徒調査では、「自分の個性や適性（向き・不向き）を考える学習」が37.6%で最上位となっており、次いで「卒業後の進路（進学や就職）選択の考え方や方法」が26.0%となっている*9。

こうした生徒側の希求に応えるためには生徒の適切な自己理解を促す必要があり、「キャリア・パスポート」はその際の有用なツールとなり得る。「キャリア・パスポート」の活用については、中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」（平成28年）で「（前略）教員が対話的に関わることで、自己評価に関する学習活動を深めていくことが重要」と指摘されていることから、学級活動を中心としながら各教科等との間を往還しつつ、自らの学習状況や自身の変容や成長の様子等に関する記録に対する教員からのフィードバックを行うなどの対話的な活用が重要であろう。

生徒にとっての身近で重要な他者である教員や保護者等との対話的な関わりの効果については、大人が成長を認めることで生徒の自己肯定感が高まること、「自分の良さ」についての客観的な後ろ盾となること、そして将来の進路を考える後押しになること等が期待される。

今回の調査結果によれば、教員によるフィードバックの不足のみならず、その他の活用についても低調な実態が見られた。生徒の自己理解や変容の自覚を促すような場面や時間を創出するなど、今後は生徒の自己評価と教員の生徒理解の相互作用を意識しながら多様な観点での活用が必要であろう。上記で指摘した研修機会の拡充と合わせて、学びのプロセスを振り返り、将来につなぐ「キャリア・パスポート」の活用の更なる工夫が求められる。

【図4】 将来の生き方や進路について考えるために指導してほしい内容（生徒調査）



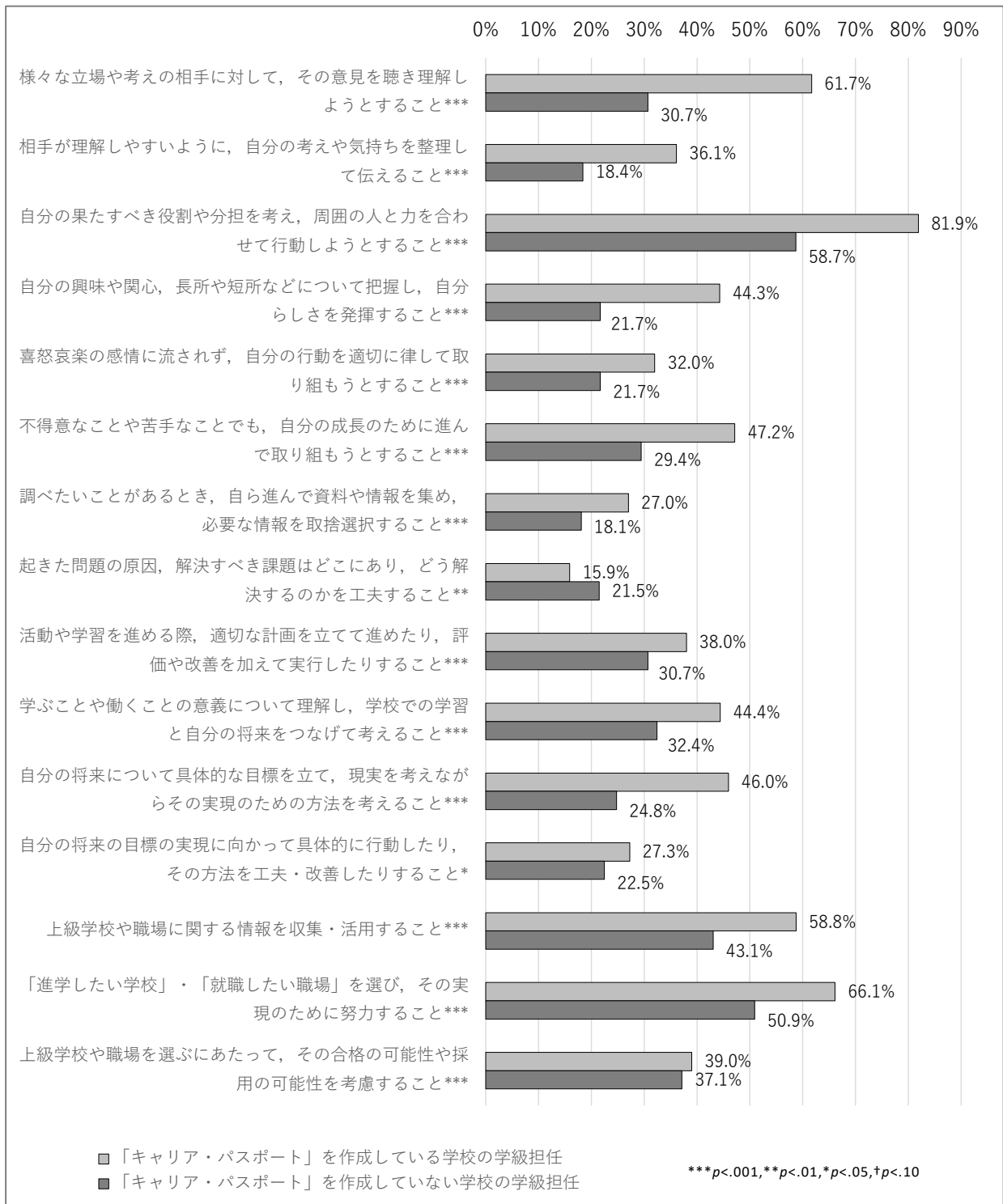
③ 「キャリア・パスポート」を作成している学校の学級担任は、生徒のキャリア発達を促すことを意識して指導を行っている（担任調査より）

令和元年度の「キャリア・パスポート」の様式・内容について尋ねた学校調査で、『「キャリア・パスポート」を作成していない』と回答した学校は55.8%であり、半数以上の中学校で作成されていなかった。

ここでは、「キャリア・パスポート」を作成している学校の学級担任とそうでない学級担任の比較を通して、キャリア発達を意識した指導内容や程度に違いが見られるかについて検討した。

図5は、「キャリア・パスポート」を作成している学校に勤務する学級担任と作成していない学校の学級担任について、担任している学級や所属している学年の指導内容について比較を行った結果である。

【図5】「キャリア・パスポート」の作成有無別に見た学級担任の指導内容（学校調査・学級担任調査）



※ここでは、「よく指導している」と回答した割合を取り上げて比較した。

※ χ^2 検定の結果、有意差が見られた項目は、「様々な立場や考えの相手に対して、その意見を聴き理解しようとする事」($\chi^2(2)=208.601,p<.001$),「相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを整理して伝える事」($\chi^2(2)=87.780,p<.001$),「自分の果たすべき役割や分担を考え、周囲の人と力を合わせて行動しようとする事」($\chi^2(2)=129.350,p<.001$),「自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、

自分らしさを発揮すること」($\chi^2(2)=129.181, p<.001$), 「喜怒哀楽の感情に流されず, 自分の行動を適切に律して取り組もうとすること」($\chi^2(2)=33.792, p<.001$), 「不得意なことや苦手なことでも, 自分の成長のために進んで取り組もうとすること」($\chi^2(2)=77.557, p<.001$), 「調べたいことがあるとき, 自ら進んで資料や情報を集め, 必要な情報を取捨選択すること」($\chi^2(2)=27.876, p<.001$), 「起きた問題の原因, 解決すべき課題はどこにあり, どう解決するのかを工夫すること」($\chi^2(2)=10.830, p<.01$), 「活動や学習を進める際, 適切な計画を立てて進めたり, 評価や改善を加えて実行したりすること」($\chi^2(2)=38.674, p<.001$), 「学ぶことや働くことの意義について理解し, 学校での学習と自分の将来をつなげて考えること」($\chi^2(2)=46.880, p<.001$), 「自分の将来について具体的な目標を立て, 現実を考えながらその実現のための方法を考えること」($\chi^2(2)=122.243, p<.001$), 「自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり, その方法を工夫・改善したりすること」($\chi^2(2)=7.188, p<.05$), 「上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること」($\chi^2(2)=72.813, p<.001$), 「『進学したい学校』・『就職したい職場』を選び, その実現のために努力すること」($\chi^2(2)=51.220, p<.001$), 「上級学校や職場を選ぶにあたって, その合格の可能性や採用の可能性を考慮すること」($\chi^2(2)=62.903, p<.001$)であった。

結果を見ると, 15項目中全てにおいて「キャリア・パスポート」を作成している学校の学級担任の方がキャリア発達を意識した指導の程度の割合が高く, 統計的にも有意な差が見られた。

とりわけ大きな差が見られた項目は, 「様々な立場や考えの相手に対して, その意見を聴き理解しようとすること」(31.0ポイント差), 「自分の果たすべき役割や分担を考え, 周囲の人と力を合わせて行動しようとすること」(23.2ポイント差), 「自分の興味や関心, 長所や短所などについて把握し, 自分らしさを発揮すること」(22.6ポイント差), 「自分の将来について具体的な目標を立て, 現実を考えながらその実現のための方法を考えること」(21.2ポイント差), 「不得意なことや苦手なことでも, 自分の成長のために進んで取り組もうとすること」(17.8ポイント差), であった。

また, 進学や就職に関する項目としては, 「上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること」(15.7ポイント差)に大きな差が見られた。

「キャリア・パスポート」を作成している学校の学級担任はキャリア発達を促すことを意識した指導を学級で実践しているという今回の調査結果から, 約半数以上の学校で未作成となっている現状の改善が必要である。

④「キャリア・パスポート」に「教科における学習の記録・振り返り」を記載して

いる学校の学級担任は, 生徒の成長等を感じている(学校調査, 担任調査より)

「キャリア・パスポート」に記載している事柄やとじ込んでいることの内容について尋ねた学校調査において, 「教科における学習の記録・振り返り」と回答した学校は僅か11.9%であり, 「自己の成長(がんばったこと)」(35.9%), 「事業所における体験活動(職場体験活動等)の記録・振り返り」(34.1%)と比べると, 学習に関する内容は記載されていない

実態が明らかとなった。

ここでは、「キャリア・パスポート」の中に「教科における学習の記録・振り返り」を記載している約1割の学校に勤める学級担任が、自分の担任している学級の生徒や保護者に対するキャリア教育の現状をどのように見ているのかについて検討した。

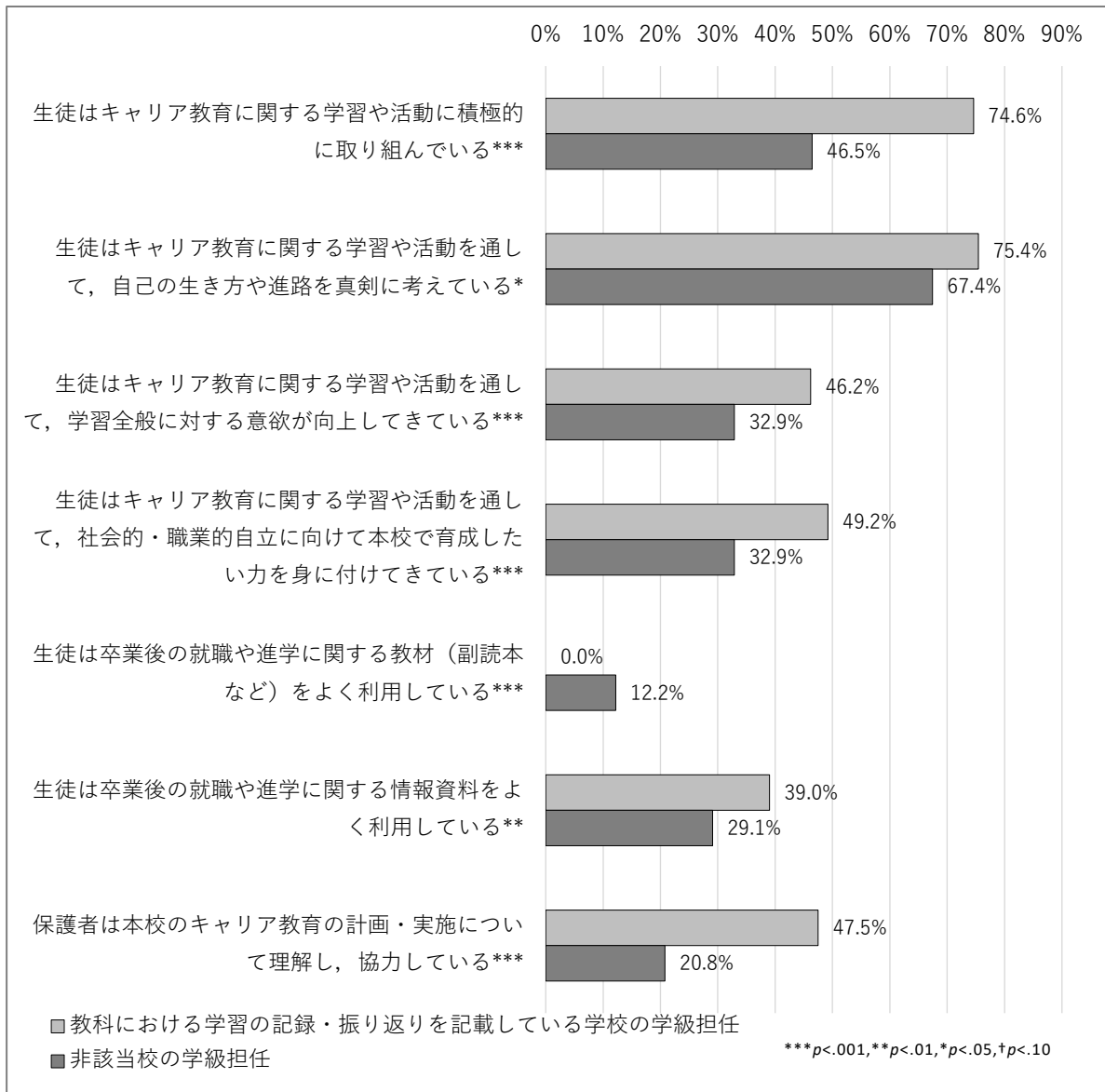
図6は、「教科における学習の記録・振り返り」を記載している学校の学級担任と記載していない学校の学級担任を比較する形で、担任している生徒や保護者に対するキャリア教育についての現状認識をグラフ化したものである。

結果を見ると、教科学習について記載している場合は、キャリア教育の計画・実施に関する学級の生徒や保護者の現状を肯定的に捉えていることが分かる。

顕著な差異が見られた項目としては、「生徒はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる」(28.1ポイント差)、「保護者は本校のキャリア教育の計画・実施について理解し、協力している」(26.7%)、「生徒はキャリア教育に関する学習や活動を通して、社会的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている」(16.3%)、「生徒はキャリア教育に関する学習や活動を通して、学習全般に関する意欲が向上してきている」(13.3%)であった。

以上の結果から、生徒が学校生活のあらゆる場面で学んだこと、とりわけ教科において学んだ事柄について、成績評定の記載のみならず自己のキャリア形成と結び付けて自ら記録・蓄積しながら、学級担任との相互的な関わりを通して適宜振り返りを行うことで、生徒自身の成長や変容を促進することが示唆される。

【図6】「キャリア・パスポート」の記載内容別に見た学級担任の現状認識（学校調査・担任調査より）



※ χ^2 検定の結果、有意差が見られた項目は、「生徒はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる」($\chi^2(1)=66.021, p < .001$)、「生徒はキャリア教育に関する学習や活動を通して、自己の生き方や進路を真剣に考えている」($\chi^2(1)=6.149a, p < .05$)、「生徒はキャリア教育に関する学習や活動を通して、学習全般に対する意欲が向上してきている」($\chi^2(1)=24.156, p < .001$)、「生徒はキャリア教育に関する学習や活動を通して、社会的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている」($\chi^2(1)=61.832, p < .001$)、「生徒は卒業後の就職や進学に関する教材（副読本など）をよく利用している」($\chi^2(1)=32.220, p < .001$)、「生徒は卒業後の就職や進学に関する情報資料をよく利用している」($\chi^2(1)=9.728, p < .01$)、「保護者は本校のキャリア教育の計画・実施について理解し、協力している」($\chi^2(1)=81.437, p < .001$)、「上記に特にあてはまるものはない」($\chi^2(1)=11.306, p < .001$)であった。

⑤学級担任が「キャリア・パスポート」を重要だと思っている場合は、学級の生徒が「基礎的・汎用的能力」を高く自己評価している（担任調査・担任調査より）

令和元年度調査における「キャリア・パスポート」の作成有無に関する回答を見ると、半数以上が作成していない（学校調査：問 15（1）、学級担任調査：問 10）。

しかし、「キャリア・パスポート」は、生徒が自らの学習状況を振り返りながらキャリア形成の見通しを立てるための有用な教材であり、今後の活用及び適切な使用が望まれる。

今回の調査において、担任する学級でキャリア教育を適切に行っていく上で今後どのようなことが重要であるかを尋ねた学級担任調査で、「『キャリア・パスポート』を活用すること」と回答した学級担任は 67.9%であった（「とても重要だと思う」と「ある程度重要だと思う」の合計）^{*10}。この結果は、担任の認識する重要性について尋ねた 9 項目の中で、最も低い割合であった。

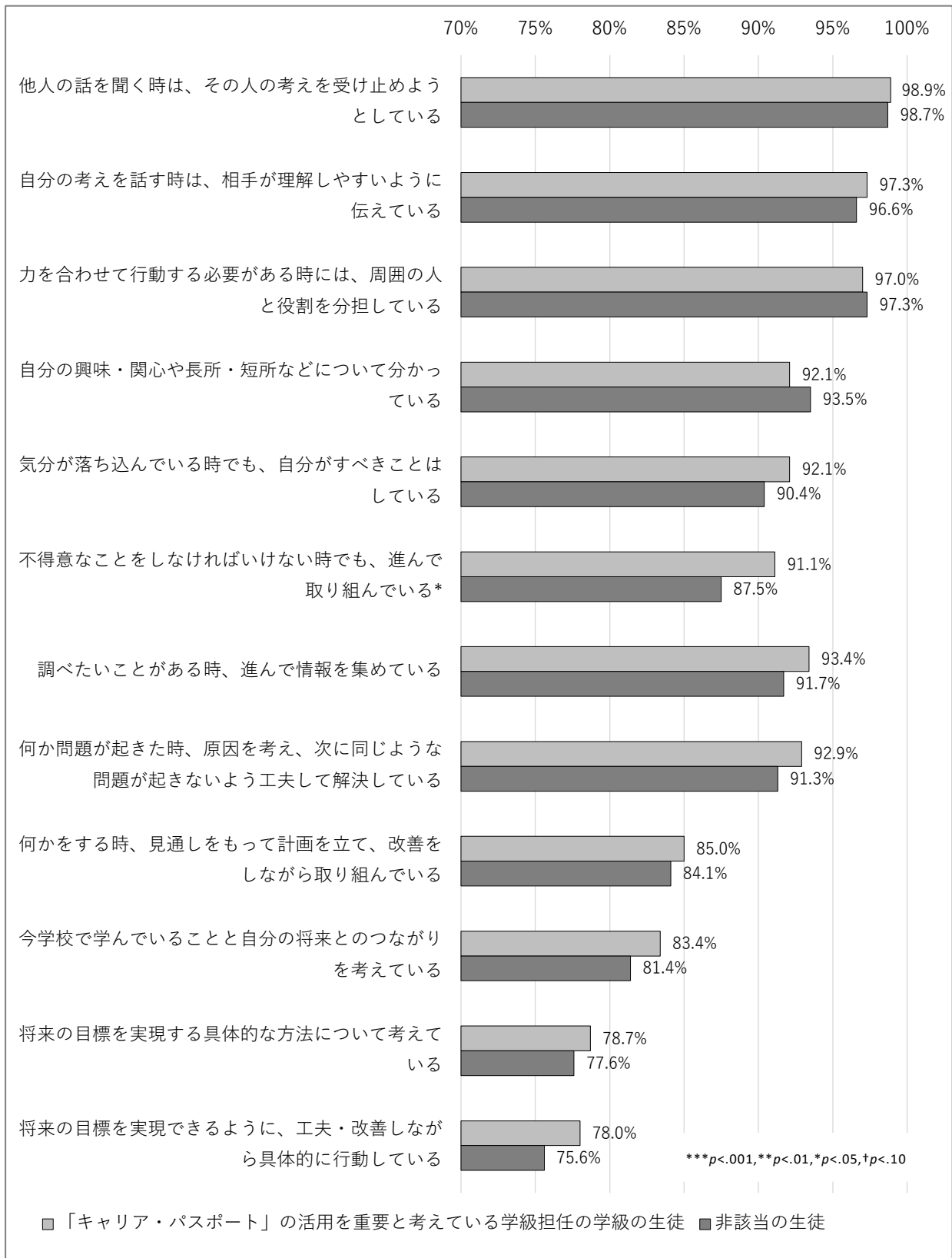
そこで、「キャリア・パスポート」の重要性を認識している担任とそうでない担任の学級の生徒間に、キャリア発達にかかわる意識や行動の差異が見られるのかについて比較した。なお、分析する際には、「とても重要だと思う」又は「ある程度重要だと思う」と回答した学級担任と「あまり重要だと思わない」又は「まったく重要だと思わない」と回答した学級担任との間で比較を行った。

図 7 は、「キャリア・パスポート」の重要性を認識している学級担任の学級の生徒とそうでない学級の生徒について、日常生活の様子や行動（「基礎的・汎用的能力」）に関する自己評価を比較した結果である。結果を見ると、12 項目中 10 項目において、重要性を認識している担任の学級生徒の方が、自身の日常生活や行動について肯定的に評価していた。

大きな差とは言えないものの、相対的に差が見られた主な項目としては、「不得意なことをしなければいけない時でも、進んで取り組んでいる」（3.6 ポイント差）、「将来の目標を実現できるように、工夫・改善しながら具体的に行動している」（2.4 ポイント差）、「今学校で学んでいることと将来とのつながりを考えている」（2.0 ポイント差）であった。

今後は「キャリア・パスポート」の作成・活用が期待されているが、自らの学習状況やキャリア形成に関する自己評価活動に資する有用なツールとなるためにも、教員がその重要性を認めて生徒と対話的に関わりながら活用することが重要である。

【図7】「キャリア・パスポート」に対する重要度の認識別に見た生徒の日常生活の様子（「基礎的・汎用的能力」）の自己評価（担任調査・生徒調査）



※ここでは、「いつもそうしている」と「時々そうしている」と回答した合計の割合を比較した。

※ χ^2 検定の結果、有意差が見られた項目は、「不得意なことをしなければいけない時でも、進んで取り組ん

でいる」($\chi^2(2)=6.353, p<.05$)であった。

⑥今後の方向性

令和元年度の段階で、半数以上の中学校が「キャリア・パスポート」の作成をしていない。それに伴い、わずか1割程度しか活用計画を立てておらず^{*11}、事後指導での活用も1割程度の学校にとどまっている^{*12}。こうした現状については、学校調査で改善の優先項目に挙げられており、「キャリア・パスポート」の作成、計画、実践の必要性が管理職レベルで認識されていることが明らかになった。

ここでは今後の方向性として2点を挙げたい。

一つ目は、研修機会の創出・提供である。学級担任調査においては重要性の認識率は約7割であり、他の実践項目との相対比較では低いものの、「キャリア・パスポート」の活用は担任レベルでも重視されつつある。また、「キャリア・パスポート」の重要性を認識している担任の学級に所属する生徒は、自身の「基礎的・汎用的能力」を高く自己評価している傾向が見られたことから、キャリア発達を促進する上での有用性が広く認知されることが望まれる。しかし、こうした重要性の認識の次の段階である適切な活用のための研修会に参加している割合は、校内外ともに2%程度と低調である^{*13}。これは、「キャリア・パスポート」に関する研修機会が少ないことも起因していると推測されるため、今後は参加機会の創出や提供が各学校や設置者において重要となるであろう。その際はより参加しやすい環境を整えることも必要である。

二つ目は、適切な記載内容や様式及び活用法を検討する必要性である。今回調査の結果によれば、現時点における記載は1割程度であるものの、「教科における学習の記録・振り返り」とじ込んでいる場合は、学習意欲の向上や育成したい力を身に付けてきていることを学級担任が実感しており、かつ、保護者の理解と協力を得ていると感じていた。この結果は、「キャリア・パスポート」に記載した学習の記録を自らのキャリアと関連付けながら振り返ることで、各教科の中にある自分のキャリア形成にとっての価値や意義を自ら見いだす可能性を示唆していると考えられるだろう。キャリア教育で育成を目指す力を意識した多面的な記録が必要であるが、自校のキャリア教育目標や実践に照らしながら「キャリア・パスポート」で記載する内容の検討が重要となる。また、教員のフィードバックによる対話的な活用も生徒の自己評価や将来展望の深化を促進すると考えられるゆえ、活用法に関する検討も今後は必要である。

参考：第一次報告書における参照データ

* 1	P126	中学校・学校調査	問 14
* 2	P144	中学校・学級担任調査	問 13
* 3	P113	中学校・学校調査	問 7
* 4	P114	中学校・学校調査	問 8
* 5	P132	中学校・学級担任調査	問 2 (2)
* 6	P133	中学校・学級担任調査	問 2 (3)
* 7	P106	中学校・学校調査	問 4 (1) B
* 8	P141	中学校・学級担任調査	問 10
* 9	P165	中学校・生徒調査	問 14
* 10	P144	中学校・学級担任調査	問 13
* 11	P109	中学校・学校調査	問 4 (3)
* 12	P124	中学校・学校調査	問 12 (1)
* 13	P132・133	中学校・学級担任調査	問 2 (2) (3)

3. 高等学校調査結果の分析

(1) 高等学校調査で用いた調査票

高等学校調査で用いた調査票は、①キャリア教育の実施状況と管理職の意識調査（学校調査）、②ホームルーム担任の意識調査（ホームルーム担任調査）、③在校生の意識調査（生徒調査）の三つである。

(2) テーマ1 キャリア教育によるカリキュラム・マネジメントの効果

○全体計画における「教科横断的、学年縦断的な取組」や「発達段階に応じたキャリア教育の実践」の重視は担任の指導の全般的促進に影響していると考えられる。

- ・キャリア教育の全体計画や全体目標は多くの学校で立てられている。
- ・担任は具体的な目標や、各教員の協力の必要性を感じている。
- ・キャリア教育の取組に対して評価や評価による取組改善を行っている学校は少ない。
- ・全体計画の策定や見直し・改善を進める学校では、担任による「人間関係形成・社会関係形成能力」「自己理解・自己管理能力」の育成指導が促進されている。
- ・全体計画で「教科横断的な取組や、学年縦断的な取組の反映」や「発達の段階に応じたキャリア教育の実践」を重視した学校では、担任の指導が全般的に促進されている。
- ・担任の指導と生徒のレリバンス意識（現在の行動や学びの意義等について、将来とのつながりの観点から考える意識）には関連がうかがえる。

1) 第一次報告書に基づく再分析

①キャリア教育によるカリキュラム・マネジメントの展開について

『高等学校学習指導要領（平成30年告示）』は総則にカリキュラム・マネジメントについて「各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと」と明記している。

また『高等学校学習指導要領（平成30年告示）』「キャリア教育の充実」には「特別活動を要としつつ各教科・科目などの特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」「学校の教育活動全体を通じ、組織的かつ計画的な進路指導を行うこと」と明記されている。

一方、『高等学校学習指導要領（平成30年告示）』「総合的な探究の時間」には、「改定の要点」の「目標の改善」として「自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成することを目指す」「（総合的な探究の

時間が) 教科・科目等横断的なカリキュラム・マネジメントの軸となるよう」と明記されている。

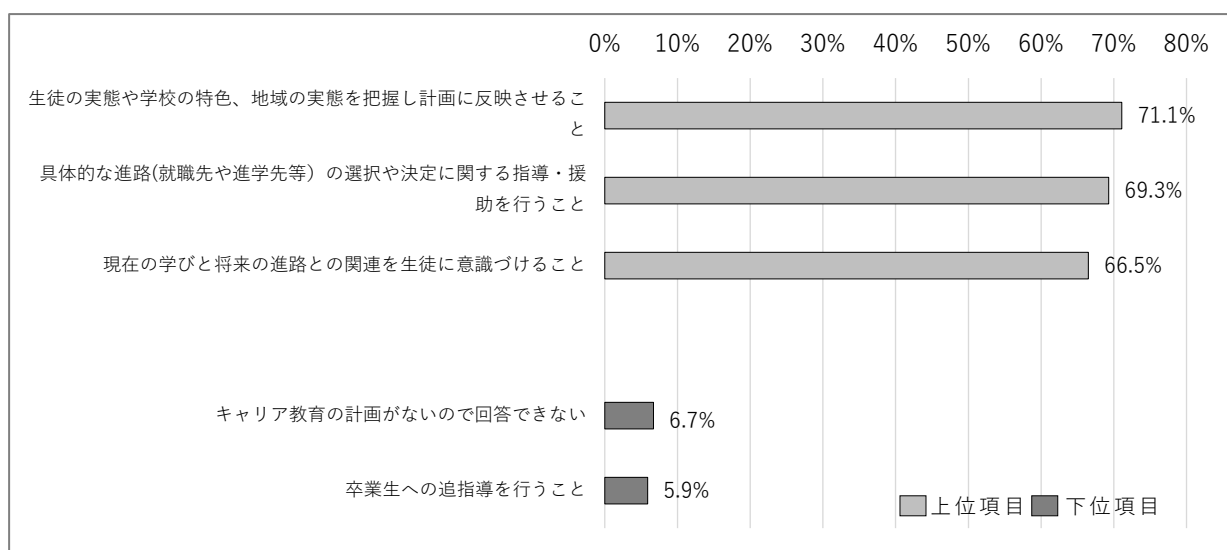
キャリア教育は「生徒が自らの在り方生き方を考え主体的に進路を選択することができる」ことを目指しており、(教科・科目にとどまらず) 学校の教育活動全体を通じて行うものである。こうしたことからキャリア教育は特別活動を要としつつ、教科・科目はもちろん、総合的な探究の時間も含む教育活動全体を俯瞰(ふかん)しカリキュラム・マネジメントに取り組むことが必要不可欠となる。

②キャリア教育によるカリキュラム・マネジメントの状況について

高等学校におけるキャリア教育によるカリキュラム・マネジメントの状況を見ると、「キャリア教育の全体計画がある」学校は 79.9%であり、全体計画の中に「キャリア教育の全体目標(学校全体で身に付けさせたい資質・能力)」を記している学校は 79.6%、その中で、「キャリア教育の学校全体(教科横断, 学年縦断)での具体的な取組」を記している学校は 64.1%である*¹。またキャリア教育の計画を立てる上で、最も重視された事柄は「生徒の実態や学校の特色, 地域の実態を把握し計画に反映させること」(図1)*²である。こうしたことから、多くの学校でキャリア教育を考えるときに学校全体の取組が意識されている。

またキャリア教育の計画について「参照することはない」「学校にキャリア教育に関する計画がない」と答えた担任は約 15%であり、キャリア教育の計画については何らかの形で担任が活用していることが分かる*³。こうしたことから、キャリア教育がカリキュラム・マネジメント展開の場面になっていることが分かる。

【図1】キャリア教育の計画を立てるうえで重視した事柄(上位3項目と下位2項目)

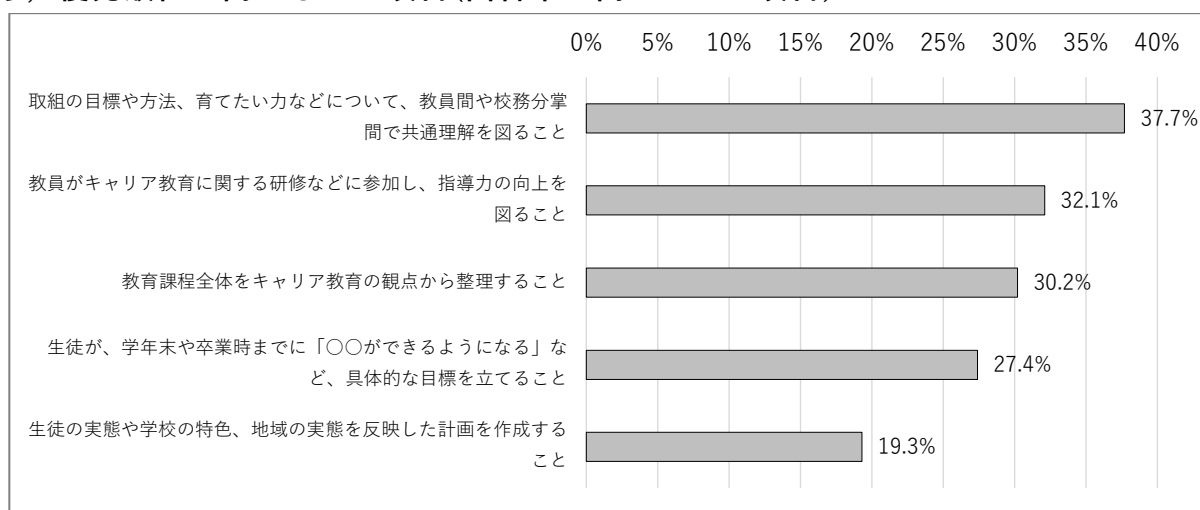


③キャリア教育の評価が課題

キャリア教育がカリキュラム・マネジメント展開の場面になっているが、見逃せない課題がある。「キャリア教育の取組に対して評価を行っている」に「あてはまる」と答えたのが、学校調査で32.0%、担任調査で10.7%、さらに、「キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている」に「そのとおりである」と答えたのは、学校調査で28.8%、担任調査で7.9%という低い数字にとどまっているのである。取組の評価・改善はカリキュラム・マネジメントにおいて重要な一つの側面であるが、この過程を通じて、目標や現状、育てたい力が共有される*⁴*⁵。

キャリア教育を適切に行っていく上で改善しなければならないこととして最も多かったのは「取組の目標や方法、育てたい力などについて、教員間や校務分掌間で共通理解を図ること」(図2)*⁶であり、以下「教員がキャリア教育に関する研修などに参加し、指導力の向上を図ること」「教育課程全体をキャリア教育の観点から整理すること」と続く。

【図2】キャリア教育を適切に行っていくうえで、改善しなければならないことのうち、優先順位が高いもの3項目(回答率の高かった5項目)



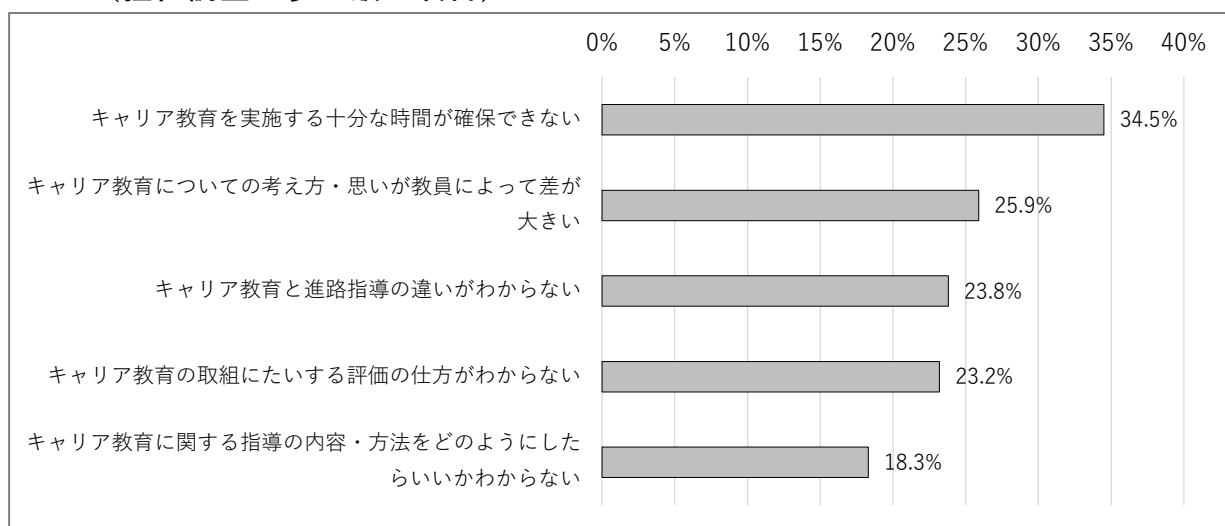
キャリア教育の計画を立てる上で重視した事柄として「生徒が学年末や卒業時まで『〇〇ができるようになる』など、具体的な目標を立てること」と答えた割合は24.6%で18項目中12番目、「目標に準拠した評価を実施すること」と答えた割合は9.7%で18項目中16番目と、目標設定や評価については計画段階から余り意識されていないことが分かる*⁷。

共通理解を図るためにも、取組を評価し改善するというプロセスが重要なのではないだろうか。

④今後の方向性

ホームルーム担任調査では、「キャリア教育目標を人に説明できる」はわずか 6.7% であり*⁸、キャリア教育の目標の浸透という点では課題が残っている。このことは、キャリア教育を行っていく上で困っていることとして多いのが「キャリア教育を実施する十分な時間が確保できない」34.5%の次に「キャリア教育についての考え方・思いが教員によって差が大きい」25.9%、「キャリア教育と進路指導の違いがわからない」23.8%と続くことから分かる（図3）*⁹。先述したように、そもそも計画を立案する時点で、具体的な目標を立てることや、目標に準拠した評価を実施することは余り重視されていない。この現実が、個人の思いの差がそのまま取組の差になり、そうしたことから何がキャリア教育なのかより分からなくなるという現状につながっているのではないだろうか。

【図3】ホームルームでキャリア教育を行っていくうえで困ったり悩んだりしていること（担任調査・多い順5項目）



ホームルームでキャリア教育を適切に行っていく上で今後重要だと思うことについて、「とても重要」「ある程度重要」の合計を高い順に並べると「生徒が、学年末や卒業時まで『〇〇ができるようになる』など具体的な目標を立てること」90.2%、「キャリア教育担当者（主任等）に各教員が協力すること」89.8%と続くことから、生徒に近い立場の担任も目標の共有を求めていることが分かる*¹⁰。

平成25年に報告された、キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査の第2次分析で今後の方向性としてキャリア教育における評価の重要性が書かれ、「生徒の成長や変容に関する評価」と「教育活動としてのキャリア教育全体の評価」の必要性が指摘されている。新学習指導要領においてキャリア教育は教育活動全体を俯瞰し、カリキュラム・マネジメントに取り組むことが必要不可欠であることを考えると、平成25年の指摘はますます重要になっている。

また、キャリア教育に関する研修の実態を見ると、「上級学校の理解を深める研修」

が34.5%であり、その次は「研修を実施していない」29.5%である。「キャリア教育の観点からの教科・科目等の授業改善に関する研修」は20.3%にとどまっており、教員への研修体制が十分ではない*11。

今回の調査結果から、学校調査・担任調査のいずれからも教員が「取組の目標や方法、育てたい力などを教員間で共有すること」の重要性を感じていることが分かり、学校全体のことを考えて取組を進めることの重要性については広く認識されていることが分かる。一方で「キャリア教育を実施する時間がない」という悩みが多く、「キャリア教育の研修が十分に行われていない」実態もある。キャリア教育の評価が不十分ということも明らかになっている。

キャリア教育は特別な時間ではない。例えば教員研修のテーマとして、「キャリア教育の視点を取り入れた授業改善」や「キャリア教育によるカリキュラム・マネジメント」を取り入れるのはどうだろうか。このことにより研修を通じて教育目標を共有し、授業にキャリア教育の視点を取り入れることができる。これはキャリア教育に取り組む時間の確保にもつながり、現在の課題を解決することになる。

キャリア教育を核としてカリキュラム・マネジメントを展開し、チーム学校でキャリア教育を推進することが今後ますます重要である。

2) 複数調査に基づくクロス分析

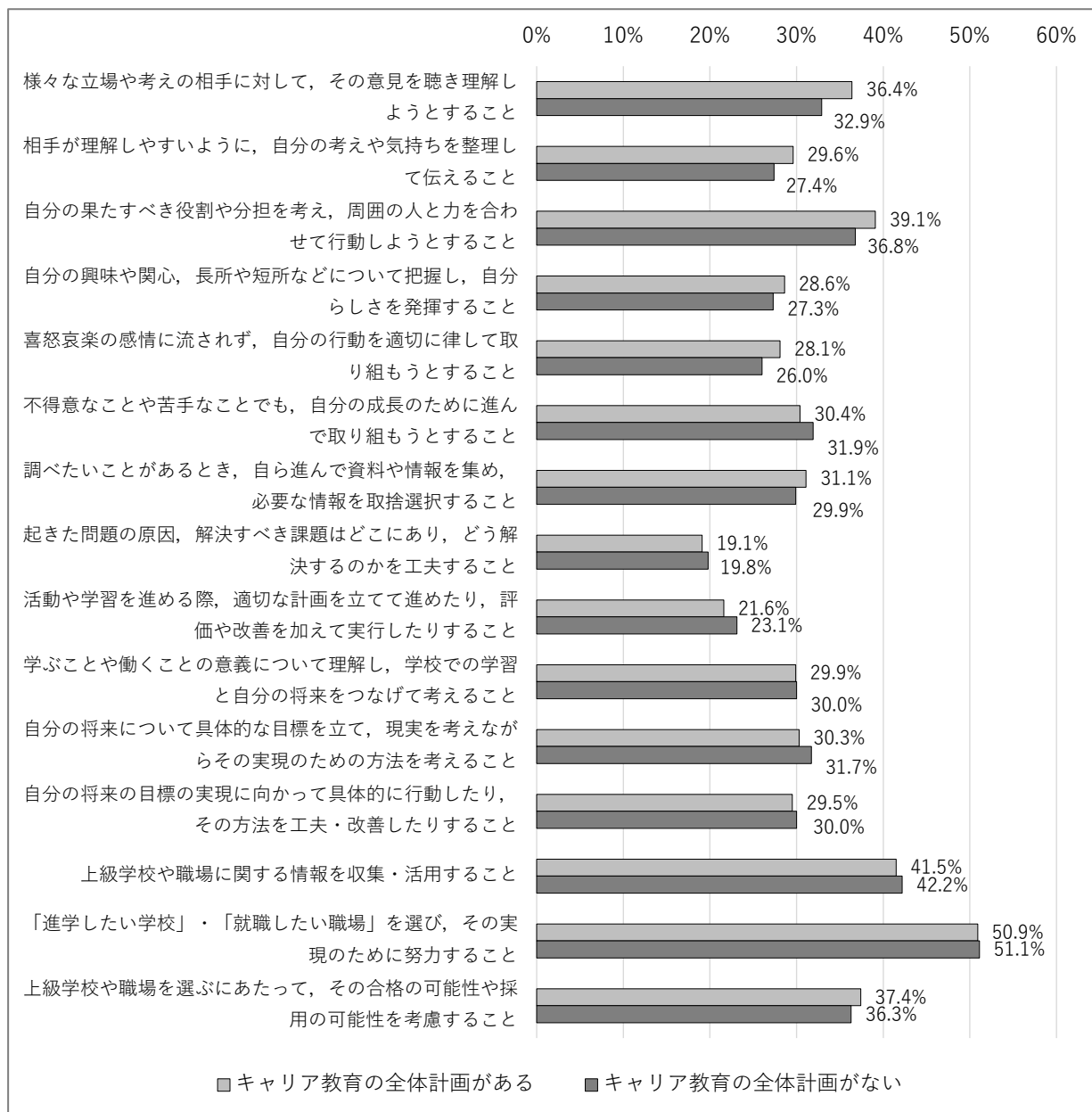
キャリア教育を推進する上では、各学校のキャリア教育の全体的な方針や計画を内外に示す全体計画や、それに基づく年間指導計画の策定が重要な役割を果たす。

そこで以下では、カリキュラム・マネジメントの視点から、特に全体計画や年間指導計画に着目しながら、「キャリア教育に取り組む学校とそうではない学校とで、担任の指導がどのように異なるのか」について見ていくとともに、担任の指導と生徒のキャリア意識の関連にも目を向けてみたい。なお本稿では、基礎的・汎用的能力に関わるような日常生活の様子を「キャリア意識」として捉えることとする。

①全体計画の策定や見直し・改善と担任の指導

担任調査にて「あなたのホームルームあるいは学年でキャリア教育を行ううえで、どの程度指導しているか」(問9)を尋ね、各項目に「よく指導している」と回答した割合を、学校調査で尋ねた「キャリア教育の全体計画の有無」(問6のA)との関連で示したものが図4である。

【図4】全体計画の有無による担任の指導状況（学校調査，担任調査）



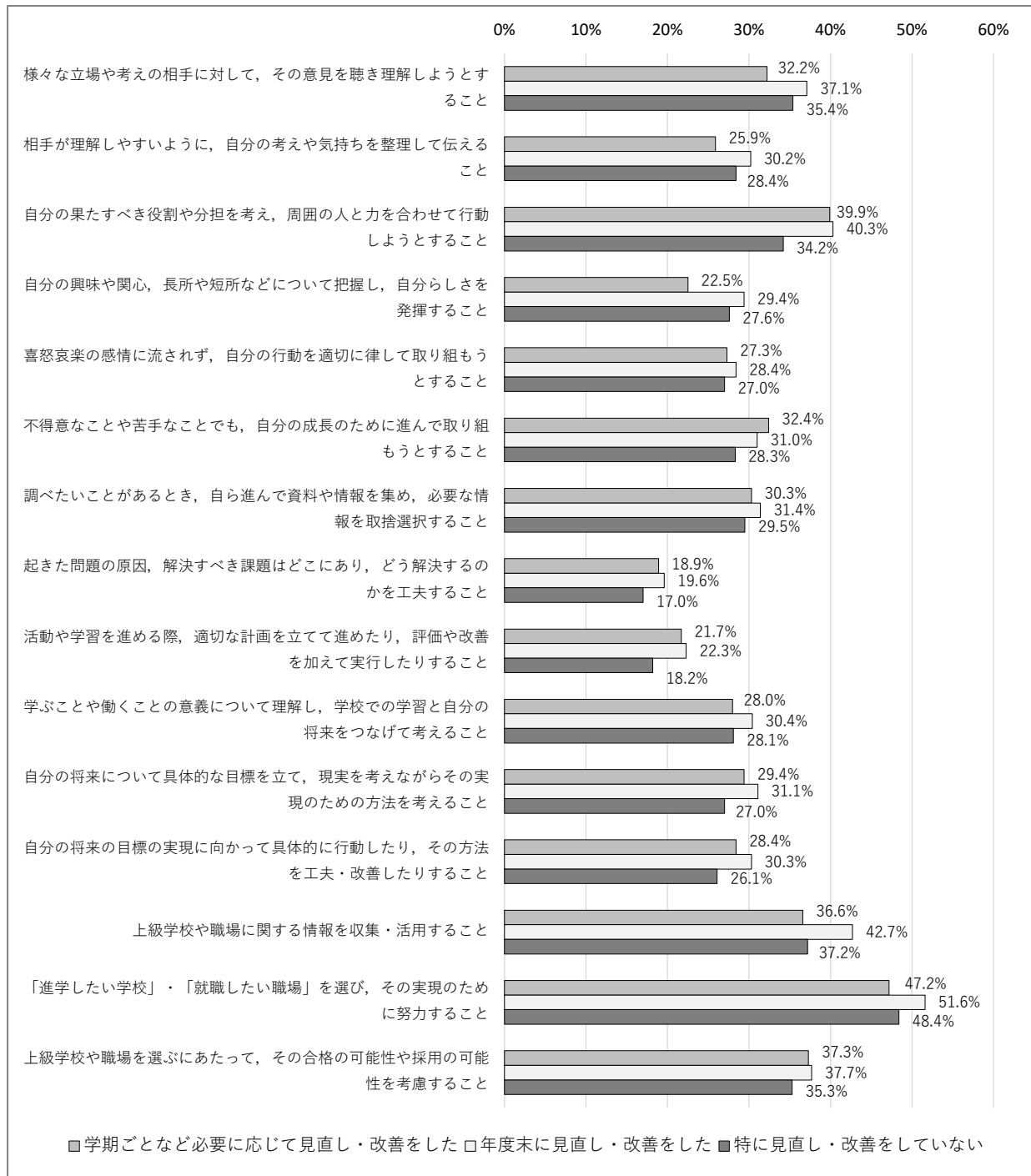
※回答は「よく指導している」「ある程度指導している」「あまり指導していない」「まったく指導していない」から一つを選択する形式であったが，図では「よく指導している」という回答の割合のみを示した。

※ χ^2 検定の結果，有意差が見られた項目はなかった。

有意差は見られないものの，「様々な立場や考えの相手に対して，その意見を聴き理解しようとする事」(3.5ポイント差)，「自分の果たすべき役割や分担を考え，周囲の人と力を合わせて行動しようとする事」(2.3ポイント差)，「相手が理解しやすいように，自分の考えや気持ちを整理して伝えること」(2.2ポイント差)，「喜怒哀楽の感情に流されず，自分の行動を適切に律して取り組もうとする事」(2.1ポイント差)など，基礎的・汎用的能力を構成する「人間関係形成・社会関係形成能力」「自己理解・自己管理能力」を育成するような指導では，全体計画がある学校の担任の方が，全般的に「よく指導している」割合が高い傾向が見られた

同様に、担任調査にて「あなたのホームルームあるいは学年でキャリア教育を行う上で、どの程度指導しているか」（問9）を尋ね、各項目に「よく指導している」と回答した割合を、学校調査で尋ねた「キャリア教育の全体計画の見直し・改善の程度」（問6のC）との関連で示したものが図5である。

【図5】全体計画の見直し・改善による担任の指導状況（学校調査、担任調査）



※回答は「よく指導している」「ある程度指導している」「あまり指導していない」「まったく指導していない」から1つを選択する形式であったが、図では「よく指導している」という回答の割合のみを示した。

※ χ^2 検定の結果、有意差が見られた項目はなかった。

有意差は見られないものの、全体計画の見直し・改善をしている学校、特に「年度末に見直し・改善をした」学校の担任が、全般的に「よく指導している」割合が高い傾向が見られた。

②全体計画で重視した内容と担任の指導

ところで全体計画で重視した内容と担任の指導には、どのような関連が見られるのだろうか。

学校調査にて尋ねた「キャリア教育の全体計画を立てるうえで、重視した事柄（問7）」のうち、担任調査にて尋ねた「あなたのホームルームあるいは学年でキャリア教育を行ううえで、どの程度指導しているか（問9）」との関連で特筆すべき結果が見られた二つの事柄について、各項目の指導状況の回答割合を示したものが表1及び表2である。重視した学校とそうでない学校を比較するために、「よく指導している」については両者の回答割合の差も示している。

まず、「教科横断的な取組や、学年縦断的な取組を計画に反映させること」を重視した学校における担任の指導状況について示したものが表1である。

【表1】全体計画で「教科横断的な取組や、学年縦断的な取組の反映」を重視した学校における担任の指導状況（学校調査、担任調査）

	よく指導している	ある程度指導している	あまり指導していない	まったく指導していない
様々な立場や考えの相手に対して、その意見を聞き理解しようとする事	37.9%(+2.7)	56.9%	5.2%	0.0%
相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを整理して伝える事	31.9%(+3.4)	58.2%	9.6%	0.3%
自分の果たすべき役割や分担を考え、周囲の人と力を合わせて行動しようとする事*	41.0%(+3.1)	54.9%	4.0%	0.0%
自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、自分らしさを発揮すること	29.2%(+0.9)	58.8%	11.9%	0.1%
喜怒哀楽の感情に流されず、自分の行動を適切に律して取り組もうとする事	27.6%(-0.1)	59.2%	12.9%	0.4%
不得意なことや苦手なことでも、自分の成長のために進んで取り組もうとする事*	31.0%(+0.2)	58.0%	10.9%	0.0%
調べたいことがあるとき、自ら進んで資料や情報を集め、必要な情報を取捨選択すること**	34.5%(+5.0)	53.4%	11.9%	0.3%
起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するのかを工夫すること**	22.3%(+4.0)	57.4%	19.5%	0.8%
活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること	21.9%(±0.0)	56.5%	20.5%	1.0%
学ぶことや働くことの意義について理解し、学校での学習と自分の将来をつなげて考えること	29.8%(-0.3)	57.4%	12.4%	0.4%
自分の将来について具体的な目標を立て、現実を考えながらその実現のための方法を考えること	32.2%(+2.1)	58.7%	8.8%	0.4%
自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫・改善したりすること*	33.0%(+4.5)	56.9%	9.5%	0.6%
上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること*	44.8%(+4.2)	47.8%	6.8%	0.7%
「進学したい学校」・「就職したい職場」を選び、その実現のために努力すること*	52.6%(+2.4)	44.4%	2.8%	0.2%
上級学校や職場を選ぶにあたって、その合格の可能性や採用の可能性を考慮すること*	38.6%(+2.0)	53.0%	8.0%	0.4%

** p<.01 * p<.05

※（ ）内の数値は、「重視した学校の回答割合－そうでない学校の回答割合」を示したものである。

※指導状況について χ^2 検定を行った結果、有意差が見られたのは、「自分の果たすべき役割や分担を考え、周囲の人と力を合わせて行動しようとする事」($\chi^2(3)=10.926, p<.05$)、「不得意なことや苦手なことでも、自分の成長のために進んで取り組もうとする事」($\chi^2(3)=8.267, p<.05$)、「調べたいことがあるとき、自ら進んで資料や情報を集め、必要な情報を取捨選択すること」($\chi^2(3)=11.773, p<.01$)、「起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するのかを工夫すること」($\chi^2(3)=14.109, p<.01$)、「自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫・改善したりすること」($\chi^2(3)=9.896, p<.05$)、「上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること」($\chi^2(3)=8.399, p<.05$)、「進学したい学校」・「就職したい職場」を選び、その実現の

ために努力すること」($\chi^2(3)=9.047, p<.05$), 「上級学校や職場を選ぶにあたって, その合格の可能性や採用の可能性を考慮すること」($\chi^2(3)9.793, p<.05$)であった。

全体計画で「教科横断的な取組や, 学年縦断的な取組の反映」を重視した学校の担任は「よく指導している」あるいは「ある程度指導している」の回答割合が高く, いずれの項目でも8割程度以上に及んでいる。

また担任の指導状況の有意差が示されたすべての項目において, 「教科横断的な取組や, 学年縦断的な取組の反映」を重視した学校の担任の方が「よく指導している」の回答割合が高い結果となった。中でも「調べたいことがあるとき, 自ら進んで資料や情報を集め, 必要な情報を取捨選択すること」(5.0ポイント差), 「自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり, その方法を工夫・改善したりすること」(4.5ポイント差)に差が見られる。

続いて, 「発達の段階に応じたキャリア教育の実践が行われるようにすること」を重視した学校における担任の指導状況について示したものが表2である。

【表2】全体計画で「発達の段階に応じたキャリア教育の実践」を重視した学校における担任の指導状況（学校調査, 担任調査）

	よく指導している	ある程度指導している	あまり指導していない	まったく指導していない
様々な立場や考えの相手に対して, その意見を聞き理解しようとする	37.9%(+3.6)	56.6%	5.2%	0.3%
相手が理解しやすいように, 自分の考えや気持ちを整理して伝える	30.5%(+2.0)	59.5%	9.4%	0.6%
自分の果たすべき役割や分担を考え, 周囲の人と力を合わせて行動しようとする	40.3%(+2.8)	54.4%	4.9%	0.4%
自分の興味や関心, 長所や短所などについて把握し, 自分らしさを発揮すること	29.8%(+2.3)	58.7%	11.0%	0.5%
喜怒哀楽の感情に流されず, 自分の行動を適切に律して取り組もうとする	28.6%(+1.7)	58.5%	12.2%	0.7%
不得意なことや苦手なことでも, 自分の成長のために進んで取り組もうとする	31.4%(+1.0)	59.0%	9.3%	0.3%
調べたいことがあるとき, 自ら進んで資料や情報を集め, 必要な情報を取捨選択すること	32.1%(+2.4)	54.1%	13.3%	0.4%
起きた問題の原因, 解決すべき課題はどこにあり, どう解決するのかを工夫すること	20.3%(+1.8)	56.3%	22.3%	1.2%
活動や学習を進める際, 適切な計画を立てて進めたり, 評価や改善を加えて実行したりすること	22.6%(+1.3)	55.2%	21.1%	1.1%
学ぶことや働くことの意義について理解し, 学校での学習と自分の将来をつなげて考える	30.9%(+1.7)	56.1%	12.2%	0.8%
自分の将来について具体的な目標を立て, 現実を考えながらその実現のための方法を考える	31.9%(+2.3)	58.1%	9.3%	0.7%
自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり, その方法を工夫・改善したりすること	31.6%(+3.6)	57.0%	10.9%	0.5%
上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること**	44.0%(+4.2)	48.5%	6.9%	0.7%
「進学したい学校」・「就職したい職場」を選び, その実現のために努力すること	51.9%(+1.9)	44.3%	3.4%	0.4%
上級学校や職場を選ぶにあたって, その合格の可能性や採用の可能性を考慮すること	38.8%(+3.0)	51.5%	8.8%	0.9%

** p<.01

※ ()内の数値は, 「重視した学校の回答割合－そうでない学校の回答割合」を示したものである。

※指導状況について χ^2 検定を行った結果, 有意差が見られたのは, 「上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること」($\chi^2(3)=13.348, p<.01$)のみであった。

全体計画で「発達の段階に応じたキャリア教育の実践」を重視した学校の担任は, 全般的に「よく指導している」あるいは「ある程度指導している」の回答割合が高く, 大方の項目で8割以上に及んでいる。

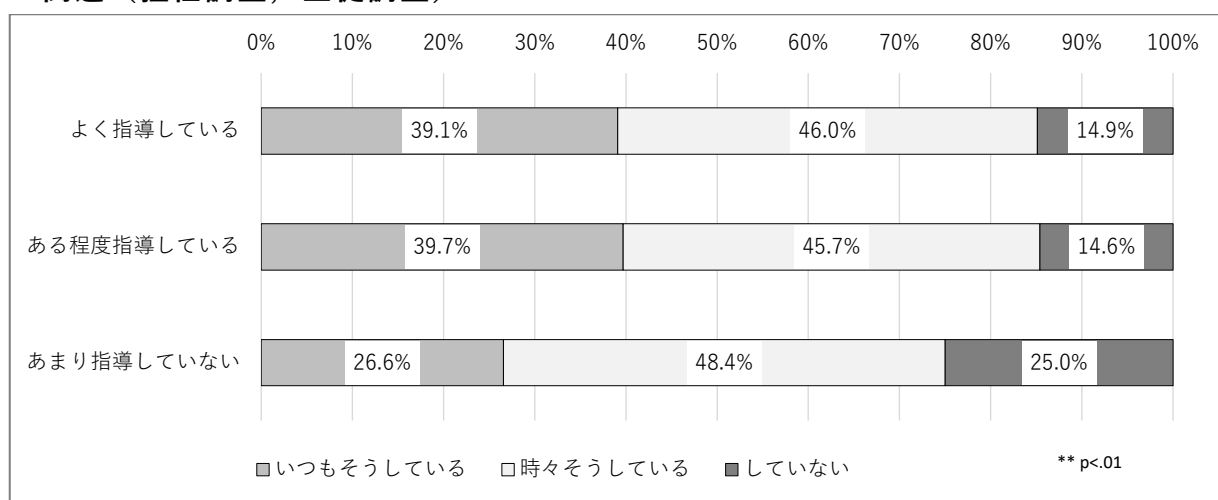
また担任の指導状況の有意差が示された「上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること」では, 「発達の段階に応じたキャリア教育の実践」を重視した学校の担任の方が「よく指導している」の回答割合が4.2ポイント高い結果となった。

③担任の指導と生徒のキャリア意識

最後に、担任の指導と生徒のキャリア意識の関連にも目を向けてみたい。生徒調査にて尋ねた「あなたの日常生活（授業中や放課後、家庭での生活などすべてを含む）の様子を振り返った時にあてはまること」（問10）のうち、担任調査にて尋ねた「あなたのホームルームあるいは学年でキャリア教育を行ううえで、どの程度指導しているか」（問9）との関連で特筆すべき結果について、具体的に示したものが図6及び図7である。

まず、担任による「相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを整理して伝えること」の指導と、生徒の「今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えている」という意識について示したものが図6である。

【図6】「相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを整理して伝えること」の指導と「今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えている」意識の関連（担任調査，生徒調査）



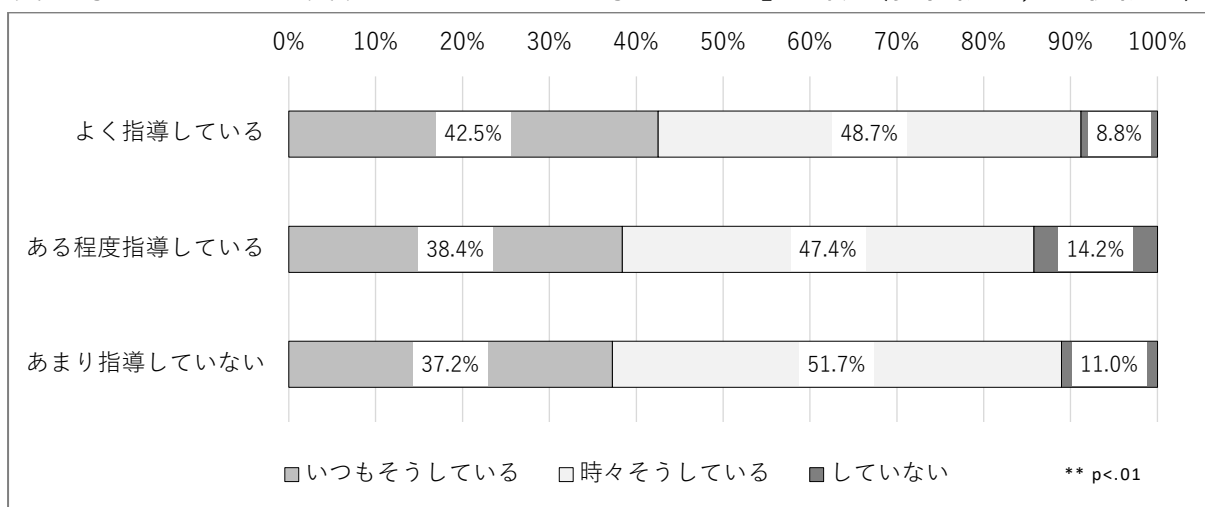
※担任調査の回答は「よく指導している」「ある程度指導している」「あまり指導していない」「まったく指導していない」から1つを選択する形式であったが、「まったく指導していない」の回答はなかったため、図には含めていない。

※ χ^2 検定の結果、 $\chi^2(4)=13.747, p<.01$ であった。

「いつもそうしている」「していない」の回答割合からは、「相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを整理して伝えること」を「よく指導している」「ある程度指導している」担任のクラスの生徒の方が、「今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えている」傾向が明らかに見られる。このことから、「他者に自分の考えや気持ちを整理して伝える」ことをうながすような指導が、生徒の学びのレリバンス意識につながるものがうかがえる。

続いて担任による「自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫・改善したりすること」の指導と、生徒の「自分の将来について具体的な目標をたて、現実を考えながらその実現のための方法を考えている」という意識について示したものが図7である。

【図7】「自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり，その方法を工夫・改善したりすること」の指導と「自分の将来について具体的な目標をたて，現実を考えながらその実現のための方法を考えている」意識（担任調査，生徒調査）



※担任調査の回答は「よく指導している」「ある程度指導している」「あまり指導していない」「まったく指導していない」から1つを選択する形式であったが、「まったく指導していない」の回答はなかったため，図には含めていない。

※ χ^2 検定の結果， $\chi^2(4)=11.659, p<.01$ であった。

「いつもそうしている」の回答割合からは，担任が「自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり，その方法を工夫・改善したりすること」を指導しているクラスほど，生徒が「自分の将来について具体的な目標をたて，現実を考えながらその実現のための方法を考えている」ことが示されている。これは，将来と現在のレリバンス（現在の行動や学びの意義等について，将来とのつながりの観点から考えること）を意識した指導の成果と考えられる。

参考：第一次報告書における参照データ

* 1	P172, P173	高等学校・学校調査	問6(1)A・B
* 2	P179	高等学校・学校調査	問7
* 3	P207	高等学校・ホームルーム担任調査	問4
* 4	P196	高等学校・学校調査	問15
* 5	P210	高等学校・ホームルーム担任調査	問7
* 6	P197	高等学校・学校調査	問16
* 7	P179	高等学校・学校調査	問7
* 8	P208	高等学校・ホームルーム担任調査	問5
* 9	P218	高等学校・ホームルーム担任調査	問13
* 10	P219	高等学校・ホームルーム担任調査	問14
* 11	P183	高等学校・学校調査	問9

(3) テーマ2 職業に関する体験活動の重要性

- 生徒は自分の個性や適性を考える学習や社会人・職業人としての常識やマナーの学習を期待し、職業体験活動（インターンシップ）に参加した大多数が有意義な活動だと感じている。
- ・就業体験活動（インターンシップ）に参加した生徒の90%が「有意義な活動だと思う」と回答している。
 - ・自分の個性や適性（向き・不向き）を考える学習や社会人・職業人としての常識やマナーの学習への期待が大きい。
 - ・3割から4割の生徒が「学校で就業体験活動はなかった」と回答している。
 - ・就業体験活動での経験を志望校選択の参考に使っている割合は非常に低い。
 - ・ホームルーム担任調査では、「ホームルームや学年で将来の進路にかかわる体験活動を実施している」と回答したのは42.9%にとどまっている。
 - ・全体計画で「就業体験活動の充実や事前指導・事後指導」を重視した学校でも、担任の指導にはまだ十分に浸透していない。
 - ・全体計画で「就業体験活動の充実や事前指導・事後指導」を重視した学校では、生徒の「キャリアプランニング能力」が高い。
 - ・全体計画で「就業体験活動の充実や事前指導・事後指導」を重視した学校の生徒は、その意義を十分に感じている。

1) 第一次報告書に基づく再分析

①高等学校卒業後の進路希望の実際

生徒調査によると、「困ったり悩んだりしていること」*1では、「自分がどのような職業に向いているのかわからない」は33.7%、「やりたい仕事が見つからない」が20.4%になっており、自分の適性がわからないことが課題の一つとなっている。

進学希望は72.0%と高く、その理由*2は「将来の仕事に役立つ専門的な知識・技能を身につけたいから」が69.6%で最も高く、次に「希望する職業につくために必要な資格をとりたいたから」が41.6%となっており、進学することを将来の職業に結び付けようとしていることがうかがえる。そのことは「志望校を選ぶにあたり、重視しているものは何か」という設問*2の回答で、「自分のやりたい勉強ができること」が65.5%で最も高く、次に「将来希望する職業に役立つ知識や技術が身につくこと」が45.6%、「資格が取得できること」が37.0%、「就職に有利であること」が33.7%となっていることから分かる。

しかし、「志望校を選ぶにあたり、参考に使っていることは何か」という設問*2では、15項目中、「学校でのテストの結果や各教科の成績」が42.4%と最も高く、次に「予備校などが行っている模擬テストの結果」が35.0%と、テストの成績により志望校を選ぶ傾向が強い。そして、「適性（向き・不向き）や興味などに関する検査の結果」は10.7%で8番目、「就業体験活動（インターンシップ）での経験」は5.5%で12番目、「ホーム

ルーム活動での生き方や進路に関する学習」は 4.0%で 14 番目と、将来の職業と結び付くような項目は余り参考にされていないことが分かる。

②就業体験活動の有用性

生徒調査から、就業体験活動に対する生徒の受け止め方を考察していく。

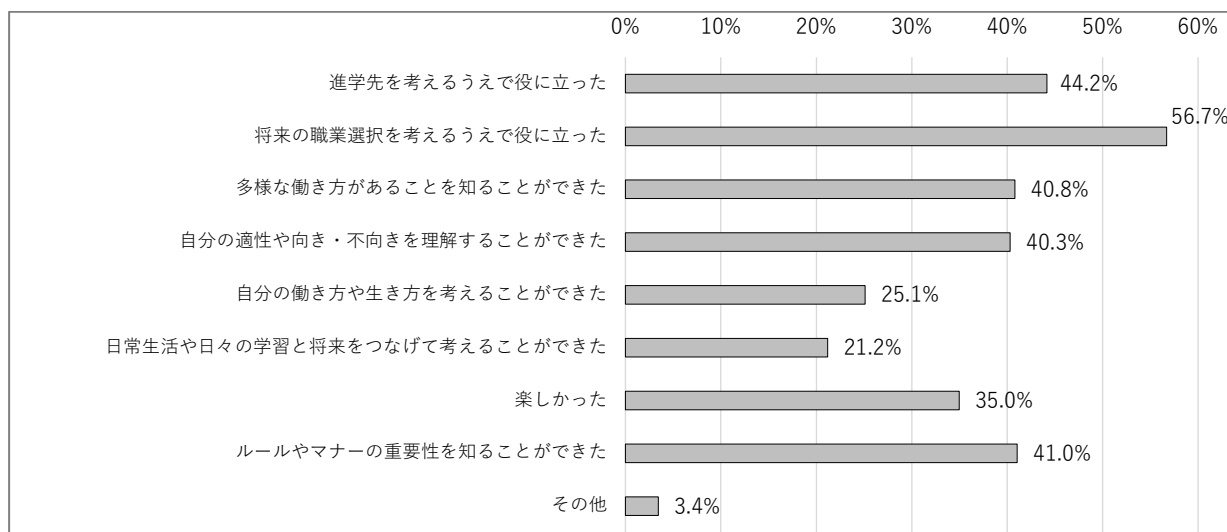
まず、「高校に入学してからこれまで、就業体験活動(インターンシップ)にどの程度取り組んだのか」という設問*³に対し、「積極的に取り組んだ」「ある程度積極的に取り組んだ」を合わせると 49.8%、「そのような活動はなかった」は 30.4%になっている。

また、「学校で経験した学習や受けた指導の中で、自分の将来の生き方や進路を考えるうえで、職場での就業体験活動(インターンシップ)が役に立ったか」という設問*⁴に対しては、「役に立った」「少しは役に立った」を合わせると 56.9%、「そのような指導はなかった」は 32.9%になっている。

就業体験活動(インターンシップ)についての設問*⁵で、「あなたは、就業体験活動(インターンシップ)に参加しましたか。」の設問に対し、「参加した(これから参加予定)」が 41.5%、「学校でそのような活動はなかった」が 38.4%、「活動はあったが、参加しなかった」が 20.1%となっている。そして、参加した生徒の感想では、90%の生徒が「有意義な活動だと思う」と回答している。

さらに、就業体験活動(インターンシップ)が「どのような点から有意義な活動だと思いましたか。」という設問*⁵への回答は、図1のとおりである。「将来の職業選択や進学先を考えるうえで役に立った」という回答が 56.7%で最多となっている。また、「自分の適性や向き・不向きを理解することができた」(40.3%)や「ルールやマナーの重要性を知ることができた」(41.0%)の項目も比較的高い割合になっている。

【図1】どのような点から有意義な活動だと思いましたか。



③高校生が望む学習内容と指導の実態

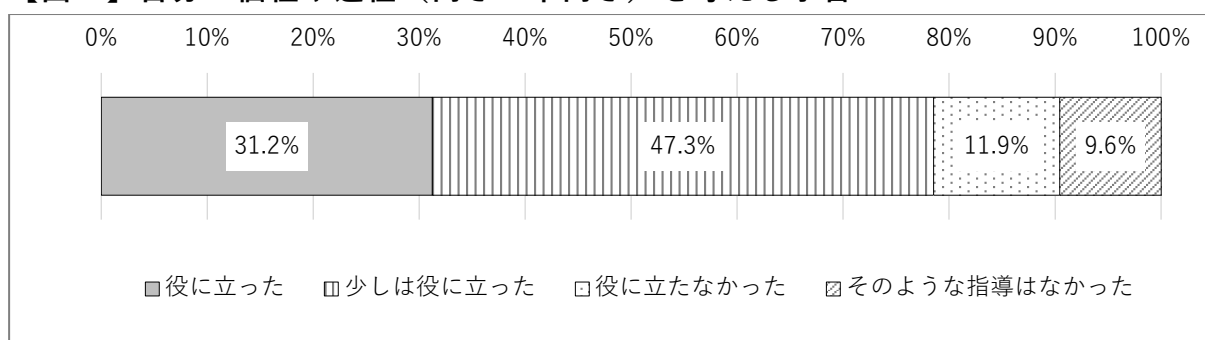
「自分の将来の生き方や進路を考えるため、どのようなことを指導してほしいか」という設問^{*6}への回答結果を表1に示す。なお、前回調査の同様の設問への回答結果も参考として併せて記載している。高校生が指導してほしい事柄の順位が変わっていないことと、「自分の個性や適性(向き・不向き)を考える学習」のポイントが上がっていることが分かる。これは、学校の指導体制や内容が従前のものと変わっていないこと、社会の変化や高校生のニーズに応えきれていないことを示していると考えられる。

【表1】自分の将来の生き方や進路について考えるため、指導してほしいこと

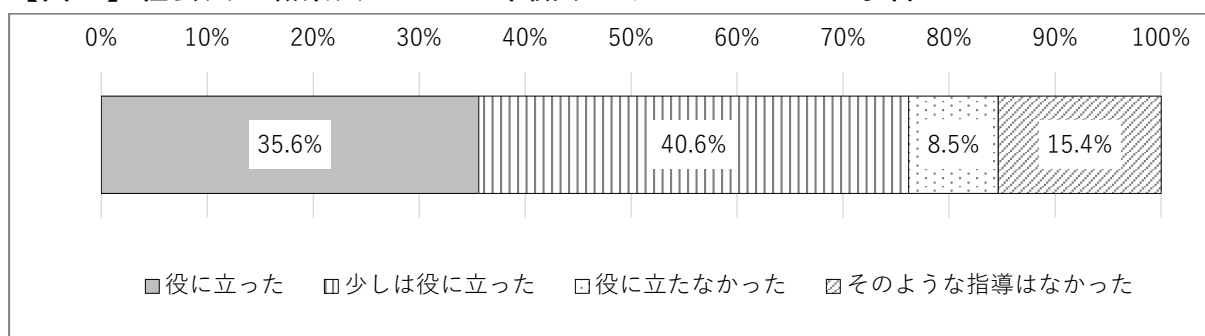
	今回調査	前回調査
自分の個性や適性(向き・不向き)を考える学習	33.5%(1位)	29.9%(1位)
特に指導してほしいことはない	25.4%(2位)	29.5%(2位)
社会人・職業人としての常識やマナー	22.9%(3位)	26.5%(3位)

また、今回調査の「自分の将来の生き方や進路を考えるうえで役に立った指導や学習」をたずねる設問^{*4}では、上記2つの指導が「役に立った」「少しは役に立った」を合わせた割合はそれぞれ、78.5%、76.2%と高くなっていて、高校生がそのような指導が有用であると感じていることが分かる(図2、図3)。

【図2】自分の個性や適性(向き・不向き)を考える学習



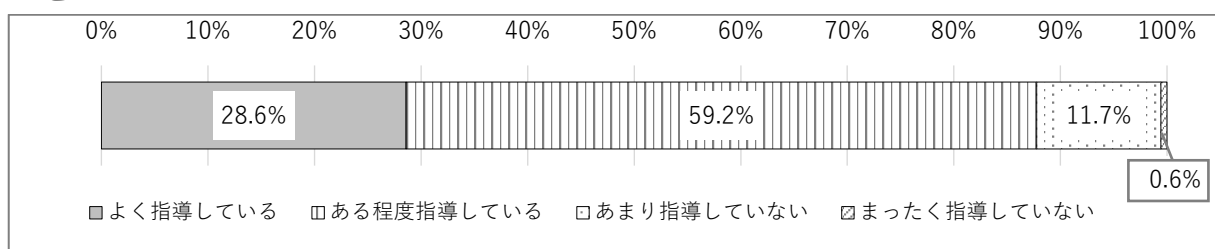
【図3】社会人・職業人としての常識やマナーについての学習



一方で、ホームルーム担任調査では、「自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、自分らしさを発揮すること」をどの程度指導しているかをたずねる設問^{*7}の

結果は図4のとおりである。

【図4】自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、自分らしさを発揮すること



「よく指導している」と「ある程度指導している」を合わせると87.8%と高い割合であることから、自己を知る指導は行われていることが分かる。しかし、生徒は更にそれ以上の「自分の個性や適性（向き・不向き）を考える学習」を求めていることが推測できる。

④今後の方向性

生徒が社会的・職業的に自立するために、高等学校に求められている教育はどのようなものであるのかを再考することが必要である。

『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編』においても、「就業体験活動は、職業の現場における実際的な知識や技術・技能に触れることが可能となるとともに、学校における学習と職業との関係についての生徒の理解を促進し、学習意欲を喚起すること、生徒が自己の職業適性や将来設計について考える機会となり、主体的な職業選択の能力や高い職業意識の育成が促進されること、生徒が教師や保護者以外の大人と接する貴重な機会となり、異世代とのコミュニケーション能力の向上が期待されることなど、高い教育効果を期待できるものである。」と就業体験活動（インターンシップ）の重要性について記されている。（第3章教育課程の編成 4 職業やボランティア活動に関わる体験的な学習の指導）

また、前回調査の第二次報告書においては、「まだ普及の途上である体験活動だが、体験活動の意義をより多くの教員が理解し、教育現場で実践されていく兆しがみえている。」（P.72）という報告もあった。

今回の学校調査では、「年間指導計画に含まれている内容」*⁸として、「体験活動」が77.9%、「体験活動の事前指導・事後指導」が59.6%と比較的高い割合で挙げられている。実際に、「令和元年度（調査年度）において企画・実施をしているもの」*⁹として、「体験活動」が72.2%、「体験活動にかかわる事前指導・事後指導」が55.8%となっている。しかし、ホームルーム担任調査*¹⁰では、「将来の進路にかかわる体験活動を実施している」は42.9%、「将来の進路にかかわる体験活動の実施においては、事前指導・事後指導を十分に行っている」は33.5%にとどまっている。ここでは、計画はあるが実施率が低い現状や実施における事前指導・事後指導の取組の低さを読み取ることがで

きる。

生徒調査をまとめると、自分の将来の生き方や進路について考えるために、自分の個性や適性（向き・不向き）を考える学習や社会人・職業人としての常識やマナーを指導してほしいという回答が多い。一方、就業体験活動に参加した多くの生徒が「自分の適性や向き・不向きを理解すること」や「ルールやマナーの重要性を知ること」において有意義な活動だったと回答している。しかし、志望校を選ぶに当たり、「自分の適性（向き・不向き）」や「就業体験活動での経験」は、余り参考にされていない。志望校を選ぶに当たり、「自分の適性（向き・不向き）」や「就業体験活動での経験」を参考にできるようにするために、指導方法の改善が求められる。また、就職希望者が、自分がどのような職業に向いているのかを知るためについても指導方法の改善が求められる。

前述した学校調査やホームルーム担任調査において、体験活動にかかわる事前指導・事後指導の実施率が低かったことから、「キャリア・パスポート」等の活用を含め、その内容の改善を図り実施率を上げていくことも一つの方策として考えられる。

今後に向けて、地域や産業界などとの連携を図り、産業現場等における就業体験活動の機会を積極的に設け、現場と学校の意思の疎通を図り生徒一人一人にあった体験内容を精査することが求められている。

2) 複数調査に基づくクロス分析

職業に関する体験活動、高等学校でいえば就業体験活動（インターンシップ）を推進するためには、計画の策定が重要な役割を果たしている。

ここでは、「就業体験活動やその事前指導・事後指導を全体計画にしっかりと位置付けている学校と、そうではない学校とでは、担任の指導や生徒のキャリア意識にどのような違いがあるのか」等について見ていく。

①全体計画で「就業体験活動の充実や事前指導・事後指導」を重視した学校と、

担任の指導

学校調査で尋ねた「キャリア教育の全体計画を立てるうえで、重視した事柄」として、就業体験活動に関する2つの事柄（問7の8、10）に回答した学校に焦点をあて、担任調査にて尋ねた「あなたのホームルームあるいは学年でキャリア教育を行ううえで、どの程度指導しているか」（問9）の回答割合を示したものが表1及び表2である。重視した学校とそうでない学校を比較するために、「よく指導している」については両者の回答割合の差も示している。

まず、「職業や就労にかかわる体験活動（就業体験活動（インターンシップ）等）を充実させること」を重視した学校における担任の指導状況について示したものが表2である。

【表2】全体計画で「就業体験活動の充実」を重視した学校における担任の指導状況
(学校調査, 担任調査)

	よく指導している	ある程度指導している	あまり指導していない	まったく指導していない
様々な立場や考えの相手に対して、その意見を聞き理解しようとする事	36.8%(+1.8)	57.5%	5.5%	0.2%
相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを整理して伝える事	28.8%(-2.1)	61.0%	9.7%	0.5%
自分の果たすべき役割や分担を考え、周囲の人と力を合わせて行動しようとする事	38.9%(+0.3)	55.1%	5.6%	0.4%
自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、自分らしさを発揮すること	28.6%(+0.2)	59.1%	11.9%	0.4%
喜怒哀楽の感情に流されず、自分の行動を適切に律して取り組もうとする事	28.4%(+1.5)	57.9%	13.0%	0.7%
不得意なことや苦手なことでも、自分の成長のために進んで取り組もうとする事	29.2%(-3.5)	59.6%	10.7%	0.4%
調べたいことがあるとき、自ら進んで資料や情報を集め、必要な情報を取捨選択すること***	28.1%(-5.8)	55.2%	16.0%	0.7%
起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するのかを工夫すること**	18.0%(-2.9)	56.4%	23.9%	1.7%
活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること***	19.0%(-6.3)	55.5%	24.2%	1.4%
学ぶことや働くことの意義について理解し、学校での学習と自分の将来をつなげて考えること	30.7%(+1.5)	56.0%	12.6%	0.8%
自分の将来について具体的な目標を立て、現実を考えながらその実現のための方法を考えること	29.4%(-2.6)	59.2%	10.2%	1.1%
自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫・改善したりすること***	28.3%(-2.9)	57.8%	13.0%	0.9%
上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること***	37.5%(-8.9)	51.8%	9.7%	1.0%
「進学したい学校」・「就職したい職場」を選び、その実現のために努力すること**	48.3%(-5.5)	46.6%	4.7%	0.4%
上級学校や職場を選ぶにあたって、その合格の可能性や採用の可能性を考慮すること***	33.7%(-7.4)	54.8%	10.7%	0.8%

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

※ () 内の数値は、「重視した学校の回答割合－そうでない学校の回答割合」を示したものである。

※指導状況について χ^2 検定を行った結果、有意差が見られたのは、「調べたいことがあるとき、自ら進んで資料や情報を集め、必要な情報を取捨選択すること」($\chi^2(3)=33.847, p<.001$), 「起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するのかを工夫すること」($\chi^2(3)=15.128, p<.01$), 「活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること」($\chi^2(3)=61.449, p<.001$), 「自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫・改善したりすること」($\chi^2(3)=18.090, p<.001$), 「上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること」($\chi^2(3)=36.716, p<.001$), 「「進学したい学校」・「就職したい職場」を選び、その実現のために努力すること」($\chi^2(3)=12.578, p<.01$), 「上級学校や職場を選ぶにあたって、その合格の可能性や採用の可能性を考慮すること」($\chi^2(3)=23.498, p<.001$)であった。

全体計画で「就業体験活動の充実」を重視した学校の担任は、全般的に「よく指導している」あるいは「ある程度指導している」の回答割合が高く、多くの指導内容で8割を超えている。

しかしテーマ1の結果(表1及び表2参照)とは対照的に、担任の指導状況の有意差が示されたすべての項目において、「就業体験活動の充実」を重視した学校の担任の方が「よく指導している」の回答割合が低い結果となった。中でも「上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること」(8.9ポイント差), 「上級学校や職場を選ぶにあたって、その合格の可能性や採用の可能性を考慮すること」(7.4ポイント差)で差が見られる。

続いて、「就業体験活動(インターンシップ)やアカデミック・インターンシップ等の体験活動において、事前指導・事後指導を重視すること」を重視した学校における担任の指導状況について示したものが表3である。

【表3】全体計画で「就業体験活動等の事前指導・事後指導」を重視した学校における担任の指導状況（学校調査，担任調査）

	よく指導している	ある程度指導している	あまり指導していない	まったく指導していない
様々な立場や考えの相手に対して，その意見を聞き理解しようとする	35.6%(-0.5)	58.6%	5.6%	0.1%
相手が理解しやすいように，自分の考えや気持ちを整理して伝える	28.4%(-1.7)	61.3%	9.8%	0.4%
自分の果たすべき役割や分担を考え，周囲の人と力を合わせて行動しようとする	39.1%(+0.6)	55.9%	4.6%	0.4%
自分の興味や関心，長所や短所などについて把握し，自分らしさを発揮すること	27.8%(-1.2)	59.8%	12.1%	0.4%
喜怒哀楽の感情に流されず，自分の行動を適切に律して取り組もうとする	27.4%(-0.5)	59.4%	12.6%	0.6%
不得意なことや苦手なことでも，自分の成長のために進んで取り組もうとする*	28.9%(-3.3)	59.9%	11.0%	0.2%
調べたいことがあるとき，自ら進んで資料や情報を集め，必要な情報を取捨選択すること*	29.2%(-2.7)	55.1%	15.3%	0.5%
起きた問題の原因，解決すべき課題はどこにあり，どう解決するのかを工夫すること**	17.4%(-3.2)	56.6%	24.5%	1.5%
活動や学習を進める際，適切な計画を立てて進めたり，評価や改善を加えて実行したりすること***	18.7%(-5.3)	55.7%	24.5%	1.1%
学ぶことや働くことの意義について理解し，学校での学習と自分の将来をつなげて考えること	30.7%(+1.2)	55.9%	12.8%	0.6%
自分の将来について具体的な目標を立て，現実を考えながらその実現のための方法を考えること	28.7%(-3.2)	60.6%	9.9%	0.8%
自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり，その方法を工夫・改善したりすること	28.3%(-2.3)	58.5%	12.4%	0.8%
上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること*	38.8%(-4.9)	51.2%	9.1%	0.9%
「進学したい学校」・「就職したい職場」を選び，その実現のために努力すること	48.9%(-3.3)	46.4%	4.2%	0.5%
上級学校や職場を選ぶにあたって，その合格の可能性や採用の可能性を考慮すること*	34.4%(-4.6)	54.4%	10.3%	0.9%

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

※（ ）内の数値は，「重視した学校の回答割合－そうでない学校の回答割合」を示したものである。

※指導状況について χ^2 検定を行った結果，有意差が見られたのは，「不得意なことや苦手なことでも，自分の成長のために進んで取り組もうとすること」($\chi^2(3)=11.247, p<.05$)，「調べたいことがあるとき，自ら進んで資料や報を集め，必要な情報を取捨選択すること」($\chi^2(3)=8.703, p<.05$)，「起きた問題の原因，解決すべき課題はどこにあり，どう解決するのかを工夫すること」($\chi^2(3)=11.862, p<.01$)，「活動や学習を進める際，適切な計画を立てて進めたり，評価や改善を加えて実行したりすること」($\chi^2(3)=40.086, p<.001$)，「上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること」($\chi^2(3)=10.062, p<.05$)，「上級学校や職場を選ぶにあたって，その合格の可能性や採用の可能性を考慮すること」($\chi^2(3)=8.587, p<.05$)であった。

全体計画で「就業体験活動等の事前指導・事後指導」を重視した学校の担任は，一般的に「よく指導している」あるいは「ある程度指導している」の回答割合が高く，多くの指導内容で8割を超えている。

しかし，テーマ1での結果とは対照的であり，担任の指導状況の有意差が示されたすべての項目において，「就業体験活動等の事前指導・事後指導」を重視した学校の担任の方が「よく指導している」の回答割合が低い結果となった。中でも「活動や学習を進める際，適切な計画を立てて進めたり，評価や改善を加えて実行したりすること」(5.3ポイント差)，「上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること」(4.9ポイント差)，「上級学校や職場を選ぶにあたって，その合格の可能性や採用の可能性を考慮すること」(4.6ポイント差)で差が見られる。

これらの結果からは，就業体験活動の充実や事前指導・事後指導を全体計画で重視する学校でも，まだ十分に担任の指導に浸透していないことが示唆されている。

②全体計画で「就業体験活動の充実や事前指導・事後指導」を重視した学校と、

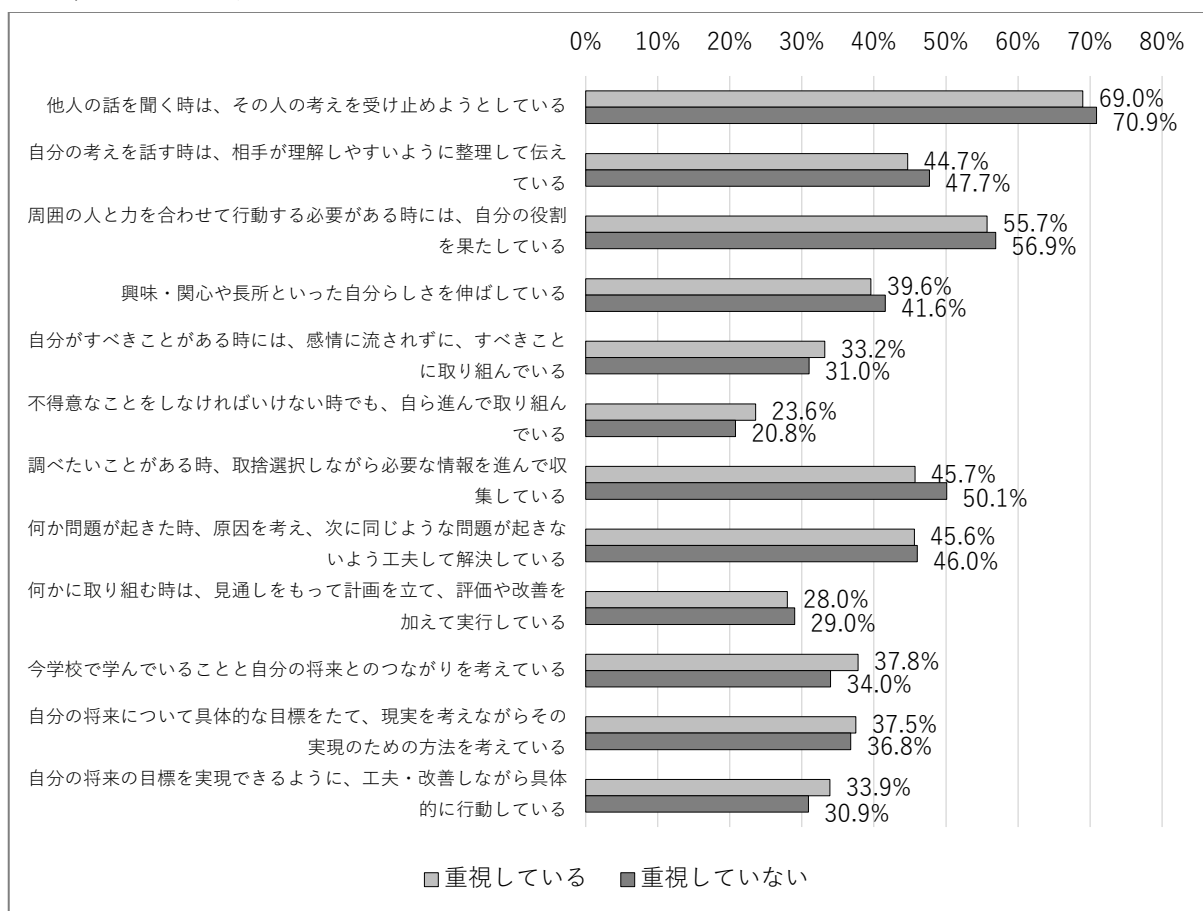
生徒のキャリア意識

では、全体計画で就業体験活動の充実や事前指導・事後指導を重視する学校と生徒のキャリア意識には、どのような関連が見られるのだろうか。

生徒調査にて「あなたの日常生活（授業中や放課後、家庭での生活などすべてを含む）の様子を振り返った時にあてはまること」（問10）を尋ね、各項目に「いつもそうしている」と回答した割合を、学校調査で尋ねた「キャリア教育の全体計画を立てるうえで、重視した事柄」のうち、就業体験活動に関する2つの事柄（問7の8、10）との関連で示したものが図5及び図6である。

まず、全体計画で「職業や就労にかかわる体験活動（就業体験活動（インターンシップ）等）を充実させること」を重視した学校か否かと生徒のキャリア意識の関連を示したものが図5である。

【図5】全体計画での「就業体験活動の充実」の重視と生徒のキャリア意識（学校調査、生徒調査）



※生徒調査の回答は「いつもそうしている」「時々そうしている」「していない」から1つを選択する形式であったが、これらの回答結果と全体計画の重視の有無について χ^2 検定を行った結果、3項目で有意差が見られたのは、「調べたいことがある時、取捨選択しながら必要な情報を進んで収集している」（ $\chi^2(2)=11.966, p<.01$ ）、「何か問題が起きた時、原因を考え、次に同じような問題が起きないように工夫して解決している」（ $\chi^2(2)=6.911, p<.05$ ）、「今学校で学んでいることと自分の

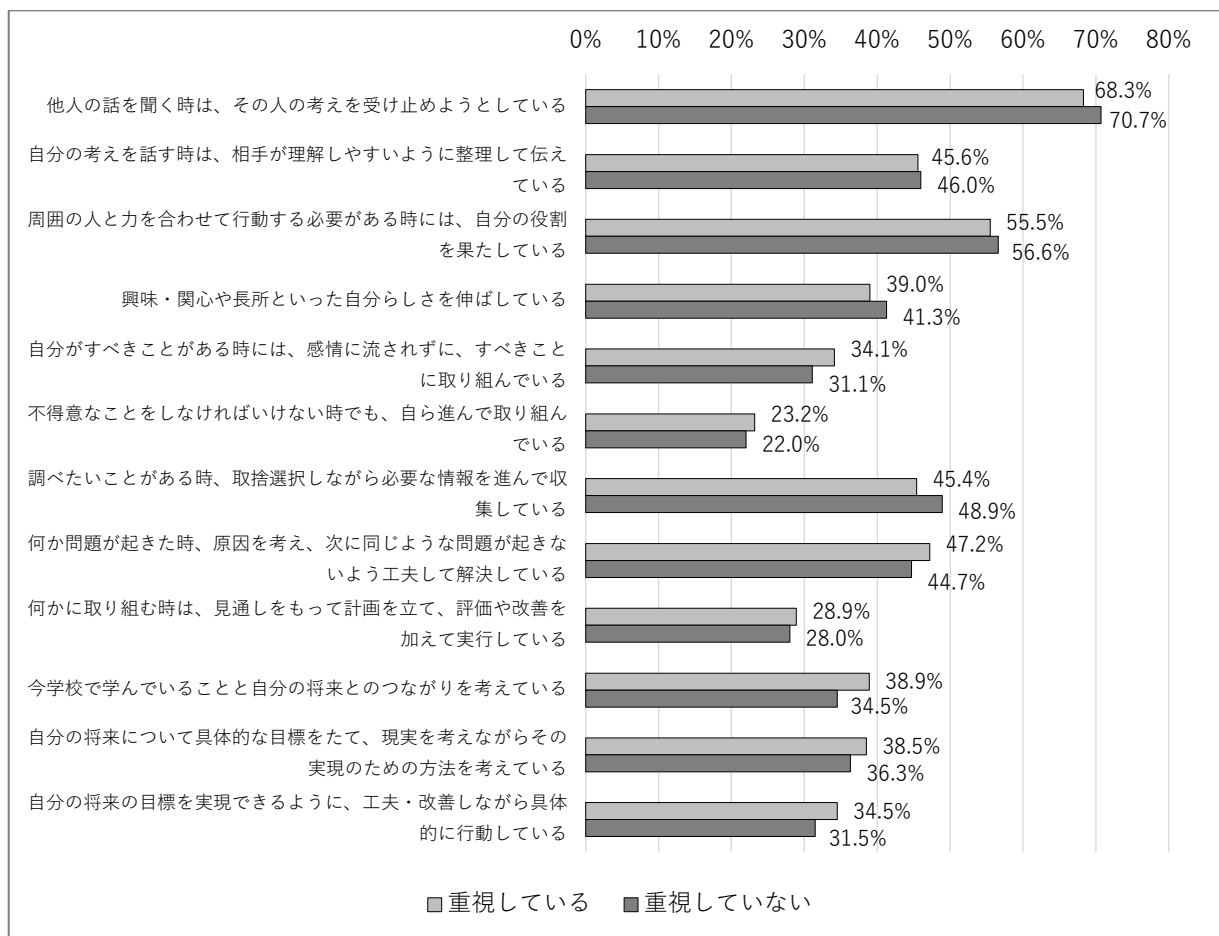
将来とのつながりを考えている」($\chi^2(2)=7.049, p<.05$)であった。

基礎的・汎用的能力を構成する「キャリアプランニング能力」では、全体計画で「就業体験活動の充実」を重視する学校の生徒の方が、全般的に「いつもそうしている」割合が高い。中でも「今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えている」(3.8ポイント差)、「自分の将来の目標を実現できるように、工夫・改善しながら具体的に行動している」(3.0ポイント差)で差が見られる。

その一方で、「課題対応能力」では、全体計画で「就業体験活動の充実」を重視する学校の生徒の方が、全般的に「いつもそうしている」割合が低い。中でも「調べたいことがある時、取捨選択しながら必要な情報を進んで収集している」では、4.4ポイントの差が見られる。こうした点を改善するためにも、その要因を明らかにし、より有意義な活動となるよう充実させることが期待される。

続いて、全体計画で「就業体験活動(インターンシップ)やアカデミック・インターンシップ等の体験活動において、事前指導・事後指導を重視すること」を重視した学校か否かと生徒のキャリア意識の関連を示したものが図6である。

【図6】全体計画での「就業体験活動等の事前指導・事後指導」の重視と生徒のキャリア意識(学校調査, 生徒調査)



※生徒調査の回答は「いつもそうしている」「時々そうしている」「していない」から1つを選択する形式であったが、これらの回答結果と全体計画の重視の有無について χ^2 検定を行った結果、有意差が見られたのは、「今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えている」(χ

² (2)=7.787, p<.05) であった。

基礎的・汎用的能力を構成する「キャリアプランニング能力」では、全体計画で「就業体験活動等の事前指導・事後指導」を重視する学校の生徒の方が、「いつもそうしている」割合が全般的に高い傾向が見られた。中でも「今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えている」では、4.4ポイントの差が見られる。

その一方で、「人間関係形成・社会形成能力」では、全体計画で「就業体験活動等の事前指導・事後指導」を重視する学校の生徒の方が、「いつもそうしている」割合が全般的に低い。中でも「調べたいことがある時、取捨選択しながら必要な情報を進んで収集している」では、3.5ポイントの差が見られる。こうした点を改善するためにも、その要因を明らかにし、より有意義な事前指導・事後指導を展開することが期待される。

③全体計画で「就業体験活動の充実や事前指導・事後指導」を重視する学校と、

生徒が感じている意義

では、就業体験活動の充実や事前指導・事後指導を全体計画で重視する学校の生徒は、就業体験活動に対してどのような意義を感じているのだろうか。

学校調査で尋ねた「キャリア教育の全体計画を立てるうえで、重視した事柄」として、就業体験活動に関する2つの事柄（問7の8，10）を回答した学校の生徒のうち、就業体験活動に「参加した（これから参加予定）」と回答した生徒の感想（有意義な活動だと思うか）（問14(5)）を示したものが表4である。

【表4】全体計画で「就業体験活動の充実」「就業体験活動等の事前指導・事後指導」を重視した学校で、活動や事前指導・事後指導に参加した（予定含む）生徒の感想（学校調査、生徒調査）

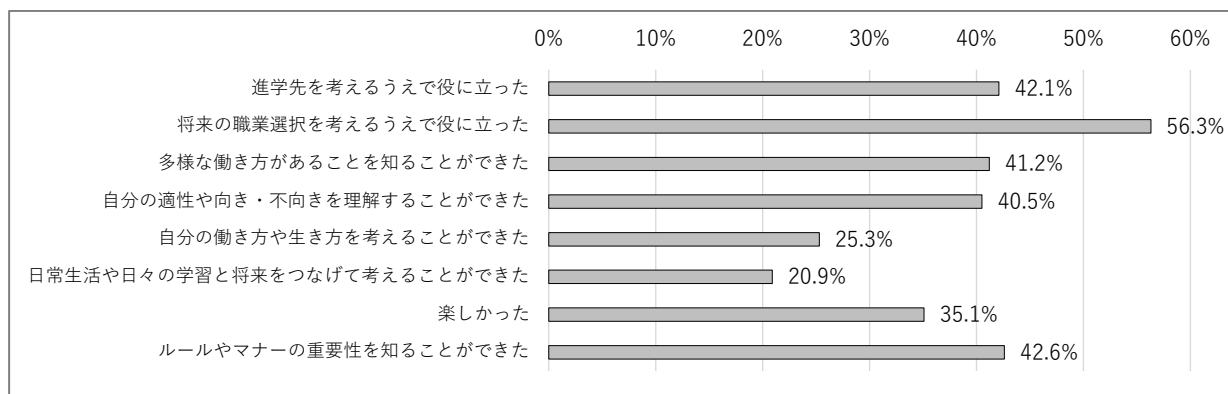
	有意義な活動 だと思う	有意義な活動 だとは思わな い	どちらとも いえない
「就業体験活動の充実」を重視した学校の生徒	89.1%	3.3%	7.6%
「就業体験活動等の事前指導・事後指導」を重視した学校の生徒	88.8%	3.2%	8.0%

全体計画で「就業体験活動の充実」や「就業体験活動等の事前指導・事後指導」を重視した学校では、いずれも約9割の生徒が就業体験活動を有意義な活動だと明確に思っていることが分かる。

さらに、「有意義な活動だと思う」と回答した生徒に対して、「どのような点から有意義な活動だと思いましたか」（問14(6)）と尋ねた結果について、就業体験活動に関する事柄ごとに示したものが図7及び図8である。

まず、全体計画で「職業や就労にかかわる体験活動（就業体験活動（インターンシップ）等）を充実させること」を重視した学校の生徒の結果について示したものが図7である。

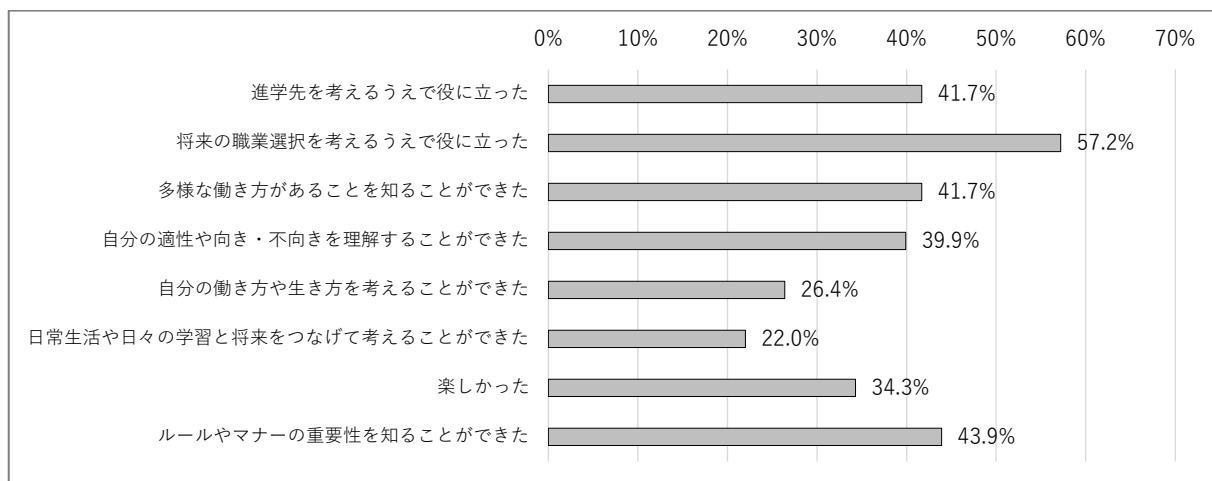
【図7】全体計画で「就業体験活動の充実」を重視した学校の生徒が「有意義な活動だと思う」理由（学校調査，生徒調査）※複数回答可



全体計画で「就業体験活動の充実」を重視した学校で、活動に参加した（予定含む）生徒のうち、「有意義な活動だと思う」生徒の理由としてもっとも回答割合が高いのは「将来の職業選択を考えるうえで役に立った」（56.3%）であり、「ルールやマナーの重要性を知ることができた」（42.6%）、「進学先を考えるうえで役に立った」（42.1%）、「多様な働き方があることを知ることができた」（41.2%）、「自分の適性や向き・不向きを理解することができた」（40.5%）も4割を超えている。

続いて、全体計画で「就業体験活動（インターンシップ）やアカデミック・インターンシップ等の体験活動において、事前指導・事後指導を重視すること」を重視した学校の生徒の結果について示したものが図8である。

【図8】全体計画で「就業体験活動等の事前指導・事後指導」を重視した学校の生徒が「有意義な活動だと思う」理由（学校調査，生徒調査）※複数回答可



全体計画で「就業体験活動等の事前指導・事後指導」を重視した学校で、活動に参加した（予定含む）生徒のうち、「有意義な活動だと思う」生徒の理由としてもっとも回答割合が高いのは「将来の職業選択を考えるうえで役に立った」（57.2%）であり、「ルールやマナーの重要性を知ることができた」（43.9%）,「進学先を考えるうえで役に立った」（41.7%）,「多様な働き方があることを知ることができた」（41.7%）も4割を超えている。

参考：第一次報告書における参照データ

* 1	P231	高等学校・生徒調査	問 7 (2)
* 2	P225,P226,P228	高等学校・生徒調査	問 6 (1)(2)(4)
* 3	P237	高等学校・生徒調査	問 12
* 4	P238	高等学校・生徒調査	問 13
* 5	P241,P244	高等学校・生徒調査	問 14(1)(5)(6)
* 6	P246	高等学校・生徒調査	問 16
* 7	P213	高等学校・ホームルーム担任調査	問 9
* 8	P176	高等学校・学校調査	問 6 (2)B
* 9	P193	高等学校・学校調査	問 13
* 10	P210	高等学校・ホームルーム担任調査	問 7

(4) テーマ3 「キャリア・パスポート」の有用性

- ホームルーム担任が「キャリア・パスポート」を「生徒の進路支援の資料として活用している」ことが、生徒の「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」学びのレリバンス意識に影響していることが考えられる。
- ・生徒は自分の個性や適性を考える学習の指導を希望している。
 - ・「キャリア・パスポート」を実施していない学校は学校調査で約半数、担任調査で約2/3である。
 - ・全体計画で「「キャリア・パスポート」等の活用」を重視する学校でも、全般的にみれば担任の指導にはまだ影響していない。
 - ・全体計画で「キャリア・パスポート」等に基づく指導を重視する学校では、担任の「キャリア・パスポート」の作成・活用は進んでいる。
 - ・担任が「キャリア・パスポート」を「生徒の進路支援の資料として活用している」クラスでは、生徒の「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」は高く、学びに対して前向きであり、学びのレリバンス意識も高い。

1) 第一次報告書に基づく再分析

①見通し・振り返る活動のツールとしての「キャリア・パスポート」

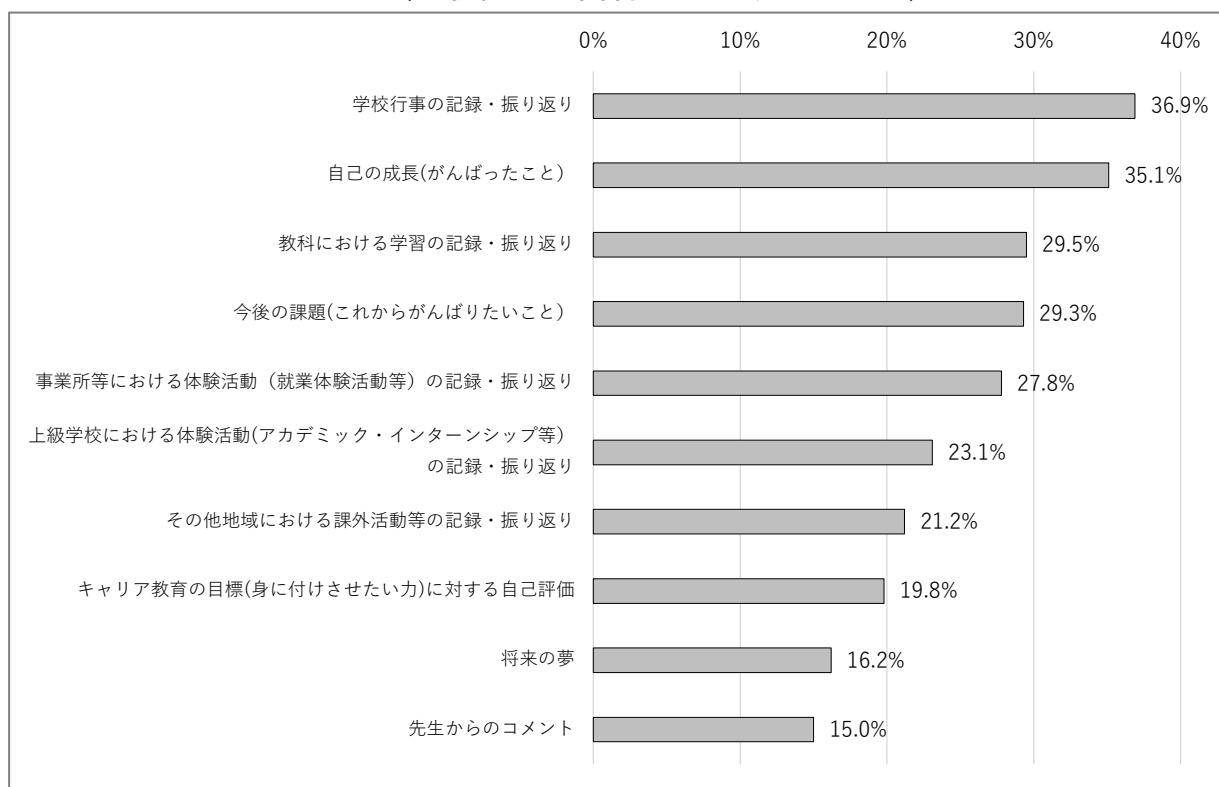
『学習高等学校指導要領(平成30年告示)』では見通し振り返る活動を重視しており、「学校、家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動をする」と明記されている。その具体的なツールとして学習指導要領特別活動編では「児童生徒が見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を、計画的に取り入れるよう工夫すること」と明示している。その例として、「キャリア・パスポート(仮称)などを活用して、子どもたちが自己評価を行うことを位置付けることなどが考えられる」と提案されている。

②「キャリア・パスポート」実施の現状

「キャリア・パスポート」については「作成していない」が学校調査で48.0%、担任調査で66.8%という現状である*¹*²。また、学校調査においてキャリア教育を適切に行っていくこととして優先順位が高いものを三つ選ぶ質問で「キャリア・パスポート」は18項目中10番目であり、まだまだ優先順位が高くない現状がある*³。

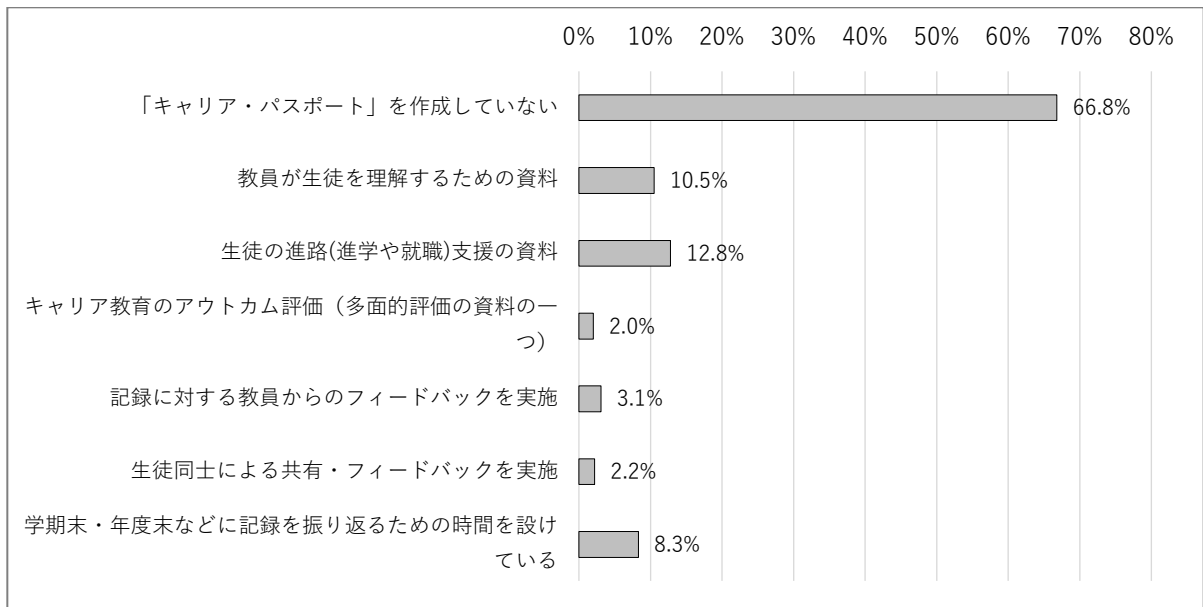
「キャリア・パスポート」に記載していることは多い順に「学校行事の記録・振り返り」、「自己の成長(がんばったこと)」、「教科における学習の記録・振り返り」、「今後の課題(これからがんばりたいこと)」、「事業所等における体験活動の記録・振り返り」となっており、大きな行事のときや、学年末など節目での活用が想定されていることが分かる(図1)*⁴。

【図1】「キャリア・パスポート」に記載していること、とじ込んでいることの内容についてあてはまるもの（学校調査・回答が10%以上のもの）



一方で、事業所や上級学校での体験活動にかかわる事後指導において、その内容として「キャリア・パスポート等を活用して当該体験活動の経験を卒業後の進路につなげる指導」の実施率は17.2%しかなく、キャリア教育の取組をつなぐツールとしての「キャリア・パスポート」の活用は進んでいない現状がある*⁵。さらに、担任調査によると「学期末・年度末などに記録を振り返るための時間を設けている」は8.3%、「記録に対する教員からのフィードバックを実施している」は3.1%と、「キャリア・パスポート」を活用して見直し振り返る活動を促進する指導は十分ではない現状がある（図2）*⁶。

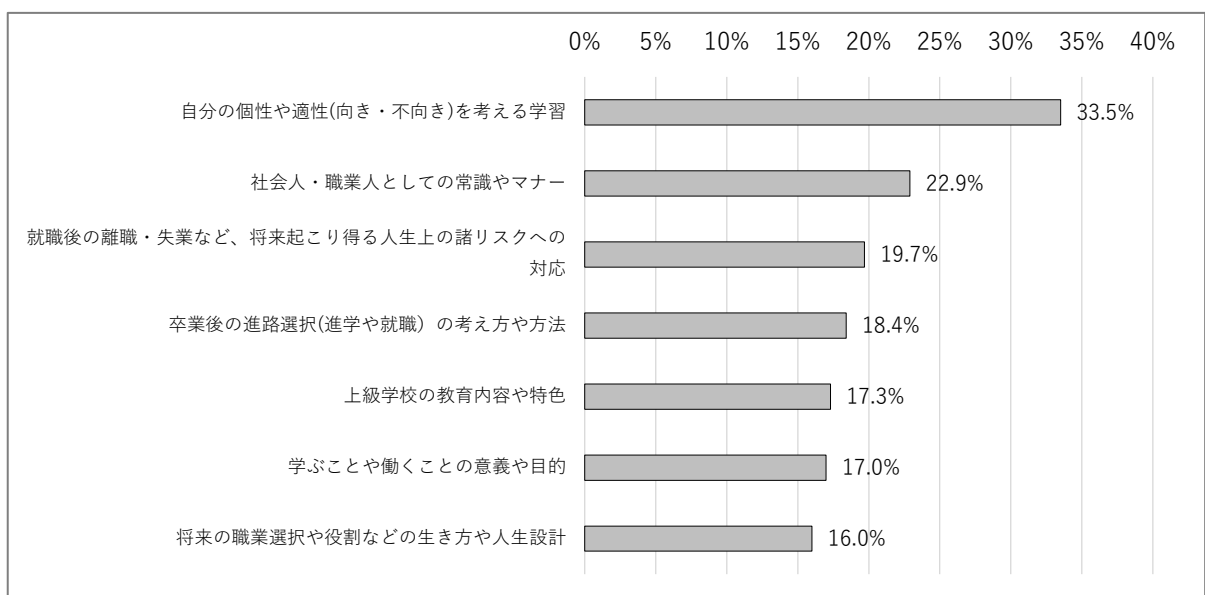
【図2】「キャリア・パスポート」をどのように活用していますか。あてはまるものをすべて選んでください。（担任調査・問11）



③今後の方向性

生徒調査において「指導してほしいこと」として最も多かったのは「自分の個性や適性（向き・不向き）を考える学習」であった*7。自分の個性や適性を考える際に重要なのは振り返りである。何かに取り組んだ後に、自分で取組を振り返り、その記録を残し蓄積していく。節目の時にその蓄積を振り返れば、自分の個性や適性に気づくということは少なくない。また記録を蓄積する際、他者からのフィードバックがあると、自己理解はより深まる。

【図3】自分の将来の生き方や進路について考えるため、指導してほしいこと（生徒調査・上位7項目）



学習指導要領にも「キャリア・パスポート」の活用にあたっては「教員が対話的に関わることで、自己評価に関する学習活動を深めていく」と明記されている。「キャリア・パスポート」を活用して、児童生徒が定期的に自己評価し、それに対して教員が対話的に関わるということが実現したときに、児童生徒は、新たな学習や生活への意欲をより高め、将来の生き方をより考えるようになるだろう。このように生徒が自己理解を深める際に適しているツールが「キャリア・パスポート」である。

また、学習指導要領総則「第4 児童（生徒）の発達への支援」では「主に集団の場面で必要な指導や援助を行うガイダンスと、（略）、一人一人が抱える課題に個別に対応した指導を行うカウンセリングの双方により、児童（生徒）の発達を支援すること」とキャリア発達を支援するキャリア・カウンセリングの重要性も指摘しているが、生徒のこれまでの蓄積が記された「キャリア・パスポート」はキャリア・カウンセリングの際に有効なツールとして活用することができる。更に「キャリア・パスポート」が校種を超えて活用されることで、一人の生徒の成長を学校種を超えて連続的に把握することも可能になる。

「キャリア・パスポート」の活用はこれから本格的に開始する。今後「キャリア・パスポート」の実施による教育的効果なども今まで以上に明らかになっていくものと思われる。各自治体や学校において「キャリア・パスポート」の作成と活用を働きかけていくことが重要である。

2) 複数調査に基づくクロス分析

「キャリア・パスポート」という用語が公文書に登場してからまだ数年しか経（た）っておらず、本調査を実施した時点では、本テーマの1)の②でも言及しているように、その作成や活用が十分になされているとは言えない状況にある。

そこで以下では全体計画に着目して、「『キャリア・パスポート』等に基づく指導を全体計画にしっかりと位置づけている学校とそうではない学校とでは、担任の指導にどのような違いがあるのか」について見ていくとともに、担任の「キャリア・パスポート等の活用」状況と、生徒のキャリア意識や学びに対する姿勢の関連についても目を向けてみたい。

①全体計画で「『キャリア・パスポート』等の活用」を重視する学校と、担任の

指導

担任調査にて「あなたのホームルームあるいは学年でキャリア教育を行ううえで、どの程度指導しているか（問9）」を尋ね、各項目の指導状況の回答割合を、学校調査で尋ねた「キャリア教育の全体計画を立てるうえで、重視した事柄（問7の17）」のうち、「『キャリア・パスポート』等に基づき生徒理解を深めることや生徒に正しい自己理解を得させること」について示したものが表1である。重視した学校とそうで

ない学校を比較するために、「よく指導している」については両者の回答割合の差も示している。

【表1】全体計画を立てる上で「キャリア・パスポート」等に基づく指導を重視した学校の担任の指導状況（学校調査，担任調査）

	よく指導している	ある程度指導している	あまり指導していない	まったく指導していない
様々な立場や考えの相手に対して、その意見を聞き理解しようとする	36.2%(+0.3)	58.0%	5.4%	0.4%
相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを整理して伝える	29.0%(-0.5)	61.4%	8.6%	1.1%
自分の果たすべき役割や分担を考え、周囲の人と力を合わせて行動しようとする	41.1%(+2.7)	54.0%	4.3%	0.6%
自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、自分らしさを発揮すること	26.3%(-2.5)	62.1%	11.3%	0.2%
喜怒哀楽の感情に流されず、自分の行動を適切に律して取り組もうとする	25.1%(-2.9)	63.0%	11.6%	0.4%
不得意なことや苦手なことでも、自分の成長のために進んで取り組もうとする	29.0%(-2.1)	62.6%	8.2%	0.2%
調べたいことがあるとき、自ら進んで資料や情報を集め、必要な情報を取捨選択すること	31.2%(-0.4)	53.8%	14.4%	0.6%
起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するのかを工夫すること	16.7%(-3.0)	60.1%	22.3%	0.9%
活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること	18.7%(-3.6)	58.9%	21.5%	0.9%
学ぶことや働くことの意義について理解し、学校での学習と自分の将来をつなげて考えること	29.0%(-1.1)	57.3%	13.3%	0.4%
自分の将来について具体的な目標を立て、現実を考えながらその実現のための方法を考えること	27.5%(-3.6)	62.4%	8.8%	1.3%
自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫・改善したりすること	26.6%(-3.5)	60.0%	12.8%	0.6%
上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること	39.2%(-2.9)	51.8%	7.7%	1.3%
「進学したい学校」・「就職したい職場」を選び、その実現のために努力すること	47.6%(-3.7)	47.4%	4.3%	0.6%
上級学校や職場を選ぶにあたって、その合格の可能性や採用の可能性を考慮すること	31.9%(-6.0)	56.5%	10.5%	1.1%

※（ ）内の数値は、「重視した学校の回答割合－そうでない学校の回答割合」を示したものである。

※指導状況について χ^2 検定を行った結果、有意差が見られた項目はなかった。

全体計画で「キャリア・パスポート」等に基づく指導を重視した学校の担任は、一般的に「よく指導している」あるいは「ある程度指導している」の回答割合が高く、多くの指導内容で8割を超えている。

しかし、重視した学校の担任の方がそうでない学校の担任より「よく指導している」と回答した割合が低い指導内容も少なからず見られることから、「キャリア・パスポート」等に基づく指導を全体計画で重視することは、一般的に見て担任の指導に影響しているとは言い難い。

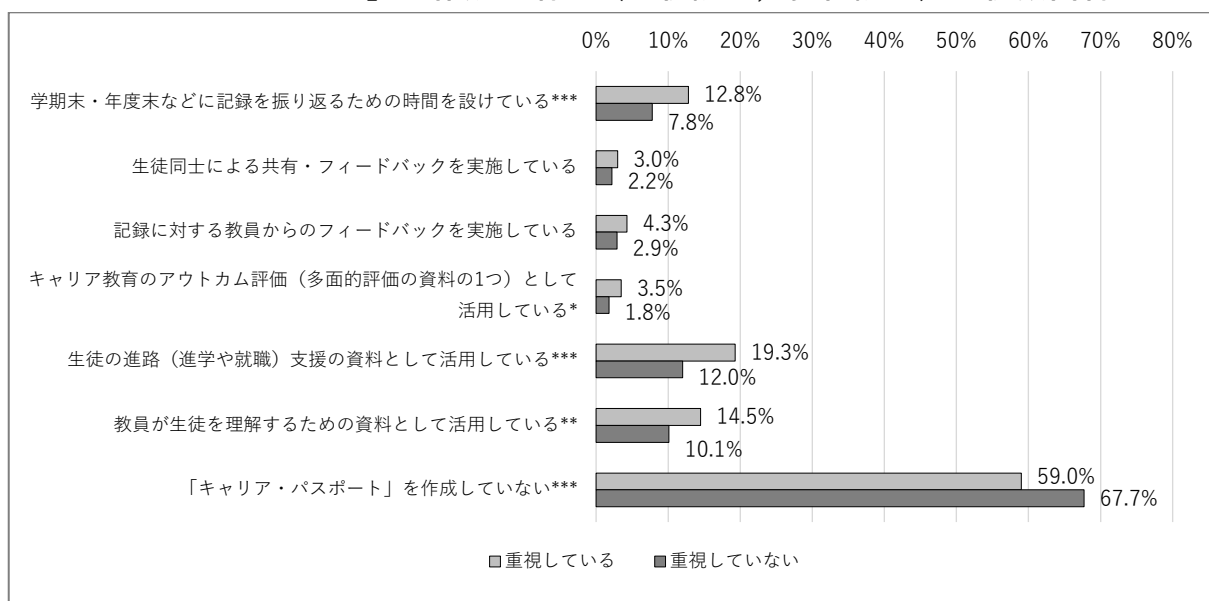
②全体計画で「キャリア・パスポート」等に基づく指導を重視する学校と、担任

の「キャリア・パスポート」の作成・活用

そもそも全体計画で「キャリア・パスポート」等に基づく指導を重視した学校では、担任の「キャリア・パスポート」の作成・活用はどのような状況なのだろうか。

担任調査にて「あなたは、「キャリア・パスポート」をどのように活用していますか」（問11）を尋ね、各項目に「あてはまる」と回答した割合を、学校調査で尋ねた「キャリア教育の全体計画を立てるうえで、重視した事柄」のうち、「『キャリア・パスポート』等に基づき生徒理解を深めることや生徒に正しい自己理解を得させること」（問7の17）との関連で示したものが図4である。

【図4】全体計画での「『キャリア・パスポート』等に基づく指導」の重視と担任の「キャリア・パスポート」の作成・活用（学校調査，担任調査）※複数回答可



※担任調査の回答結果と全体計画の重視の有無について χ^2 検定を行った結果、有意差が見られたのは、「学期末・年度末などに記録を振り返るための時間を設けている」($\chi^2(1)=13.342, p<.001$), 「キャリア教育のアウトカム評価（多面的評価の資料の1つ）として活用している」($\chi^2(1)=6.211, p<.05$), 「生徒の進路（進学や就職）支援の資料として活用している」($\chi^2(1)=19.438, p<.001$), 「教員が生徒を理解するための資料として活用している」($\chi^2(1)=8.221, p<.01$), 「『キャリア・パスポート』を作成していない」($\chi^2(1)=14.001, p<.001$)であった。

全体計画で「『キャリア・パスポート』等に基づく指導」を重視した学校の担任では「『キャリア・パスポート』を作成していない」の回答割合が59.0%にとどまっており、重視していない学校の担任より8.7ポイントも低い。このことから、「『キャリア・パスポート』等に基づく指導」を全体計画で重視した学校では、担任による「キャリア・パスポート」の作成が進んでいることが明確に分かる。

さらに、重視した学校では、担任の「キャリア・パスポート」の活用も全般的に進んでいる。中でも「生徒の進路（進学や就職）支援の資料として活用している」(7.3ポイント差), 「学期末・年度末などに記録を振り返るための時間を設けている」(5.0ポイント差), 「教員が生徒を理解するための資料として活用している」(4.4ポイント差)では大きな差が見られる。

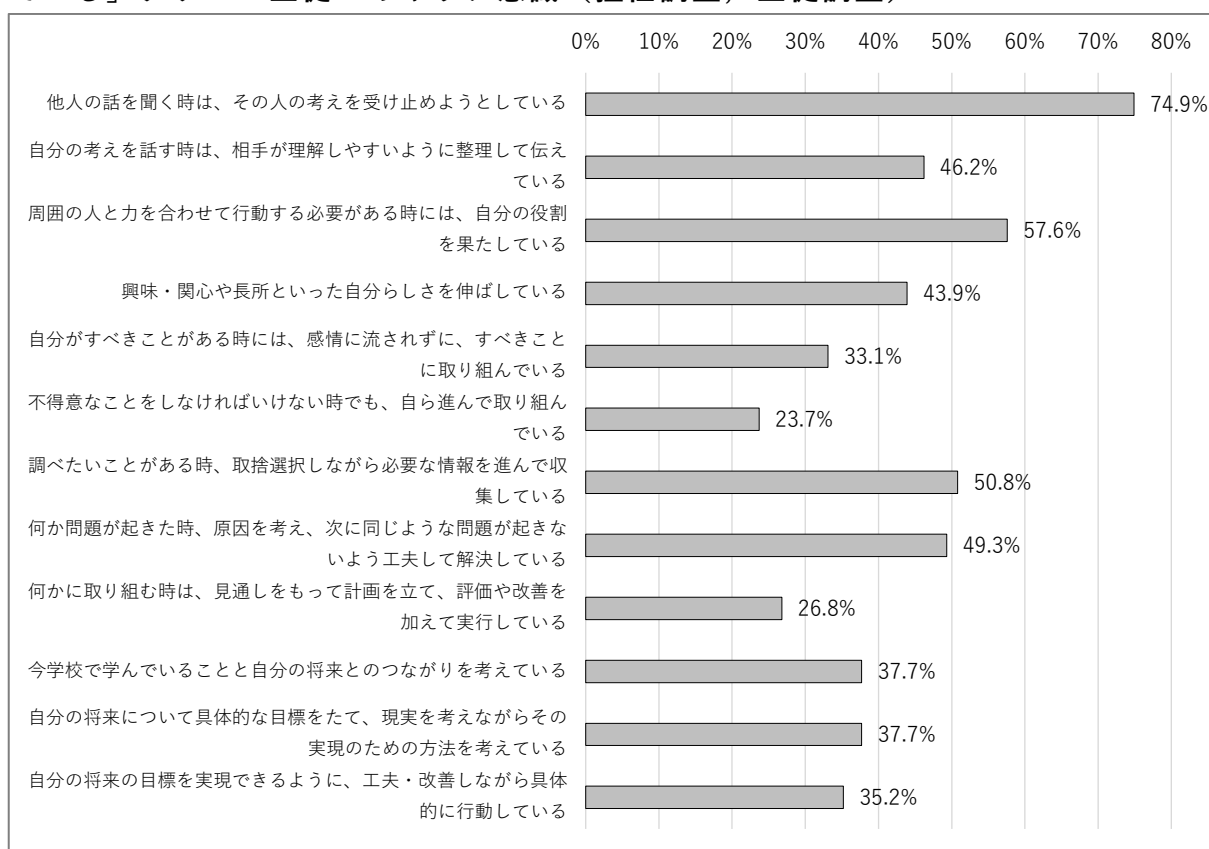
③担任の「キャリア・パスポート等の活用」と、生徒のキャリア意識や学びに対する姿勢

では担任の「キャリア・パスポート」の作成・活用と生徒のキャリア意識や学びに対する姿勢には、どのような関連が見られるのだろうか。以下にて、担任による「キ

キャリア・パスポート」の活用がもっとも進んでいる（図4参照）「生徒の進路（進学や就職）支援の資料として活用している」（問11の5）に焦点をあてて見ていく。

担任が生徒の進路支援の資料としてキャリア・パスポートを活用しているクラスの生徒のキャリア意識（生徒調査問10）について、「いつもそうしている」と明確な回答をした割合を示したものが図5である。

【図5】担任が「キャリア・パスポート」を「生徒の進路支援の資料として活用している」クラスの生徒のキャリア意識（担任調査，生徒調査）

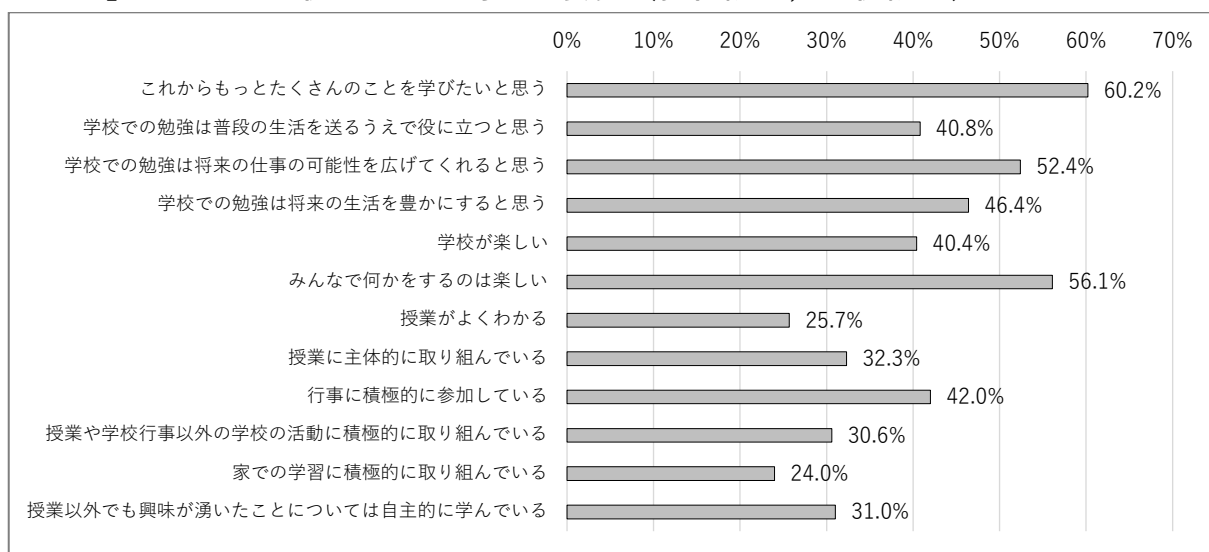


※回答は、「いつもそうしている」「時々そうしている」「していない」から1つを選択する形式であった。

「他人の話聞く時は、その人の考えを受け止めようとしている」（74.9%）、「周囲の人と力を合わせて行動する必要がある時には、自分の役割を果たしている」（57.6%）など、基礎的・汎用的能力を構成する「人間関係形成・社会関係形成能力」の高さが目立つほか、「調べたいことがある時、取捨選択しながら必要な情報を進んで収集している」（50.8%）、「何か問題が起きた時、原因を考え、次に同じような問題が起きないように工夫して解決している」（49.3%）といった「課題対応能力」に関する回答も半数程度見られた。

同様に、生徒の学びに対する姿勢（生徒調査問15）について、「あてはまる」と明確な回答をした割合を示したものが図6である。

【図6】担任が「キャリア・パスポート」を「生徒の進路支援の資料として活用している」クラスの生徒の学びに対する姿勢（担任調査，生徒調査）



※回答は、「あてはまる」「どちらかと言えば、あてはまる」「どちらかと言えば、あてはまらない」「あてはまらない」から1つを選択する形式であった。

「これからもっとたくさんを学びたいと思う」（60.2%）、「みんなで何かをするのは楽しい」（56.1%）だけでなく、「学校での勉強は将来の仕事の可能性を広げてくれると思う」（52.4%）も半数以上の回答が見られるなど、学びに対する姿勢が前向きであり、学びのレリバンス意識も高いことがうかがえる。

参考：第一次報告書における参照データ

- *1 P199 高等学校・学校調査 問17
- *2 P216 高等学校・ホームルーム担任調査 問11
- *3 P197, P198 高等学校・学校調査 問16
- *4 P200 高等学校・学校調査 問17 (2)
- *5 P195 高等学校・学校調査 問14 (2)
- *6 P216 高等学校・ホームルーム担任調査 問11
- *7 P246 高等学校・生徒調査 問16

4. 各学校種調査結果の比較分析

(1) 各学校種調査結果の比較分析で用いた調査票

各学校種調査結果の比較分析に用いた調査票は、小学校、中学校及び高等学校の①キャリア教育の実施状況と管理職の意識調査(学校調査)、②学級・ホームルーム担任の意識調査(学級・ホームルーム担任調査)、③児童生徒の意識調査(児童生徒調査)の三つであり、計九つである。

(2) テーマ1 学校・教員の取組と児童生徒の「学びのレリバンズ意識」

○各校種段階や学校の特性に応じたキャリア教育の実践が、児童生徒の「学びのレリバンズ意識(学ぶことについて将来とのつながりや意義等について考える意識)」に影響していると考えられる

- ・小学校においては、キャリア教育に関する授業実践が実施されている学校や、将来について具体的な目標を立てることなどについて学級担任による働きかけがある学校の児童の「学びのレリバンズ意識」が高い。
- ・中学校では、キャリア教育目標に基づき、体験活動に関する実践がなされている学校の生徒で「学びのレリバンズ意識」が高いと考えられる。
- ・高等学校に関しては、学校の特性等の違いによりキャリア教育に関する取組状況が異なると考えられるため解釈が難しい部分もあるが、「学びのレリバンズ意識」に関し、「進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッションの実施」や「事業所や上級学校での体験活動にかかわる事前指導・事後指導」が重要であることが示唆される結果が得られた。

1. 分析の背景・目的

児童生徒の学力低下・学習意欲の低下が課題と考えられるようになって久しい。OECDのPISA調査では、「勉強することは役に立つ」といった項目への回答割合について、我が国の児童生徒は他国と比べ低いことが示されてきた。

また、昨今の自然災害の発生や新型コロナウイルス感染症の感染拡大なども含め、様々な要因により将来に対する不透明性が高まっている。このほか、AI技術等の進展などもあり、将来求められる能力等が様々な形で再定義され、変容等していくことが想定される。

このような中で、児童生徒が学ぶことに意義を見だし将来に向かう姿勢を有するということが重要なことであろうと考えられるが、学校・教員によるキャリア教育に関する取組の実施は、このような児童生徒の意識の在り方にどのように関係しているであろうか。

本稿では、児童生徒が学ぶことについて将来とのつながりや意義等について考える

意識を「学びのレリバンス意識」としてとらえることとし、その意識の在り方と、学校での実践や担任による指導との関連性について分析を行った。小学校、中学校、高等学校で共通の枠組みにより分析を行うことで、段階別の共通点や差異などについて把握・整理することを試みた。

2. 「学びのレリバンス意識」について

本稿では、「学びのレリバンス意識」として、三つの調査項目に着目した。

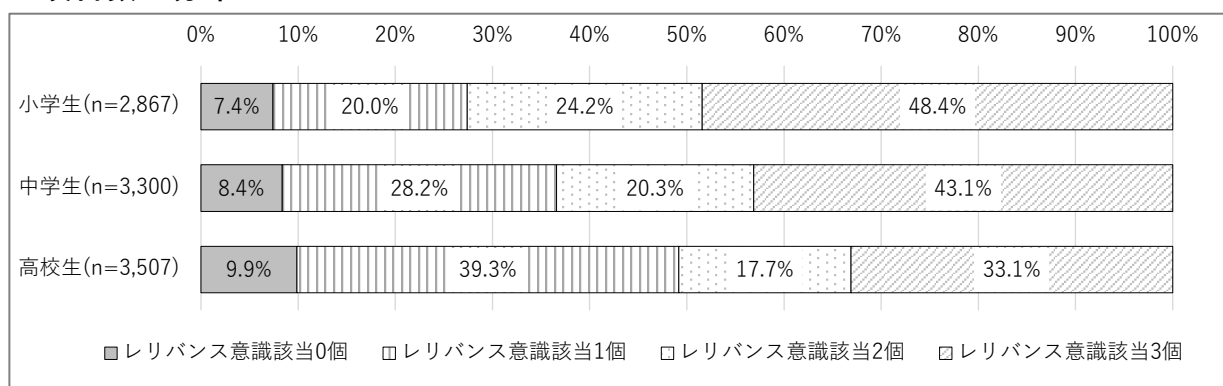
一つ目は、「将来とのつながりを考えている」というものであり、小学生は「学校で学んでいることと自分が大人になった時のこととのつながりを考えている」（問5J）、中学生・高校生は「今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えている」（問8J, 問10J）の項目で調査をしている。それぞれ「いつもしてそうしている」「時々そうしている」「していない」の三つの選択肢による回答が得られている。

二つ目は「役に立つ」という意識を持っているかというものであり、小学生・中学生・高校生ともに、「学校での勉強は普段（ふだん）の生活を送るうえで役に立つと思う」（問7B, 問13B, 問15B）という項目で調査をしている。この調査項目については、「あてはまる」、「どちらかと言えば、あてはまる」、「どちらかと言えば、あてはまらない」、「あてはまらない」の四つの選択肢による回答が得られている。

三つ目は、「可能性を広げてくれる」というものであり、「学校での勉強は将来の仕事の可能性を広げてくれると思う」という項目で、「あてはまる」、「どちらかと言えば、あてはまる」、「どちらかと言えば、あてはまらない」、「あてはまらない」の選択肢で、小学生、中学生、高校生共通の形で回答が得られている（問7C, 問13C, 問15C）。

これらの項目の回答分布は第一次報告書（P.97, 99, 155, 164, 234, 245）に示されており、全体としては肯定的な回答割合が高いことが確認できる。今回これらの項目をもとに「学びのレリバンス意識」に関して分析をするに当たり、「将来とのつながりを考えている」の項目については「いつもそうしている」又は「時々そうしている」、「役に立つ」と「可能性を広げてくれる」の項目は「あてはまる」の回答に着目し、それらの回答をした該当項目数に着目した。その分布を示したのが図1である。

【図1】「学びのレリバンス意識」に関する項目についての児童生徒の肯定的な回答の項目数の分布



3. キャリア教育における取組実施状況との関連性

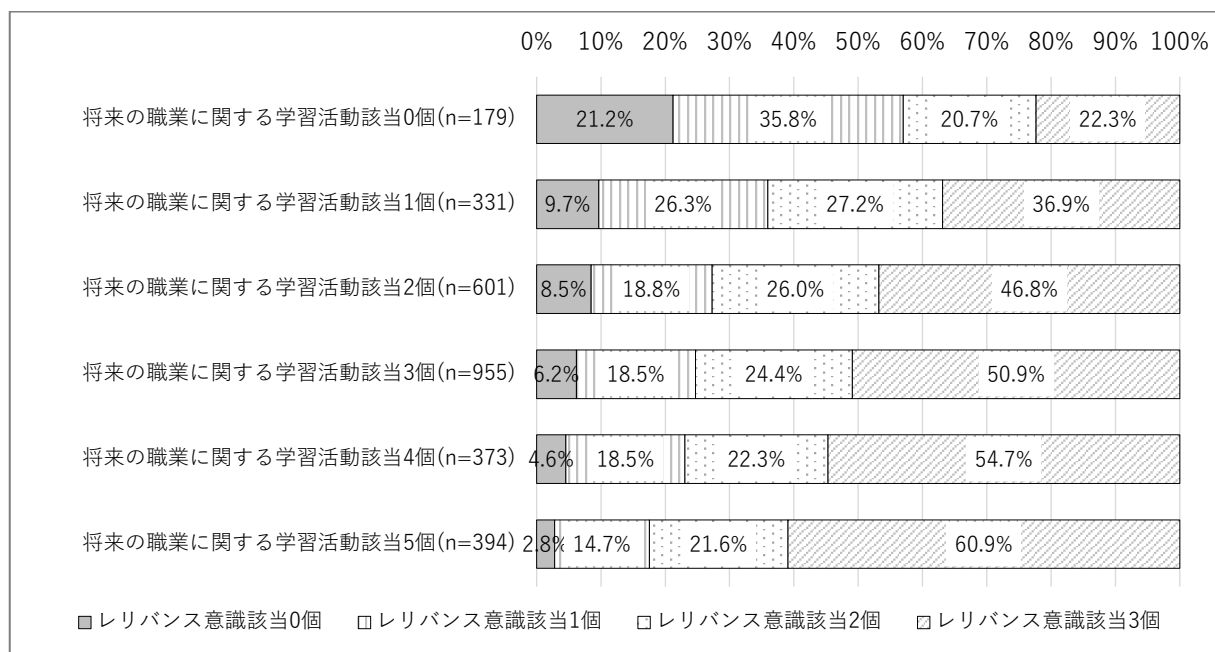
キャリア教育における取組の実施は「学びのレリバンス意識」とどのように関係しているだろうか。この点に関し、まず、児童生徒自身の回答をもとにして検討を行った。

小学生に関して「お店や工場，農家や漁師の仕事など，いろいろな仕事を知る学習」，「自分にあった職業を考える学習」，「自分がなりたい職業の内容について調べる活動」，「お店や工場，農家や漁師の仕事などの職業を見学したり体験したりする活動」，「大人の人から職業についてのお話を聞いたり，質問したりする活動」の五つの項目について活動したことがあるかどうかを尋ねた設問（問6）との関係を見ると，「ある」と回答した項目数が多い児童では，「学びのレリバンス意識」の肯定的な回答項目数も多い傾向にあることが把握された（図2）。

中学生，高校生については小学生と同じ調査項目はなく，また，この結果はあくまで児童自身が回答したものであるが，学校における取組実施が，児童生徒の意識の在り方と一定程度関係性がありそうだということを把握することができる。

このような関連性が見られることも踏まえ，続いて，学校調査と担任調査のデータとの関係により，どのような学校の児童生徒が，「学びのレリバンス意識」をより高く有しているのかを把握するための分析を行った。

【図2】小学生の将来の職業に関する学習活動の該当個数と「学びのレリバンス意識」に関する項目についての児童の肯定的な回答項目数との関係



4. 学校調査データを用いた分析

学校調査から把握される各学校における取組状況について、次の表に示した各調査項目に着目した。「計画の策定」は全体計画と年間指導計画を策定しているか否か、「計画での重視事項」については、キャリア教育の計画を立てる上で重視した事柄として、計画の立て方や内容面に着目した。

「企画・実践面の内容」に関しては、「授業実践」に関する内容と、「体験活動」に関する内容のそれぞれに関し、各学校で実施していると回答されたものと児童生徒の「学びのレリバンス意識」との関連性について分析を行った。

このほか、「キャリア・パスポート」を作成している学校であるか否かという点に着目して分析した。

【表1】調査項目と各調査票の設問番号の対応表（学校調査・児童生徒調査）

	内容・要素	調査項目	小学校	中学校	高校
学校調査	計画策定	全体計画の策定有無	問 4(1)A	問 4(1)A	問 6(1)A
		年間指導計画の策定有無	問 4(2)A	問 4(2)A	問 6(2)A
	計画での重視事項	発達の段階に応じたキャリア教育の実践が行われるようにすること	問 5_3	問 5_3	問 7_3
		児童／生徒が、学年末や卒業時まで「〇〇ができるようになる」など、具体的な目標を立てること	問 5_4	問 5_4	問 7_4
		現在の学びと将来の進路との関連を児童／生徒に意識づけること	問 5_5	問 5_5	問 7_5
		児童／生徒に進路に関する情報を得させる活動を取り入れること	問 5_14	問 5_14	問 7_14
		具体的な進路（就職先や進学先等）の選択や決定に関する指導・援助を行うこと	-	問 5_15	問 7_15
	企画・実践の内容（授業実践）	児童／生徒のキャリア発達を意識した各教科（・科目）の授業	問 11_1	問 11_1	問 13_1
		将来設計全般に関する学習の実施	問 11_5	問 11_5	問 13_5
		進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッションの実施	問 11_7	問 11_7	問 13_7
		就職後の離職・転職など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応に関する学習	問 11_16	問 11_16	問 13_16
	企画・実践の内容（体験活動）	職場の訪問や見学、職業の調査・研究活動	問 11_8	問 11_8	問 13_8
		事業所における体験活動	問 11_9	問 11_9	問 13_9
		上級学校における体験活動	問 11_10	問 11_10	問 13_10
		事業所や上級学校での体験活動にかかわる事前指導・事後指導	問 11_11	問 11_11	問 13_11
	「キャリア・パスポート」の作成	問 15(1)	問 15(1)	問 17(1)	

注)「具体的な進路（就職先や進学先等）の選択や決定に関する指導・援助を行うこと」について、小学校では調査を実施していない。

前掲の各項目と児童生徒の「学びのレリバンス意識」とのクロス集計に関し、検定の結果を整理すると、後掲のようになった。

【表2】学校の取組状況と「学びのレリバンス意識」との関連にかかるとの分析結果（学校調査・児童生徒調査）

内容・要素	調査項目	小学校	中学校	高校	
学校調査	計画策定	全体計画の策定有無			
		年間指導計画の策定有無			
	計画での重視事項	発達の段階に応じたキャリア教育の実践が行われるようにすること		**	**
		児童／生徒が、学年末や卒業時まで「〇〇ができるようになる」など、具体的な目標を立てること	*		
		現在の学びと将来の進路との関連を児童／生徒に意識づけること			*
		児童／生徒に進路に関する情報を得させる活動を取り入れること	*		
		具体的な進路（就職先や進学先等）の選択や決定に関する指導・援助を行うこと	-		**
	企画・実践の内容（授業実践）	児童／生徒のキャリア発達を意識した各教科（・科目）の授業	*		
		将来設計全般に関する学習の実施	*		
		進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッションの実施	*		**
就職後の離職・転職など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応に関する学習		-		**	
企画・実践の内容（体験活動）	職場の訪問や見学，職業の調査・研究活動		*	**	
	事業所における体験活動			**	
	上級学校における体験活動			**	
	事業所や上級学校での体験活動にかかわる事前指導・事後指導			**	
「キャリア・パスポート」の作成					

** : p<0.01, * : p<0.05

注) 実施していない学校の児童生徒の方が「学びのレリバンス意識」の肯定的な回答割合が高いという関係であった場合には網掛けをした。

注) 「就職後の離職・転職など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応に関する学習」について、小学校では実施している学校が0校であり比較ができなかった。

小学生、中学生については、幾つかの点に関して、学校でのキャリア教育に関する取組の実施と児童生徒の「学びのレリバンス意識」との間に正の関連性があることが明らかになった。

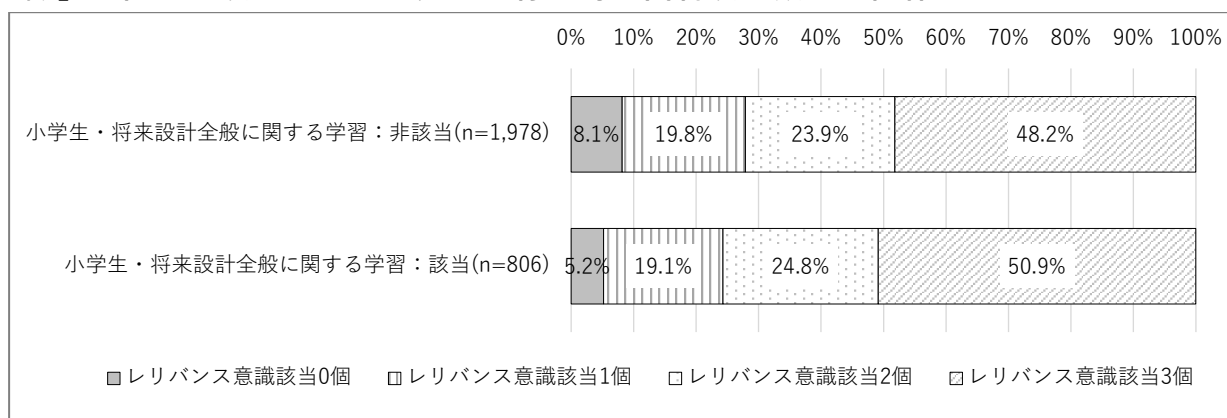
小学生の場合には、計画での重視事項として、「児童が、学年末や卒業時まで「〇〇ができるようになる」など、具体的な目標を立てること」や「児童に進路に関する情報を得させる活動を取り入れること」に回答があった学校において、また、授業実践に関し「児童のキャリア発達を意識した各教科の授業」、「将来設計全般に関する学習」、「進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッションの実施」に回答があった学校で、児童の「学びのレリバンス意識」の肯定的な回答項目数が多い傾向となっている。

中学生の場合には、計画での重視事項として「発達の段階に応じたキャリア教育の実践が行われるようにすること」に回答があった学校、体験活動に関し「職場の訪問や

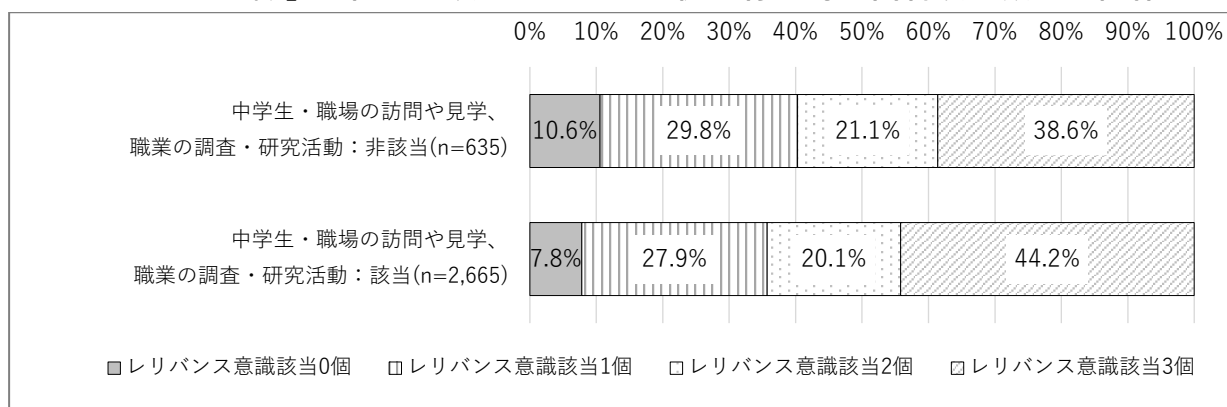
見学，職業の調査・研究活動」に回答があった学校において，生徒の「学びのレリバンス意識」の肯定的な回答項目数が多い傾向が見られている。

（なお，中学生に関して，本報告書「2-2 中学校調査結果の分析」で示された，職場体験活動及び事前指導・事後指導を重視している学校（「職場体験重視校」）であるか否かで分析すると，職場体験重視校の生徒の方が「学びのレリバンス意識」の肯定的な回答項目数が多いという傾向も見られた。）

【図3】小学校の「将来設計全般に関する学習」の実施の有無と「学びのレリバンス意識」に関する項目について児童の肯定的な回答項目数との関係



【図4】中学校の「職場の訪問や見学，職業の調査・研究活動」の実施の有無と「学びのレリバンス意識」に関する項目について生徒の肯定的な回答項目数との関係



高校生については，学校での取組の実施と生徒の「学びのレリバンス意識」との関連性が負の関係になっているものが見られる。これは，学校の特徴（「学びのレリバンス意識」がもともと高い生徒が多い学校であるか否か等）の違いがあることが影響しているのではないかと考えられる。

下記に，高校について「普通科」の生徒と「それ以外の学科」の生徒に分けて実施した分析結果と，それとは別に，学校の進学率について「4割未満」の場合に限定した分析結果を示した。

（なお，学校の進学率は，進学準備中の者については将来的には進学するものと想定して進学者の数に含める形で，「4割未満」，「4割以上7割未満」，「7割以上9割未満」，

「9割以上」の四つの選択肢で回答を得たものである。今回、進学率が「4割未満」の学校に着目することで、キャリア教育の実践が求められる度合いや在籍する生徒の特性等に関し、ある程度均質の集団を取り出して分析することができるのではないかと考えた。）

【表3】学校の取組状況と「学びのレリバンス意識」との関連にかかる分析結果（高等学校のみ）（学校調査・生徒調査）

	内容・要素	調査項目	高校生	高校生	高校生
			(普通科)	(その他の学科)	(進学率4割未満)
学校調査	計画策定	全体計画の策定有無			
		年間指導計画の策定有無	*		
	計画での重視事項	発達の段階に応じたキャリア教育の実践が行われるようにすること		**	
		生徒が、学年末や卒業時まで「〇〇ができるようになる」など、具体的な目標を立てること			
		現在の学びと将来の進路との関連を生徒に意識づけること		*	
		生徒に進路に関する情報を得させる活動を取り入れること			
		具体的な進路（就職先や進学先等）の選択や決定に関する指導・援助を行うこと	**		
	企画・実践の内容（授業実践）	生徒のキャリア発達を意識した各教科（・科目）の授業			
		将来設計全般に関する学習の実施			
		進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッションの実施	*		**
		就職後の離職・転職など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応に関する学習	**		
	企画・実践の内容（体験活動）	職場の訪問や見学、職業の調査・研究活動	*	*	
		事業所における体験活動	**	**	—
		上級学校における体験活動		*	
		事業所や上級学校での体験活動にかかわる事前指導・事後指導	**	**	**
		「キャリア・パスポート」の作成			

** : p<0.01, * : p<0.05

注) 実施していない学校の児童生徒の方が「学びのレリバンス意識」の肯定的な回答割合が高いという関係であった場合には網掛けをした。

注) 「進学率4割未満」の学校で「事業所における体験活動」はすべての学校が実施しているとの回答であり、クロス集計による比較・検定ができなかった。

「普通科」と「それ以外の学科」を分類した上での分析結果では、ともに、やはりキャリア教育に関する取組の実施と生徒の「学びのレリバンス意識」との関連性が負の関係になっているものが多い。これは、キャリア教育に関する取組が生徒に負の影響を及ぼしているということではなく、「普通科」と「それ以外の学科」に分類した上でも、「学びのレリバンス意識」がもともと高い生徒が多い学校では、(大学進学・受験のことをより意識した教育実践がなされているなど) キャリア教育に関する取組が余り実施されないという関係性にあるということなのではないかと推察される。

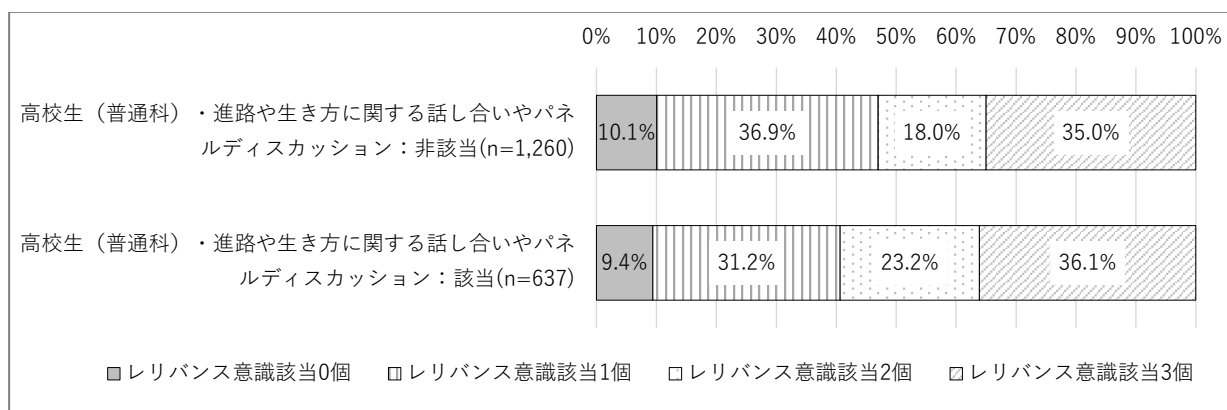
この点に関し、進学率が4割未満の学校の生徒に限った分析の結果を見ると、学校での取組の状況と生徒の「学びのレリバンス」との関係について負のものはなく、「進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッションの実施」と「事業所や上級学校での体験活動にかかわる事前指導・事後指導」について、それぞれ実施している学校の生徒の方が「学びのレリバンス意識」が高いという関係になっている。

また、正の関連性が見られている点に改めて着目すると、「普通科」において、「具体的な進路（就職先や進学先等）の選択や決定に関する指導・援助を行うこと」と「進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッションの実施」について、「学びのレリバンス意識」と正の関連性があるという結果となっている。「その他の学科」に関しては、「上級学校における体験活動」のほか、「事業所や上級学校での体験活動にかかわる事前指導・事後指導」を実施している学校の生徒で「学びのレリバンス意識」が高いという結果となっている。

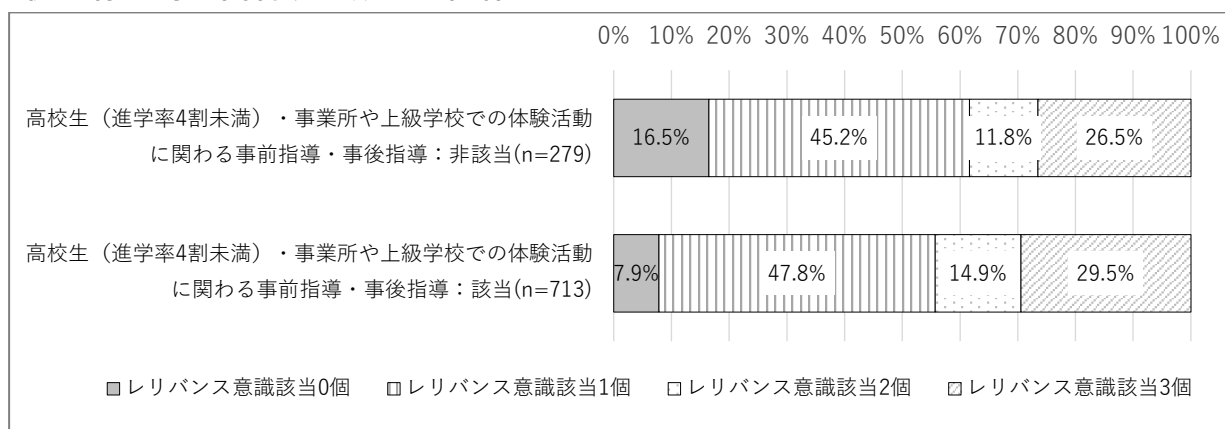
「進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッションの実施」が、「学びのレリバンス意識」に対して関連性があることは、学校の特性に分類しないで行った高校生全体についての分析や、進学率4割未満の学校の生徒に限った場合の分析でも示された。これは、学校の特性（在籍する生徒の特性）にかかわらず、生徒自身に将来のことについて考えさせる機会を学校において設けることが重要であるということを示唆する結果なのではないかと考えられる。

また、「事業所や上級学校での体験活動にかかわる事前指導・事後指導」に関しては、「普通科」に関する分析では負の関連性が見られるのに対し、「その他の学科」や進学率4割未満の学校に限った分析においては正の関連性が見られ、特徴的な結果となっている。特に進学率4割未満の学校に関しては、「事業所における体験活動」は全ての学校が実施していると回答している中で、「事業所や上級学校での体験活動にかかわる事前指導・事後指導」を実施していると回答があった学校の生徒の方が「学びのレリバンス意識」について肯定的な回答項目数が多いという関係となっている。体験活動等の取組をより重視しているような学校において、事前指導・事後指導の実施の重要性が高いということを示唆する結果なのではないかと考えられる。

【図5】 高等学校（普通科）の「進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッション」の実施の有無と「学びのレリバンス意識」に関する項目について生徒の肯定的な回答項目数との関係



【図6】高等学校（進学率4割未満）の「事業所や上級学校での体験活動に関わる事前指導・事後指導」の実施の有無と「学びのレリバンス意識」に関する項目について生徒の肯定的な回答項目数との関係



5. 担任調査データを用いた分析

続いて、学級・ホームルーム担任調査から把握される教員のキャリア教育に関する態度や、児童生徒への働きかけの違い等について、次の表に示した各調査項目に着目した。

「キャリア教育に関する態度」としては、教員のキャリア教育に関する認識・理解度の高さということに着目し、「計画に基づく学級・ホームルーム実践」としては、学級・ホームルーム又は学年におけるキャリア教育の計画・実施の状況を把握できる項目に着目した。「児童生徒への働きかけ」については、「学びのレリバンス意識」に直接的に作用しうるような指導をどの程度実施しているかということに着目した。

【表4】調査項目と各調査票の設問番号の対応表（担任調査・児童生徒調査）

	内容・要素	調査項目	小学校	中学校	高校
担任調査	キャリア教育に関する態度	学校のキャリア教育目標に関する認識・理解度	問4	問4	問5
		「基礎的・汎用的能力」に関する認識・理解度	問5	問5	問6
	計画に基づく学級・ホームルーム実践	学級・ホームルームまたは学年のキャリア教育の計画は、児童/生徒のキャリア発達の課題に即して作成されたものである	問6_1	問6_1	問7_1
		学級・ホームルームまたは学年のキャリア教育は計画に基づいて実施している	問6_3	問6_3	問7_3
児童生徒への働きかけ		「学ぶことや働くことの意義について理解し、学校での学習と自分の将来をつなげて考えること」について指導	問8(10)	問8(10)	問9(10)
		「自分の将来について具体的な目標を立て、現実を考えながらその実現のための方法を考えること」について指導	問8(11)	問8(11)	問9(11)

		「自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫・改善したりすること」について指導	問 8(12)	問 8(12)	問 9(12)
--	--	---	---------	---------	---------

前掲の各項目と児童生徒の「学びのレリバンス意識」とのクロス集計に関し、検定の結果を整理すると、後掲のようになった。

【表 5】担任教員の取組状況と「学びのレリバンス意識」との関連にかかる分析結果（担任調査・児童生徒調査）

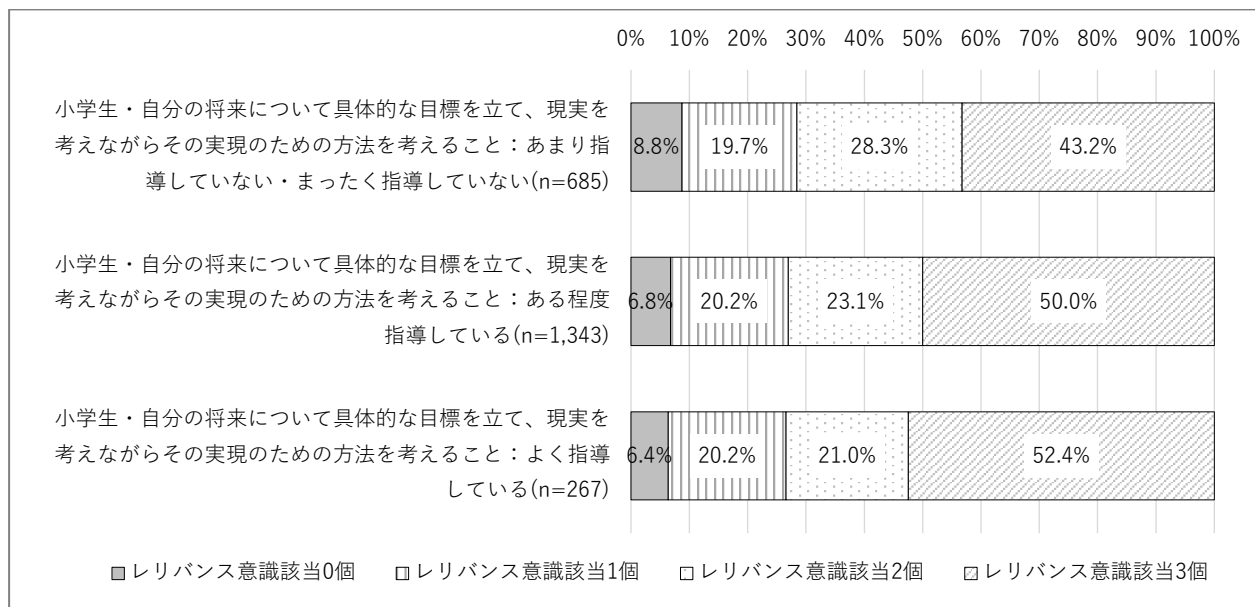
	内容・要素	調査項目	小学校	中学校	高校
担任調査	キャリア教育に関する態度	学校のキャリア教育目標に関する認識・理解度		*	
		「基礎的・汎用的能力」に関する認識・理解度			*
	計画に基づく学級・ホームルーム実践	学級・ホームルームまたは学年のキャリア教育の計画は、児童/生徒のキャリア発達の課題に即して作成されたものである			
		学級・ホームルームまたは学年のキャリア教育は計画に基づいて実施している	*		
児童生徒への働きかけ		「学ぶことや働くことの意義について理解し、学校での学習と自分の将来をつなげて考えること」について指導			
		「自分の将来について具体的な目標を立て、現実を考えながらその実現のための方法を考えること」について指導	*		
		「自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫・改善したりすること」について指導			

** : p<0.01, * : p<0.05

注) 認識・理解度が低い、又は指導していないと回答した担任の児童生徒の方が「学びのレリバンス意識」の肯定的な回答割合が高いという関係であった場合には網掛けをした。

小学生に関しては、担任が「学級・ホームルームまたは学年のキャリア教育は計画に基づいて実施している」と回答している場合や、「自分の将来について具体的な目標を立て、現実を考えながらその実現のための方法を考えること」について「指導している」と回答している場合に、児童の「学びのレリバンス意識」について肯定的な回答項目数が比較的多いという関係が見られる。

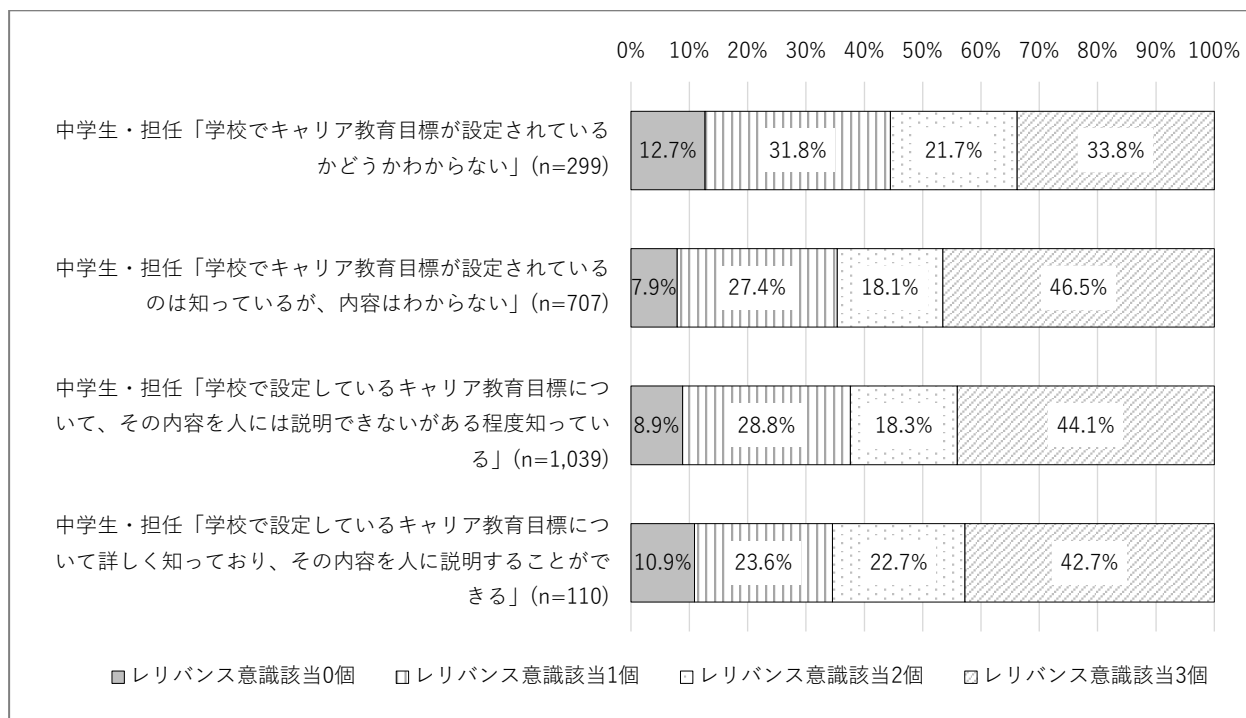
【図7】小学校担任の「自分の将来について具体的な目標を立て、現実を考えながらその実現のための方法を考えること」の指導の状況と実施の有無と「学びのレリバンズ意識」に関する項目について児童の肯定的な回答項目数との関係



中学生に関しては、「学校のキャリア教育目標に関する認識・理解度」について「学校でキャリア教育目標が設定されているかどうか分からない」と回答している場合に、生徒の「学びのレリバンズ意識」が比較的低いという関係が見られている。

「児童生徒への働きかけ」として着目した項目については統計的に有意な関連性が見られなかったが、これは、中学校においては教科担任制であるということも影響しているのではないかと推察される。

【図 8】 中学校担任の学校におけるキャリア教育目標の認識と「学びのレリバンス意識」に関する項目について生徒の肯定的な回答項目数との関係



高校生に関しては、『『基礎的・汎用的能力』に関する認識・理解度』について『『基礎的・汎用的能力』について詳しく知っており、その内容を人に説明することができる』と回答した場合に生徒の「学びのレリバンス意識」が比較的低いという関係が見られているが、この点については、やはり学校の特性の違いが影響しているのではないかと推察される。

学校調査との関係性の中で見られた結果も踏まえると、高等学校に関しては、キャリア教育に関する取組をより意識的に行っている学校であるということと、生徒の「学びのレリバンス意識」の水準との関係については、小学校、中学校よりも複雑な関係性にあるのではないかと考えられる。

(なお、本報告書「2-3 高等学校調査結果の分析」では、担任による指導が生徒のレリバンス意識に作用しているのではないかと示されている。)

6. まとめ

以上のように、児童生徒の「学びのレリバンス意識(学ぶことについて将来とのつながりや意義等について考える意識)」に関して、学校調査から把握される取組の状況と、学級・ホームルーム担任調査から把握される教員の態度・働きかけの状況との関連性について、調査項目間のクロス集計を行った。

クロス集計及び検定の結果として、小学校においては、学校として計画を策定する際の重視事項として、「児童が、学年末や卒業時まで「○○ができるようになる」など、具体的な目標を立てること」や「児童に進路に関する情報を得させる活動を取り入れること」に回答があった学校において、また、授業実践に関し「児童のキャリア発達

を意識した各教科の授業」、「将来設計全般に関する学習」、「進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッションの実施」に回答があった学校で、児童の「学びのレリバンズ意識」の肯定的な回答項目数が多い傾向であった。担任調査との関係性としても、計画策定に基づく取組実施や、児童に対する担任からの働きかけが重要であることが示された。

中学校に関しては、「発達の段階に応じたキャリア教育の実践が行われるようにすること」といったことを計画策定の際に重視している学校で、生徒の「学びのレリバンズ意識」の肯定的な回答項目数が多い傾向であった。また、各教員が学校のキャリア教育目標を認識していることや、「職場の訪問や見学、職業の調査・研究活動」などの体験活動が実践されていることが、生徒の「学びのレリバンズ意識」に作用するのではないかという分析結果が示された。

高等学校に関しては学校の特性等の違いによりキャリア教育に関する取組状況が異なると考えられるため解釈が難しい部分もあるが、学校の特性にかかわらず、「進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッションの実施」など、生徒自身に将来のことについて考えさせる機会を学校において設けることが重要であるということが示唆される結果が得られた。また、「学びのレリバンズ意識」に関し、「事業所における体験活動」などを実施する際には事前指導・事後指導が重要であるということを示す分析結果も得られた。

(3) テーマ2 学校・教員の取組と児童生徒の「課題対応能力」

○各学校段階に応じたキャリア教育の実践が、児童生徒の「課題対応能力」と関連を有すると考えられる

- ・小学校においては、全体計画に「キャリア教育の全体目標」が盛り込まれること、「進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッションの実施」などの授業実践を行うこと、学級のキャリア教育の計画が児童のキャリア発達の課題に即して作成され、また、計画に基づいてキャリア教育を実施すること、児童に成長について振り返りをさせる学校の児童の「課題対応能力」が高い。
- ・中学校においては、全体計画に「キャリア教育の成果に関する評価方法」を盛り込むこと、「職場の訪問や見学、職業の調査・研究活動」「事業所や上級学校での体験活動にかかわる事前指導・事後指導」を実施すること、学級におけるキャリア教育で「キャリア・カウンセリングを実施している」こととこれに関連してキャリア・カウンセリングの中で生徒に自身の成長の振り返りを促すこと、加えて、「起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するのかを工夫すること」「活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること」を学級担任が指導する学校の生徒で「課題対応能力」が高い。
- ・高等学校においては、全体計画に「キャリア教育の成果に関する評価方法」が盛り込まれていること、年間指導計画に「キャリア・カウンセリング」が盛り込まれていることが教員の指導を通じて生徒の「課題対応能力」の能力実感に作用している可能性がある。

1. 分析の背景・目的

先を見通すことが難しい社会であると言われていたが、自然災害や新型コロナウイルス感染症の拡大等、想定していない状況に巻き込まれることが実際に起きている。

このような社会情勢の下でキャリア形成していくことを考えると、特に児童生徒にとっては、自身の置かれた状況を適切に判断し、その時々課題を着実に解決する力が重要になる。こうした、状況判断と課題設定、設定した課題を解決する力、すなわち基礎的・汎用的能力の中の「課題対応能力」は、急に身に付くものではなく、学校の教育活動全体を通じて育まれるものであり、他の章でも着目した、カリキュラム・マネジメントや体験活動、「キャリア・パスポート」といった各種の働きかけを通じて、気づきを促し、主体的に考えさせ、行動や意識の変容を企図して働きかけること(=キャリア・カウンセリング)を通じて身に付けるものである。

以上のように、「課題対応能力」の重要性を改めて確認せざるを得ない状況であり、児童生徒が身に付けるべき資質・能力としての「課題対応能力」への関心が高まる一方で、国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2019: 18-19)が示したとおり、教師の指導の力点は必ずしも「課題対応能力」には置かれてこなかったことが明らかになっている(小学校教員で「課題対応能力」をよく指導していると答えた者の割合は、28.8%)。

各学校や児童生徒の実態を踏まえてキャリア教育が推進されるべきであることに鑑みれば、すべての学校で「課題対応能力」を伸長する指導をすべきとは限らない。しかし、児童生徒が在学時及び学校を離れたあとでも継続的にキャリア形成をしていけるようになるための基盤と考えれば、今後のキャリア教育の全体計画・年間指導計画の改善時に、「課題対応能力」の視点からキャリア教育目標及び計画を再考したい学校もあるかもしれない。

このことを踏まえて、学校及び教員のキャリア教育に係る取組状況の中から「課題対応能力」に関連する要因を探索する。その結果を踏まえ、「課題対応能力」の指導に重点を置きたい学校及び教師にとっての示唆を提示する。

2. 「課題対応能力」について

本稿では、「課題対応能力」として、次の三つの調査項目に着目した。なお、いずれの回答も「いつもそうしている」「時々そうしている」「そうしていない」の三つの選択肢による回答が得られている。

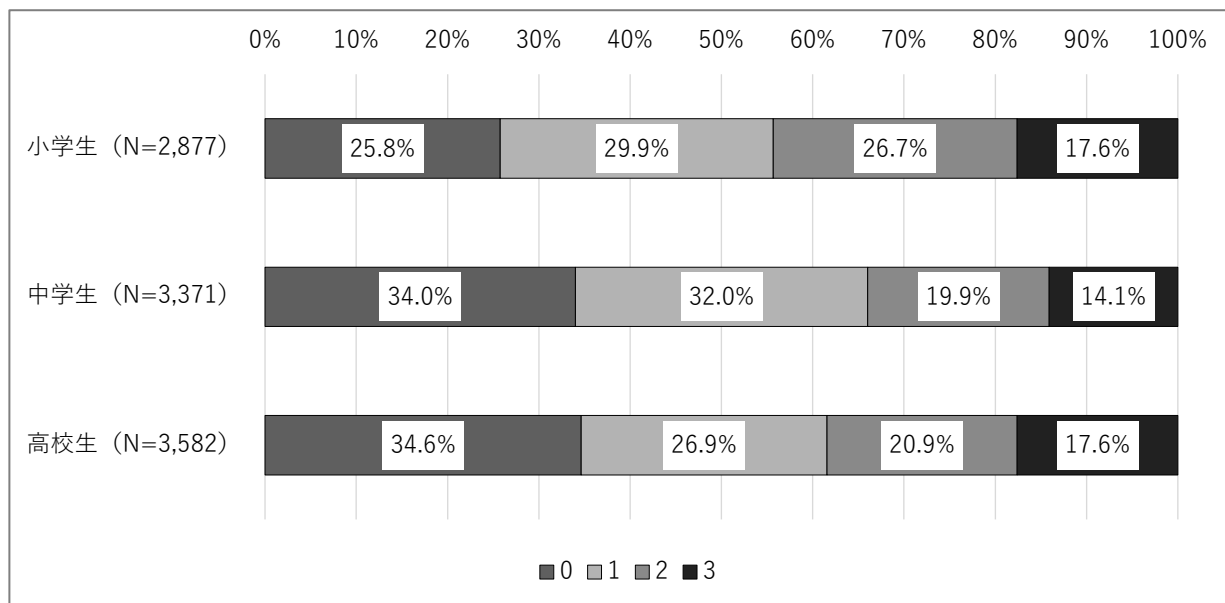
一つ目は、「情報収集」であり、小学生は「知りたいことがある時、進んで情報を集めている」、中学生は「調べたいことがある時、進んで情報を集めている」、高校生は「調べたいことがある時、取捨選択しながら必要な情報を進んで収集している」の項目で調査をしている。

二つ目は「課題解決」であり、小学生は「何か問題が起きた時、原因を考えて、解決するように工夫している」、中学生・高校生ともに「何か問題が起きた時、原因を考え、次に同じような問題が起きないように工夫して解決している」という項目で調査をしている。

三つ目は、「PDCA サイクル」であり、小学生は「何かをする時は、計画を立て、工夫しながら進めている」、中学生は「何かをする時、見通しをもって計画を立て、改善をしながら取り組んでいる」、高校生は「何かに取り組む時は、見通しをもって計画を立て、評価や改善を加えて実行している」という項目で調査をしている。

これらの項目の回答分布は第一次報告書（P.97, 155, 234）に示されており、全体としては肯定的な回答割合が高いことが確認できる。今回分析をするに当たり、いずれの項目も「いつもそうしている」に焦点を絞り、それらの回答をした該当項目数に着目した。その分布を示したのが図1である。

【図 1】課題対応能力に関する項目に「いつもそうしている」と回答した項目数の分布



注) 小学生：問 5, 中学生：問 8, 高校生：問 10

3. 学校調査データを用いた分析

学校調査から把握される各学校における取組状況について、「計画策定」「企画・実践面の内容」「キャリア・パスポート」にかかる調査項目に着目した。「計画策定」は全体計画と年間指導計画を策定しているか否か及び各計画に盛り込んだ事項に着目した。「企画・実践面の内容」に関しては、「授業実践」に関する内容と、「体験活動」に関する内容のそれぞれに関し、実施しているものと児童生徒の「課題対応能力」との関連性について分析を行った。このほか、「キャリア・パスポート」を作成している学校であるか否かという点に着目して分析した。なお、本節の分析では前節とは異なる対象に着目していることを踏まえて、「計画の重視事項」から各計画に盛り込んだ項目へと着目する変数を変更している。

【表1】調査項目と各調査票の設問番号の対応表（学校調査・児童生徒調査）

内容・要素	調査項目	小学生	中学生	高校生	
学校調査	計画策定	全体計画の策定有無	問 4(1)A	問 4(1)A	問 6(1)A
		全体計画に盛り込んだ事項	問 4(1)B	問 4(1)B	問 6(1)B
		年間指導計画の策定有無	問 4(2)A	問 4(2)A	問 6(2)A
		年間指導計画に盛り込んだ事項	問 4(2)B	問 4(2)B	問 6(2)B
	企画・実践の内容 (授業実践)	キャリア発達を意識した各教科(・科目)の授業	問 11_1	問 11_1	問 13_1
		進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッションの実施	問 11_7	問 11_7	問 13_7
		就職後の離職・転職など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応に関する学習	問 11_16	問 11_16	問 13_16
	企画・実践の内容 (体験活動)	職場の訪問や見学, 職業の調査・研究活動	問 11_8	問 11_8	問 13_8
		事業所における体験活動	問 11_9	問 11_9	問 13_9
		上級学校における体験活動	問 11_10	問 11_10	問 13_10
		事業所や上級学校での体験活動にかかわる事前指導・事後指導	問 11_11	問 11_11	問 13_11
		「キャリア・パスポート」の作成	問 15(1)	問 15(1)	問 17(1)

前掲の各項目と児童生徒の「課題対応能力」とのクロス集計に関し、 χ^2 検定の結果を整理すると、後掲のようになった。

【表2】学校の取組状況と「課題対応能力」との関連にかかるとの分析結果（学校調査・児童生徒調査）

	内容・要素	調査項目	小学生	中学生	高校生
学校調査	計画策定	全体計画の策定有無			
		・キャリア教育の全体目標	**		
		・キャリア教育の成果に関する評価方法		*	
		年間指導計画の策定有無			
		・キャリア・カウンセリング	-		**
	企画・実践の内容 (授業実践)	キャリア発達を意識した各教科（・科目）の授業			
		進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッションの実施	*		
		就職後の離職・転職など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応に関する学習	-		
	企画・実践の内容 (体験活動)	職場の訪問や見学，職業の調査・研究活動			*
		事業所における体験活動			
		上級学校における体験活動			
		事業所や上級学校での体験活動にかかわる事前指導・事後指導			*
		「キャリア・パスポート」の作成		*	

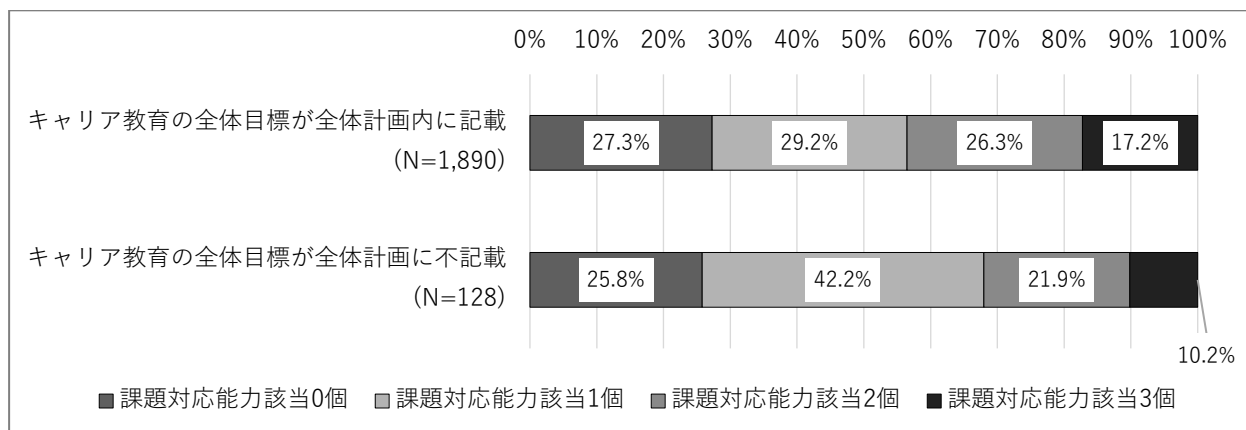
** : p<0.01, * : p<0.05

注) 実施していない学校の児童生徒の方が「課題対応能力」の肯定的な回答割合が高いという関係であった場合には網掛けをした。横棒が入ったセルは回答が存在しない，若しくは，全ケースが特定の選択肢に集中して，検定ができなかった場合を指す。

小学生，中学生については，幾つかの点に関して，学校でのキャリア教育に関する取組の実施と児童生徒の「課題対応能力」との間に関連性を見いだすことができた。

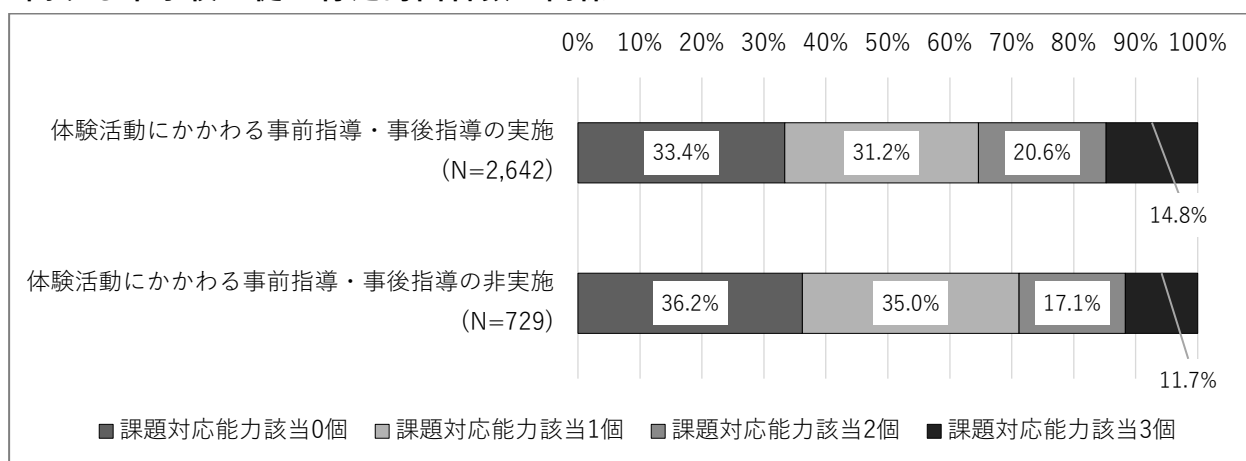
小学生の場合には全体計画策定時に「キャリア教育の全体目標」を盛り込むこと，「進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッションの実施」などの授業実践が正の関連性を有していた。一方，「『キャリア・パスポート』の作成」が負の関連性を有していた。この負の関連性が見られたことについて特記しておく，「『キャリア・パスポート』の作成」に取り組んでいる学校に見られる特徴として，「発達の段階に応じたキャリア教育の実践が行われるようにすること」，「児童が，学年末や卒業時まで「〇〇ができるようになる」など，具体的な目標を立てること」，「『キャリア・パスポート』等に基づき，児童理解を深めることや児童に正しい自己理解を得させること」等の項目と関連を見いだすことができる。すなわち自校の児童の様子から，学校の教育活動全体を通じて児童に働きかけ，児童の変容・成長を促し，またその変容・成長を児童自身にも捉えてもらう必要性を感じているがゆえに移行期間に先んじて「キャリア・パスポート」の導入に踏み切った学校である可能性がある。

【図2】全体計画に「キャリア教育の全体目標」が記載されているかと「課題対応能力」に関する小学校児童の肯定的回答数の関係



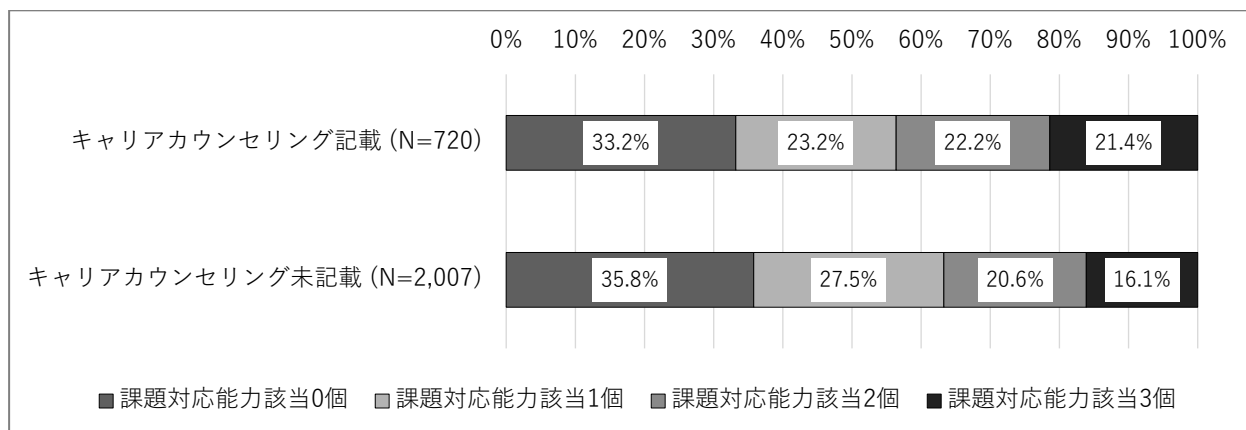
中学生の場合には全体計画策定時に「キャリア教育の成果に関する評価方法」を盛り込むこと、「職場の訪問や見学、職業の調査・研究活動」「事業所や上級学校での体験活動にかかわる事前指導・事後指導」の実施が「課題対応能力」と正の関連性を有していた。特に「事前指導・事後指導」が正の関連性を有していることは重要である。中学校における職場体験の実施率は既に9割を超えており、実態としてほとんどの学校において実施されている。このような状況に鑑みれば、更なる充実を図る上での要点は「事前指導・事後指導」となるが、計画に盛り込むことでその実施も充実が図られる可能性が示唆される結果である（2-2. 中学校調査結果の分析も参照のこと。）。

【図3】「体験活動にかかわる事前指導・事後指導」の実施状況と「課題対応能力」に関する中学校生徒の肯定的回答数の関係



高校生については、年間指導計画内に「キャリア・カウンセリング」が盛り込まれていることが正の関連性を有していた。キャリア・カウンセリングの趣旨に則（のっと）った教員の働きかけにより生徒の課題認識が促されている可能性が示唆される。

【図4】年間指導計画内の「キャリア・カウンセリング」の記載状況と「課題対応能力」に関する中学校生徒の肯定的回答数の関係



さらに、高校について「普通科」の生徒と「それ以外の学科」の生徒に分けた集計結果を下記に示す。なお、進路多様校と推定される進学率4割未満の学校に関する集計結果も併せて提示した。

【表3】学校の取組状況と「課題対応能力」との関連にかかる分析結果（高校のみ）
（担任調査・生徒調査）

	内容・要素	調査項目	普通科	その他	進学率 4割未 満
学 校 調 査	計画策定	全体計画の策定有無			
		・キャリア教育の全体目標			
		・キャリア教育の成果に関する評価方法		*	**
		年間指導計画の策定有無			
	企画・実践の内容 (授業実践)	・キャリア・カウンセリング	**		**
		キャリア発達を意識した各教科・科目の授業			
		進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッションの実施			
	企画・実践の内容 (体験活動)	就職後の離職・転職など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応に関する学習			
		職場の訪問や見学，職業の調査・研究活動			
		事業所における体験活動			-
		上級学校における体験活動	*		
		事業所や上級学校での体験活動にかかわる事前指導・事後指導			
		「キャリア・パスポート」の作成			

** : p<0.01, * : p<0.05

「普通科」の場合には、年間指導計画に「キャリア・カウンセリングを取り入れること」を盛り込むこと、「上級学校における体験活動」を企画・実施することとの間で正の関連性が見られた。特に後者については、上級学校を体験する一連の過程の中で行う調べもの等を通して生じた知りたいこと等を調べる経験等が関連している可能性が垣間（かいま）見える結果である。

他方で、「それ以外の学科」の場合には、キャリア教育に関する取組と「課題対応能力」との間の関連性は、全体計画に「キャリア教育の成果に関する評価方法」が盛り込まれているかという項目に見いだせる。「キャリア教育の成果に関する評価」を明確に定めることで、生徒の実態を踏まえることが「課題対応能力」の伸長に関連する可能性、又は、そうした評価を行う過程で生徒自身も自身の能力の伸長を自覚することが関連する可能性がありうる。

「進学率4割未満」の高等学校の生徒については、全体計画に「キャリア教育の成果に関する評価方法」が盛り込まれていること、年間指導計画に「キャリア・カウンセリングを取り入れること」が盛り込まれていることが正の関連性を有していた。その影響の仕方については前述したとおりだが、進路多様校と推測される進学率4割未満の高等学校においては、適切に生徒の実態を捉え、キャリア・カウンセリングを行っていくことが生徒の能力獲得実感と関連していることは今後の実践に向けて重要な意義がある結果である。

4. 担任調査データを用いた分析

児童生徒の課題対応能力に影響を与えうる要因として、学校のみならず、教員のキャリア教育に関する態度や、児童生徒への働きかけを想定できる。そこで、担任調査から把握される、担任教員の態度・働きかけの違い等について着目する。

「キャリア教育に関する態度」としては、教員のキャリア教育に関する認識・理解度の高さということに着目した。「計画に基づく学級・ホームルーム実践」としては、学級・ホームルーム又は学年におけるキャリア教育の計画・実施の状況やキャリア・カウンセリングに着目した。「児童生徒への働きかけ」については、「課題対応能力」に直接的に作用しうるような指導をどの程度実施しているかということ及びキャリア・カウンセリング内で行わせている振り返りに着目した。

【表4】調査項目と各調査票の設問番号の対応表（担任調査・児童生徒調査）

	内容・要素	調査項目	小学生	中学校	高校生
担任	キャリア教育に関する態度	学校のキャリア教育目標に関する認識・理解度	問 4	問 4	問 5
		「基礎的・汎用的能力」に関する認識・理解度	問 5	問 5	問 6
	計画に基づく学級・ホームルーム実践	学級・ホームルームまたは学年のキャリア教育の計画は、児童のキャリア発達の課題に即して作成されたものである	問 6	問 6	問 7
		学級・ホームルームまたは学年のキャリア教育は計画に基づいて実施している	問 6	問 6	問 7
		キャリア・カウンセリングを実施している	問 6	問 6	問 7
	児童生徒への働きかけ	調べたいことがあるとき、自ら進んで資料や情報を集め、必要な情報を取捨選択すること	問 8(7)	問 8(7)	問 9(7)
		起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するのかを工夫すること	問 8(8)	問 8(8)	問 9(8)
		活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること	問 8(9)	問 8(9)	問 9(9)
		児童生徒に対してこれまでの成長について振り返りをさせている	問 11	問 11	問 12

前掲の各項目と児童生徒の「課題対応能力」とのクロス集計に関し、 χ^2 検定の結果を整理すると、後掲の結果が得られた。

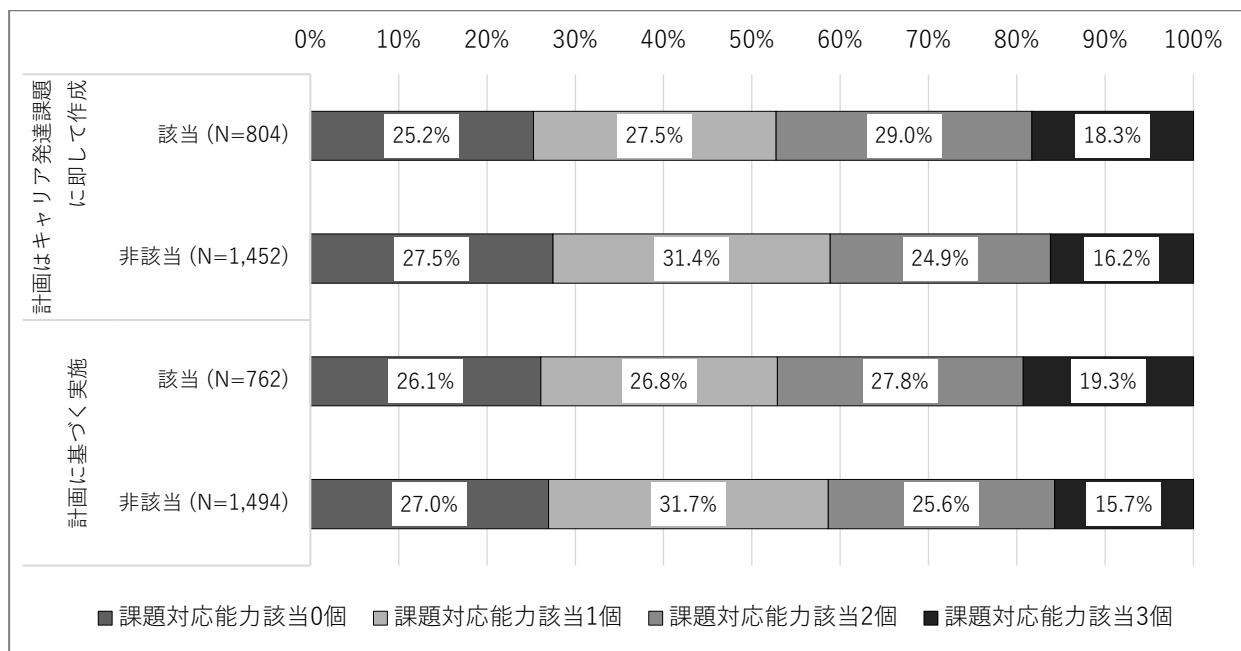
【表5】担任教員の取組状況と「課題対応能力」との関連にかかる分析結果（担任調査・児童生徒調査）

	内容・要素	調査項目	小学生	中学校	高校生
担任	キャリア教育に関する態度	学校のキャリア教育目標に関する認識・理解度		**	
		「基礎的・汎用的能力」に関する認識・理解度			
	計画に基づく学級・ホームルーム実践	学級・ホームルームまたは学年のキャリア教育の計画は、児童のキャリア発達の課題に即して作成されたものである	*		
		学級・ホームルームまたは学年のキャリア教育は計画に基づいて実施している	*		
		キャリア・カウンセリングを実施している		**	
	児童生徒への働きかけ	調べたいことがあるとき、自ら進んで資料や情報を集め、必要な情報を取捨選択すること			
		起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するのかを工夫すること		**	
		活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること		*	
		児童生徒に対してこれまでの成長について振り返りをさせている	*	*	

** : p<0.01, * : p<0.05

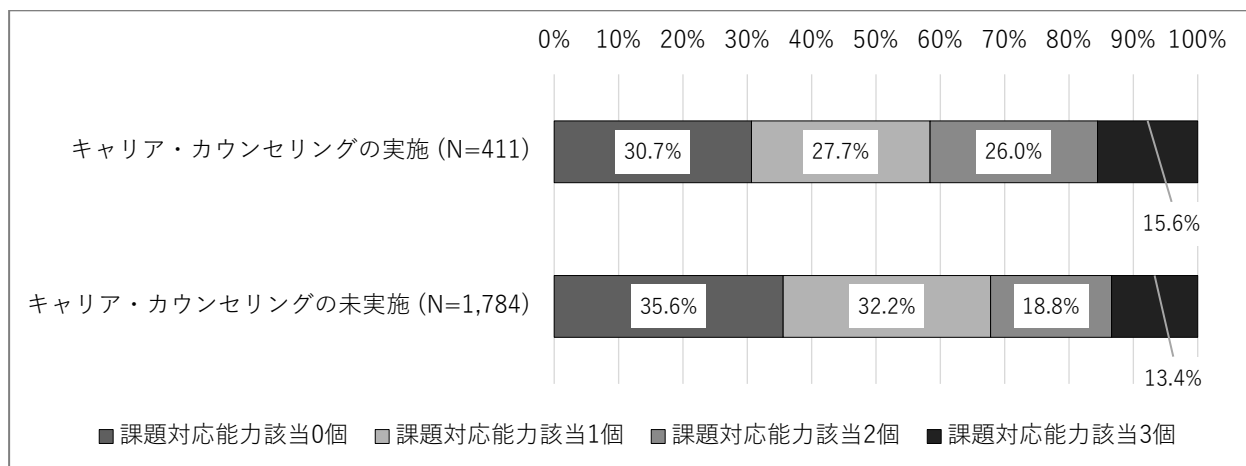
小学生に関しては、「計画に基づく学級・ホームルーム実践」のうち「キャリア教育の計画は、児童のキャリア発達の課題に即して作成された」こと、「キャリア教育は計画に基づいて実施している」こと、「児童に対してこれまでの成長について振り返りをさせている」ことと「課題対応能力」との間に正の関連性が窺（うかが）われた。自校の児童の状況を踏まえて計画し、その計画に則ってキャリア教育を実践し、キャリア・カウンセリングの中で児童に自身の成長を振り返らせることが能力獲得実感に関連するとの解釈は決して不合理な結果ではないものと思われる。

【図5】学級でのキャリア教育での計画・実施状況と「課題対応能力」に関する小学校児童の肯定的回答数の関係

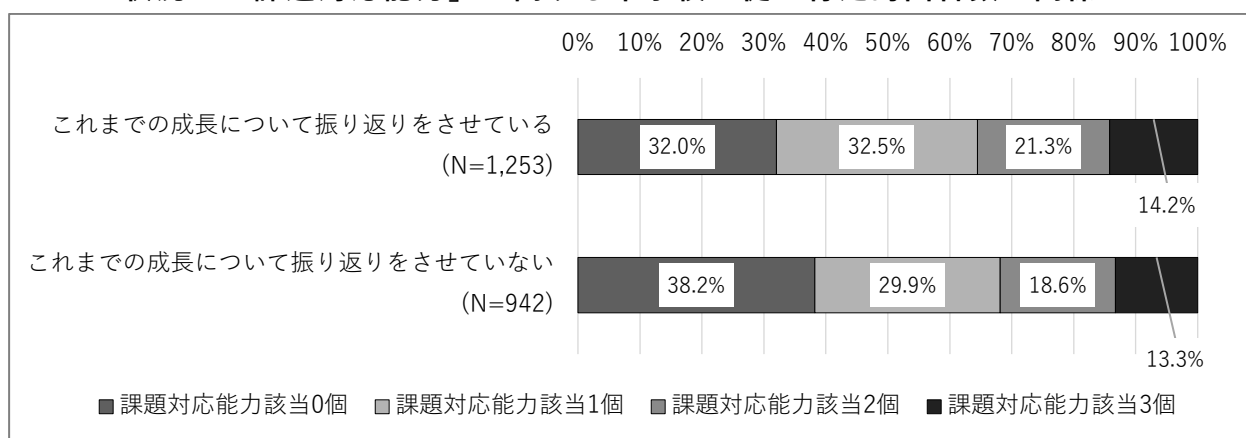


中学生に関しては、「学校のキャリア教育目標に関する認識・理解度」について「学校でキャリア教育目標が設定されているかどうか分からない」と回答している場合に、生徒の「課題対応能力」が低いという関係が見られている。また、学級あるいは学年におけるキャリア教育で「キャリア・カウンセリングを実施」している場合に正の関連性が窺われる。加えて、「起きた問題の原因，解決すべき課題はどこにあり，どう解決するのかを工夫すること」「活動や学習を進める際，適切な計画を立てて進めたり，評価や改善を加えて実行したりすること」を学級担任教員が指導しているほど，また，キャリア・カウンセリングの中で生徒に自身の成長の振り返りを促すほど，生徒の「課題対応能力」獲得実感は高いという正の関連性が見られた。「課題対応能力」に関わる「起きた問題の原因，解決すべき課題はどこにあり，どう解決するのかを工夫すること」「活動や学習を進める際，適切な計画を立てて進めたり，評価や改善を加えて実行したりすること」を指導していることと生徒の能力獲得実感が関連することは極めて合理的な結果である。小学校に続いて中学校においてもキャリア・カウンセリングの実践が生徒の能力獲得実感に関連していることは確認しておきたい。今後更なる推進・充実が図られるべき「キャリア・パスポート」を積極的に活用することもまた考慮すべきと思われる。また，自校のキャリア教育目標の理解度が生徒の能力獲得実感に関わっていることは，教育目標が教育実践の性質に影響する可能性を示唆するものである。

【図6】学級での「キャリア・カウンセリング」の実施と「課題対応能力」に関する中学校生徒の肯定的回答数の関係



【図7】キャリア・カウンセリング時における「成長の振り返りをさせている」かについての状況と「課題対応能力」に関する中学校生徒の肯定的回答数の関係



高校生に関しては、ホームルーム担任の取組状況と「課題対応能力」との間に明確な関連性が窺われる項目は見いだされていない。なお、高校については、前節のように「普通科」と「それ以外の学科」、「進学率4割未満」とに分けて分析しても、明確な関連性を見いだすことができなかった。学校調査で見いだすことができた「キャリア・カウンセリング」に関する項目についても担任調査では関連性が見られないということは個別の(ホームルーム担任)教員の個別の取組とは異なる経路で生徒の「課題対応能力」への働きかけが生じている可能性があるが、いずれにしても更なる調査研究を要する。

5. まとめ

児童生徒の「課題対応能力」について、学校調査から把握される取組の状況と、学級・ホームルーム担任調査から把握される教員の態度・働きかけの状況との関連性について、調査項目間のクロス集計を行った。

クロス集計及び検定の結果として、次のことが明らかとなった。

小学校においては、全体計画に「キャリア教育の全体目標」が盛り込まれること、「進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッションの実施」などの授業実践を行うこと、学級のキャリア教育の計画が児童のキャリア発達の課題に即して作成され、また、計画に基づいてキャリア教育を実施すること、児童に成長について振り返りをさせることが「課題対応能力」の能力実感に作用している可能性がある。

中学校においては、全体計画に「キャリア教育の成果に関する評価方法」を盛り込むこと、「職場の訪問や見学、職業の調査・研究活動」「事業所や上級学校での体験活動にかかわる事前指導・事後指導」を実施すること、学級におけるキャリア教育で「キャリア・カウンセリングを実施している」こととこれに関連してキャリア・カウンセリングの中で生徒に自身の成長の振り返りを促すこと、加えて、「起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するのかを工夫すること」「活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること」を学級担任教員が指導することが「課題対応能力」の能力実感に作用している可能性がある。

高等学校においては、学校の特性等の違いによりキャリア教育に関する取組状況が異なると考えられるため解釈が難しい部分もあるが、概して、全体計画に「キャリア教育の成果に関する評価方法」が盛り込まれていること、年間指導計画に「キャリア・カウンセリングを取り入れること」が盛り込まれていることが「課題対応能力」の能力実感に作用している可能性がある。

総じて言えることは、キャリア教育実践を通じて「課題対応能力」の伸長を促そうとする場合、目標や評価に関わることを計画の上で明確にすること、体験活動のみではなく事前指導・事後指導も充実を図ること、キャリア・カウンセリングを通じて振り返りを促すことなど、これまでキャリア教育の実践上で重視されてきたことは変わらず重要であるということである。本稿で提示できたのは一時点の実態調査データを分析した結果であるため、今後の更なる検証は求められるものの、重視されてきたこれらのことの意義を改めて垣間（かいま）見ることができ結果が得られている。自然災害等により教育・学習環境は今後も変化を強いられることがあるかもしれないが、自校の児童生徒の状況を踏まえたキャリア教育目標に則り、児童生徒へ働きかけや対話を展開するという、本質的な部分はあることがないことを確認したい。キャリア教育の推進・充実に向けては、基礎基本に立ち返ることが肝要である。

III. 資料編

【附表1】全体計画の有無別にみた、学校のカリキュラム・マネジメントの状況(小学校(2)図1)

	全体計画がある	全体計画がない
キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児童の実態に応じて明確化している***	63.0%	14.9%
教育課程全体をキャリア教育の観点から整理している***	22.3%	6.1%
各教科等での学習のうち適したものを、キャリア教育として位置付け、実施している**	68.2%	56.8%
キャリア教育を通じて育成したい力を教員間で共通理解している***	40.5%	14.9%
教員はキャリア教育に関して理解し、協力している***	38.1%	12.8%
キャリア教育に関する担当者を中心とする校務分掌組織が確立され、機能している***	24.1%	4.1%
キャリア教育の取組に対して評価を行っている***	21.1%	8.1%
キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている***	18.2%	4.1%

【附表2】全体計画に「キャリア教育の全体目標と基礎的・汎用的能力との関係を記している学校とそうでない学校の別でみた、学校のカリキュラム・マネジメントの状況(小学校(2)図2)

	全体目標と基礎的・汎用的能力との関係が記入されている	全体目標と基礎的・汎用的能力との関係が記入されていない
キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児童の実態に応じて明確化している**	68.5%	56.8%
教育課程全体をキャリア教育の観点から整理している**	28.4%	17.7%
各教科等での学習のうち適したものを、キャリア教育として位置付け、実施している	71.6%	64.3%
キャリア教育を通じて育成したい力を教員間で共通理解している**	46.2%	34.0%
教員はキャリア教育に関して理解し、協力している***	47.7%	27.6%
キャリア教育に関する担当者を中心とする校務分掌組織が確立され、機能している***	30.0%	17.7%
キャリア教育の取組に対して評価を行っている*	24.8%	17.0%
キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている	20.2%	16.0%

**【附表3】全体計画の有無別にみた、担任のカリキュラム・マネジメントの状況
(小学校(2)図3)**

	全体計画がある	全体計画がない
学級または学年のキャリア教育の計画は、児童のキャリア発達の課題に即して作成されたものである***	32.3%	15.0%
学級または学年のキャリア教育は計画に基づいて実施している***	43.9%	18.8%
学級のキャリア教育計画を実施するための時間は確保されている***	23.3%	11.4%
キャリア教育の取組に対して評価を行っている**	11.5%	5.3%
キャリア教育の評価結果に基づいて改善を行っている**	6.1%	2.3%

【附表4】全体計画の有無別にみた、自校のキャリア教育目標を把握している担任の割合(小学校(2)図4)

	あてはまる	あてはまらない
キャリア教育の全体計画がある***	60.2%	21.2%

【附表5】全体計画に「キャリア教育の全体目標と基礎的・汎用的能力との関係を記している学校とそうでない学校の別でみた、自校のキャリア教育目標を把握している担任の割合(小学校(2)図5)

	あてはまる	あてはまらない
※キャリア教育の全体目標と基礎的・汎用的能力との関係を全体計画に記載している***	65.8%	54.2%

【附表6】全体計画の有無別にみた、児童や保護者のキャリア教育に関する現状に対する担任の意識（小学校（2）図6）

	全体計画がある	全体計画がない
児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる***	34.9%	19.8%
児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、自己の生き方や進路を真剣に考えている***	30.1%	18.6%
児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、学習全般に対する意欲が向上してきている***	21.6%	11.2%
児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、社会的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている**	15.3%	8.6%
保護者は本校のキャリア教育の計画・実施について理解し、協力している	14.3%	10.9%

【附表7】年間指導計画の有無別にみた、学校のカリキュラム・マネジメントの状況（小学校（2）図7）

	年間指導計画がある	年間指導計画がない
キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児童の実態に応じて明確化している***	63.1%	45.2%
教育課程全体をキャリア教育の観点から整理している***	27.9%	11.3%
各教科等での学習のうち適したものを、キャリア教育として位置付け、実施している**	71.3%	61.0%
キャリア教育を通じて育成したい力を教員間で共通理解している***	42.1%	29.8%
教員はキャリア教育に関して理解し、協力している***	40.0%	26.3%
キャリア教育に関する担当者を中心とする校務分掌組織が確立され、機能している***	27.7%	12.4%
キャリア教育の取組に対して評価を行っている***	23.8%	12.9%
キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている***	21.3%	9.7%

【附表 8】 年間指導計画の有無別にみた、担任のカリキュラム・マネジメントの状況（小学校（2）図 8）

	年間指導計画がある	年間指導計画がない
学級または学年のキャリア教育の計画は、児童のキャリア発達の課題に即して作成されたものである***	34.5%	21.9%
学級または学年のキャリア教育は計画に基づいて実施している***	45.5%	30.8%
学級のキャリア教育計画を実施するための時間は確保されている**	23.4%	17.5%
キャリア教育の取組に対して評価を行っている*	12.1%	8.1%
キャリア教育の評価結果に基づいて改善を行っている*	6.8%	3.8%

【附表 9】 年間指導計画の有無別にみた、自校のキャリア教育目標を把握している担任の割合（小学校（2）図 9）

	あてはまる	あてはまらない
キャリア教育の年間指導計画がある***	57.7%	45.3%

【附表 10】 学校のカリキュラム・マネジメントの状況別にみた、自校のキャリア教育目標を把握している担任の割合（小学校（2）図 10）

	あてはまる	あてはまらない
キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児童の実態に応じて明確化している***	60.2%	42.3%
教育課程全体をキャリア教育の観点から整理している*	57.6%	50.1%
各教科等での学習のうち適したものを、キャリア教育として位置付け、実施している	53.3%	48.5%
キャリア教育を通じて育成したい力を教員間で共通理解している***	64.1%	44.8%
教員はキャリア教育に関して理解し、協力している***	61.3%	47.1%
キャリア教育に関する担当者を中心とする校務分掌組織が確立され、機能している***	63.2%	48.7%
キャリア教育の取組に対して評価を行っている**	58.7%	50.0%
キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている	56.9%	50.7%

【附表 11】 学校のカリキュラム・マネジメントの状況別にみた、「児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる」と思う担任の割合（小学校（2）図 11）

	あてはまる	あてはまらない
キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児童の実態に応じて明確化している**	35.4%	27.5%
教育課程全体をキャリア教育の観点から整理している	36.2%	30.4%
各教科等での学習のうち適したものを、キャリア教育として位置付け、実施している	32.1%	30.6%
キャリア教育を通じて育成したい力を教員間で共通理解している***	37.8%	28.2%
教員はキャリア教育に関して理解し、協力している***	41.3%	27.1%
キャリア教育に関する担当者を中心とする校務分掌組織が確立され、機能している**	38.4%	29.9%
キャリア教育の取組に対して評価を行っている**	39.5%	29.8%
キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている***	42.9%	29.5%

【附表 12】 学校のカリキュラム・マネジメントの状況別にみた、「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、学習全般に対する意欲が向上してきている」と思う担任の割合（小学校（2）図 12）

	あてはまる	あてはまらない
キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児童の実態に応じて明確化している**	22.8%	15.8%
教育課程全体をキャリア教育の観点から整理している*	23.8%	13.8%
各教科等での学習のうち適したものを、キャリア教育として位置付け、実施している*	21.0%	16.4%
キャリア教育を通じて育成したい力を教員間で共通理解している*	22.4%	17.8%
教員はキャリア教育に関して理解し、協力している**	24.4%	17.1%
キャリア教育に関する担当者を中心とする校務分掌組織が確立され、機能している	22.1%	18.7%
キャリア教育の取組に対して評価を行っている*	24.6%	18.3%
キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている*	25.8%	18.3%

【附表 13】 計画に基づいてキャリア教育を実施する担任とそうでない担任の別に見た、学習に対する児童の意識（小学校（2）図 13）

	計画に基づいて実施している	計画に基づいて実施していない
これからもっとたくさんのことを学びたいと思う**	64.2%	57.0%
学校での勉強はふだんの生活を送るうえで役に立つと思う**	69.3%	62.6%
学校での勉強は将来の仕事の可能性を広げてくれると思う	62.6%	61.1%
学校が楽しい***	63.8%	55.4%
授業に主体的に取り組んでいる***	46.6%	36.1%
授業がよくわかる*	56.8%	52.0%
家での学習に積極的に取り組んでいる*	38.5%	33.8%
授業や学校行事以外で学校の活動に積極的に取り組んでいる	39.0%	35.1%

【附表 14】 計画に基づいてキャリア教育を実施する担任とそうでない担任の別に見た、基礎的・汎用的能力に関する児童の意識（小学校（2）図 14）

	計画に基づいて実施している	計画に基づいて実施していない
誰かの話を聞く時は、その人の考えを受け止めようとしている***	64.7%	56.5%
自分の考えを話す時は、相手が理解しやすいように伝えている***	66.5%	57.7%
誰かと力を合わせないといけない時は、その誰かと役割分担をして取り組んでいる**	72.2%	65.1%
自分の長所や短所などについて分かっている**	58.1%	51.4%
やる気が出ない時でも、やるべきことはきちんとやる**	59.3%	52.3%
苦手なことをしないといけない時でも、進んで取り組んでいる**	45.7%	38.1%
知りたいことがある時、進んで情報を集めている	43.5%	42.7%
何か問題が起きた時、原因を考えて、解決するように工夫している*	51.3%	45.8%
何かをする時は、計画を立て、工夫しながら進めている	45.3%	41.3%
学校で学んでいることと自分が大人になったときのこととのつながりを考えている	41.3%	38.1%
将来の目標をかなえる方法について考えている*	47.6%	42.7%
将来の目標をかなえられるように、工夫しながら努力している	45.9%	45.3%

【附表 15】 学校のキャリア教育計画において体験活動を重視する学校と重視しない学校の別にみた、体験活動の実施に対する担任の意識（小学校（3）図1）

	職業や就労にかかわる体験活動の充実を重視した	職業や就労にかかわる体験活動の充実を重視しなかった
将来の進路にかかわる体験活動（職場見学等）を実施している***	42.0%	22.0%
将来の進路にかかわる体験活動の実施においては、事前指導・事後指導を十分にしている***	28.1%	15.6%

【附表 16】 学校のキャリア教育計画において体験活動を重視する学校と重視しない学校の別にみた、将来の職業に関する児童の学習経験（小学校（3）図2）

	職業や就労にかかわる体験活動の充実を重視した	職業や就労にかかわる体験活動の充実を重視しなかった
お店や工場、農家や漁師の仕事など、いろいろな仕事を知る学習**	81.9%	75.3%
自分にあった職業を考える学習**	27.6%	35.4%
自分になりたい職業の内容について調べる活動***	26.9%	36.0%
お店や工場、農家や漁師の仕事などの職業を見学したり体験したりする活動**	77.3%	68.9%
大人の人から職業についてのお話を聞いたり、質問したりする活動**	67.7%	60.0%

【附表 17】 学校のキャリア教育計画において事前・事後指導を重視する学校と重視しない学校の別にみた、体験活動の実施に対する担任の意識（小学校（3）図3）

	体験活動における事前指導・事後指導重視した	体験活動における事前指導・事後指導重視した
将来の進路にかかわる体験活動（職場見学等）を実施している***	42.4%	22.4%
将来の進路にかかわる体験活動の実施においては、事前指導・事後指導を十分にしている**	28.4%	15.8%

【附表 18】学校のキャリア教育計画において体験活動を重視する学校と重視しない学校の別にみた、体験活動の実施にあたって重視した目標（小学校（3）図4）

	職業や就労にかかわる体験活動の充実を重視した	職業や就労にかかわる体験活動の充実を重視しなかった
進学先を考える	21.0%	27.8%
将来の職業選択を考える***	40.3%	14.8%
多様な働き方があることを知る***	75.8%	38.0%
自分の適性や向き・不向きを理解する*	27.4%	13.0%
自分の働き方や生き方考える*	62.9%	45.4%
日常生活や日々の学習と将来をつなげて考える	74.2%	63.0%

【附表 19】体験活動を実施するにあたって重視した目標別にみた、「家での学習に積極的に取り組んでいる」に「あてはまる」と回答した児童の割合（小学校（3）図5）

	重視した	重視しなかった
進学先を考える	34.6%	37.6%
将来の職業選択を考える**	45.7%	32.3%
多様な働き方があることを知る***	43.9%	30.4%
自分の適性や向き・不向きを理解する**	50.0%	34.9%
自分の働き方や生き方考える**	42.4%	31.3%
日常生活や日々の学習と将来をつなげて考える	35.5%	39.3%

【附表 20】職場見学の実施の有無別にみた学習に対する児童の意識（小学校（3）図6）

	職場見学を実施している	職場見学を実施していない
これからもっとたくさんのことを学びたいと思う*	65.0%	56.0%
学校での勉強はふだんの生活を送るうえで役に立つと思う*	67.2%	58.3%
学校での勉強は将来の仕事の可能性を広げてくれると思う***	67.9%	51.1%
学校が楽しい**	64.4%	52.0%
授業に主体的に取り組んでいる*	42.3%	34.6%
授業がよくわかる	55.8%	53.3%
家での学習に積極的に取り組んでいる*	42.8%	33.2%
授業や学校行事以外で学校の活動に積極的に取り組んでいる***	50.0%	33.0%

【附表 21】 職場見学に充てる日数別にみた、将来の職業に関する児童の学習経験
（小学校（3） 図7）

	2日以上	1日
お店や工場、農家や漁師の仕事など、いろいろな仕事を知る学習**	90.1%	73.5%
自分にあった職業を考える学習	27.9%	37.7%
自分がなりたい職業の内容について調べる活動**	17.1%	34.4%
お店や工場、農家や漁師の仕事などの職業を見学したり体験したりする活動***	91.0%	69.5%
大人の人から職業についてのお話を聞いたり、質問したりする活動***	83.8%	58.9%

【附表 22】 職場見学に充てる日数別にみた、児童や保護者のキャリア教育に関する現状に対する担任の意識（小学校（3） 図8）

	2日以上	1日
児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる*	55.6%	35.9%
児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、自己の生き方や進路を真剣に考えている	31.5%	29.3%
児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、学習全般に対する意欲が向上してきている	33.3%	20.7%
児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、社会的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている*	24.1%	8.7%
保護者は本校のキャリア教育の計画・実施について理解し、協力している	32.7%	20.2%

【附表 23】 学校の実施する事前指導の内容別にみた、「自分の長所や短所などについて分かっている」に「いつもそうしている」と回答した児童の割合（小学校（3） 図9）

	実施している	実施していない
授業や学校生活等でこれまで学んだことを当該体験活動につなげる指導	54.8%	51.1%
社会人講話等で当該体験活動の理解を深めさせる指導**	68.1%	50.9%
マナー指導（礼儀作法や挨拶の方法、電話の掛け方の指導等）*	56.6%	47.0%

【附表 24】 学校の実施する事後指導の内容別にみた、「授業や学校行事以外で学校の活動に積極的に取り組んでいる」に「あてはまる」と回答した児童の割合（小学校（3） 図 10）

	実施している	実施していない
報告書やレポートの作成など当該体験活動を評価させる指導*	39.0%	29.7%
発表会やポスターセッションなど当該体験活動の成果を共有させる指導**	42.1%	27.3%
当該体験活動の経験をこれからの教科学習や学校生活につなげる指導	34.0%	27.6%
「キャリア・パスポート」等を活用して当該体験活動の経験を卒業後の進路につなげる指導***	54.7%	28.1%
当該体験活動の経験をこれからの生き方につなげて考えさせる指導**	37.7%	25.6%

【附表 25】 「「キャリア・パスポート」等を活用して当該体験活動の経験を卒業後の進路につなげる指導」の有無別にみた、学習に対する児童の意識（小学校（3） 図 11）

	「キャリア・パスポート」等を活用して当該体験活動の経験を卒業後の進路につなげる指導を実施している	「キャリア・パスポート」等を活用して当該体験活動の経験を卒業後の進路につなげる指導を実施していない
これからもっとたくさんのことを学びたいと思う**	70.9%	51.8%
学校での勉強はふだんの生活を送るうえで役に立つと思う**	76.7%	60.7%
学校での勉強は将来の仕事の可能性を広げてくれると思う***	77.9%	54.6%
学校が楽しい	63.5%	55.9%
授業に主体的に取り組んでいる	39.5%	36.7%
授業がよくわかる	55.3%	49.9%
家での学習に積極的に取り組んでいる***	55.8%	26.8%
授業や学校行事以外で学校の活動に積極的に取り組んでいる***	54.7%	28.1%

【附表 26】「お店や工場，農家や漁師の仕事などの職業を見学したり体験したりする活動」の有無別にみた，学習に対する児童の意識（小学校（3）図 12）

	職業を見学したり体験したりする活動をしたことがある	職業を見学したり体験したりする活動をしたことがない
これからもっとたくさんのことを学びたいと思う***	62.6%	53.7%
学校での勉強はふだんの生活を送るうえで役に立つと思う***	68.5%	58.6%
学校での勉強は将来の仕事の可能性を広げてくれると思う***	65.1%	53.0%
学校が楽しい*	60.5%	55.9%
授業に主体的に取り組んでいる	41.5%	37.8%
授業がよくわかる***	56.9%	47.0%
家での学習に積極的に取り組んでいる***	38.3%	30.3%
授業や学校行事以外で学校の活動に積極的に取り組んでいる***	40.1%	30.7%

【附表 27】「お店や工場，農家や漁師の仕事などの職業を見学したり体験したりする活動」の有無別にみた，基礎的・汎用的能力に対する児童の意識（小学校（3）図 13）

	職業を見学したり体験したりする活動をしたことがある	職業を見学したり体験したりする活動をしたことがない
誰かの話を聞く時は、その人の考えを受け止めようとしている***	64.0%	50.6%
自分の考えを話す時は、相手が理解しやすいように伝えている***	62.7%	55.6%
誰かと力を合わせないといけない時は、その誰かと役割分担をして取り組んでいる**	69.3%	63.8%
自分の長所や短所などについて分かっている***	57.1%	48.9%
やる気が出ない時でも、やるべきことはきちんとやる**	56.8%	50.0%
苦手なことをしないといけない時でも、進んで取り組んでいる*	42.9%	38.3%
知りたいことがある時、進んで情報を集めている	45.2%	41.9%
何か問題が起きた時、原因を考えて、解決するように工夫している***	50.8%	43.6%
何かをする時は、計画を立て、工夫しながら進めている**	45.1%	39.3%
学校で学んでいることと自分が大人になったときのこととのつながりを考えている***	41.6%	34.6%
将来の目標をかなえる方法について考えている	45.0%	42.9%
将来の目標をかなえられるように、工夫しながら努力している	46.3%	44.0%

【附表 28】「キャリア・パスポート」作成の有無別の、学校のカリキュラム・マネジメントの状況(小学校 (4) 図 1)

	「キャリア・パスポート」を作成している	「キャリア・パスポート」を作成していない
キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児童の実態に応じて明確化している***	69.9%	48.6%
教育課程全体をキャリア教育の観点から整理している	23.0%	18.3%
各教科等での学習のうち適したものを、キャリア教育として位置付け、実施している	70.4%	64.8%
キャリア教育を通じて育成したい力を教員間で共通理解している***	52.0%	30.1%
教員はキャリア教育に関して理解し、協力している***	49.5%	27.4%
キャリア教育に関する担当者を中心とする校務分掌組織が確立され、機能している***	30.1%	17.2%
キャリア教育の取組に対して評価を行っている***	30.6%	14.5%
キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている***	26.0%	12.0%

【附表 29】「キャリア・パスポート」作成の有無別の、管理職からみたキャリア教育の成果(小学校 (4) 図 2)

	「キャリア・パスポート」を作成している	「キャリア・パスポート」を作成していない
キャリア教育の実践によって、児童が社会的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている**	22.4%	13.9%
キャリア教育の実践によって、児童が将来や自らの生き方を考えるきっかけになり得ている***	67.3%	44.3%
キャリア教育の実践によって、学習全般に対する児童の意欲が向上してきている*	25.0%	16.9%
キャリア教育の実践によって、学校や地域の課題解決に向かっている	14.8%	10.4%

【附表 30】「キャリア・パスポート」作成の有無別の、担任がキャリア・カウンセリングとして行っている実践(小学校(4) 図3)

	「キャリア・パスポート」を作成している	「キャリア・パスポート」を作成していない
日常生活において、自己の生き方に関して児童に新たな気づきを促している***	40.8%	31.5%
児童に対してこれまでの成長について振り返りをさせている***	65.8%	55.3%
児童と将来の夢や目標について対話している***	48.9%	39.3%
中学生になるにあたって、児童と不安や期待について対話している	42.5%	40.0%
児童との個別面談(二者面談)を実施している	33.8%	29.1%
児童・保護者との三者面談を実施している	4.7%	5.1%
学区外の中学校に進学する児童の進路相談にのっている	14.2%	14.6%

【附表 31】「キャリア・パスポート」作成の有無別の、担任からみた学級や学年の児童や保護者におけるキャリア教育の計画・実施に関する現状(小学校(4) 図4)

	「キャリア・パスポート」を作成している	「キャリア・パスポート」を作成していない
児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる***	38.9%	28.2%
児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、自己の生き方や進路を真剣に考えている*	31.1%	25.6%
児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、学習全般に対する意欲が向上してきている***	26.9%	15.7%
児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、社会的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている***	19.0%	11.7%
保護者は本校のキャリア教育の計画・実施について理解し、協力している**	18.0%	11.6%

【附表 32】「キャリア・パスポート」記録に対する教員のフィードバックの有無別の、担任からみた学級や学年の児童や保護者におけるキャリア教育の計画・実施に関する現状（小学校（4）図5）

	記録に対する教員からのフィードバックを実施している	記録に対する教員からのフィードバックを実施していない
児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる*	50.5%	36.2%
児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、自己の生き方や進路を真剣に考えている	38.7%	29.2%
児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、学習全般に対する意欲が向上してきている	31.2%	25.9%
児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、社会的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている	25.8%	17.4%
保護者は本校のキャリア教育の計画・実施について理解し、協力している*	26.9%	15.9%

【附表 33】「キャリア・パスポート」記録に対する児童同士による共有・フィードバックの有無別の、担任からみた学級や学年の児童や保護者におけるキャリア教育の計画・実施に関する現状（小学校（4）図6）

	児童同士による共有・フィードバックを実施している	児童同士による共有・フィードバックを実施していない
児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる	47.8%	37.5%
児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、自己の生き方や進路を真剣に考えている**	49.3%	28.1%
児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、学習全般に対する意欲が向上してきている**	40.3%	24.8%
児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、社会的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている*	28.4%	17.5%
保護者は本校のキャリア教育の計画・実施について理解し、協力している*	28.4%	16.3%

【附表 34】学期末・年度末などに記録を振り返る時間の有無別の、担任からみた学級や学年の児童や保護者におけるキャリア教育の計画・実施に関する現状（小学校（4）図 7）

	学期末・年度末などに記録を振り返るための時間を設けている	学期末・年度末などに記録を振り返るための時間を設けていない
児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる*	45.0%	33.7%
児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、自己の生き方や進路を真剣に考えている*	36.9%	26.1%
児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、学習全般に対する意欲が向上してきている	30.6%	23.8%
児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、社会的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている	20.7%	17.6%
保護者は本校のキャリア教育の計画・実施について理解し、協力している	20.7%	15.7%

【附表 35】「キャリア・パスポート」に「自己の成長（がんばったこと）」の記載や綴じこみの有無別の、学校のカリキュラム・マネジメントの状況（小学校（4）図 8）

	「自己の成長（がんばったこと）」を記載している、綴じ込んでいる	「自己の成長（がんばったこと）」を記載している、綴じ込んでいない
キャリア教育を通じて育成したい力を貴校の特色や児童の実態に応じて明確化している*	72.0%	52.0%
教育課程全体をキャリア教育の観点から整理している	21.1%	36.0%
各教科等での学習のうち適したものを、キャリア教育として位置付け、実施している	70.3%	68.0%
キャリア教育を通じて育成したい力を教員間で共通理解している	52.0%	44.0%
教員はキャリア教育に関して理解し、協力している	50.9%	40.0%
キャリア教育に関する担当者を中心とする校務分掌組織が確立され、機能している	30.0%	24.0%
キャリア教育の取組に対して評価を行っている*	32.6%	12.0%
キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている	26.9%	16.0%

【附表 36】 全体計画と年間指導計画の作成状況（学校調査）（中学校（2）図 1）

	全体計画がある	年間指導計画がある
今回調査	89.9%	80.8%
前回調査	81.3%	76.7%

【附表 37】 全体計画に具体的に記されている内容（上位 3 項目と下位 3 項目，学校調査）（中学校（2）図 2）

上位 3 項目	あてはまる
学校教育目標	77.7%
キャリア教育の全体目標 （学校全体で身に付けさせたい資質・能力）	76.5%
キャリア教育の各学年の重点目標 （各学年で身に付けさせたい資質・能力）	73.2%
下位 3 項目	あてはまる
キャリア教育に必要な資源確保のための 学校内外の体制	28.4%
キャリア教育の成果に関する評価方法	12.4%
評価結果に基づく改善の行動計画	5.3%

【附表 38】 学級でキャリア教育を適切に行っていくうえで，現状からみて，今後重要だと思うこと（「とても重要だと思う」「ある程度重要だと思う」を合わせた上位 3 項目と下位 3 項目，学級担任調査）（中学校（2）図 3）

上位 3 項目	「とても重要だと思う」「ある程度重要だと思う」
生徒が，学年末や卒業時まで「〇〇ができるようになる」など，具体的な目標を立てること	95.8%
キャリア教育担当者（主任等）に各教員が協力すること	93.7%
取組の目標や方法，育てたい力などを教員間や校務分掌間で共通理解を図ること	93.4%
下位 3 項目	「とても重要だと思う」「ある程度重要だと思う」
各教科等のうち適したものを，キャリア教育に位置付け，実施すること	80.8%
キャリア教育の取組に対して評価を行うこと	71.1%
「キャリア・パスポート」を活用すること	68.0%

【附表 39】キャリア教育を適切に行っていくうえで、改善しなければならないこと（上位 2 項目と下位 2 項目，学校調査）（中学校（2）図 4）

上位 2 項目	「とても重要だと思う」「ある程度重要だと思う」
教育課程全体をキャリア教育の観点から整理すること	28.8%
取組の目標や方法，育てたい力などについて，教員間や校務分掌間で共通理解を図ること	28.5%
下位 2 項目	「とても重要だと思う」「ある程度重要だと思う」
キャリア教育にかかわる体験活動の前後の学習を，事前指導・事後指導として関連づけること	2.3%
キャリア教育に関して他校との連携を図ること	2.0%

【附表 40】キャリア教育の評価に基づく改善の実施有無別に見た学級担任の指導状況（学校調査・担任調査）（中学校（2）図 5）

担任問 6 項目番号	あなたの学級あるいは学年における、キャリア教育の計画・実施の現状についておたずねします。あなたが「そのとおりである」と思うものをすべて選んでください。	「キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている」と回答した学校の学級担任	非該当校の学級担任
1	学級または学年のキャリア教育の計画は、学校全体のキャリア教育の計画に基づいて作成されたものである*	68.6%	64.0%
2	学級または学年のキャリア教育の計画は、生徒のキャリア発達の課題に即して作成されたものである	35.9%	34.8%
3	学級または学年のキャリア教育は計画に基づいて実施している***	60.7%	45.0%
4	学級のキャリア教育計画を実施するための時間は確保されている***	40.4%	21.2%
5	キャリア・カウンセリングを実施している***	40.4%	21.2%
6	生徒の進路相談を行っている	88.6%	87.7%
7	キャリア教育に関する指導案や教材の作成等を工夫している	18.9%	15.7%
8	キャリア教育に関する研修などに積極的に参加し、自己の指導力の向上に努めている***	11.9%	2.1%
9	卒業後の就職や進学に関する情報提供や生徒主体の情報収集に取り組んでいる***	47.9%	65.2%
10	進学にかかる費用や奨学金についての情報提供や生徒主体の情報収集に取り組んでいる	36.1%	40.3%
11	近年の若年者の雇用・就職・就業の動向に関する情報提供や生徒主体の情報収集に取り組んでいる	9.5%	9.1%
12	就職後の離職・失業など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応に関する情報提供や生徒主体の情報収集に取り組んでいる***	0.0%	2.3%
13	グローバル化などの社会・経済・産業の構造的変化に関する情報提供や生徒主体の情報収集に取り組んでいる***	9.2%	8.2%
14	将来の進路にかかわる体験活動（職場体験活動等）を実施している***	96.2%	67.7%
15	将来の進路にかかわる体験活動の実施においては、事前指導・事後指導を十分に行っている***	73.9%	54.7%

16	地域や家庭から協力を得るように努めている***	59.5%	49.2%
17	キャリア教育の取組に対して評価を行っている***	28.5%	16.1%
18	キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている***	25.3%	13.9%
19	本校（学年団）の教員はキャリア教育に関して理解し、協力している***	46.0%	30.1%
20	特にキャリア教育に関する計画・実施はしていない	0.0%	0.0%

【附表 41】キャリア教育の評価に基づく改善の実施有無（学級担任）別に見た，学級担任の基礎的・汎用的能力の指導状況（学級担任調査）（中学校（2）図6）

担任問 8 項目番号	あなたの学級あるいは学年でキャリア教育を行ううえで，次の(1)～(15)のそれぞれについてどの程度指導しているか，あてはまるものを1～4の中から1つずつ選んでください。	「キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている」と回答した学校の学級担任	非該当校の学級担任
1	様々な立場や考えの相手に対して，その意見を聴き理解しようとする事***	67.7%	36.9%
2	相手が理解しやすいように，自分の考えや気持ちを整理して伝える事***	48.1%	19.9%
3	自分の果たすべき役割や分担を考え，周囲の人と力を合わせて行動しようとする事***	86.2%	63.2%
4	自分の興味や関心，長所や短所などについて把握し，自分らしさを発揮すること***	60.7%	23.5%
5	喜怒哀楽の感情に流されず，自分の行動を適切に律して取り組もうとする事***	75.2%	14.7%
6	不得意なことや苦手なことでも，自分の成長のために進んで取り組もうとする事***	55.9%	31.8%
7	調べたいことがあるとき，自ら進んで資料や情報を集め，必要な情報を取捨選択すること***	47.6%	15.8%
8	起きた問題の原因，解決すべき課題はどこにあり，どう解決するのかを工夫すること***	37.3%	15.5%
9	活動や学習を進める際，適切な計画を立てて進めたり，評価や改善を加えて実行したりすること***	68.9%	25.7%
10	学ぶことや働くことの意義について理解し，学校での学習と自分の将来をつなげて考える事***	47.6%	34.6%
11	自分の将来について具体的な目標を立て，現実を考えながらその実現のための方法を考える事***	56.1%	27.7%
12	自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり，その方法を工夫・改善したりすること***	48.4%	19.0%
13	上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること***	71.9%	44.0%
14	「進学したい学校」・「就職したい職場」を選び，その実現のために努力すること***	73.9%	52.9%
15	上級学校や職場を選ぶにあたって，その合格の可能性や採用の可能性を考慮すること***	47.6%	35.7%

【附表 42】キャリア教育の評価に基づく改善の実施有無に見た生徒の日常生活の様子（「基礎的・汎用的能力」）の自己評価（学校調査・生徒調査）（中学校（2）図7）

生徒問 8 項目番号	問 8：あなたの日常生活（授業中や放課後、家庭での生活）についておたずねします。次の A～L のそれぞれについて、自分のふだんの生活の様子をふり返った時、あてはまるものを 1～3 の中から 1 つずつ選んでください。	「キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行っている」と回答した学校の生徒	非該校の生徒
1	他人の話聞く時は、その人の考えを受け止めようとしている**	67.6%	62.0%
2	自分の考えを話す時は、相手が理解しやすいように伝えている	59.1%	56.3%
3	力を合わせて行動する必要がある時には、周囲の人と役割を分担している†	62.8%	58.8%
4	自分の興味・関心や長所・短所などについて分かっている	51.5%	48.7%
5	気分が落ち込んでいる時でも、自分がすべきことはしている	40.1%	37.6%
6	不得意なことをしなければいけない時でも、進んで取り組んでいる†	31.5%	28.0%
7	調べたいことがある時、進んで情報を集めている†	47.4%	46.3%
8	何か問題が起きた時、原因を考え、次に同じような問題が起きないように工夫して解決している	40.8%	38.7%
9	何かをする時、見通しをもって計画を立て、改善をしながら取り組んでいる†	30.0%	26.6%
10	今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えている	32.1%	32.8%
11	将来の目標を実現する具体的な方法について考えている	30.1%	30.7%
12	将来の目標を実現できるように、工夫・改善しながら具体的に行動している	24.8%	24.9%

【附表 43】体験活動の事前指導の内容（学校調査）（中学校（3）図 1）

問 12（1）事前指導について		件数	割合	割合 （無回答等除く）
選択肢				
1	当該体験活動の目的を設定・確認させる指導	296	95.2%	95.2%
2	授業や学校生活等でこれまで学んだことを当該体験活動につなげる指導	205	65.9%	65.9%
3	社会人講話等で当該体験活動の理解を深めさせる指導	116	37.3%	37.3%
4	マナー指導（礼儀作法や挨拶の方法，電話の掛け方の指導等）	296	95.2%	95.2%
5	上記以外の指導	23	7.4%	7.4%
6	特に事前指導はしていない（する予定はない）	0	0.0%	0.0%
99	無回答	0	0.0%	-
100	判別不能・エラー等	0	0.0%	-
回答者数		311	-	-

【附表 44】体験活動の事後指導の内容（学校調査）（中学校（3）図 2）

問 12（2）事後指導について		件数	割合	割合 （無回答等除く）
選択肢				
1	報告書やレポートの作成など当該体験活動を評価させる指導	288	92.6%	92.6%
2	発表会やポスターセッションなど当該体験活動の成果を共有させる指導	249	80.1%	80.1%
3	当該体験活動の経験をこれからの教科学習や学校生活につなげる指導	171	55.0%	55.0%
4	「キャリア・パスポート」等を活用して当該体験活動の経験を卒業後の進路につなげる指導	39	12.5%	12.5%
5	当該体験活動の経験をこれからの生き方につなげて考えさせる指導	199	64.0%	64.0%
6	上記以外の指導	10	3.2%	3.2%
7	特に事後指導はしていない（する予定はない）	0	0.0%	0.0%
99	無回答	0	0.0%	-
100	判別不能・エラー等	0	0.0%	-
回答数		311	-	-

【附表 45】体験活動の計画をするうえで重視している点（学校調査）（中学校（3）図 3）

問 6 (3) 上記のキャリア教育にかかわる体験活動に関して、どういう点を重視して内容を計画していますか。実施している体験活動に関して、重視している点を次のうちからすべて選んでください。		件数	割合	割合 (無回答等除く)
選択肢				
1	進学先を考える	143	52.4%	53.4%
2	将来の職業選択を考える	212	77.7%	79.1%
3	多様な働き方があることを知る	191	70.0%	71.3%
4	自分の適性や向き・不向きを理解する	158	57.9%	59.0%
5	自分の働き方や生き方を考える	215	78.8%	80.2%
6	日常生活や日々の学習と将来をつなげて考える	154	56.4%	57.5%
7	上記以外	3	1.1%	1.1%
8	特に何も重視していない	0	0.0%	0.0%
99	無回答	5	1.8%	-
100	判別不能・エラー等	0	0.0%	-
	回答数	273	-	-

【附表 46】 職場体験活動を振り返って有意義だと思った点（生徒調査）（中学校（3）図 4）

問 12 (6) どのような点から有意義な活動だと思いましたか。あてはまるものをすべて選んでください。		件数	割合	割合 (無回答等除く)
選択肢				
1	進学先を考えるうえで役に立った	1326	46.2%	46.3%
2	将来の職業選択を考えるうえで役に立った	1565	54.5%	54.6%
3	多様な働き方があることを知ることができた	1500	52.3%	52.3%
4	自分の適性や向き・不向きを理解することができた	1113	38.8%	38.8%
5	自分の働き方や生き方を考えることができた	983	34.3%	34.3%
6	日常生活や日々の学習と将来をつなげて考えることができた	769	26.8%	26.8%
7	楽しかった	1770	61.7%	61.7%
8	ルールやマナーの重要性を知ることができた	1665	58.0%	58.1%
9	その他	160	5.6%	5.6%
99	無回答	3	0.1%	-
100	判別不能・エラー等	0	0.0%	-
回答者数		2870	-	-

【附表 47】体験活動の重視有無別にみた具体的な指導内容や効果の重視点（学校調査）（中学校（3）図 5）

	問 8:あなたの学級あるいは学年でキャリア教育を行ううえで、次の(1)～(15)のそれぞれについてどの程度指導しているか、あてはまるものを1～4の中から1つずつ選んでください。	職場体験活動を重視している学校	非該当校
1	進学先を考える	54.4%	45.2%
2	将来の職業選択を考える	79.7%	74.2%
3	多様な働き方があることを知る	72.2%	64.5%
4	自分の適性や向き・不向きを理解する*	61.4%	38.7%
5	自分の働き方や生き方を考える) †	81.9%	69.7%
6	日常生活や日々の学習と将来をつなげて考える	58.2%	51.6%

【附表 48】体験活動の事前指導・事後指導の重視別にみた事前指導の内容（学校調査）（中学校（3）図 6）

学校問 12（1） 事前指導の内容	事前指導・事後指導を重視している学校	非該当校
1 当該体験活動の目的を設定・確認させる指導	95.3%	94.7%
2 授業や学校生活等でこれまで学んだことを当該体験活動につなげる指導†	68.5%	57.9%
3 社会人講話等で当該体験活動の理解を深めさせる指導*	40.4%	27.6%
4 マナー指導（礼儀作法や挨拶の方法、電話の掛け方の指導等）	96.2%	92.1%

【附表 49】体験活動の事前指導・事後指導の重視別に見た事後指導の内容（学校調査）（中学校（3）図 7）

学校間 12（2） 事後指導の内容		事前指導・事後指導を 重視している学校	非該当校
1	報告書やレポートの作成など当該体験活動を評価させる指導	92.3%	93.4%
2	発表会やポスターセッションなど当該体験活動の成果を共有させる指導*	83.0%	71.1%
3	当該体験活動の経験をこれからの教科学習や学校生活につなげる指導	56.2%	51.3%
4	「キャリア・パスポート」等を活用して当該体験活動の経験を卒業後の進路につなげる指導†	14.5%	6.6%
5	当該体験活動の経験をこれからの生き方につなげて考えさせる指導	64.7%	61.8%

【附表 50】学校側の重視項目別に見た生徒の日常生活の様子（「基礎的・汎用的能力」）の自己評価（学校調査・生徒調査）（中学校（3）図 8）

担任 間 8 項目番 号		職場体験活 動を重視し ている学校 の生徒	非該当校の 生徒
1	他人の話聞く時は、その人の考えを受け止めようとしている	65.0%	65.8%
2	自分の考えを話す時は、相手が理解しやすいように伝えている	58.4%	54.2%
3	力を合わせて行動する必要がある時には、周囲の人と役割を分担している	60.7%	58.0%
4	自分の興味・関心や長所・短所などについて分かっている	49.8%	46.8%
5	気分が落ち込んでいる時でも、自分がすべきことはしている	38.4%	36.1%
6	不得意なことをしなければいけない時でも、進んで取り組んでいる	29.4%	25.3%
7	調べたいことがある時、進んで情報を集めている*	47.0%	46.5%
8	何か問題が起きた時、原因を考え、次に同じような問題が起きないように工夫して解決している	39.9%	37.3%
9	何かをする時、見通しをもって計画を立て、改善をしながら取り組んでいる	28.4%	26.2%
10	今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えている*	33.0%	26.6%
11	将来の目標を実現する具体的な方法について考えている	30.4%	28.4%
12	将来の目標を実現できるように、工夫・改善しながら具体的に行動している	24.9%	21.4%

【附表 51】キャリア教育を適切に行っていくうえで、改善しなければならないこと（学校調査）（中学校（4）図 1）

問 14 貴校がキャリア教育を適切に行っていくうえで、改善しなければならないことのうち、優先順位の高いものを3つ選んでください。		件数	割合	割合 (無回答等 除く)
選択肢				
1	キャリア教育の計画の作成にあたって、ガイダンスの機能の充実を図ること	30	7.6%	8.5%
2	キャリア教育の計画の作成にあたって、カウンセリングの機能の充実を図ること	56	14.1%	15.8%
3	生徒の実態や学校の特色、地域の実態を反映した計画を立案すること	82	20.7%	23.2%
4	生徒が、学年末や卒業時までに「〇〇ができるようになる」など、具体的な目標を立てること	97	24.4%	27.4%
5	教育課程全体をキャリア教育の観点から整理すること	102	25.7%	28.8%
6	各教科等での学習のうち適したものを、キャリア教育として位置付け、実施すること	49	12.3%	13.8%
7	取組の目標や方法、育てたい力などについて、教員間や校務分掌間で共通理解を図ること	101	25.4%	28.5%
8	キャリア教育の担当者を中心とする組織体制を確立すること	56	14.1%	15.8%
9	教員がキャリア教育に関する研修などに参加し、指導力の向上を図ること	97	24.4%	27.4%
10	保護者や地域、外部団体との連携を図ること	51	12.8%	14.4%
11	キャリア教育に関して他校との連携を図ること	7	1.8%	2.0%
12	キャリア教育の取組に対して評価を行うこと	46	11.6%	13.0%
13	キャリア教育の評価結果に基づいて取組の改善を行うこと	45	11.3%	12.7%
14	キャリア教育を実施するための時間を確保すること	43	10.8%	12.1%
15	キャリア教育のための予算を確保すること	35	8.8%	9.9%
16	キャリア教育にかかわる体験活動（職場体験活動やボランティア活動、上級学校見学等）を実施すること	12	3.0%	3.4%
17	キャリア教育にかかわる体験活動の前後の学習を、事前指導・事後指導として関連づけること	8	2.0%	2.3%
18	キャリア・カウンセリングを実施すること	29	7.3%	8.2%
19	「キャリア・パスポート」を活用すること	75	18.9%	21.2%
20	特になし	0	0.0%	0.0%

99	無回答	2	0.5%	-
100	判別不能・エラー等	41	10.3%	-
	回答者数	397	-	-

【附表 52】全体計画に示されている内容（学校調査）（中学校（4）図2）

問 4(1)B Aで「1 計画がある」と答えた方におたずねします。全体計画には、以下の内容が具体的に記されていますか。あてはまるものをすべて選んでください。		件数	割合	割合 (無回答等除く)
選択肢				
1	生徒の実態	224	56.4%	56.7%
2	保護者や地域の実態	169	42.6%	42.8%
3	学校教育目標	307	77.3%	77.7%
4	キャリア教育の全体目標（学校全体で身に付けさせたい資質・能力）	302	76.1%	76.5%
5	キャリア教育の全体目標（学校全体で身に付けさせたい資質・能力）と基礎的・汎用的能力との関係	184	46.3%	46.6%
6	キャリア教育の各学年の重点目標(各学年で身に付けさせたい資質・能力)	289	72.8%	73.2%
7	キャリア教育の各学年の重点目標(各学年で身に付けさせたい資質・能力)と基礎的・汎用的能力との関係	140	35.3%	35.4%
8	キャリア教育の学校全体（教科横断，学年縦断）での具体的な取組	250	63.0%	63.3%
9	キャリア教育に必要な資源確保のための学校内外の体制	112	28.2%	28.4%
10	キャリア教育の成果に関する評価方法	49	12.3%	12.4%
11	評価結果に基づく改善の行動計画	21	5.3%	5.3%
12	キャリア教育の推進体制	102	25.7%	25.8%
13	その他	14	3.5%	3.5%
99	無回答	2	0.5%	-
100	判別不能・エラー等	0	0.0%	-
	回答者数	397	-	-

【附表 53】「キャリア・パスポート」の活用について（担任調査）（中学校（4）図3）

問 10 あなたは、「キャリア・パスポート」をどのように活用していますか。あてはまるものをすべて選んでください。		件数	割合	割合 (無回答等 除く)
選択肢				
1	学期末・年度末などに記録を振り返るための時間を設けている	144	10.4%	10.6%
2	生徒同士による共有・フィードバックを実施している	60	4.4%	4.4%
3	記録に対する教員からのフィードバックを実施している	73	5.3%	5.4%
4	キャリア教育のアウトカム評価（多面的評価の資料の1つ）として活用している	44	3.2%	3.2%
5	生徒の進路（進学）支援の資料として活用している	140	10.2%	10.3%
6	教員が生徒を理解するための資料として活用している	169	12.3%	12.4%
7	該当するものがない	163	11.8%	12.0%
8	「キャリア・パスポート」を作成していない	868	62.9%	63.6%
99	無回答	10	0.7%	-
100	判別不能・エラー等	5	0.4%	-
	回答者数	1379	-	-

【附表 54】 将来の生き方や進路について考えるために指導してほしかった内容（生徒調査）（中学校（4）図 4）

問 14 あなたは、自分の将来の生き方や進路について考えるため、学級活動の時間や総合的な学習の時間などで、これまでにどのようなことを指導してほしかったですか。 「もっとよく指導してほしかった」「これまで指導がなかったけれども、指導してほしかった」など、あなたが指導してほしかったと思うことがらをすべて選んでください。		件数	割合	割合 (無回答等除く)
選択肢				
1	自分の個性や適性（向き・不向き）を考える学習	1226	35.8%	37.6%
2	高等学校など上級学校の教育内容や特色	839	24.5%	25.7%
3	産業や職業の種類や内容	701	20.5%	21.5%
4	学ぶことや働くことの意義や目的	703	20.5%	21.6%
5	卒業後の進路（進学や就職）選択の考え方や方法	849	24.8%	26.0%
6	卒業後の進路（進学や就職）に関する情報の入手方法とその利用の仕方	588	17.2%	18.0%
7	卒業後の進路（進学や就職）についての相談の方法や内容	594	17.3%	18.2%
8	将来の職業選択や役割などの生き方や人生設計	660	19.3%	20.2%
9	海外留学に関する案内・説明	458	13.4%	14.0%
10	卒業後の進路を決定するにあたっての先生からの助言	537	15.7%	16.5%
11	高等学校などの上級学校や企業への合格・採用の可能性	806	23.5%	24.7%
12	社会人・職業人としての常識やマナー	707	20.6%	21.7%
13	進学にかかる費用や奨学金制度	701	20.5%	21.5%
14	労働に関する法律や制度の仕組み	519	15.1%	15.9%
15	近年の若者の雇用・就職・就業の動向	583	17.0%	17.9%
16	社会全体のグローバル化（国際化）の動向	517	15.1%	15.9%
17	就職後の離職・失業など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応	831	24.3%	25.5%
18	転職希望者や再就職希望者などへの就職支援の仕組み	522	15.2%	16.0%
19	男女が対等な構成員として様々な活動に参画できる社会（男女共同参画社会）の重要性	430	12.6%	13.2%
20	情報化の進展（AI・IoT等）による産業構造・労働環境の変化	533	15.6%	16.3%

21	特に指導してほしかったことはない	723	21.1%	22.2%
99	無回答	87	2.5%	-
100	判別不能・エラー等	78	2.3%	-
	回答者数	3426	-	-

【附表 55】「キャリア・パスポート」の作成有無別に見た学級担任の指導内容（学校調査・学級担任調査）（中学校（4）図5）

担任問 8 項目番号		「キャリア・パスポート」を作成している学校の学級担任	「キャリア・パスポート」を作成していない学校の学級担任
1	様々な立場や考えの相手に対して、その意見を聴き理解しようとする事***	61.7%	30.7%
2	相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを整理して伝える事***	36.1%	18.4%
3	自分の果たすべき役割や分担を考え、周囲の人と力を合わせて行動しようとする事***	81.9%	58.7%
4	自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、自分らしさを発揮すること***	44.3%	21.7%
5	喜怒哀楽の感情に流されず、自分の行動を適切に律して取り組もうとする事***	32.0%	21.7%
6	不得意なことや苦手なことでも、自分の成長のために進んで取り組もうとする事***	47.2%	29.4%
7	調べたいことがあるとき、自ら進んで資料や情報を集め、必要な情報を取捨選択すること***	27.0%	18.1%
8	起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するのかを工夫すること**	15.9%	21.5%
9	活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること***	38.0%	30.7%
10	学ぶことや働くことの意義について理解し、学校での学習と自分の将来をつなげて考える事***	44.4%	32.4%
11	自分の将来について具体的な目標を立て、現実を考えながらその実現のための方法を考える事***	46.0%	24.8%
12	自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫・改善したりすること*	27.3%	22.5%
13	上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること***	58.8%	43.1%
14	「進学したい学校」・「就職したい職場」を選び、その実現のために努力すること***	66.1%	50.9%
15	上級学校や職場を選ぶにあたって、その合格の可能性や採用の可能性を考慮すること***	39.0%	37.1%

【附表 56】「キャリア・パスポート」の記載内容別に見た学級担任の現状認識（学校調査・担任調査より）（中学校（4）図 6）

担任問 7	あなたの学級あるいは学年の生徒や保護者における，キャリア教育の計画・実施に関する現状についておたずねします。あなたが「そのとおりである」と思うものをすべて選んでください。	「教科における学習の記録・振り返り」を記載している学校の学級担任	「教科における学習の記録・振り返り」を記載していない学校の学級担任
1	生徒はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる***	74.6%	46.5%
2	生徒はキャリア教育に関する学習や活動を通して，自己の生き方や進路を真剣に考えている*	75.4%	67.4%
3	生徒はキャリア教育に関する学習や活動を通して，学習全般に対する意欲が向上してきている***	46.2%	32.9%
4	生徒はキャリア教育に関する学習や活動を通して，社会的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている***	49.2%	32.9%
5	生徒は卒業後の就職や進学に関する教材（副読本など）をよく利用している***	0.0%	12.2%
6	生徒は卒業後の就職や進学に関する情報資料をよく利用している**	39.0%	29.1%
7	保護者は本校のキャリア教育の計画・実施について理解し，協力している***	47.5%	20.8%

【附表 57】「キャリア・パスポート」に対する重要度の認識別に見た生徒の日常生活の様子（「基礎的・汎用的能力」）の自己評価（担任調査・生徒調査）（中学校（4）図7）

生徒問 8	問 8：あなたの日常生活（授業中や放課後、家庭での生活）についておたずねします。次の A～L のそれぞれについて、自分のふだんの生活の様子をふり返った時、あてはまるものを 1～3 の中から 1 つずつ選んでください。	「キャリア・パスポート」の活用を重要と考えている学級担任の学級の生徒	非該当の生徒
1	他人の話聞く時は、その人の考えを受け止めようとしている	98.9%	98.7%
2	自分の考えを話す時は、相手が理解しやすいように伝えている	97.3%	96.6%
3	力を合わせて行動する必要がある時には、周囲の人と役割を分担している	97.0%	97.3%
4	自分の興味・関心や長所・短所などについて分かっている	92.1%	93.5%
5	気分が落ち込んでいる時でも、自分がすべきことはしている	92.1%	90.4%
6	不得意なことをしなければいけない時でも、進んで取り組んでいる*	91.1%	87.5%
7	調べたいことがある時、進んで情報を集めている	93.4%	91.7%

【附表 58】キャリア教育の計画を立てるうえで重視した事柄（上位 3 項目と下位 2 項目）（高等学校（2）図 1）

上位 3 項目	割合（無回答等除く）
生徒の実態や学校の特色、地域の実態を把握し計画に反映させること	71.1%
具体的な進路(就職先や進学先等)の選択や決定に関する指導・援助を行うこと	69.3%
現在の学びと将来の進路との関連を生徒に意識づけること	66.5%
下位 2 項目	
キャリア教育の計画がないので回答できない	6.7%
卒業生への追指導を行うこと	5.9%

【附表 59】 キャリア教育を適切に行っていくうえで、改善しなければならないことのうち、優先順位が高いもの 3 項目(回答率の高かった 5 項目) (高等学校 (2) 図 2)

	割合 (無回答等除く)
取組の目標や方法、育てたい力などについて、教員間や校務分掌間で共通理解を図ること	37.7%
教員がキャリア教育に関する研修などに参加し、指導力の向上を図ること	32.1%
教育課程全体をキャリア教育の観点から整理すること	30.2%
生徒が、学年末や卒業時まで「〇〇ができるようになる」など、具体的な目標を立てること	27.4%
生徒の実態や学校の特色、地域の実態を反映した計画を作成すること	19.3%

【附表 60】 ホームルームでキャリア教育を行っていくうえで困ったり悩んだりしていること (担任調査・多い順 5 つ) (高等学校 (2) 図 3)

	割合 (無回答等除く)
キャリア教育を実施する十分な時間が確保できない	34.5%
キャリア教育についての考え方・思いが教員によって差が大きい	25.9%
キャリア教育と進路指導の違いがわからない	23.8%
キャリア教育の取組にたいする評価の仕方がわからない	23.2%
キャリア教育に関する指導の内容・方法をどのようにしたらいいかわからない	18.3%

【附表 61】全体計画の有無による担任の指導状況（学校調査，担任調査）（高等学校）
（2）図 4）

	キャリア教育の全体計画がある	キャリア教育の全体計画がない
様々な立場や考えの相手に対して，その意見を聴き理解しようとする事	36.4%	32.9%
相手が理解しやすいように，自分の考えや気持ちを整理して伝える事	29.6%	27.4%
自分の果たすべき役割や分担を考え，周囲の人と力を合わせて行動しようとする事	39.1%	36.8%
自分の興味や関心，長所や短所などについて把握し，自分らしさを発揮すること	28.6%	27.3%
喜怒哀楽の感情に流されず，自分の行動を適切に律して取り組もうとする事	28.1%	26.0%
不得意なことや苦手なことでも，自分の成長のために進んで取り組もうとする事	30.4%	31.9%
調べたいことがあるとき，自ら進んで資料や情報を集め，必要な情報を取捨選択すること	31.1%	29.9%
起きた問題の原因，解決すべき課題はどこにあり，どう解決するのかを工夫すること	19.1%	19.8%
活動や学習を進める際，適切な計画を立てて進めたり，評価や改善を加えて実行したりすること	21.6%	23.1%
学ぶことや働くことの意義について理解し，学校での学習と自分の将来をつなげて考えること	29.9%	30.0%
自分の将来について具体的な目標を立て，現実を考えながらその実現のための方法を考えること	30.3%	31.7%
自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり，その方法を工夫・改善したりすること	29.5%	30.0%
上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること	41.5%	42.2%
「進学したい学校」・「就職したい職場」を選び，その実現のために努力すること	50.9%	51.1%
上級学校や職場を選ぶにあたって，その合格の可能性や採用の可能性を考慮すること	37.4%	36.3%

【附表 62】全体計画の見直し・改善による担任の指導状況（学校調査，担任調査）
（高等学校（2）図5）

	学期ごとなど必要に応じて見直し・改善をした	年度末に見直し・改善をした	特に見直し・改善をしていない
様々な立場や考えの相手に対して，その意見を聴き理解しようとする事	32.2%	37.1%	35.4%
相手が理解しやすいように，自分の考えや気持ちを整理して伝える事	25.9%	30.2%	28.4%
自分の果たすべき役割や分担を考え，周囲の人と力を合わせて行動しようとする事	39.9%	40.3%	34.2%
自分の興味や関心，長所や短所などについて把握し，自分らしさを発揮すること	22.5%	29.4%	27.6%
喜怒哀楽の感情に流されず，自分の行動を適切に律して取り組もうとする事	27.3%	28.4%	27.0%
不得意なことや苦手なことでも，自分の成長のために進んで取り組もうとする事	32.4%	31.0%	28.3%
調べたいことがあるとき，自ら進んで資料や情報を集め，必要な情報を取捨選択すること	30.3%	31.4%	29.5%
起きた問題の原因，解決すべき課題はどこにあり，どう解決するのかを工夫すること	18.9%	19.6%	17.0%
活動や学習を進める際，適切な計画を立てて進めたり，評価や改善を加えて実行したりすること	21.7%	22.3%	18.2%
学ぶことや働くことの意義について理解し，学校での学習と自分の将来をつなげて考えること	28.0%	30.4%	28.1%
自分の将来について具体的な目標を立て，現実を考えながらその実現のための方法を考えること	29.4%	31.1%	27.0%
自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり，その方法を工夫・改善したりすること	28.4%	30.3%	26.1%
上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること	36.6%	42.7%	37.2%
「進学したい学校」・「就職したい職場」を選び，その実現のために努力すること	47.2%	51.6%	48.4%
上級学校や職場を選ぶにあたって，その合格の可能性や採用の可能性を考慮すること	37.3%	37.7%	35.3%

【附表 63】「相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを整理して伝えること」の指導と「今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えている」意識の関連（担任調査，生徒調査）（高等学校（2）図 6）

	いつもそうしている	時々そうしている	していない
よく指導している	39.1%	46.0%	14.9%
ある程度指導している	39.7%	45.7%	14.6%
あまり指導していない	26.6%	48.4%	25.0%
まったく指導していない	-	-	-

※「-」は、該当なしを表す

** p<.01

【附表 64】「自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり，その方法を工夫・改善したりすること」の指導と「自分の将来について具体的な目標をたて，現実を考えながらその実現のための方法を考えている」意識（担任調査，生徒調査）（高等学校（2）図 7）

	いつもそうしている	時々そうしている	していない
よく指導している	42.5%	48.7%	8.8%
ある程度指導している	38.4%	47.4%	14.2%
あまり指導していない	37.2%	51.7%	11.0%
まったく指導していない	-	-	-

※「-」は、該当なしを表す

** p<.01

【附表 65】 どのような点から有意義な活動だと思いましたか。(高等学校 (3) 図 1)

問 14(6) どのような点から有意義な活動だと思いましたか。 あてはまるものをすべて選んでください。		件数	割合	割合 (無回答 等除く)
選択肢				
1	進学先を考えるうえで役に立った	552	44.2%	44.2%
2	将来の職業選択を考えるうえで役に立った	709	56.7%	56.7%
3	多様な働き方があることを知ることができた	510	40.8%	40.8%
4	自分の適性や向き・不向きを理解することができた	504	40.3%	40.3%
5	自分の働き方や生き方を考えることができた	314	25.1%	25.1%
6	日常生活や日々の学習と将来をつなげて考えることができた	265	21.2%	21.2%
7	楽しかった	437	35.0%	35.0%
8	ルールやマナーの重要性を知ることができた	513	41.0%	41.0%
9	その他	43	3.4%	3.4%
99	無回答	0	0.0%	-
100	判別不能・エラー等	0	0.0%	-
回答者数		1250	-	-

【附表 66】 自分の将来の生き方や進路について考えるため、指導してほしいこと(高等学校(3)表1)

問 16 (あなたは、自分の将来の生き方や進路について考えるため、ホームルーム活動の時間や総合的な探究の時間などで、これまでにどのようなことを指導してほしいですか。 「もっとよく指導してほしい」「これまで指導がなかったけれども、指導してほしい」など、あなたが指導してほしいことと思うことがらをすべて選んでください。)		件数	割合	割合 (無回答等除く)
選択肢				
1	自分の個性や適性(向き・不向き)を考える学習	1149	31.9%	33.5%
2	上級学校(大学、短期大学、専門職大学・専門職短期大学、専門学校等)の教育内容や特色	592	16.4%	17.3%
3	産業や職業の種類や内容	487	13.5%	14.2%
4	学ぶことや働くことの意義や目的	582	16.1%	17.0%
5	卒業後の進路(進学や就職)選択の考え方や方法	631	17.5%	18.4%
6	卒業後の進路(進学や就職)に関する情報の入手方法とその利用の仕方	481	13.3%	14.0%
7	卒業後の進路(進学や就職)についての相談の方法や内容	426	11.8%	12.4%
8	将来の職業選択や役割などの生き方や人生設計	550	15.3%	16.0%
9	海外留学に関する案内・説明	315	8.7%	9.2%
10	卒業後の進路を決定するにあたっての先生からの助言	348	9.7%	10.2%
11	上級学校(大学、短期大学、専門職大学・専門職短期大学、専門学校等)や企業への合格・採用の可能性	402	11.1%	11.7%
12	社会人・職業人としての常識やマナー	784	21.7%	22.9%
13	進学にかかる費用や奨学金制度	407	11.3%	11.9%
14	労働に関する法律や制度の仕組み	453	12.6%	13.2%
15	近年の若者の雇用・就職・就業の動向	442	12.3%	12.9%
16	社会全体のグローバル化(国際化)の動向	358	9.9%	10.4%
17	就職後の離職・失業など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応	676	18.7%	19.7%
18	転職希望者や再就職希望者などへの就職支援の仕組み	437	12.1%	12.7%
19	男女が対等な構成員として様々な活動に参画できる社会(男女共同参画社会)の重要性	281	7.8%	8.2%
20	情報化の進展(AI・IoT等)による産業構造・労働環境の変化	354	9.8%	10.3%
21	特に指導してほしいことはない	872	24.2%	25.4%

99	無回答	147	4.1%	-
100	判別不能・エラー等	31	0.9%	-
	回答者数	3606	-	-

【附表 67】 自分の個性や適性（向き・不向き）を考える学習（高等学校（3） 図 2）

問 13 自分の個性や適性（向き・不向き）を考える学習		件数	割合	割合 （無回答 等除く）
選択肢				
1	役に立った	1117	31.0%	31.2%
2	少しは役に立った	1692	46.9%	47.3%
3	役に立たなかった	426	11.8%	11.9%
4	そのような指導はなかった	342	9.5%	9.6%
99	無回答	29	0.8%	-
100	判別不能・エラー等	0	0.0%	-
合計		3606	100.0%	100.0%

【附表 68】 社会人・職業人としての常識やマナーについての学習(高等学校（3） 図 3)

問 13T 社会人・職業人としての常識やマナーについての学習		件数	割合	割合 （無回答 等除く）
選択肢				
1	役に立った	1271	35.2%	35.6%
2	少しは役に立った	1448	40.2%	40.6%
3	役に立たなかった	302	8.4%	8.5%
4	そのような指導はなかった	548	15.2%	15.4%
99	無回答	36	1.0%	-
100	判別不能・エラー等	1	0.0%	-
合計		3606	100.0%	100.0%

【附表 69】 自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、自分らしさを発揮すること（高等学校（3）図 4）

問 9（4）自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、自分らしさを発揮すること		件数	割合	割合 （無回答等除く）
選択肢				
1	よく指導している	1158	28.5%	28.6%
2	ある程度指導している	2398	59.0%	59.2%
3	あまり指導していない	472	11.6%	11.7%
4	まったく指導していない	23	0.6%	0.6%
99	無回答	15	0.4%	-
100	判別不能・エラー等	0	0.0%	-
合計		4066	100.0%	100.0%

【附表 70】 全体計画での「就業体験活動の充実」の重視と生徒のキャリア意識（学校調査、生徒調査）（高等学校（3）図 5）

	重視している	重視していない
他人の話聞く時は、その人の考えを受け止めようとしている	69.0%	70.9%
自分の考えを話す時は、相手が理解しやすいように整理して伝えている	44.7%	47.7%
周囲の人と力を合わせて行動する必要がある時には、自分の役割を果たしている	55.7%	56.9%
興味・関心や長所といった自分らしさを伸ばしている	39.6%	41.6%
自分がすべきことがある時には、感情に流されずに、すべきことに取り組んでいる	33.2%	31.0%
不得意なことをしなければいけない時でも、自ら進んで取り組んでいる	23.6%	20.8%
調べたいことがある時、取捨選択しながら必要な情報を進んで収集している	45.7%	50.1%
何か問題が起きた時、原因を考え、次に同じような問題が起きないように工夫して解決している	45.6%	46.0%
何かに取り組む時は、見通しをもって計画を立て、評価や改善を加えて実行している	28.0%	29.0%
今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えている	37.8%	34.0%
自分の将来について具体的な目標をたて、現実を考えながらその実現のための方法を考えている	37.5%	36.8%
自分の将来の目標を実現できるように、工夫・改善しながら具体的に行動している	33.9%	30.9%

【附表 71】全体計画での「就業体験活動等の事前指導・事後指導」の重視と生徒のキャリア意識（学校調査，生徒調査）（高等学校（3）図6）

	重視している	重視していない
他人の話聞く時は、その人の考えを受け止めようとしている	68.3%	70.7%
自分の考えを話す時は、相手が理解しやすいように整理して伝えている	45.6%	46.0%
周囲の人と力を合わせて行動する必要がある時には、自分の役割を果たしている	55.5%	56.6%
興味・関心や長所といった自分らしさを伸ばしている	39.0%	41.3%
自分がすべきことがある時には、感情に流されずに、すべきことに取り組んでいる	34.1%	31.1%
不得意なことをしなければいけない時でも、自ら進んで取り組んでいる	23.2%	22.0%
調べたいことがある時、取捨選択しながら必要な情報を進んで収集している	45.4%	48.9%

【附表 72】全体計画で「就業体験活動の充実」を重視した学校の生徒が「有意義な活動だと思う」理由（学校調査，生徒調査）※複数回答可（高等学校（3）図7，8）

	就業体験活動（インターンシップ）の充実	就業体験活動（インターンシップ）やアカデミック・インターンシップ等の事前指導・事後指導
進学先を考えるうえで役に立った	42.1%	41.7%
将来の職業選択を考えるうえで役に立った	56.3%	57.2%
多様な働き方があることを知ることができた	41.2%	41.7%
自分の適性や向き・不向きを理解することができた	40.5%	39.9%
自分の働き方や生き方を考えることができた	25.3%	26.4%
日常生活や日々の学習と将来をつなげて考えることができた	20.9%	22.0%
楽しかった	35.1%	34.3%
ルールやマナーの重要性を知ることができた	42.6%	43.9%

【附表 73】「キャリア・パスポート」に記載していること、とじ込んでいることの内容についてあてはまるもの（学校調査・回答が10%以上のもの）（高等学校（4）図1）

	割合（無回答等除く）
学校行事の記録・振り返り	36.9%
自己の成長(頑張ったこと)	35.1%
教科における学習の記録・振り返り	29.5%
今後の課題(これから頑張りたいこと)	29.3%
事業所等における体験活動（就業体験活動等）の記録・振り返り	27.8%
上級学校における体験活動(アカデミック・インターンシップ等)の記録・振り返り	23.1%
その他地域における課外活動等の記録・振り返り	21.2%
キャリア教育の目標(身につけたい力)に対する自己評価	19.8%
将来の夢	16.2%
先生からのコメント	15.0%

【附表 74】「キャリア・パスポート」をどのように活用していますか。あてまるものをすべて選んでください。（担任調査・問11）（高等学校（4）図2）

	割合（無回答等除く）
「キャリア・パスポート」を作成していない	66.8%
教員が生徒を理解するための資料	10.5%
生徒の進路(進学や就職)支援の資料	12.8%
キャリア教育のアウトカム評価（多面的評価の資料の一つ）	2.0%
記録に対する教員からのフィードバックを実施	3.1%
生徒同士による共有・フィードバックを実施	2.2%
学期末・年度末などに記録を振り返るための時間を設けている	8.3%

【附表 75】自分の将来の生き方や進路について考えるため、指導してほしかったこと（生徒調査・上位7項目）（高等学校（4）図3）

	割合（無回答等除く）
自分の個性や適性(向き・不向き)を考える学習	33.5%
社会人・職業人としての常識やマナー	22.9%
就職後の離職・失業など、将来起こりうる人生上の諸リスクへの対応	19.7%
卒業後の進路選択(進学や就職)の考え方や方法	18.4%
上級学校の教育内容や特色	17.3%
学ぶことや働くことの意義や目的	17.0%
将来の職業選択や役割などの生き方や人生設計	16.0%

【附表 76】全体計画での「キャリア・パスポート」等に基づく指導の重視と担任の「キャリア・パスポート」の作成・活用（学校調査，担任調査）※複数回答可（高等学校（4）図4）

	重視している	重視していない
学期末・年度末などに記録を振り返るための時間を設けている***	12.8%	7.8%
生徒同士による共有・フィードバックを実施している	3.0%	2.2%
記録に対する教員からのフィードバックを実施している	4.3%	2.9%
キャリア教育のアウトカム評価（多面的評価の資料の1つ）として活用している*	3.5%	1.8%
生徒の進路（進学や就職）支援の資料として活用している***	19.3%	12.0%
教員が生徒を理解するための資料として活用している**	14.5%	10.1%
「キャリア・パスポート」を作成していない***	59.0%	67.7%

【附表 77】 担任が「キャリア・パスポート」を「生徒の進路支援の資料として活用している」クラスの生徒のキャリア意識（担任調査，生徒調査）（高等学校（4）図5）

	生徒の進路（進学や就職）支援の資料として活用している
他人の話聞く時は、その人の考えを受け止めようとしている	74.9%
自分の考えを話す時は、相手が理解しやすいように整理して伝えている	46.2%
周囲の人と力を合わせて行動する必要がある時には、自分の役割を果たしている	57.6%
興味・関心や長所といった自分らしさを伸ばしている	43.9%
自分がすべきことがある時には、感情に流されずに、すべきことに取り組んでいる	33.1%
不得意なことをしなければいけない時でも、自ら進んで取り組んでいる	23.7%
調べたいことがある時、取捨選択しながら必要な情報を進んで収集している	50.8%
何か問題が起きた時、原因を考え、次に同じような問題が起きないように工夫して解決している	49.3%
何かに取り組む時は、見通しをもって計画を立て、評価や改善を加えて実行している	26.8%
今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えている	37.7%
自分の将来について具体的な目標をたて、現実を考えながらその実現のための方法を考えている	37.7%
自分の将来の目標を実現できるように、工夫・改善しながら具体的に行動している	35.2%

【附表 78】 担任が「キャリア・パスポート」を「生徒の進路支援の資料として活用している」クラスの生徒の学びに対する姿勢（担任調査，生徒調査）（高等学校（4）図6）

	生徒の進路（進学や就職）支援の資料として活用している
これからもっとたくさんのことを学びたいと思う	60.2%
学校での勉強は普段の生活を送るうえで役に立つと思う	40.8%
学校での勉強は将来の仕事の可能性を広げてくれると思う	52.4%
学校での勉強は将来の生活を豊かにすると思う	46.4%
学校が楽しい	40.4%
みんなで何かをするのは楽しい	56.1%
授業がよくわかる	25.7%
授業に主体的に取り組んでいる	32.3%
行事に積極的に参加している	42.0%
授業や学校行事以外の学校の活動に積極的に取り組んでいる	30.6%
家での学習に積極的に取り組んでいる	24.0%
授業以外でも興味が湧いたことについては自主的に学んでいる	31.0%

【附表 79】「学びのレリバンス意識」に関する項目についての児童生徒の肯定的な回答の項目数の分布(校種間 (2) 図 1)

	レリバンス意識該当 0 個	レリバンス意識該当 1 個	レリバンス意識該当 2 個	レリバンス意識該当 3 個
小学生(n=2,867)	7.4%	20.0%	24.2%	48.4%
中学生(n=3,300)	8.4%	28.2%	20.3%	43.1%
高校生(n=3,507)	9.9%	39.3%	17.7%	33.1%

【附表 80】小学生の将来の職業に関する学習活動の該当個数と「学びのレリバンス意識」に関する項目についての児童の肯定的な回答項目数との関係(校種間 (2) 図 2)

	レリバンス意識該当 0 個	レリバンス意識該当 1 個	レリバンス意識該当 2 個	レリバンス意識該当 3 個
将来の職業に関する学習活動該当 0 個(n=179)	21.2%	35.8%	20.7%	22.3%
将来の職業に関する学習活動該当 1 個(n=331)	9.7%	26.3%	27.2%	36.9%
将来の職業に関する学習活動該当 2 個(n=601)	8.5%	18.8%	26.0%	46.8%
将来の職業に関する学習活動該当 3 個(n=955)	6.2%	18.5%	24.4%	50.9%
将来の職業に関する学習活動該当 4 個(n=373)	4.6%	18.5%	22.3%	54.7%
将来の職業に関する学習活動該当 5 個(n=394)	2.8%	14.7%	21.6%	60.9%

【附表 81】小学校の「将来設計全般に関する学習」の実施の有無と「学びのレリバンス意識」に関する項目について児童の肯定的な回答項目数との関係 (校種間 (2) 図 3)

	レリバンス意識該当 0 個	レリバンス意識該当 1 個	レリバンス意識該当 2 個	レリバンス意識該当 3 個
小学生・将来設計全般に関する学習：非該当(n=1,978)	8.1%	19.8%	23.9%	48.2%
小学生・将来設計全般に関する学習：該当(n=806)	5.2%	19.1%	24.8%	50.9%

【附表 82】中学校の「職場の訪問や見学、職業の調査・研究活動」の実施の有無と「学びのレリバンス意識」に関する項目について生徒の肯定的な回答項目数との関係(校種間(2)図4)

	レリバンス意識該当0 個	レリバンス意識該当1 個	レリバンス意識該当2 個	レリバンス意識該当3 個
中学生・職場の訪問や見学、 職業の調査・研究活動：非該当 (n=635)	10.6%	29.8%	21.1%	38.6%
中学生・職場の訪問や見学、 職業の調査・研究活動：該当 (n=2,665)	7.8%	27.9%	20.1%	44.2%

【附表 83】高等学校（普通科）の「進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッション」の実施の有無と「学びのレリバンス意識」に関する項目について生徒の肯定的な回答項目数との関係(校種間(2)図5)

	レリバンス意識該当0 個	レリバンス意識該当1 個	レリバンス意識該当2 個	レリバンス意識該当3 個
高校生（普通科）・進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッション：非該当(n=1,260)	10.1%	36.9%	18.0%	35.0%
高校生（普通科）・進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッション：該当(n=637)	9.4%	31.2%	23.2%	36.1%

【附表 84】高等学校（進学率4割未満）の「事業所や上級学校での体験活動に関わる事前指導・事後指導」の実施の有無と「学びのレリバンス意識」に関する項目について生徒の肯定的な回答項目数との関係(校種間(2)図6)

	レリバンス意識該当0 個	レリバンス意識該当1 個	レリバンス意識該当2 個	レリバンス意識該当3 個
高校生（進学率4割未満）・事業所や上級学校での体験活動に関わる事前指導・事後指導：非該当(n=279)	16.5%	45.2%	11.8%	26.5%
高校生（進学率4割未満）・事業所や上級学校での体験活動に関わる事前指導・事後指導：該当(n=713)	7.9%	47.8%	14.9%	29.5%

【附表 85】 小学校担任の「自分の将来について具体的な目標を立て、現実を考えながらその実現のための方法を考えること」の指導の状況と実施の有無と「学びのレリバンス意識」に関する項目について児童の肯定的な回答項目数との関係 (校種間 (2) 図 7)

	レリバンス意識該当 0 個	レリバンス意識該当 1 個	レリバンス意識該当 2 個	レリバンス意識該当 3 個
小学生・自分の将来について具体的な目標を立て、現実を考えながらその実現のための方法を考えること：あまり指導していない・まったく指導していない(n=685)	8.8%	19.7%	28.3%	43.2%
小学生・自分の将来について具体的な目標を立て、現実を考えながらその実現のための方法を考えること：ある程度指導している(n=1,343)	6.8%	20.2%	23.1%	50.0%
小学生・自分の将来について具体的な目標を立て、現実を考えながらその実現のための方法を考えること：よく指導している(n=267)	6.4%	20.2%	21.0%	52.4%

【附表 86】 中学校担任の学校におけるキャリア教育目標の認識と「学びのレリバンス意識」に関する項目について生徒の肯定的な回答項目数との関係(校種間 (2) 図 8)

	レリバンス意識該当 0 個	レリバンス意識該当 1 個	レリバンス意識該当 2 個	レリバンス意識該当 3 個
中学生・担任「学校でキャリア教育目標が設定されているかどうかわからない」(n=299)	12.7%	31.8%	21.7%	33.8%
中学生・担任「学校でキャリア教育目標が設定されているのは知っているが、内容はわからない」(n=707)	7.9%	27.4%	18.1%	46.5%
中学生・担任「学校で設定しているキャリア教育目標について、その内容を人には説明できないがある程度知っている」(n=1,039)	8.9%	28.8%	18.3%	44.1%
中学生・担任「学校で設定しているキャリア教育目標について詳しく知っており、その内容を人に説明することができる」(n=110)	10.9%	23.6%	22.7%	42.7%

【附表 87】 課題対応能力に関する項目に「いつもそうしている」と回答した項目数の分布（校種間（3） 図 1）

	0	1	2	3
小学生（N=2,877）	25.8%	29.9%	26.7%	17.6%
中学生（N=3,371）	34.0%	32.0%	19.9%	14.1%
高校生（N=3,582）	34.6%	26.9%	20.9%	17.6%

【附表 88】 全体計画に「キャリア教育の全体目標」が記載されているかと「課題対応能力」に関する小学校児童の肯定的回答数の関係(校種間（3） 図 2）

	課題対応計 いつものみ				合計
	課題対応能 力該当 0 個	課題対応能 力該当 1 個	課題対応能 力該当 2 個	課題対応能 力該当 3 個	
キャリア教育の全体目標が全体計画内に記載 (N=1,890)	27.3%	29.2%	26.3%	17.2%	100.0%
キャリア教育の全体目標が全体計画に不記載 (N=128)	25.8%	42.2%	21.9%	10.2%	100.0%

【附表 89】 「体験活動にかかわる事前指導・事後指導」の実施状況と「課題対応能力」に関する中学校生徒の肯定的回答数の関係(校種間（3） 図 3）

	課題対応計 いつものみ				合計
	課題対応能 力該当 0 個	課題対応能 力該当 1 個	課題対応能 力該当 2 個	課題対応能 力該当 3 個	
体験活動にかかわる事前指導・事後指導の実施 (N=2,642)	33.4%	31.2%	20.6%	14.8%	100.0%
体験活動にかかわる事前指導・事後指導の非実施 (N=729)	36.2%	35.0%	17.1%	11.7%	100.0%

【附表 90】年間指導計画内の「キャリア・カウンセリング」の記載状況と「課題対応能力」に関する中学校生徒の肯定的回答数の関係(校種間 (3) 図 4)

	課題対応計 いつものみ				合計
	課題対応能 力該当 0 個	課題対応能 力該当 1 個	課題対応能 力該当 2 個	課題対応能 力該当 3 個	
キャリアカウンセリング記載 (N=720)	33.2%	23.2%	22.2%	21.4%	100.0%
キャリアカウンセリング未記載 (N=2,007)	35.8%	27.5%	20.6%	16.1%	100.0%

【附表 91】学級でのキャリア教育での計画・実施状況と「課題対応能力」に関する小学校児童の肯定的回答数の関係(校種間 (3) 図 5)

		課題対応計 いつものみ				合計
		課題対応能 力該当 0 個	課題対応能 力該当 1 個	課題対応能 力該当 2 個	課題対応能 力該当 3 個	
計画はキャリア発達課題に即して作成	該当 (N=804)	25.2%	27.5%	29.0%	18.3%	100.0%
	非該当 (N=1,452)	27.5%	31.4%	24.9%	16.2%	100.0%
計画に基づく実施	該当 (N=762)	26.1%	26.8%	27.8%	19.3%	100.0%
	非該当 (N=1,494)	27.0%	31.7%	25.6%	15.7%	100.0%

【附表 92】学級での「キャリア・カウンセリング」の実施と「課題対応能力」に関する中学校生徒の肯定的回答数の関係(校種間 (3) 図 6)

		課題対応計 いつものみ				合計
		課題対応能 力該当 0 個	課題対応能 力該当 1 個	課題対応能 力該当 2 個	課題対応能 力該当 3 個	
	キャリア・カ ウンセリング の実施 (N=411)	30.7%	27.7%	26.0%	15.6%	100.0%
キャリア・ カウンセリ ングを実施 している	キャリア・カ ウンセリング の未実施 (N=1,784)	35.6%	32.2%	18.8%	13.4%	100.0%

【附表 93】キャリア・カウンセリング時における「成長の振り返りをさせている」かについての状況と「課題対応能力」に関する中学校生徒の肯定的回答数の関係(校種間 (3) 図 7)

		課題対応計 いつものみ				合計
		課題対応能 力該当 0 個	課題対応能 力該当 1 個	課題対応能 力該当 2 個	課題対応能 力該当 3 個	
	これまでの成 長について振 り返りをさせ ている (N=1,253)	32.0%	32.5%	21.3%	14.2%	100.0%
生徒に対し てこれまで の成長につ いて振り返 りをさせて いる	これまでの成 長について振 り返りをさせ ていない (N=942)	38.2%	29.9%	18.6%	13.3%	100.0%

キャリア教育に関する総合的研究

令和3年10月現在

(協力者)

藤田 晃之	筑波大学人間系教授
小田 暁	仙台市教育局教育人事部教職員課管理主事
京免 徹雄	筑波大学人間系助教
黒川 省吾	神奈川県中教育事務所指導主事
佐藤 学	足立区教育委員会教育指導部学力定着推進課指導主事
山田 亮	東洋英和女学院大学人間科学部人間科学科専任講師
安藤 勉	川崎市立幸高等学校校長
酒井 淳平	立命館宇治中学校・高等学校教諭
望月 由起	日本大学文理学部教育学科教授
立石 慎治	筑波大学教学マネジメント室助教 (国立教育政策研究所 フェロー)
有海 拓巳	株式会社浜銀総合研究所地域戦略研究部主任研究員

(国立教育政策研究所)

鈴木 敏之	生徒指導・進路指導研究センター長
長田 徹	生徒指導・進路指導研究センター総括研究官
武井 久幸	生徒指導・進路指導研究センター副センター長

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター

〒100-8951

東京都千代田区霞が関3-2-2

TEL：03-6733-6882 FAX：03-6733-6967

URL：https://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/div09-shido.html

令和3年10月発行

※本報告書の第一次報告書の全文は、以下のURLに掲載しています。

https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/career_SogotekiKenkyu/